

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	日本に移住した外国人における居住空間に対する認知的枠組みとしての図式とその形成に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	川野江里子
Author(English)	Eriko Kawano
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京科学大学, 報告番号:甲第1号, 授与年月日:2024年11月30日, 学位の種別:課程博士, 審査員:那須 聖,奥山 信一,斎尾 直子,野原 佳代子,平賀 あまな,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Institute of Science Tokyo, Report number:甲第1号, Conferred date:2024/11/30, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Type(English)	Doctoral Thesis

日本に移住した外国人における
居住空間に対する認知的枠組みとしての図式とその形成に関する研究

2024年10月

川野 江里子

日本に移住した外国人における居住空間に対する認知的枠組みとしての図式とその形成に関する研究

目次

第1章 序論

1-1. 研究の背景と目的	6
1-2. 既往研究と本研究の位置付け	
1-2-1. 環境移行に関する既往研究	9
1-2-2. 評価グリッド法に関する既往研究	11
1-2-3. 本研究の位置付け	13
1-3. 研究の方法	
1-3-1. 本研究における用語の定義	14
1-3-2. 日本に移住した外国人の「居住空間の図式」の形成についての分析方法	19
1-3-3. 日本に移住した外国人における日本の居住空間の認識についての抽出・分析方法	20
1-3-4. 日本移住後の日本の居住空間の認識の中で形成される「居住空間の図式」の分析方法	20
1-4. 研究の構成	21

第2章 日本文化に触れた文化人・知識人による日本移住後の日本の居住空間の認識

—明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査

2-1. 本章の目的	24
2-2. 研究の方法	24
2-3. 調査の概要	
2-3-1. 調査対象文献の概要と調査の範囲	25
2-3-2. 調査対象文献の分類および本研究における文献の捉え方	26
2-3-3. 調査対象文献著者の概要	29
2-3-4. 調査対象文献著者の日本国内移動の軌跡	36
2-4. 日本の居住空間の認識	
2-4-1. 日本の居住空間の認識一覧	46
2-4-2. 床（畳、床座、床に寝る）・沓脱習慣	48
2-4-3. 簡素さ（家具の無い居住空間・簡素な造り / 装飾）	54
2-4-4. 自然とのつながり・庭 / 庭園	57
2-4-5. 部屋の広さ・天井高	59
2-4-6. 建具・仕切り	61
2-4-7. 温熱環境	63
2-4-8. 光環境（採光・照明）	63
2-4-9. 音環境	66
2-4-10. におい環境	66
2-4-11. 床の間	69
2-4-12. 茶室	69
2-4-13. 清潔さ	72
2-4-14. 東京 / 街並み・建物・住居	72
2-4-15. 京都 / 街並み・建物・住居	75
2-4-16. 日本の旅館	75
2-4-17. 本節のまとめ	78

2-5. 居住空間の認識および住まい方の変化	80
2-6. 本章のまとめ	83
第3章 東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識—東京在住の外国人を対象とした質問紙調査	
3-1. 本章の目的	86
3-2. 研究の方法	86
3-3. 調査の概要	
3-3-1. 調査の方法	88
3-3-2. 調査対象者の属性	89
3-4. 居住実態の概略	
3-4-1. 居住空間の概要	90
3-4-2. 現在の生活様式	91
3-4-3. 住居の選択基準	92
3-5. 居住空間の認識	
3-5-1. 居住空間への興味・関心	94
3-5-2. 居住空間の基本的な建築空間要素に対する評価	96
3-5-3. 居住空間の日本の建築空間要素に対する評価	100
3-5-4. 日本の建築空間要素に関連した家具や習慣、浴室に対する評価	104
3-5-5. 居住空間における快適さ・くつろぎについて	106
3-5-6. 日本の居住空間にはない「自国において重要と認識している物や事柄」	109
3-5-7. 自国の居住空間にはない「日本において重要と認識している物や事柄」	110
3-6. 考察	
3-6-1. 居住形態と広さの評価との関係	111
3-6-2. 居住年数と広さの評価との関係	112
3-6-3. 住居選択基準と広さの評価との関係	113
3-6-4. 居住空間の方角の評価と日光の評価との関係	117
3-6-5. 日光の評価と開放感の評価との関係	118
3-6-6. 日光の評価と広さの評価との関係	119
3-6-7. 開放感の評価と広さの評価との関係	120
3-7. 本章のまとめ	121
第4章 東京に在住する外国人の日本における住まい方の変化の対応と 居住空間の認知構造からみる「居住空間の図式」形成の過程 —東京在住の外国人を対象としたインタビュー調査	
4-1. 本章の目的	124
4-2. 研究の方法	124
4-3. 調査の概要	
4-3-1. 調査の方法	126
4-3-2. 調査対象者の属性	128
4-3-3. インタビュー調査結果の概観	130

4-4. 居住空間の認識と「住まい方の対応」	
4-4-1. 調査対象者ごとの概念項目の整理	131
4-4-2. 調査対象者全体の概念項目の整理	138
4-4-3. 居住空間の認識と日本居住後の「住まい方の対応」の分類	140
4-4-4. 日本の居住空間と「住まい方の対応」にみる「居住空間の図式」形成の推定	146
4-5. 居住空間の認知構造の上位概念と「住まい方の変化の対応」	
4-5-1. 居住空間の認知構造の上位概念	147
4-5-2. 居住空間の認知構造の上位概念と「住まい方の変化の対応」	152
4-6. 本章のまとめ	154
第5章 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程	
	一文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照
5-1. 本章の目的	156
5-2. 研究の方法	156
5-3. 日本の居住空間の認識と住まい方一文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照	
5-3-1. 床座生活にまつわる生活様式および習慣	157
5-3-2. 居住空間の簡素さ	158
5-3-3. 自然とのつながりおよび向き合い方	159
5-3-4. 部屋の広さ・天井高についての認識	160
5-3-5. 仕切りとその機能性	161
5-3-6. 快適性にまつわる感覚	162
5-3-7. 都市の様子（東京 / 街並み・建物・住居）	163
5-3-8. 宿泊施設としての日本の旅館	164
5-3-9. 本節のまとめ	165
5-4. 日本の居住空間の認識と住まい方の変化一文献調査とインタビュー調査との対照	
5-4-1. 日本の居住空間の認識および住まい方の「変化」の捉え方	168
5-4-2. 時間経過を伴う日本の居住空間の認識および住まい方の変化	
	一文献調査とインタビュー調査との対照・168
5-4-3. 文献調査で抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化	169
5-4-4. インタビュー調査で抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化	170
5-4-5. 本節のまとめ	171
5-5. 日本の居住空間の特質と日本の居住空間における「住まい方の対応」との関わり	172
5-6. 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程	
5-6-1. 日本の居住空間の他地域との共通性と特異性の定義および推定方法	173
5-6-2. 日本の居住空間の他地域との共通性	174
5-6-3. 日本の居住空間の特異性	175
5-6-4. 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程	177
5-7. 本章のまとめ	179
第6章 結論	182

第 1 章 序章

1-1. 研究の背景と目的

慣れ親しんだ環境から様々な出来事により別の環境へ移る環境移行^{1,2}は、人生を進めていくなかで誰もが体験しうることである。環境移行には、進学、就職、結婚のようなライフイベントに伴う移行、災害による移住のように予期せぬ移行、想定可能でも、外国移住、高齢施設への移住など著しく居住環境の変わる環境移行が挙げられるが、この居住経験の更新を通して、わたしたちは、新たな環境と関係を構築していく。

なかでも、異国における居住経験は、文化や風土など取り巻く環境が大きく異なることから、住まいの在り方に及ぼす影響は顕著である。異文化を経験すること、とりわけその経験を自分の中で受けとめることは、ある瞬間の出来事ではなく、実際には時間の経過とともに変化するプロセスの中で起こりうる。いわゆるカルチャー・ショックには、一般的な傾向として新しい文化に魅了される「蜜月期」、現実的な問題に直面する「敵対・攻撃期」、新しい環境に適応し始める「回復期」、現地社会の習慣・文化を受け入れ順応する「適応期」の4つの段階があると提唱されている³。初めて知らない文化に遭遇したときの衝撃や拒絶反応のような否定的な側面もあるが、近年、未知との出会いにより新しいものの捉え方を得る契機となる可能性があるとして肯定的な側面にも注目がなされてきている⁴。

異国における居住経験は、文化や風土など取り巻く環境が大きく異なることから、住まいの在り方に及ぼす影響は顕著であり、異文化居住経験においても、居住経験の更新により、この適応や受容、拒絶等のプロセスは生ずるであろうと考えられる。日本の居住空間を例に挙げると、日本の住宅の特異さについて外国人が記述した文献は多く残されているが^{5,6,7}、北岡らが外国人のイメージする日本らしさについて「結局は自分が背景として持っているイメージを通してしか理解しえない」と指摘しているように⁸、日本の居住空間を日本人と全く同じ視点で捉えているのではなく、その人の持つ文化的背景や居住経験に基づいた見方よるものが大きいのではないかと考えられる。

1 S.ワップナー、山本多喜司編著、『人生移行の発達心理学』、北大路書房、1991

2 高橋鷹志、環境移行からみた高齢者の住まい、すまいろん、23号、8-23、1992

3 Oberg, K. Cultural shock: Adjustment to new cultural environments, *Practical Anthropology*, 7, 177-182, 1960

4 石井敏、久米昭元、遠山淳、『異文化コミュニケーションの理論』、有斐閣、2001

5 エドワード・S モース、上田篤・加藤晃規・柳美代 訳、『日本人の住まい 内と外』、鹿島出版会、1979

6 ジャック・ブズー＝マサビュオー、加藤隆 訳、『家屋と日本文化』、平凡社、1996

7 ブルーノ・タウト、篠田英雄 訳、『日本の家屋と生活』、春秋社、2008

8 北岡紀子・磯貝恵三、日本もどきと日本らしさ、日本デザイン学会、デザイン学研究、No.81, 88, 1990

わたしたちが環境を知覚する際、過去の経験によって獲得した体系的な知識に基づいて解釈しようとする働きがある。これは、個人のもつ文化的背景や経験をもとに構造化した認知的枠組みを通して、人は周囲の事象や物事を認識しているという考えに依拠するものであり、その認知的枠組みは、主に心理学の分野で使用されるスキーマ (図式)⁹ やスクリプト¹⁰ といったある事象を説明するひとかたまりの情報システムと同義である。古くはバートレットが、人間の記憶が過去の経験から体制化された「スキーマ」と一致した方向へ変容されることを実験によって示した¹¹。また、ピアジェは、発達段階において、子どものもつ認知的な枠組みを「シェマ (スキーマ)」と呼び、子どもの知識や思考はシェマに合うように外界の情報を取り入れる「同化」と新しい情報によって自分のもっているシェマを変化させる「調節」の両者の均衡化をとりながら、連続的に変化していくものとして捉えた¹²。ナイサーは視覚の認知構造において、人間は「予期図式」に基づいて情報を探索抽出し、状況に応じてこれを修正しているという知覚循環の概念を提唱した¹³。このように、人間は認知・記憶・思考などの高次の情報処理を行う際、経験に基づいた知識を体制化した認知的な枠組みを用いて情報を取り込み、場合によって得た情報に基づいてこの枠組みの修正を行なっていると考えられている^{14, 15}。

環境知覚においても、例えば住環境の知覚として居住空間を認識する際、居住空間を構成する面積や天井高の物理量だけでなく、この認知的枠組みに基づいて「これは玄関だ」「これは居間だ」といったように特定の空間を認識し、更にその広さや大きさ、印象を個々人の認知的枠組みによって評価していると考えられる。先述の異国における居住経験においても、その人のもつ文化的背景や居住経験に基づいた見方すなわち経験に基づいた知識を体制化した認知的枠組みを用いて、新たな環境における居住空間を認識していると考えられる。本研究では、この認知的枠組みを認知心理学で使用される「図式」と表す。図式は単一のものではなく複数の総体であり、情報を取り入れ場合によっては修正を行う動的なものであり、新たな経験によって既存の枠組みに修正が入り更新していくものと、修正せずそのままのものが混在することが考えられる。さらに、居住空間を認識^{16, 17}する際の認知的枠組みとしての図式を「居住空間の図式」と呼称する。この「居住空間の図式」

9 知識を体制化する心的な枠組み。過去の経験や学習から獲得した知識や関連した概念を組み合わせ、意味のあるまとまりを作り出す。外界から情報を収集し処理する際に、人間は構造化されたスキーマを用いると考えられている。

10 社会生活における一連の定型の行動にかかわるスキーマ。特定の文脈における、適切な連続した事象を記述した構造を持つ。

11 Frederic Charles Bartlett, *Remembering: A study in experimental and social psychology*, Cambridge University Press, London, 1932

12 ジャン・ピアジェ, ベルベル・イネルデ, 波多野完治 (訳), 『新しい児童心理学』, 白水社, 1969

13 U. ナイサー, 古崎敬・村瀬夏共訳, 『認知の構図: 人間は現実をどのようにとらえるか, サイエンス社』, 1978

14 海保博之・松原望 (監修), 竹村和久・北村英哉・住吉チカ (編), 『感情と思考の科学事典』, 朝倉書店, 2010

15 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治, 『心理学』, 有斐閣, 2018

16 本研究では、認識の定義を「物事をはっきりと見分け、判断すること。そういうふうにして物事を知る、心の働き。また、その知った事柄」とし、評価の定義を「どれだけの価値・価格があるかを見定めること」とする。先述の認知的枠組みを用いて人間が情報を取り込む際に、まず環境を認識し、その中で価値判断を含む評価を行っているという考えに基づき、評価は認識の概念に包含されるものとする。価値判断を含む質問項目については空間に対する評価とし、それ以外はすべて空間に対する認識とし、表記を認識と評価で区別する。

17 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編), 『岩波国語辞典第四版』, 岩波書店, 1986

とその形成には、文化的背景や居住経験¹⁸が関わっていると想定する。「居住空間の図式」の詳細な定義については第1章3節にて述べる。

このような背景を踏まえ、本研究では、顕著な変化を伴う環境移行である外国移住に着目し、日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識および「居住空間の図式」の形成について明らかにすることを目的とする。日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識を明らかにすることにより、日本の居住空間と過去に居住した空間との住まい方の変化の状態を整理し、居住空間に関する認知構造の上位概念と対照することで「居住空間の図式」の形成についてその過程を明らかにできると考える。加えて、日本の居住空間の認識を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について日本の居住空間の他地域との共通性および特異性から整理することで、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにすることができる

と考える。

外国人の日本移住に際し、異なる文化的背景や経験をもった人々が捉える日本の居住空間を明らかにすることで、より円滑に適応できるような日本の居住空間の建築デザインへの知見となることを期待する。また、新たな環境へ移行後の居住空間の認識や評価、適応の過程を、認知構造を含めて捉えることにより、本研究で着目する異文化居住経験のみならず、大きな変化を伴う環境移行時の「居住空間の図式」形成においても、転用可能な知見となることを期待する。

18 個々人の家庭環境や家族関係などを含む生育環境もここに包含され则认为る。

1-2. 既往研究と本研究の位置付け

1-2-1. 環境移行に関する既往研究

環境移行には、災害のように予測不可能な環境移行とライフイベントによる予測可能な環境移行がある。予測可能な環境移行の中では、本研究の対象とする外国移住等の異文化また遠方への移住や、高齢者施設への移住等、居住空間が著しく変化する環境移行と、同じ地域内での住み替えなどあまり変わらない環境移行とに分けられる。本項では居住空間に顕著な変化が見られる環境移行について、既往研究をもとに論じる。

居住空間に著しい変化のある環境移行には、自然災害による非常時の拠点移動が挙げられる。野村らは東日本大震災による北海道への長期避難者を対象にアンケート調査・ヒアリング調査を通して、被災後の生活実態を把握し、避難先での居住環境の課題を環境移行の観点から整理している。環境移行において重要と考える「居住地意向」「住環境（住宅・家財）」「人間関係」に着目し、移住・転居、家財入手、人間関係形成に至る経緯やそれらによる出来事について詳細に分析している¹⁹。転居が日常生活を取り戻す一つの契機となったことがわかる一方で、「転居にまつわる心理的・金銭的負担で転居をあきらめる例」、「不十分な居住環境を避難生活ゆえに仕方がないと判断してしまう傾向」も見られている。前田らは、東日本大震災における仮設住宅の住環境改善支援の実践的な取り組みのなかで、支援を受け入れる背景要因を探るために、アンケート調査を通して仮設住宅住環境支援に対する居住者の認識や評価について、インタビュー調査を通して震災前の住居、避難所、仮設住宅それぞれに対する居住環境の認識、コミュニティや支援者などの社会環境に関する認識、住環境改善支援に関する認識について聞き取りを行なっている²⁰。居住環境の認識においては、震災前の住居には「住宅が流出したことへの喪失感」「地域への愛着」が、避難先には「居住者間の軋れき」「避難生活に伴う戸惑い」が、仮設住宅には「安堵感」「居住環境上の問題」「支援の遅れに対する戸惑い、不満」などが挙げられている。

予測可能ではあるものの著しく居住環境が変化する環境移行として、高齢者施設への移住も挙げられる。年齢による意識の変化を辿った研究として、高齢者の住宅選択の実態と意識に関して、年齢の異なる2グループ「予備軍グループ」「高齢者グループ」を対象に、結婚後から現在に至るまでの居住経験や今後の居住環境についての希望をアンケート調査、ヒアリング調査に基づいて比較・分析した沖田らの研究がある²¹。現在の住居

19 野村理恵・森傑・島口拓也、遠隔地避難における環境移行からみた居住環境の課題 東日本大震災における北海道への長期避難者を対象として、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築計画、1255-1256、2016

20 前田昌弘・石川直人・伊藤俊介・阪田弘一・高田光雄、他者への“信頼”からみた仮設住宅居住者への支援の受け入れ要因—東日本大震災における仮設住宅の住環境改善支援に関する実践的研究 その2—、日本建築学会計画系論文集、83(752)、1821-1831、2018

21 沖田富美子・石渡瑞枝、高齢者の住宅選択の実態と意識に関する研究：第1報 居住経験及び住宅に対する考え方の実状、日本女子大学大学院紀要、家政学研究科・人間生活学研究科、日本女子大学、11、197-204、2005

の選択基準、満足点、今後の住み替えの選択基準において2グループ間で違いが明らかになっているが、住み替えについては、「予備軍グループ」が日当たりの良さ、経済性、持ち家であることを優先事項としてあげている一方で、「高齢者グループ」では、バリアフリーであること、介助サービスや緊急時対応サービスが受けられることが優先項目として挙げられ、高齢者施設への入居希望が多いことから、年齢を重ねることで居住選択の基準に変化が見られることがわかる。

一方、異文化居住経験に着目した研究には、インタビュー調査を通して日本在住の外国人41名から日本人の住生活や日本での生活を通して得た違和感を聞き取り、外国人からみた日本の住文化の特徴抽出を試みた林らの研究がある²²。得られた特徴としては「日本の住文化の固有性によるもの」として、沓脱習慣や浴室・トイレが一体化していないこと、長い迷路のような廊下が、「日本人の体型に関わるもの」としてシャワーの位置や調理台が低いことが、「日本人の急激な生活の変化に伴う混乱」として、居間にテーブル・ソファが設けられているにもかかわらずコタツ・座席で食事をするのが普通になっている点などを挙げている。同様に、留学生42名の住居形態・設備、母国と比べて困っている点をアンケートにて調査し、その中からさらに28名にヒアリング調査、住居の実測調査を行い、外国人の日本での住まい方や母国や日本の生活様式を明らかにした石川らの研究がある²³。日本の居住環境に関しては、「音に関する不満」が多く、「昼に慣れない」「壁が薄い」「キッチンが小さい」という点を挙げている。また、生活様式の変化として、就寝方式がベッドから畳・床へ変化した例、椅子座から床座へ変化した例も示している。どちらも異文化居住経験における住まいの認識や住まい方の変化についてインタビュー調査を通して分析しているが、外国人からみた日本の住居の特徴を挙げることや、生活変化の記述にとどまっている。

異文化居住経験における適応プロセスに焦点を当てた野間らの研究では、住環境を住居を取り巻く自然的あるいは社会的な環境と考え、空間構成、環境要素と人間関係の3つの視点から捉え、来日後の日本の住環境への適応不適応のプロセスを外国人23名にインタビュー調査を行い、分析している。具体的には、住環境と住様式の一致/不一致を基軸に適応状態/不適応状態の評価方法を設定し、空間構成においては、来日後の住居選択を踏まえた上で「立地と周辺環境」「住居の大きさ」「間取り」への適応プロセスを、環境要素においては「温熱環境」「音環境」「光環境」「衛生面」への適応プロセスを、人間関係については「同居人の存在」「近

22 林玉森・内藤和彦, 外国人から見た日本住宅に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 379-380, 2003

23 石川智章・布野修司, 在日外国人留学生の生活環境と居住空間に関する考察 — 彦根市を事例として —, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 141-142, 2008

隣関係」「文化の違い」への適応プロセスを分析している^{24, 25}。

環境移行のなかで外国移住に関する既往研究において、異文化居住経験に着目した研究では、日本居住後に獲得した住環境の認識や評価をその時点での個人の意識の表出として捉え、また、ある一定の期間の変化を追っている適応プロセスに関する研究では、適応不適応という基軸で住環境を捉えており、その背景にある認知の枠組みについては視野に入っているものの具体的な分析は行われていない。一方で、第1章1節で述べたように、われわれが環境を知覚する際、過去の経験によって獲得した体系的な知識に基づいて解釈しようとする働きがあるとすれば、解釈の基になる認知的枠組みと日本の居住空間の認識の関係を見ていくことが、居住空間の認知の構造の一端を明らかにすることにつながるのではないだろうかと考える。

1-2-2. 評価グリッド法に関する既往研究

本研究では、居住空間を認識する際の認知的枠組みとしての図式、すなわち「居住空間の図式」を扱う研究方法として、評価グリッド法を採用する。詳細は次節で述べる。評価グリッド法には、先立つ理論として、G.A.Kellyが1955年に提唱したパーソナルコンストラクト理論²⁶がある。この理論において、人間にはコンストラクトシステムと呼ばれる固有の認知構造があり、各人が経験を通じて構築されたコンストラクトシステムを持っており、これによって外界の情報を認知、理解し、その結果を予測しようと努めていると考えられている。このコンストラクトシステムは幼少時からの経験によって獲得され、修正・強化されて形成される。この認知構造において評価に関する構造を取り出したものが評価グリッド法で扱う評価構造である。評価構造では、評価項目が物理的な状況や客観的な判断などの下位概念から抽象的・心理的な価値といった上位概念まで階層的につながっていると考えられ、評価グリッド法ではラダーリングという手法を用いこれらの概念を引き出していく^{27, 28, 29}。本項では、既往研究をもとにこの評価グリッド法と評価構造について論じる。

24 野間有朝・柳沢究, 日本在住外国人の住経験から見る日本の住環境への適応プロセス 来日後の住環境における環境要素及び人間関係への適応プロセス, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 115-116, 2021

25 野間有朝・柳沢究, 日本在住外国人の住経験から見る日本の住環境への適応プロセス 来日後の住環境の空間構成への適応プロセス一, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 61, 125-128, 2021

26 Kelly, G. A., The psychology of personal constructs. Vol. 1. A theory of personality. Vol. 2. Clinical diagnosis and psychotherapy. W. W. Norton., 1955

27 讃井純一郎, 乾正雄, レポートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出: 認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(1), 日本建築学会論文集, 367号, pp15-22, 1986

28 讃井純一郎, 乾正雄, 個人差および階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化: 認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(2), 日本建築学会論文集, 374号, pp54-60, 1987

29 辻村壮平, 階層的に構造化された評価を引き出すための評価グリッド法, 日本音響学会誌, 73巻, 12号, pp783-789, 2017

クライアントと設計者の価値観の違いを明らかにするためにインテリア・プレゼンボードに着目し、評価グリッド法を用いた森永らの研究がある³⁰。人が評価を行う際の着眼点はその人がもつ価値観に基づくものであり、判断材料を通して示される評価はその背景にあるその人がもつ判断の根源となる知識と経験あるいはその先にある関心や興味を知ることにつながると考え、インテリア・プレゼンボードの評価を通してクライアントが期待しているインテリア空間を判断するための評価項目と評価項目間の因果関係で構成される評価構造を取り出すことを試みている。調査対象者はインテリア設計従事者21名、一般人20名、インテリアに関する知識のない建築学科の学生20名で、5種類のプレゼンボードを順番に提示し、優れているものから劣っていると感じる順に並べてもらい、そのうち2枚を取り出し優劣を判断した理由を尋ねラダーリングを行い、評価項目を抽出し、評価構造を捉えている。

鉄道駅のわかりやすいサインの実現に向け、利用者が抱くサインに対する本質的なニーズの解明を評価グリッド法を用いて試みた池田らの研究では³¹、インタビュー調査を行う前に、鉄道駅のサインについて関心があるかどうか、つまりサインについての評価構造を有しているか否かを事前アンケート調査でスクリーニングしている。このアンケート調査では、駅全体のサイン計画に関する6項目、個別のサイン盤面に関する6項目の合計12項目に関する印象を5段階の評定尺度により評価させている。サインに関する評価構造を有していない人にとっては、評定尺度の「3. どちらともいえない」を選択することが多くなると判断しているためである。スクリーニングにより選ばれた10名を対象に1名ずつ評価グリッド法によるインタビューを行い、鉄道駅の追設サインに対する評価項目を抽出し、評価構造を取り出している。

どちらの研究も、「期待するインテリア空間」、「鉄道駅のわかりやすいサイン」といった抽象的なイメージについて、価値判断を含む評価の源となる認知構造の存在を背景に、評価グリッド法を用いて言語化し、価値判断にまつわる評価構造を取り出そうと試みている。ここに、居住空間を認識する際に用いる「居住空間の図式」という認知構造に含まれる認知的枠組みのうち、居住空間の選好についての評価構造を取り出そうとする本研究の試みを見出せると考える。

30 森永智年・大井尚行・高橋浩伸, インテリア・プレゼンボードの評価を通じた評価構造と個人属性の類型化 住環境に関する価値観の進化と変容に関する研究, 日本建築学会論文集, 76(666), 633-639, 2011

31 池田佳樹・辻村壮平・佐野友紀・安江仁孝・今西美音子・平手小太郎, 駅空間におけるサインの評価構造に関する研究 追設サインに着目した駅利用者への情報提供手法に関する検討, 日本建築学会論文集, 82(741), 2799-2806, 2017

1-2-3. 本研究の位置付け

以上を踏まえて、本研究は建築空間要素を基軸に居住空間の認識とその認識の変化について個人の「居住空間の図式」を把握した上で論じる点において独自のものであり、われわれ一人ひとりがもつ文化的背景、居住経験を射程に居住空間の認識とその変容を明らかにしようと試みるものである。

本研究で対象とする居住空間の範囲は、室内空間と周辺環境からなる物理的空間と物理的空間に付随する印象や感情を伴う心理的空間とする。用語の定義については1章3節において詳細を述べる。ここでは、本研究における居住空間は、2節1項で取り上げた既往研究における対象空間である「日本住宅」「居住空間」「住環境」「居住環境」の含む内容と重複すると考え、取り扱う対象内容について表1-1のように整理する。

表 1-1 本研究と既往研究で取り扱う調査対象の範囲

研究テーマ 対象内容	予測可能・変化の著しい環境移行						災害による環境移行	
	「居住空間の図式」と日本の居住環境の認識の関係	異文化居住経験からみた日本の居住空間の特徴		異文化居住経験における適応プロセス		高齢者の住居選択の実態と意識	遠隔地避難における居住環境の課題	仮設住宅居住者による支援の受け入れ要因
	本研究	林・内藤, 2003	石川・布野, 2008	野間・柳沢, 2021	野間・柳沢, 2021	沖田・石渡, 2005	野村、他, 2016	前田、他, 2018
基本的な建築空間要素 部屋の広さ、天井高、 窓のサイズ、天井・壁の色など	○	○	○	○	—	○	○	○
日本的な建築空間要素 玄関、廊下、押入れ、畳、 可動式家具、浴室の構成など	○	○	○	○	—			
空間の印象や評価： 開放感、眺め、日光の有無、 部屋の方角、快適さ、 心地よさ、安心・安全など	○	○	○	—	○	○	○	○
周辺環境 立地、アクセス、テリトリー	○	—	—	○	—	○	○	○
人間関係、経済性、 支援サービス	—	—	—	—	○	○	○	○

1-3. 研究の方法

1-3-1. 本研究における用語の定義

居住空間の図式：

我々が環境を知覚する際、過去の経験によって獲得した体系的な知識に基づいて解釈しようとする働きがあり、これは個人のもつ文化的背景や経験をもとに構造化した認知的枠組みを通して、人は周囲の事象や物事を認識しているという考えに依拠している。この認知的枠組みは、主に心理学の分野で使用されるスキーマ（図式）⁹ やスクリプト¹⁰ といったある事象を説明するひとかたまりの情報システムと同義である。

古くはバートレットが、人間の記憶が過去の経験から体制化された「スキーマ」と一致した方向へ変容されることを実験によって示した。記憶の変容に関するこの実験では、原図であるエジプトの絵文字のフクロウをリレー式で絵を描いて再生していく。順番を追うごとに絵は変容していき、10番目には、実験の被験者であるイギリス人の持つ猫のイメージが描かれている。これは、自分の持つイメージに記憶が変容されていく、つまり元々もっている認知の枠組みに基づいて、知覚、記憶、認知していることを示している¹¹。

ピアジェは、発達段階において、子どものもつ認知的な枠組みを「シエマ（スキーマ）」と呼び、子どもの知識や思考は外界と心理的な要素との相互作用において、自分のもっている知識の枠組み（シエマ）に合うように外界の情報を取り入れる「同化」と、物事や外界が自己に合わない場合に、新しい情報によって自分のもっているシエマを変化させる「調節」の両者の均衡化をとりながら連続的に変化していくものとして捉えた¹²。

ナイサーは視覚の認知構造において、人間は「予期図式」に基づいて情報を探索抽出し、状況に応じてこれを修正しているという知覚循環の概念を提唱した¹³。我々がある環境を評価する際、その環境に対してあらかじめイメージする「このような環境なのだろう」という予期図式と照合し、状況に応じて修正する作業を行なっているという概念である。

このように、人間は高次の情報処理を行う際、経験に基づいた知識を体制化した認知的な枠組みを用いて情報を取り込み、場合によって得た情報に基づいてこの枠組みの修正を行なっていると考えられている。第1章1節で述べたように、環境知覚においても、例えば住環境の知覚として居住空間を認識する際、居住空間を構成する面積や天井高の物理量だけでなく、この認知的枠組みに基づいて「これは玄関だ」「これは居間だ」といったように特定の空間を認識し、更にもその広さや大きさ、印象を個々人の認知的枠組みによって評価していると

考えられる。異国における居住経験においても、その人のもつ文化的背景や居住経験に基づいた見方すなわち経験に基づいた知識を体制化した認知的枠組みを用いて、新たな環境における居住空間を認識していると考えられる。本研究では、この認知的枠組みを認知心理学で使用される「図式」と表す。図式は単一のものではなく複数の総体であり、情報を取り入れ場合によっては修正を行う動的なものであり、新たな経験によって既存の枠組みに修正が入り更新していくものと、修正せずそのままのものが混在することが考えられる。さらに、居住空間を認識^{16, 17}する際の認知的枠組みとしての図式を「居住空間の図式」と呼称する。この「居住空間の図式」とその形成には、文化的背景や居住経験が関わっていると想定する。

ナイサーの提唱した知覚循環の概念を基に、「居住空間の図式」の形成について、図 1-1 に例を示す。

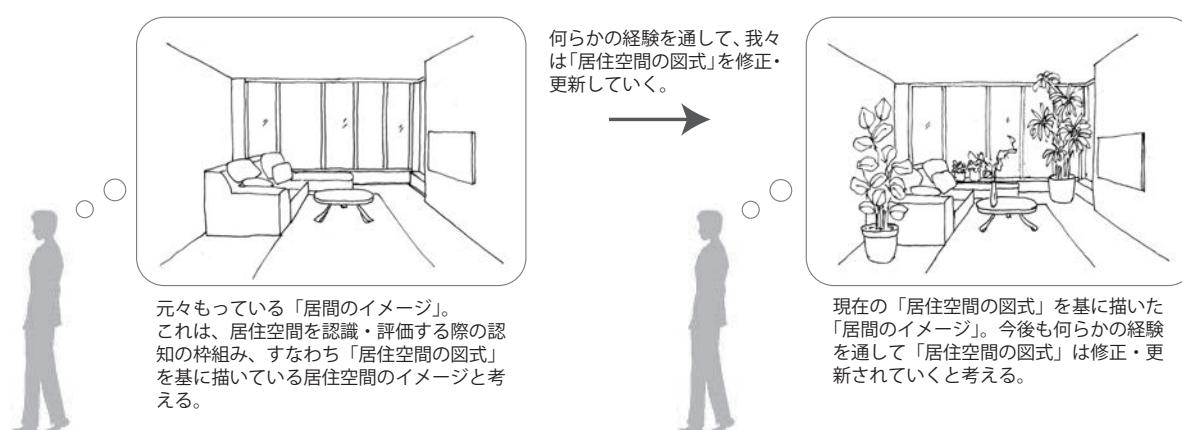


図 1-1. ナイサーの知覚循環モデルに基づく「居住空間の図式」の形成の一例

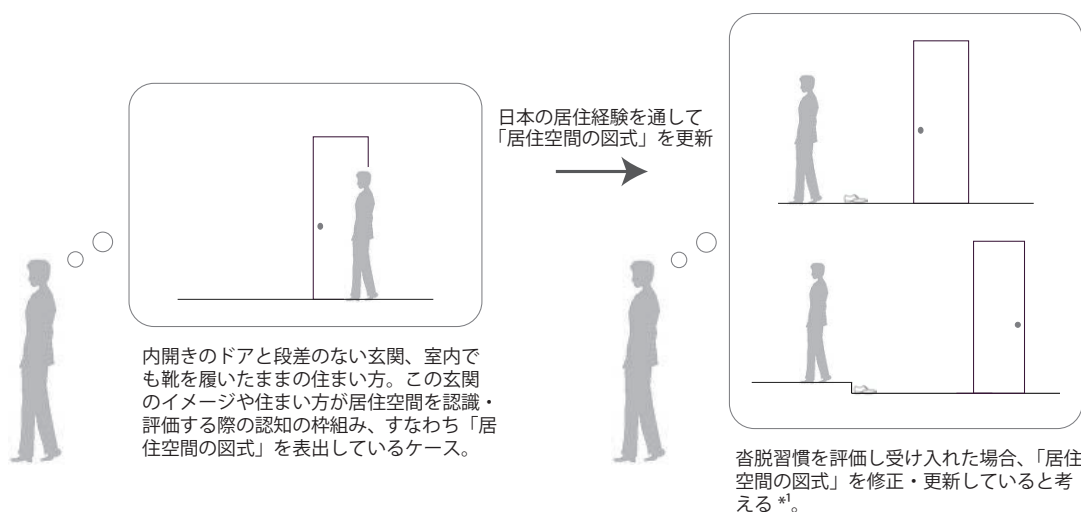
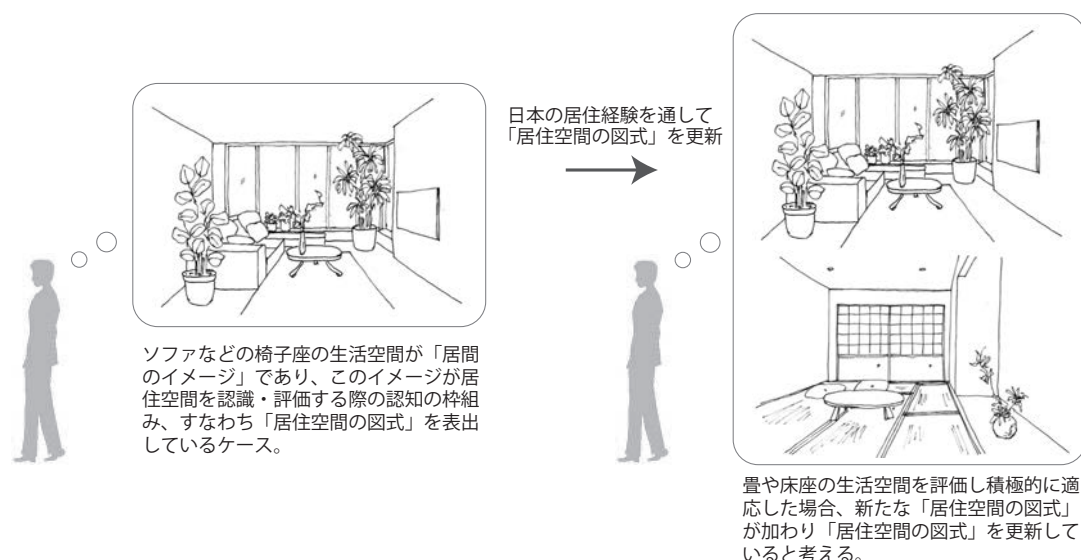
図 1-1 の左側の元々もっている「居間のイメージ」は、その人のもつ居住空間を認識・評価する際の認知的枠組み、すなわち「居住空間の図式」を通して描いている「居住空間のイメージ」である。窓が広く自然光の入る空間で、必要最低限の家具や家電のみで構成されている「居間のイメージ」として「居住空間の図式」が表出されている。その後、何らかの経験を通して、元来の「居間のイメージ」に植物と共生している様子が加わっている。これは、何らかの経験を通して、居住空間を認識・評価する際の認知的枠組みとしての「居住空間の図式」に修正・更新があり、新たな「居住空間の図式」が形成され、「居間のイメージ」として表出している³²。

さらに、本研究の調査対象とする日本に移住した外国人の異文化居住経験における「居住空間の図式」の形成について、図 1-2 に例を示す。

32 図 1-1. では居住空間を装飾する要素を事例として挙げているが、認知的枠組みとしての「居住空間の図式」修正・更新は、物理的な要素によるものに限定されない。空間の奥行き感、なわばり感等の空間感覚や住まい方等の住習慣も含むと考える。

図 1-2 上段のケースは、外国人が日本移住後、初めて和室や畳の空間および床座を体験し、その居住空間や住まい方を評価し、積極的に和室空間や床座の住まい方に適応した場合である。その人の居住空間を認識する際の認知的枠組みとしての「居住空間の図式」に、生活空間として和室や床座での住まい方についての「居住空間の図式」が新たに加わることで、「居住空間の図式」を更新していると考えられる。

図 1-2 下段のケースは、日本移住後、沓脱習慣および沓脱習慣に基づいた家の造り（玄関の段差など）を体験し、この習慣について積極的に適応し室内でへ靴を履かない生活へと移行した場合である。玄関に段差がある/なしに関係なく「室内では靴を履かない」すなわち沓脱習慣が「居住空間の図式」に加わることで、これまでの「室内でも靴を履く」という「居住空間の図式」を修正・更新していると考えられる。



* 1：沓脱習慣を受け入れ積極的に適応した場合は、玄関の段差のあるなしにかかわらず、沓脱習慣が「居住空間の図式」として修正され更新されていくと考えられる。

図 1-2. ナイサーの知覚循環モデルに基づく外国人の日本移住後の「居住空間の図式」の形成の事例

このように、「居住空間の図式」の更新は、新たな「居住空間の図式」が加わる場合や「居住空間の図式」が修正される場合を想定しており、どちらも「居住空間の図式」の形成に関わっていると考える。本研究では「居住空間の図式」そのものを調査対象とせず、「居住空間の図式」の形成について、居住空間の認識とその変容から捉えることを試みる。

認知構造：

主に心理学の分野では認知構造は「ヒトの認知系のなかに備えられた認知機能を有する構造で、外界を認知するために必要な汎用な構造」と定義付けられているが³³、G.A.Kellyは1955年に「人間は各人が経験を通じて構築されたコンストラクトシステムと呼ばれる固有の認知構造を持っており、これによって外界の情報を認知、理解し、その結果を予測しようと努めている」というパーソナルコンストラクト理論を提唱した²⁵。このコンストラクトシステムは幼少時からの経験によって獲得され、修正・強化されて形成される。2節2項で述べたように、パーソナルコンストラクト理論は本稿で分析手法として採用する評価グリッド法に先立つ理論であり、この認知構造において評価に関する構造を取り出したものが評価グリッド法で扱う評価構造である。評価構造では、評価項目が物理的な状況や客観的な判断などの下位概念から抽象的・心理的な価値といった上位概念まで階層的につながっていると考えられ、評価グリッド法ではラダーリングという手法でこれらの概念を引き出していく^{26, 27, 28}。本研究では、この認知構造について、外界すなわち周囲の環境を認識する際の認知的枠組みとしての「図式」を包含するものと捉える。さらに、本研究における「居住空間の図式」は、Kellyの提唱するコンストラクトシステムの認知構造の中に描かれた居住空間のイメージとその評価構造の上位概念の中に見出せると考える。図1-3に居住空間における認知構造の一例を示す。



図1-3. 居住空間についての認知構造（評価構造）の一例

33 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編),『心理学辞典』,有斐閣,1999

図 1-3 では、ある人の居住空間のイメージと居住空間の認知構造の階層を言語化した一例である。部屋に設置されている家具や窓の大きさなどの物理的な状況や客観的な判断などの下位概念から開放感や自由さ、居心地のよさなどの抽象的・心理的価値が上位概念まで階層的に並んでいる。本研究では、認知構造を構成するこれらの概念のうち上位概念に「居住空間の図式」の中心的概念を見出すことができると考える。これは、わたしたちが周囲の環境を認識する際に、物理的に存在するものや客観的な判断を伴う事象だけでなく、同時にそこに抽象的・心理的価値を捉え評価していると考えられるからである。

居住空間：

本研究で取り扱う居住空間は、室を構成する建築空間要素、立地やアクセスなどの周辺環境などを含む物理的空間と、物理的空間に付随する印象や感情を伴う心理的空間とする。詳細は以下の通りである。

物理的空間：

物理的空間には、室内空間と周辺環境を含む。詳細は下記の通りである。

室内空間：基本的な建築空間要素（部屋の広さ、天井高、窓のサイズ、天井・壁の色）

日本の建築空間要素（玄関、廊下、間仕切り、押入れ、畳、可動式家具、浴室の構成）

周辺環境：立地、アクセス、テリトリー

心理的空間：

心理的空間とは、物理的空間に付随する印象や感情を伴う空間である。主に、空間の印象や評価：開放感、眺め、日光の有無、部屋の方角、快適さ、心地よさ、安心・安全などが挙げられる。

1-3-2. 日本に移住した外国人の「居住空間の図式」の形成についての分析方法

本研究における「居住空間の図式」は、それ自体を捉えることはできないが、前述の通り、Kelly の提唱するコンストラクトシステム²⁵の認知構造の中に描かれた居住空間のイメージとその評価の上位概念の中に見出せると考える。「居住空間の図式」は、居住空間を認識^{16, 17}する際の認知的枠組みとしての図式であり、この認知的枠組みに基づいてイメージする居住空間については、その居住空間に対して肯定的かつ好意的であると考え。それゆえ、個人のもつ好ましい居住空間の認知構造の上位概念（以下、上位概念）が、居住空間の図式を形成する中心的概念のうち、居住空間の選好に関わる基準であることを想定する。Kelly の提唱するコンストラクトシステム²²において評価に関する構造を取り出したものが評価グリッド法で扱う評価構造であり、評価構造では、評価項目が物理的な状況や客観的な判断などの下位概念から抽象的・心理的な価値といった上位概念まで階層的につながっていると考えられる^{26, 27, 28}。本論文では、インタビュー調査を通して、評価グリッド法を採用し、ラダーリングの手法で、上位概念を抽出する。

日本移住後の「居住空間の図式」形成については、日本居住前後の住まい方の状態（不変/変化）とその状態についての認識（以下、住まい方の対応）から推定されると考える。日本移住後の「居住空間の図式」形成を捉えるためには、日本移住前の居住空間の認識や住まい方からの変容を把握する必要がある。居住空間を認識する際の認知的枠組みについて、生後間もない無経験状態から現在の「居住空間の図式」形成に至るまでの変容を辿ることはきわめて困難であり、過去の経験に基づいた「居住空間の図式」と日本移住後の「居住空間の図式」について、それぞれの住まい方の状態とその状態についての認識から推定した上で対照し、その変容を「居住空間の図式」の形成として捉える。一対一でより深い対話が可能なインタビュー調査を通して、日本移住前後の居住空間の認識や住まい方からの変容を把握する。

さらに、評価グリッド法を用いて抽出した好ましい居住空間の認知構造の上位概念と日本移住後の住まい方の状態と住まい方の対応から「居住空間の図式」形成の過程を考察する。本論文の第4章に相当する。

インタビュー調査を通して把握した日本と東京の居住空間の認識と住まい方の変化は、第5章で対照・考察する内容として用いる。

1-3-3. 日本に移住した外国人における日本の居住空間の認識についての抽出・分析方法

「居住空間の図式」の更新を探る前段階として、日本に居住する外国人の日本の居住空間の認識を把握するために、現在の居住空間の認識や住まい方を明らかにし、外国人の日本の居住空間の捉え方を整理する。現状の居住空間の認識や住まい方について幅広く把握するために、質問紙を用いて調査を行う。なかでも、「居住空間の図式」形成に関わっていると想定される個人の文化的背景や居住経験に相当する居住年数や居住空間の選択基準と日本の居住空間の認識との関わりを検討する。本論文の第3章に相当する。

質問紙調査を通して把握した日本の居住空間の認識と住まい方は、第5章で対照・考察する内容として用いる。

1-3-4. 日本移住後の日本の居住空間の認識の中で形成される「居住空間の図式」の分析方法

本研究では、顕著な変化を伴う環境移行である外国移住に着目し、日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識および「居住空間の図式」形成について明らかにすることが目的であると同時に、日本の居住空間の認識を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について日本の居住空間の他地域との共通性および特異性を整理することで、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにすることを試みる。第3章、第4章で得られる現在日本に居住する外国人の日本の居住空間の認識と住まい方および住まい方の変化と、多くの外国人が来日した明治時代以降現代に至るまでに移住した（長期旅行を含む）外国人から見た日本の居住空間の認識と住まい方および住まい方の変化を対照することで、現代の日本の居住空間の他地域との共通性および特異性を整理することができると思う。これら日本の居住空間の特質と「居住空間の図式」形成とを照合することにより、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにすることを試みる。

第3章および第4章で得られるデータと対照するデータを収集するために、明治時代以降現代までに出版された日本に移住した外国人による日本の居住空間にまつわる記述がある書籍を対象に文献調査を行い、日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識およびその変化を明らかにし、日本の居住空間の特質やその変遷を整理する。本論文の第2章に相当する。

1-4. 研究の構成

本研究は、序論および結論を含めて、全6章で構成される。第2章以下の各章題、それぞれの章で明らかにする事項について以下に示すとともに、研究の構成図を図1-4に表す。

第2章「日本文化に触れた文化人・知識人による日本移住後の日本の居住空間の認識—明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査」では、明治以降現代に至るまで日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識および日本の居住空間における住まい方を明らかにすることにより、日本の居住空間の捉えられ方の特徴や時代によるその変遷を整理することを目的とする。明治以降の日本文化に触れた文化人・知識人による日本の居住空間の認識、住まい方を、明治から平成にかけて出版された書籍を対象として分析する。

第3章「東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識—東京在住の外国人を対象とした質問紙調査」では、東京に居住する外国人の現在の居住空間の認識について質問紙調査に基づいて論じる。なかでも、「居住空間の図式」の更新について探る前段階として、「居住空間の図式」形成に関わっていると想定される個人の文化的背景や居住経験に相当する居住年数や居住空間の選択基準と日本の居住空間の認識との関わりを検討する。

第4章「東京に在住する外国人の日本における住まい方の変化の対応と居住空間の認知構造からみる「居住空間の図式」形成の過程—東京在住の外国人を対象としたインタビュー調査」では、第3章の結果および考察を踏まえ、インタビュー調査に基づいて、外国人の日本の居住空間の認識を整理し、それらと日本の居住空間における住まい方の状態（不変/変化）の対応（以下、「住まい方の対応」）から「居住空間の図式」形成について推定を行う。さらに、居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念と日本居住後の日本の居住空間における住まい方の変化の対応（以下、「住まい方の変化の対応」）から「居住空間の図式」形成の過程を考察する。

第5章「日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程—文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照」では、第2章の文献調査で得られた日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識およびその変化と、第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査で得られた日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識及びその変化との対照を行う。これらの対照をもとに日本の居住空間の特質と日本の居住空間における「住まい方の対応」の関わりを整理し、日本の居住空間の特質における他地域との共通性および特異性の観点から、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について考察する。

第6章「結論」では、以上の議論を総括し、結論とする。

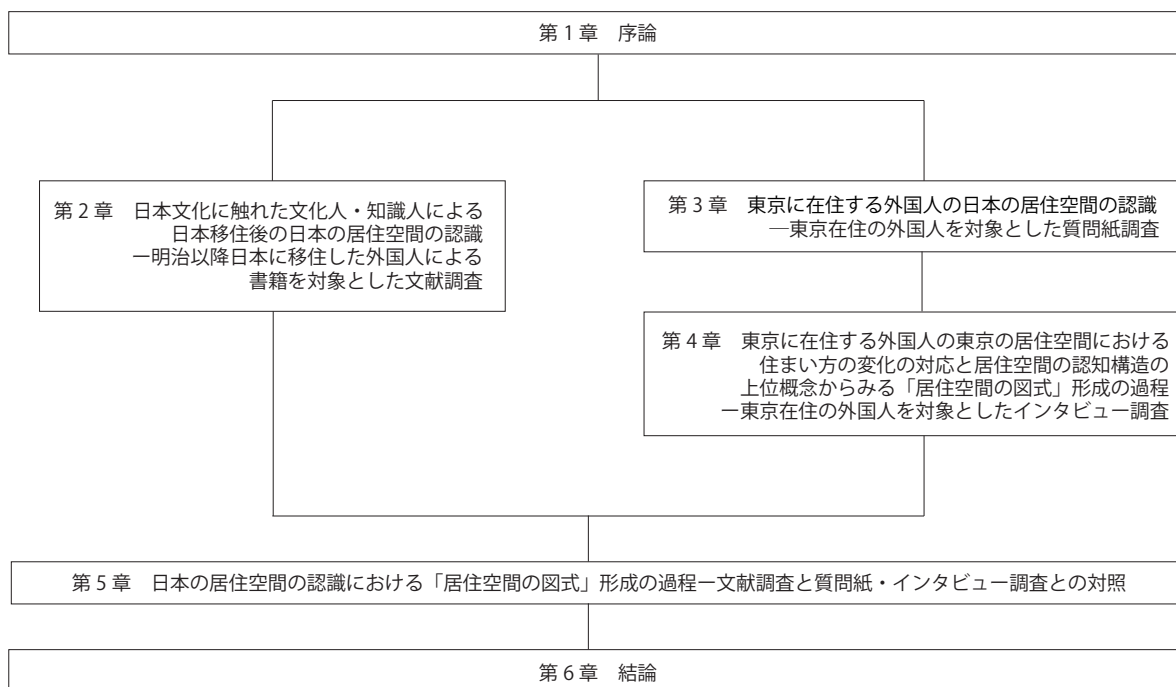


図 1-4. 本研究の構成

第 2 章 日本文化に触れた文化人・知識人による
日本移住後の日本の居住空間の認識
—明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査

2-1. 本章の目的

本研究では外国人の日本における居住空間の認識と「居住空間の図式」の形成について明らかにすることが目的であるが、加えて、日本の居住空間の認識を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について日本の居住空間の他地域との共通性および特異性から整理することで、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにすることができると思う。「居住空間の図式」の形成については、第3章、第4章で詳細に検討するが、図式形成について明らかにする過程で、質問紙調査およびインタビュー調査を通して、現在日本に居住する外国人の日本の居住空間の認識と住まい方について整理する。ここから日本に移住した外国人の視点による日本の居住空間の特質を見出すことができるのではないかと考える。一方で、来日した外国人が日本の居住空間について記述した書籍が多く出版されていることから、開国後多くの外国人が来日した明治時代以降現代までに移住³⁴した外国人から見た日本の居住空間の認識と住まい方と、質問紙調査およびインタビュー調査を通して得られた現在日本に居住する外国人の日本の居住空間の認識と住まい方を対照することでより鮮明に日本の居住空間の他地域との共通性および特異性を、さらには明治・大正・昭和期と現代の相違点を整理することができると思う。この対照・分析については第5章で扱う。本章では、明治時代以降現代に至るまでのおよそ150年の間に日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識と住まい方を明らかにすることにより、その捉えられ方の特徴や時間経過に伴う認識の変化を整理することを目的とする。

2-2. 研究の方法

多くの外国人が来日した明治から平成にかけて出版された文献を調査対象として、日本文化に触れた文化人および知識人による日本の居住空間の認識および住まい方を明らかにする。文献の選定においては、開国後の明治時代以降に移住した外国人が著者である書籍で居住空間についての記載があるものを対象とする。調査の手順は、①文献ごとに、居住空間にまつわる記述³⁵、具体的には建築要素や空間の使い方の描写を抽出する。また、その描写に評価内容が含まれる場合はその記述も抽出する。②抽出した建築要素や空間の使い方、その評価内容について、全文献のデータから同じグループとして捉えられる項目を抽出する。③項目ごとに記述内容を整理し、日本に移住した外国人からみた日本の居住空間の物理的特質・行動的特質および時間経過に伴う認識の変化について明らかにする。

34 ここでいう移住とは、日本に居住した/している場合だけでなく、旅行目的で来日し、ある一定期間日本の居住空間を経験した場合も含む。

35 叙述も含む。

第2章 日本文化に触れた文化人・知識人による日本移住後の日本の居住空間の認識
 —明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査

2-3. 調査の概要

2.3.1 調査対象文献の概要と調査の範囲

調査対象文献の概要を表2-1に示す。文献は、原著初版が明治から平成にかけて出版された書籍24冊である。

表 2-1 調査文献の概要一覧

著者 (生年-没年)	出身国	訳者	タイトル	頁数	出版社	出版年 カッコ内は初版年	原著出版年 カッコ内は初版年	日本での初版出版年 (出版社)	註記
イザベラ・バード (1831-1904)	イギリス	時岡敬子	イザベラ・バードの日本紀行 上	481	講談社	[2008] 2021	1880	1973	*1
		時岡敬子	イザベラ・バードの日本紀行 下	405	講談社	[2008] 2016	1880	1973	
エミール・ギメ (1836-1918)	フランス	岡本嘉子	明治日本散策 東京・日光	362	KADOKAWA	[2019] 2022	1880	2019	—
E・S・モース (1838-1925)	アメリカ	上田篤 加藤晃規 柳美代	日本人の住まい 内と外	329	鹿島出版会	[1979] 2003	1886	1979 (鹿島出版会)	—
		石川欣一	日本その日その日	320	講談社	[2013] 2021	1917	[1929]1939 (創元社)	—
フェリックス・レガメ (1844-1907)	フランス	林久美子	明治日本写生帖	310	KADOKAWA	2019	1905	2019	—
ラフカディオ・ハーン (1850-1904)	イギリス	池田雅之	新編 日本の面影	332	KADOKAWA	[2000] 2013	1894	1964	*2
		池田雅之	新編 日本の面影II	171	KADOKAWA	2015	1894	1964	
ビエール・ロチ (1850-1923)	フランス	市川裕見子	日本秋景 ビエール・ロチの日本印象記	258	中央公論新社	2020	1889	1890	*3
エリザ・R・シドモア (1856-1928)	アメリカ	外崎克久	シドモア日本紀行	467	講談社	[2002] 2020	[1891] 1902	1986	*4
ブルーノ・タウト (1880-1938)	ドイツ	森尙郎	ニッポン	188	講談社	[1991] 2016	—	[1934] 1941 (明治書房)	—
		森尙郎	日本文化私観	333	講談社	[1992] 2018	—	1936 (明治書房)	—
		篠田英雄	日本美の再発見 [増補改訳版]	175	岩波書店	[1962] 2019	—	1939 (岩波書店)	—
		篠田英雄	日本の家屋と生活	357	春秋社	[1950] 2008	—	[1949] 1950 (春秋社)	—
		篠田英雄	忘れられた日本	212	中央公論新社	[2007] 2016	—	1952 (創元文庫)	—
キャサリン・サンソム (1883-1981)	イギリス	大久保美春	東京に暮す	269	岩波書店	[1994] 2020	1937	1994	—
周作人 (1885-1967)	中国	木山英雄	日本談義集	390	平凡社	2002	—	1973 筑摩書房	*5
バーナード・リーチ (1887-1979)	イギリス	柳宗悦 水尾比呂志	バーナード・リーチ日本絵日記	341	講談社	[2002] 2022	1960	1955 (毎日新聞社)	—
ドナルド・キーン (1922-2019)	アメリカ	足立康	果てしなく美しい日本	326	講談社	[2002] 2016	1959	1973, 1993, 1999	—
		金関寿夫	日本人の美意識	290	中央公論新社	[1999] 2016	1969	1990 (中央公論社)	—
		—	二つの母国に生きて	232	朝日新聞社	[2015] 2016	—	1987 (朝日新聞社)	—
ジャック・ブズー＝マサビュオー (1930-)	フランス	加藤隆	家屋と日本文化	321	平凡社	1996	1966-1982	1996 (平凡社)	—
オギュスタン・ベルク (1942-)	フランス	宮原信	空間の日本文化	300	筑摩書房	[1994] 2007	1982	1985 (筑摩書房)	—
アレックス・カー (1952-)	アメリカ	—	美しき日本の残像	289	朝日新聞社	[2000] 2007	—	1993 (新潮社)	—

註記 日本での初版出版

*1: イザベラ・バード, 高梨健吉訳, 『日本奥地紀行』, 平凡社, 1973

*2: 小泉八雲, 平井呈一訳 『日本瞥見記 上』 小泉八雲作品集第5巻, 恒文社, 1964
 小泉八雲, 平井呈一訳 『日本瞥見記 下』 小泉八雲作品集第6巻, 恒文社, 1964

*3: ビエール・ロチ, 飯田旗郎抄訳 『陸眼八目』 (1890)

ビエール・ロチ, 下田行夫訳 『秋の日本風物誌』 (1953)

*4: エリザ・R・シドモア, 恩地光夫訳, 『日本・人力車旅情』 有隣新書, 1986
 (原著から神奈川・東京をテーマとする最初の13章を全訳)

*5: 周作人, 木山英雄訳, 『日本文化を語る』, 筑摩書房, 1973

著者は15名で、出身国は、フランス5名、イギリス4名、アメリカ4名、中国1名、ドイツ1名である³⁶。選定にあたり、明治時代以降に移住した外国人による居住空間に特化した論考、または居住空間についての記述を含む論考、日記、紀行、随筆および画集で、先行文献³⁷を参考に現在書店で入手可能な24冊の書籍を対象とした。ここでいう居住空間とは、住居と周辺環境を含む居住空間だけでなく、旅館や茶屋等の広義の居住空間を含む。また、居住空間に連なる神社仏閣及び庭園、都市空間についても取り扱う。

2-3-2. 調査対象文献の分類および本研究における文献の捉え方

調査対象文献書籍24冊の居住空間へのまなざしとその中で主に記述している内容を分類して図式化したものを図2-1に示す。研究者の視点から居住空間に特化した論考には、J. マサビュオーの『家屋と日本文化』、空間そのものを射程に入れたO. ベルクの『空間の日本文化』、さらに生活様式や生活文化まで含めた論考には、フィールドワークに基づいたE・モースの『日本のすまい・内と外』や物語形式で綴られたB・タウトの『日本の家屋と生活』が挙げられる。日本文化についての論考で、居住空間についての記述があるものとしては、周作人、B・タウトやD・キーンの著作が挙げられる。紀行、日記、随筆については、開国間もない明治初期の日本の様子を旅行を通して記したI・バードの『イザベラ・バードの日本紀行』、E・ギメの『明治日本散策』、E・モースの『日本その日その日』、P・ロチの『日本秋景』、E・シドモアの『シドモア日本紀行』や、昭和初期に京都から飛騨を経由し信越から東北地方へと旅した様子を記したB・タウトの『日本美の再発見』や、同じく昭和初期の東京の様子を描いたサンソムの『東京に暮す』がある。また、随筆については、昭和後期から平成にかけて徳島や京都での暮らしを記したA・カーの『美しき日本の残像』がある。

これらの異なるまなざしによる記述内容について、調査対象としての捉え方を「語り」という観点から整理する。ここでの「語り」とは、「語られた内容」と「語るという行為」の両者を包含するナラティブに相当し³⁸、創作物以外に、ノンフィクションや体験談など日常の語りも含む³⁹。調査対象文献における居住空間についての記述も「語り」であり、これらの「語り」には語り手自身の世界の捉え方が反映されている³⁵。歴史やルポルタージュ、ノンフィクション、体験談などの「語り」では、一般的に対応する現実があり、それを誤りなく伝えることができれば事実を語った内容となるが、事実そのものは読み手にとって認識不可能なもので

36 質問紙調査（第3章）およびインタビュー調査（第4章）では調査対象者各30名と6名で、出身地域に大きな偏りはない。本章の文献調査で抽出した日本の居住空間の認識について質問紙調査およびインタビュー調査で得られた回答との対照（第5章）において、出身地域により著しく乖離している項目は確認できなかった。回答内で大きな偏りはなかったものの、対象群全体の範囲が欧米圏の一部に偏っていることには留意が必要である。

37 佐伯彰一・芳賀徹編、『外国人による日本論の名著』，中央公論新社，1987

38 下山晴彦(編)，『誠信心理学辞典 新版』，誠信書房，2014

39 甲田直美，『物語の言語学』，ひつじ書房，2024

あり⁴⁰、事実か否か実証的に証明することはできない。また、語られる内容が事実と異なっていたり、語り手の解釈や曲解により再構成されることもありうる³⁵。このような前提をもとに「語り」を通して本研究で見出そうとしているのは語られている内容の真偽や内容の浅深・多寡ではなく、そこで「何が語られているのか」である。語り手の根底にある価値観³⁵を通して捉えた日本の居住空間の認識を見出そうと試みるものである。語り手の根底にある価値観とは、語り手の経験に基づき知識を体制化した認知的枠組み、すなわち本研究における「居住空間の図式」の中心的概念および居住空間を認識する際の評価構造の上位概念に相当するものであると考える。このように「語り」を通して、各文献の著者における居住空間の認識を明らかにしようとするものである。

さらに、このように捉えた「語り」の分析において、次元は異なるが、調査者自身のまなざしも関わってくることに留意が必要である。ある一定の規準に基づいて、調査者は語り手の価値観を通して捉えた日本の居住空間の認識について整理するが、その過程において設定した規準の解釈にあたり、調査者の視点が完全に排除されるとは言い切れない。このような前提をもとに調査対象文献から「語り」を通して日本の居住空間の認識を見出そうとする本文献調査において、調査対象書籍と調査者の関係についても把握しておく必要がある。

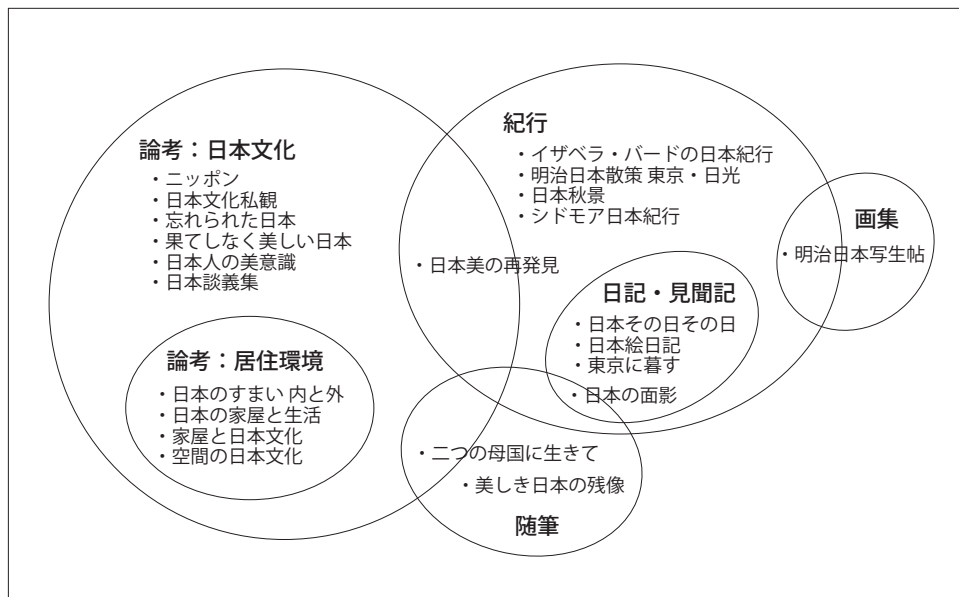
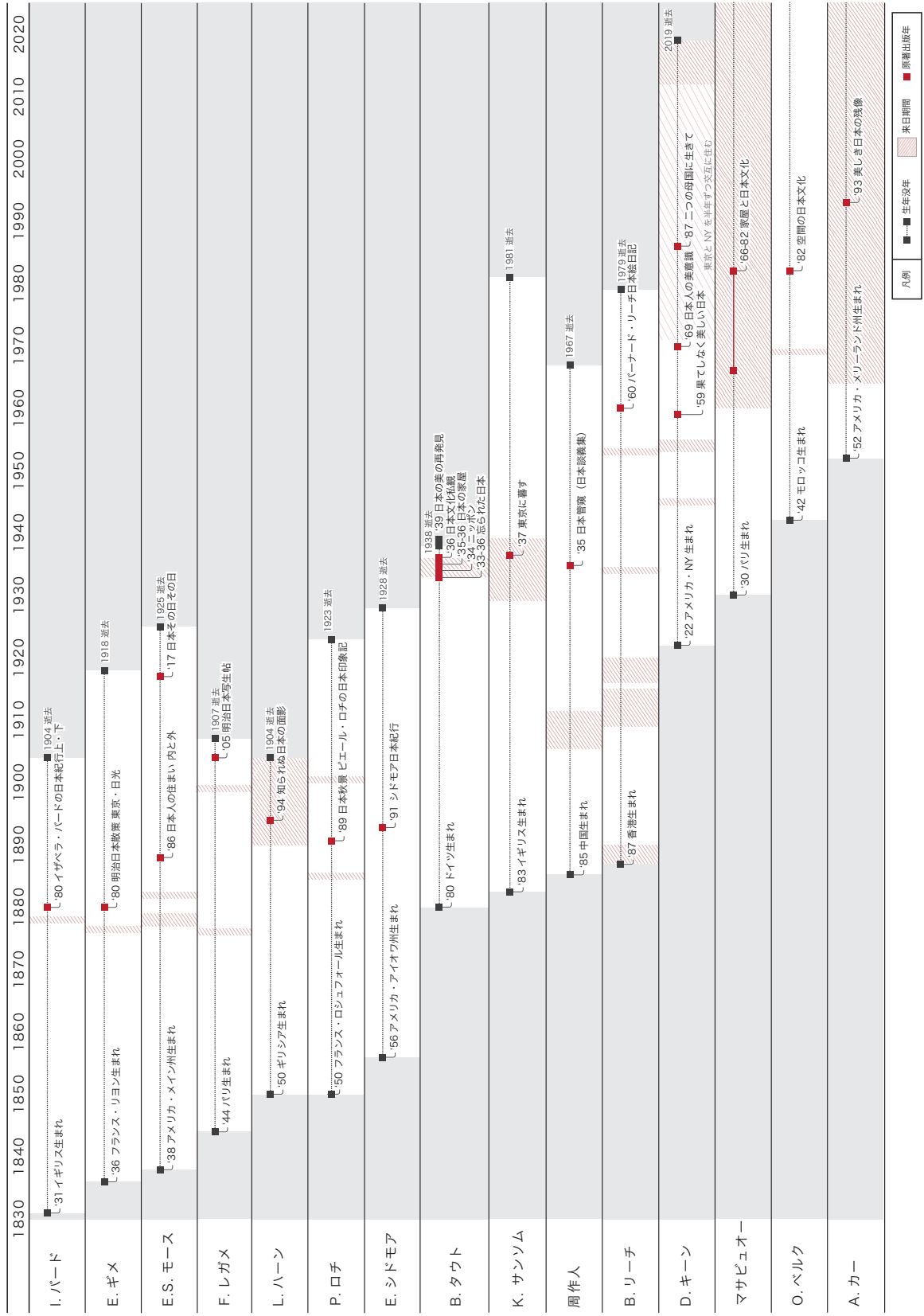


図 2-1 調査対象文献の分類

40 橋本陽介,『物語論 基礎と応用』,講談社,2017

表2-2 調査対象文献著者の年表



2-3-3. 調査対象文献著者の概要

時代背景の異なる著者の来日期間や書籍の出版された時期を概観するために、調査対象文献著者の年表一覧を作成した。表 2-2 に示す。また、各著者の略歴を以下、生年順に記す。

・イザベラ・バード (Isabella L. Bird, 1831-1904)

『イザベラ・バードの日本紀行 上・下』^{41,42}

原著: Unbeaten Tracks in Japan-----An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikko and Ise, John Murray, London, 1880

1831年イギリス生まれ。23歳の時に行った北米旅行を最初に生涯の多くを旅のうちに過ごし、いくつもの旅行記を残した。日本を訪れたのは、1878年47歳の時である。本書は1878年来日時の東北・北海道への旅行などをまとめたもので、原著は1880年にイギリスで出版された。1904年没

・エミール・ギメ (Émile Guimet, 1836-1918)

『明治日本散策 東京・日光』⁴³

原著: Promenades japonaises, Tokio-Nikko, G. Charpentier editeur, Paris, 1880

1836年、フランス生まれ。実業家。家業の化学工業で財を成したのち、西欧圏外の宗教に関心を抱き、地中海や中近東、インド、中国、日本を旅行。89年にパリで宗教博物館を創設。のちに同館はフランス国立ギメ東洋美術館として東洋学の拠点となっている。1918年没。本書は明治9年に宗教と文化への関心で来日した際の紀行で、同行画家のレガメの挿絵を収録している。

・E・S・モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925)

1838年アメリカ・メイン州生まれ。動物学者。進化論の観点から腕足動物を研究対象に選び、1877年来日。その折、東京にて大森貝塚を発見する。その後、1878年に家族を伴って再来日、文部省に請われて東京大学理学部の教授を2年間務める(1878-1879)。1882年に三度目の来日(8ヶ月間)。日本美術研究家ウィリアム・ビゲローを伴い、フェノロサとともに、関西、中国地方を回った。帰国後、『日本人の住まい』と日本滞在時の日記とスケッチをもとにした『日本その日その日』を出版。アメリカ各地で日本と日本文化についての講演

41 イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 上』, 講談社, [2008] 2021

42 イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 下』, 講談社, [2008] 2016

43 エミール・ギメ, 岡本嘉子訳, 『明治日本散策』, KADOKAWA, [2019] 2022

を晩年にいたるまで続けた。日本に初めてダーウィンの進化論を体系的に紹介したことで知られる。1925年没。

『日本のすまい・内と外』⁴⁴

原著：Japanese Homes and Their Surroundings, the 2nd edition, Sampson Low, Marton, Searle & Livingston(Ltd), London, 1886

翻訳者⁴によれば、本書は「伝統的な日本のすまいにかんする人類学的研究」とでもいうべきものであり、観察された期間は、1887年から89年までの三年あまりの時期である。モースは主として中流階層のすまいを観察対象とし、北海道から九州までの訪問先で住宅を観察し記録に残した。アメリカ住宅との比較の視点を持ち日本の住宅を捉えようとした比較文化研究ともいえる。

『日本その日その日』⁴⁵

原著：Japan Day by Day, 1917

本書は、初めて1877年に来日した際の様子から時系列順に書き進められた日本滞在録である。北は北海道から南は鹿児島まで、日本各地を訪れた際の様子や住まい方、日本人の行動について、時には母国の例と比較しながら記述している。動物学者でありながら、日本人の生活文化に関心を寄せ、多くの写生図を本著にも残している。

・フェリックス・レガメ (Félix Régamey, 1844-1907)

『明治日本写生帖』⁴⁶

原著：Le Japon en images, vers 1905

1844年、フランス生まれ。パリの芸術家の家庭に育ち、挿絵や戯画を新聞、雑誌に寄稿。パリ・コミュニケーション後は英米に渡り、デッサン教育にも携わった。1876年、1899年に訪日した経験から『お駒』『実用の日本』『お菊さんの薔薇色手帖』などの著作を残した。レガメは2度目の来日の記録として『日本』『東京の学校におけるデッサンとその教育』を残しており、本書は、この二作品をコンパクトに図像を中心として編集し直したものである。1907年没

44 エドワード・S・モース、上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳、『日本のすまい・内と外』、鹿島出版会、[1979] 2003

45 エドワード・S・モース、石川欣一訳、『日本その日その日』、講談社、[2013] 2021

46 フェリックス・レガメ、林久美子訳、『明治日本写生帖』、KADOKAWA、2019

・ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904)

『新編 日本の面影』⁴⁷、『新編 日本の面影II』⁴⁸

原著：Glimpses of Unfamiliar Japan, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1894

1850年、ギリシアにて、アイルランド人の父とギリシア人の母の間に生まれる。幼くして父母と別れ、19歳でアメリカへ。1890年に来日、同年小泉節子と結婚し、96年帰化し、小泉八雲と改名。1904年没

本書は、ハーンが初めて日本へ来た1890年4月4日から松江を去る1891年11月15日までの1年7ヶ月のことを扱っている。原著は1894年ボストンとニューヨークのホートン・ミフリン社から出版された作品集『知られぬ日本の面影』である。

・ピエール・ロチ (Pierre Loti, 1850-1923)

『日本秋景 ピエール・ロチの日本印象紀』⁴⁹

原著：Japoneries d'automne, Calmann-Levy 1889

1850年フランス・ロシュフォル生まれ。1885年7月、海軍士官として初来日。一旦、中国に向かい、再来日した同年9月23日から11月17日までの期間のことをまとめたのが本書である。最後の来日は1900年のことで、この時は1901年10月30日まで滞在した。1923年没

・エリザ・R・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore, 1856-1928)

『シドモア日本紀行』⁵⁰

原著：Jinrikisha Days in Japan, [1891] 1902

1856年アメリカ・アイオワ州生まれ。1884年、横浜へ初上陸（初来日と推定）。彼女の兄が外交官で日本に滞在することが多かったため、エリザも何度も来日していたようである。本書は、1884年秋から1902年春までの約20年間にわたる写真・挿絵入りの記録である。

1912年にアメリカ・ワシントンのポトマック公園において日本の桜が寄贈されたが、その立役者が彼女であった。

47 ラフカディオ・ハーン、池田雅之訳、『新編 日本の面影』、KADOKAWA, [2000] 2013

48 ラフカディオ・ハーン、池田雅之訳、『新編 日本の面影II』、KADOKAWA, 2015

49 ピエール・ロチ、市川裕見子訳、『日本秋景 ピエール・ロチの日本印象記』、中央公論新社、2020

50 エリザ・R・シドモア、外崎克久訳、『シドモア日本旅行』、講談社、[2002] 2020

・ブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938)

1880年、東ドイツ・ケーニヒスベルク生まれ。建築家。1933年5月、ナチスに追われる形で来日し、その後、1936年10月に大学教授としてイスタンブールへ招聘されるまでの三年半を日本で暮らし、仙台、高崎、東京、京都などを拠点に、講演や工芸指導に当たった。1938年、イスタンブールにて亡くなる。

タウトは短い日本滞在期間に多くの論考、講演記録、日記を残している。実施設計の機会に恵まれなかった日本時代の執筆活動は盛んで、日本で翻訳出版された書籍は多い。

『ニッポン』(1934)⁵¹

本書は、伊勢神宮や民家など日本古来の建築を好意的に評価し、特に桂離宮を「現代における最大の世界的奇蹟」などと称賛したタウトの最初の日本印象紀である。なお、本書は『ニッポン』(明治書房、昭和16年(1941年)刊)を底本とし、原文をすべて新かな、新漢字に改めたものである。

『日本文化私観』(1936)⁵²

滞日中のわずか三年間に残した日本文化論のうちの一つで『ニッポン』に続くものである。本書は、『日本文化私観』(明治書房、昭和11年(1936年)刊)を底本とし、原文をすべて新かな、新漢字に改めたものである。

『日本美の再発見 [増補改訳版]』(1939)⁵³

本書は1939年6月に論文二篇と日記抄二篇との訳に『日本美の再発見』という題目を付して刊行されたものの改訂版にあたる。改版を機会に、「日本建築の世界的奇蹟」(欧文雑誌”Nippon”(1935年1月号)に掲載)と「伊勢神宮」(『ニッポン』(1933)にも収載)の二小篇を新たに付け加えている。「日本建築の基礎」は1935年10月に国際文化振興会で企画された講演会の一環としてタウトが受け持った題目であり、独文および英文で出版された公演の原稿を本人の依頼により訳者が雑誌『日本評論』に訳載したものである。日記抄については「飛騨から裏日本へ」は『日本評論』に、また「冬の秋田」は『文芸春秋』に掲載されたものである。「永遠なるもの」は『日本の家屋と生活』の最終章を収載している。

51 ブルーノ・タウト、森嶋郎訳、『ニッポン』、講談社、[1991] 2016

52 ブルーノ・タウト、森嶋郎訳、『日本文化私観』、講談社、[1992] 2018

53 ブルーノ・タウト、篠田英雄訳、『日本美の再発見 [増補改訳版]』、岩波書店、[1939] 2019

『日本の家屋と生活』(1950)⁵⁴

本書は、タウトが1935年6月19日から1936年1月14日にかけて書き上げた物語形式の著作である。高崎にある洗心亭を基点に諸所を周遊視察し、日本の家屋とその生活とが示す色々な特性を風土、建築、技術、文化等の多角的な観点から観察し、それぞれの事象についてまとめたものである。1949年に雄鶏社から共訳で出版されたが、春秋社版著作集では同一訳者を必要としたので、新たに訳出したものが1950年に出版された本書の初版である。1950年12月発行の『日本の家屋と生活』を底本とし、旧漢字を新漢字とするなど表記を一部改めている。

『忘れられた日本』(1952)⁵⁵

本書は日本に滞在中に桂離宮及び伊勢神宮について書いたものを主とし、これになんらか関連しているものを従として、十五篇の文章を集めたものである。本書は1952年9月に刊行された『忘れられた日本』を底本とし、旧字体を新字体に改めたものである。

・キャサリン・サンソム (Katharine Sansom, 1883-1981)

『東京に暮す』⁵⁶

原著：Living in Tokyo, Katharine Sansom, 1937

1883年イギリス生まれ。1928年から1939年まで、夫（ジョージ・サンソム、外交官）の赴任に伴い東京で暮らす。この間の滞日見聞記が本書であり、1937年にイギリスで原著が出版された。1981年没。

・周作人 (1885-1967)

『日本談義集』⁵⁷

1885年中国生まれ。1906年に日本へ留学、1911年帰国。1935年頃に論文として留学時代の日本での経験をもとにまとめ発表したものが「日本管窺の二 日本の衣食住」（日本談義集に収録）であり、本研究ではこの論考を調査対象とする⁵⁸。1967年没。

54 ブルーノ・タウト、篠田英雄訳、『日本の家屋と生活』、春秋社、[1950] 2008

55 ブルーノ・タウト、篠田英雄編訳、『忘れられた日本』、中央公論新社、[2007] 2016

56 キャサリン・サンソム、大久保美春訳、『東京に暮す』、岩波書店、[1994] 2020

57 周作人、木山英雄編訳、『日本談義集』、平凡社、2002

58 『日本談義集』p.382「周作人と日本」にて「日本管窺」を論文として『国聞週報』に発表したという自伝の内容が紹介されている。

・バーナード・リーチ (Bernard Leach, 1887-1979)

『バーナード・リーチ日本絵日記』⁵⁹

原著：A Potter in Japan, Ferber & Ferber, 1960

1887年香港生まれ。父は弁護士、母は誕生後間もなく死別。日本在住の母方の祖父母に引き取られ、父の再婚で香港に戻る3歳まで京都及び彦根で育つ。8歳で父の転勤でシンガポールへ、10歳で英国へ。1909年22歳で日本へ、婚約中の英国人女性と結婚。1915年28歳で家族で北京へ赴くが、翌年日本に戻る。1920年、33歳で濱田庄司を伴い英国へ帰国。1934年に一時日本に滞在するも翌年英国へ戻る。本著(1955年、毎日新聞社より刊行)は1953年に19年ぶりに訪れた日本で各地の名所や窯場を巡ったことを記した絵日記である。

・ドナルド・キーン (Donald Keene, 1922-2019)

1922年アメリカ・NY生まれ。日本文学研究者、文芸評論家。第2次大戦後、コロンビア大学、ケンブリッジ大学を経て京都大学大学院に留学。帰国後、コロンビア大学教授に就任し、古典から現代文学まで広く研究した。長く、日本・NY間を往来していたが、2011年に東京へ転居。2012年に日本国籍を取得。2019年没。⁶⁰

『果てしなく美しい日本』⁶¹

原著：LIVING JAPAN: The Land, the People and Their Changing World, 1959

ニューヨークの出版社からの依頼で現代日本についての一般読者向けの本として書いたものが第一部 生きている日本(1973年)、原著：LIVING JAPAN: The Land, the People and Their Changing World, 1959である。2002年に文庫本を刊行する際に二つの講演を記載し、第二部(1993年)と第三部(1999年)としてまとめられた。

『日本人の美意識』⁶²

原著："Japanese Aesthetics", *Philosophy East and West*, 1969

本書は9章からなる日本文化にまつわる論考で、本研究では、1章「日本人の美意識」を調査対象とする。上述の原著は1章に該当する。

59 バーナード・リーチ, 柳宗悦訳, 水尾比呂志補訳, 『バーナードリーチ 日本絵日記』, 講談社, [2002] 2022

60 <https://www.donaldkeene.org/history> (2023年7月19日参照)

61 ドナルド・キーン, 足立康訳, 『果てしなく美しい日本』, 講談社, [2002] 2016

62 ドナルド・キーン, 金関寿夫訳, 『日本人の美意識』, 中央公論新社, [1999] 2016

『二つの母国に生きて』⁶³

本書は執筆時に一年をニューヨークと東京で棲み分ける生活をしてきた筆者の随筆集である。本研究では「私の日本住居論」「谷崎先生のこと」を調査対象としている。

・ジャック・プズー＝マサビュオー (Jacques Pezeu-Massabuau, 1930-)

『家屋と日本文化』⁶⁴

1930年パリ生まれ。ソルボンヌ大学卒業。1960年来日。論文“La maison japonaise”（日本の民家）で文学国家博士号を得る。本書は雑誌等で発表した伝説論文に加筆し、まとめたものである。日本では1996年に出版。⁶⁵

・オギュスタン・ベルク (Augustin Berque, 1942-)

『空間の日本文化』⁶⁶

原著：Vivre l'espace au Japon, Presses Universitaires de France, 1982

1942年生まれ。パリ大学で地理学第三課程博士号及び文学博士号（国家博士号）を取得。1984年から1988年、日仏会館フランス学長。日本にも合わせて12年ほど滞在して研究・教育に携わる（2018年当時）。⁶⁷ 本書は、「日本的空間のアナロジー的な同一性を体系的に捉える」ことを試みた日本論である。

・アレックス・カー (Alex Kerr, 1952-)

『美しき日本の残像』⁶⁸

1952年アメリカ生まれ。1964年、12歳の時に父の転勤で初来日、横浜本牧の米海軍基地に住む。1973年から徳島・祖谷で茅葺民家を再生させる活動を始める。本書は1993年に出版、翌年、新潮学芸賞を受賞。1996年に本書の英訳に加筆した『Lost Japan』を出版。数カ国語に翻訳されている。

63 ドナルド・キーン、『二つの母国に生きて』,朝日新聞出版,[2015] 2016

64 ジャック・プズー＝マサビュオー,加藤隆訳,『家屋と日本文化』,平凡社,1996

65 <http://www2.gol.com/users/jpmassa/japonais.html> (2023年7月19日閲覧)

66 オギュスタン・ベルク,宮原信訳,『空間の日本文化』,筑摩書房,[1994] 2007

67 <https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/jyusyou/2018.html> (2023年7月19日閲覧)

68 アレックス・カー,『美しき日本の残像』,朝日新聞出版,[2000] 2007

2-3-4 調査対象文献著者の日本国内移動の軌跡

調査対象文献の著者は、滞日中、東京だけでなく日本各地を訪問している。彼ら / 彼女らの訪問先を把握するために、日本各地の訪問先の居住空間について具体的に記している9名の移動の軌跡を地図上に表す（図2-2から図2-10）⁶⁹。東北、関西へと広く移動したバード⁷⁰やタウト、北海道から九州まで偏ることなく日本各地を訪れたモース、東京から関西、山陰方面に移動した、ハーン、シドモア、ロチなど、これらの図からは、東京、横浜を中心に、北へ西へと移動している様子がうかがえる。また、明治時代に訪日したバード、ギメ、モース、ロチ、シドモア、タウトにおいては、関東圏内では必ず日光に立ち寄っていることがわかる。

69 これらの軌跡図では、調査対象書籍の文中に居住空間についての記載がある訪問先を中心に、訪問したことが明らかな場所を抽出しプロットしている。そのため、著者が滞日中に訪問した全ての場所・地域を網羅しておらず、限定されている。

70 バードは北海道も訪れている。

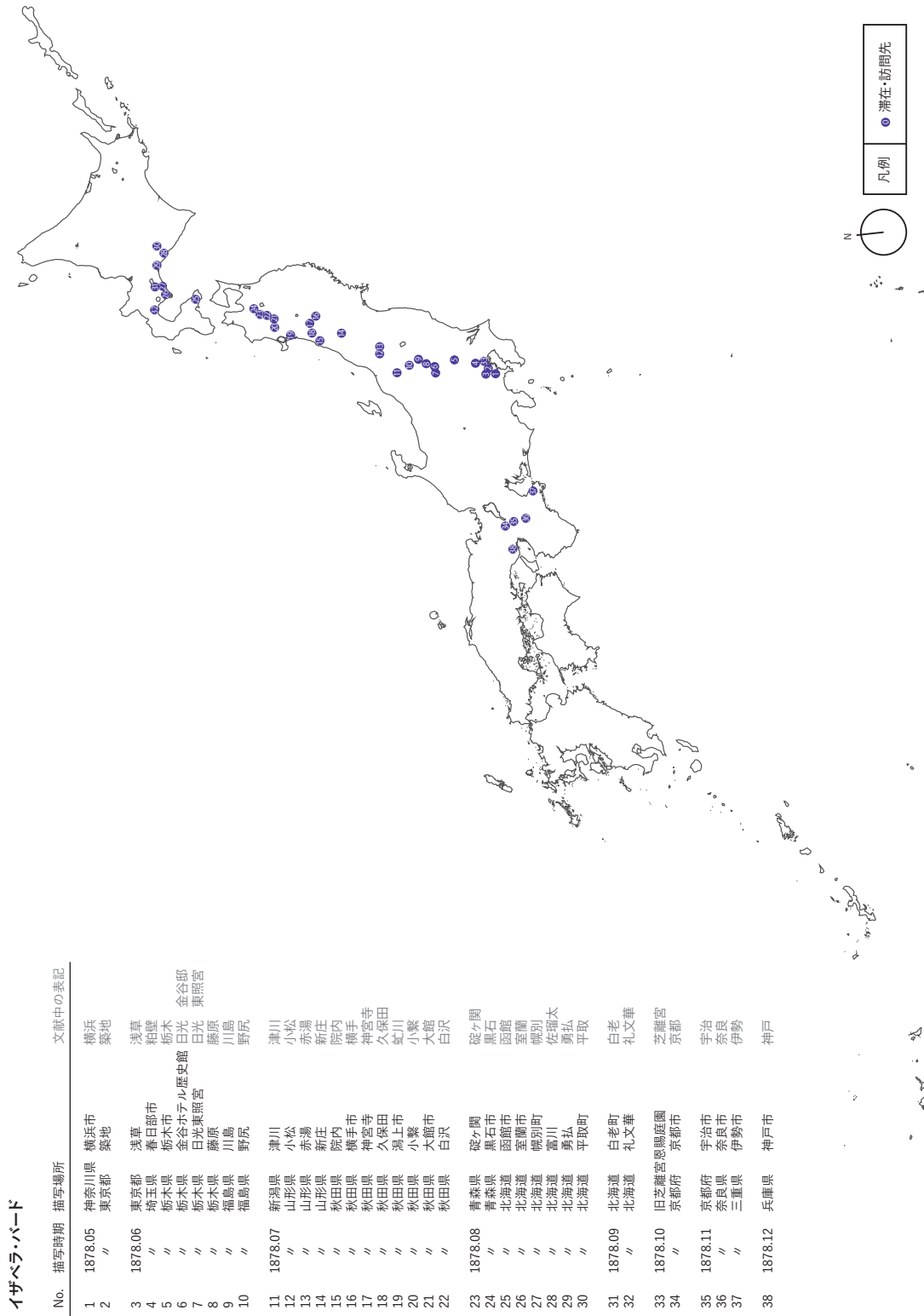


図2-2 日本国内移動の軌跡（イザベラ・バード）

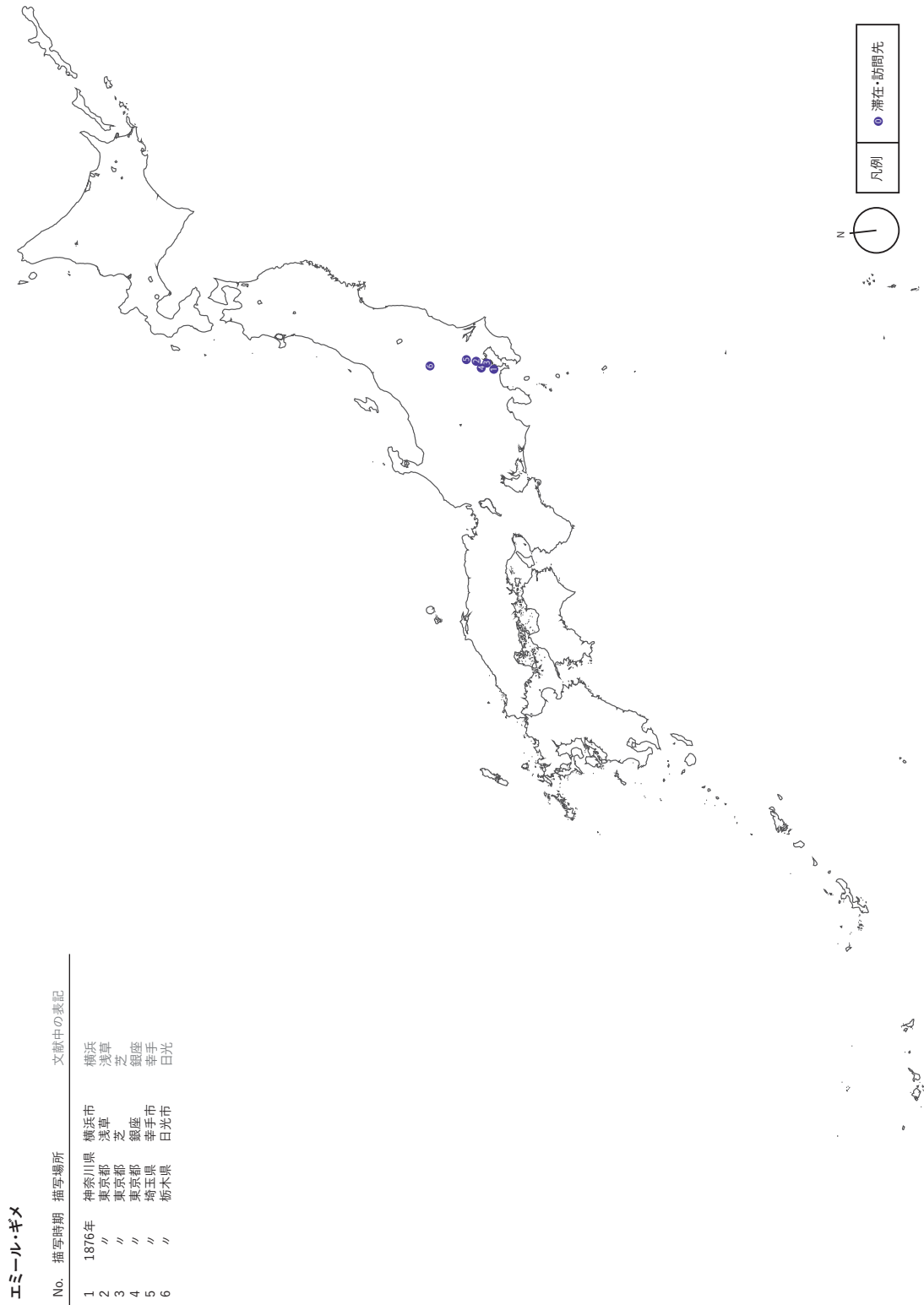


図 2-3 日本国内移動の軌跡 (エミール・ギメ)

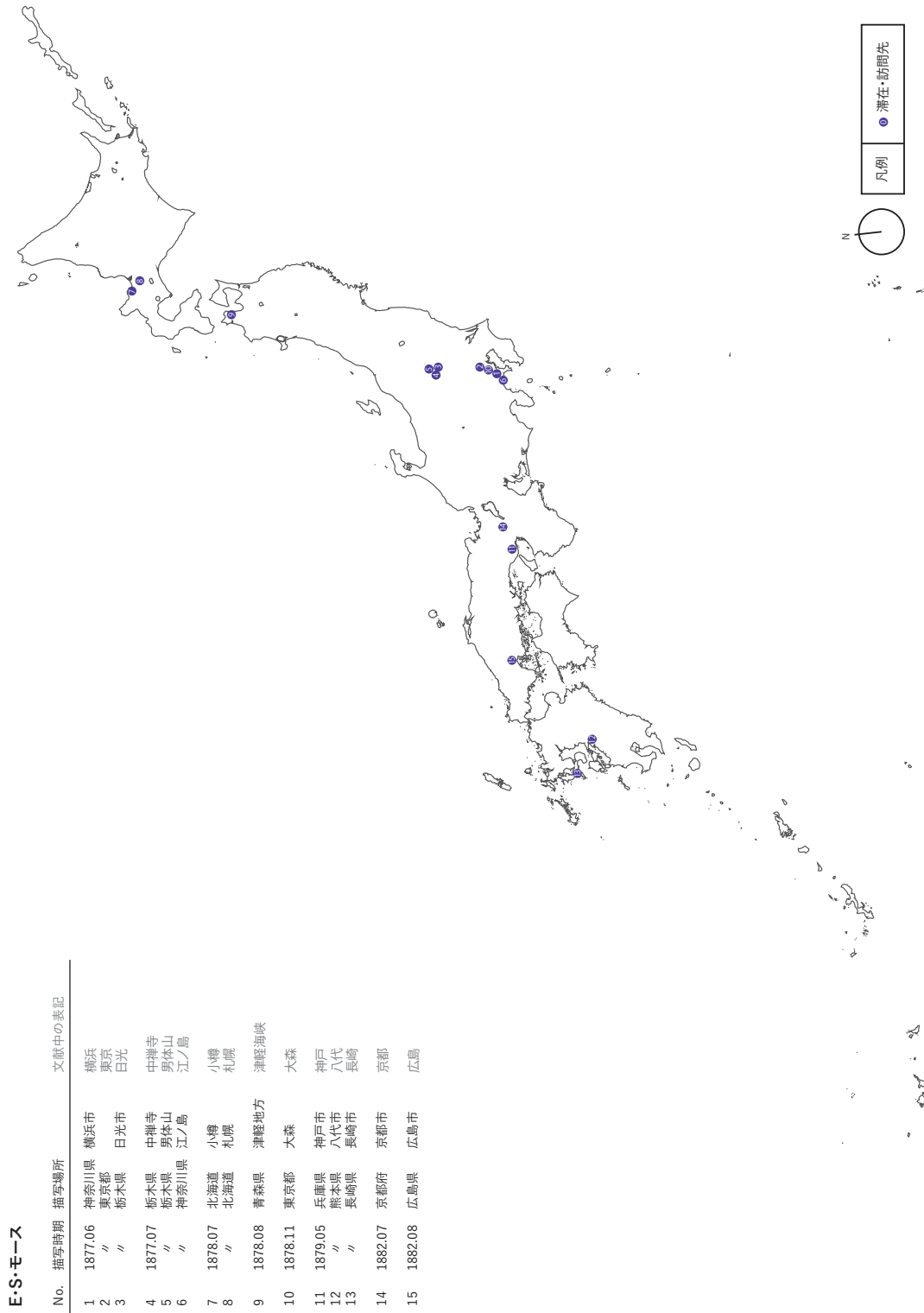


図2-4 日本国内移動の軌跡 (E・S・モース)

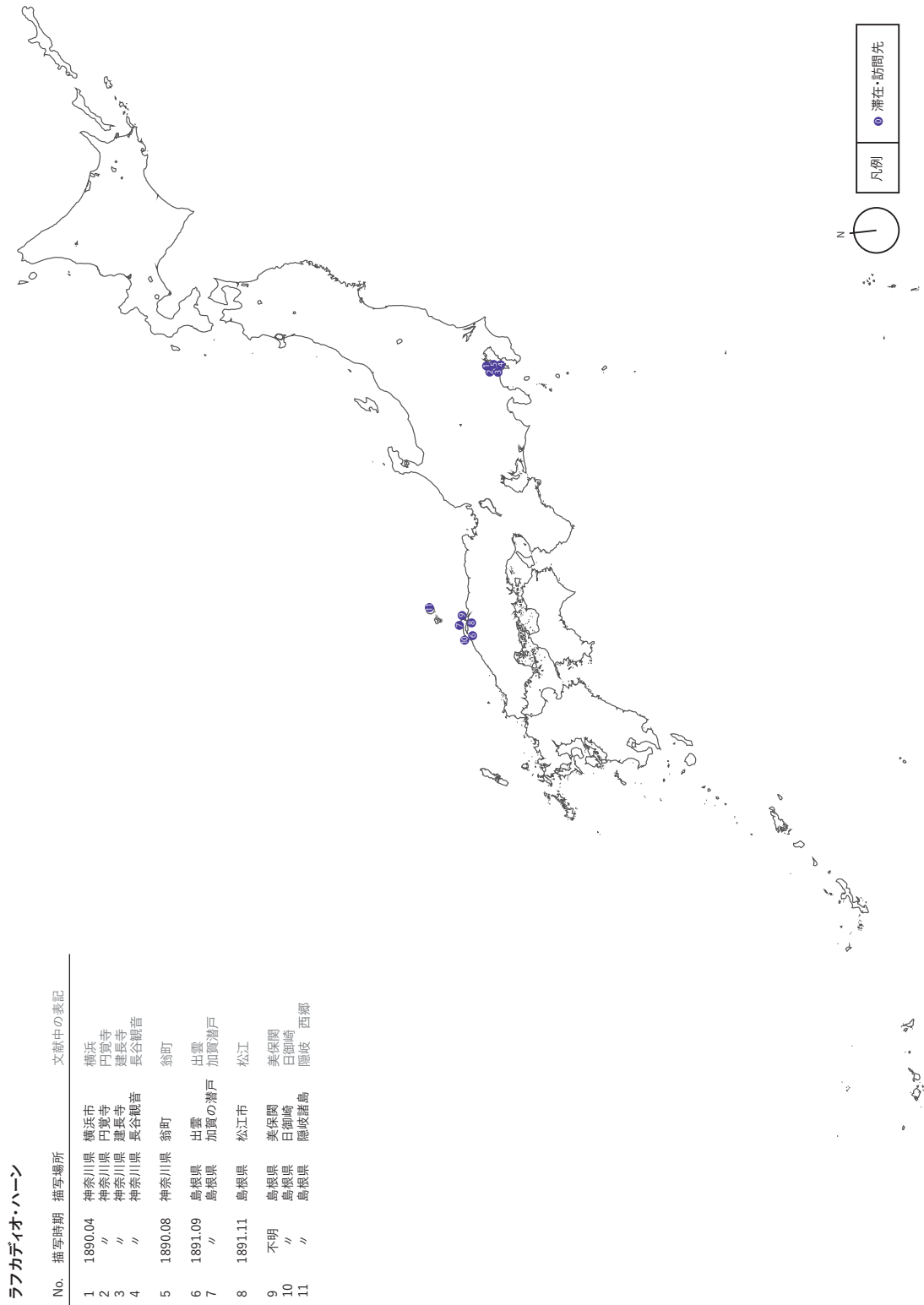


図 2-5 日本国内移動の軌跡（ラフカディオ・ハーン）

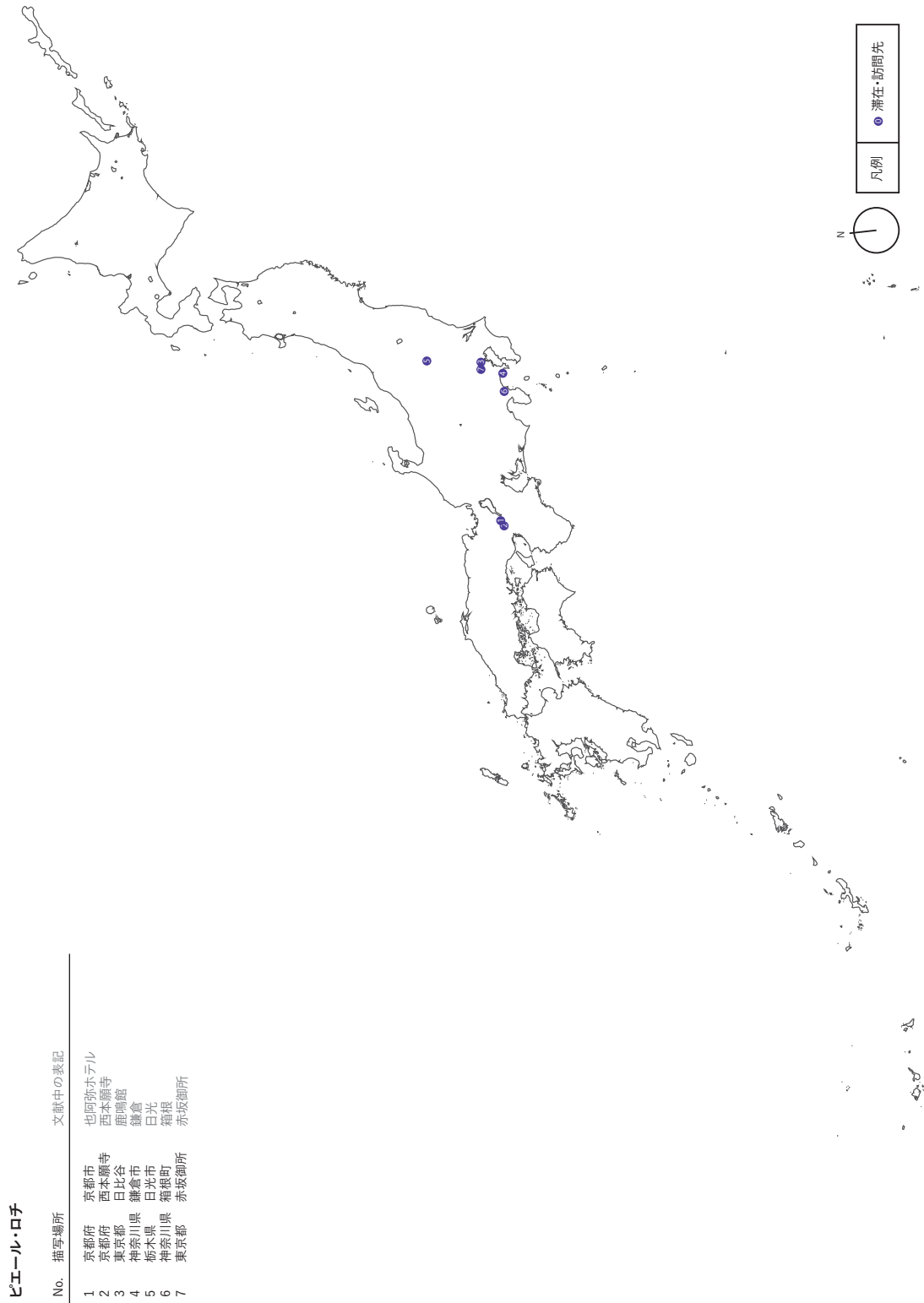


図2-6 日本国内移動の軌跡（ピエール・ロチ）

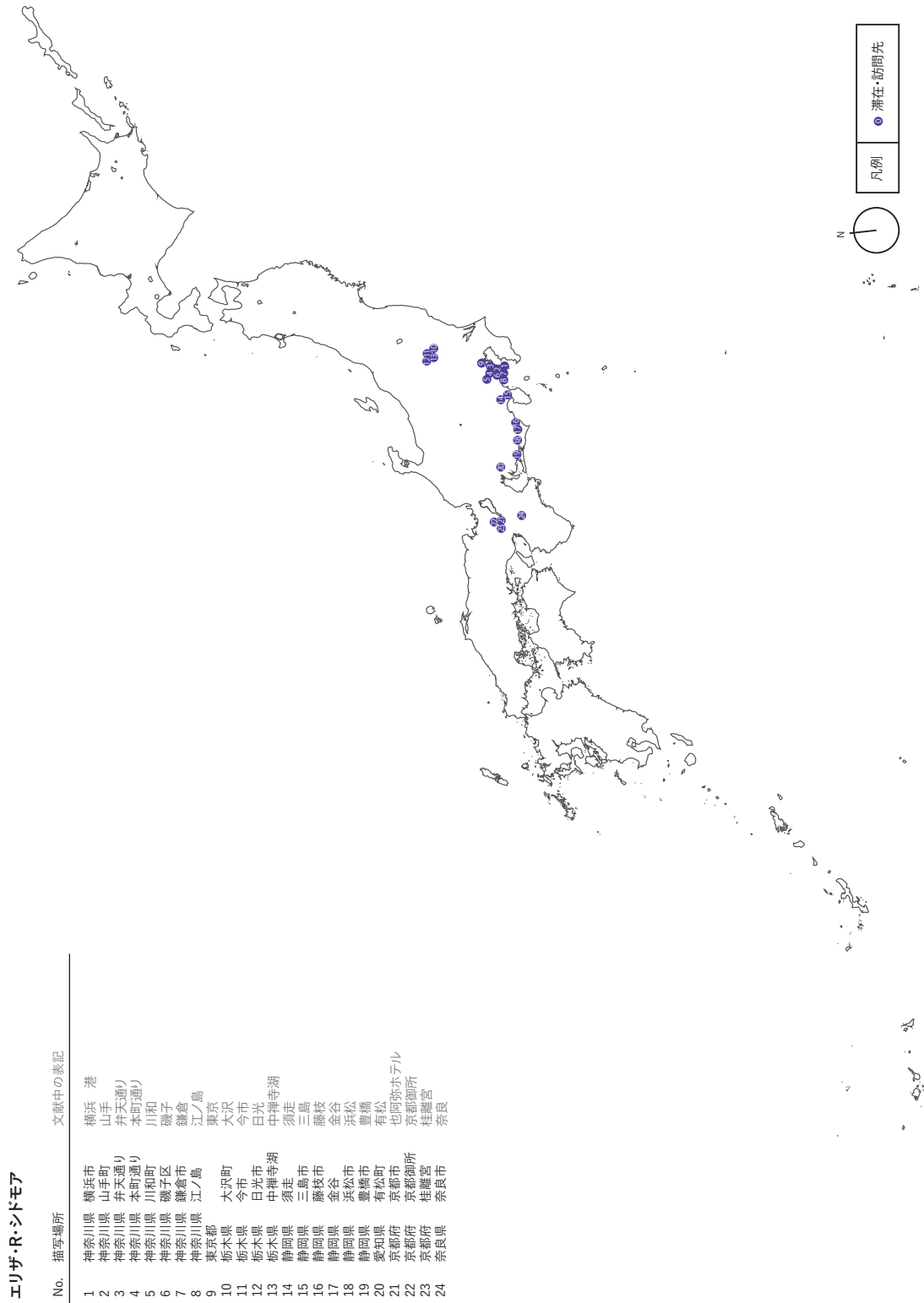


図2-7 日本国内移動の軌跡 (エリザ・R・シドモア)

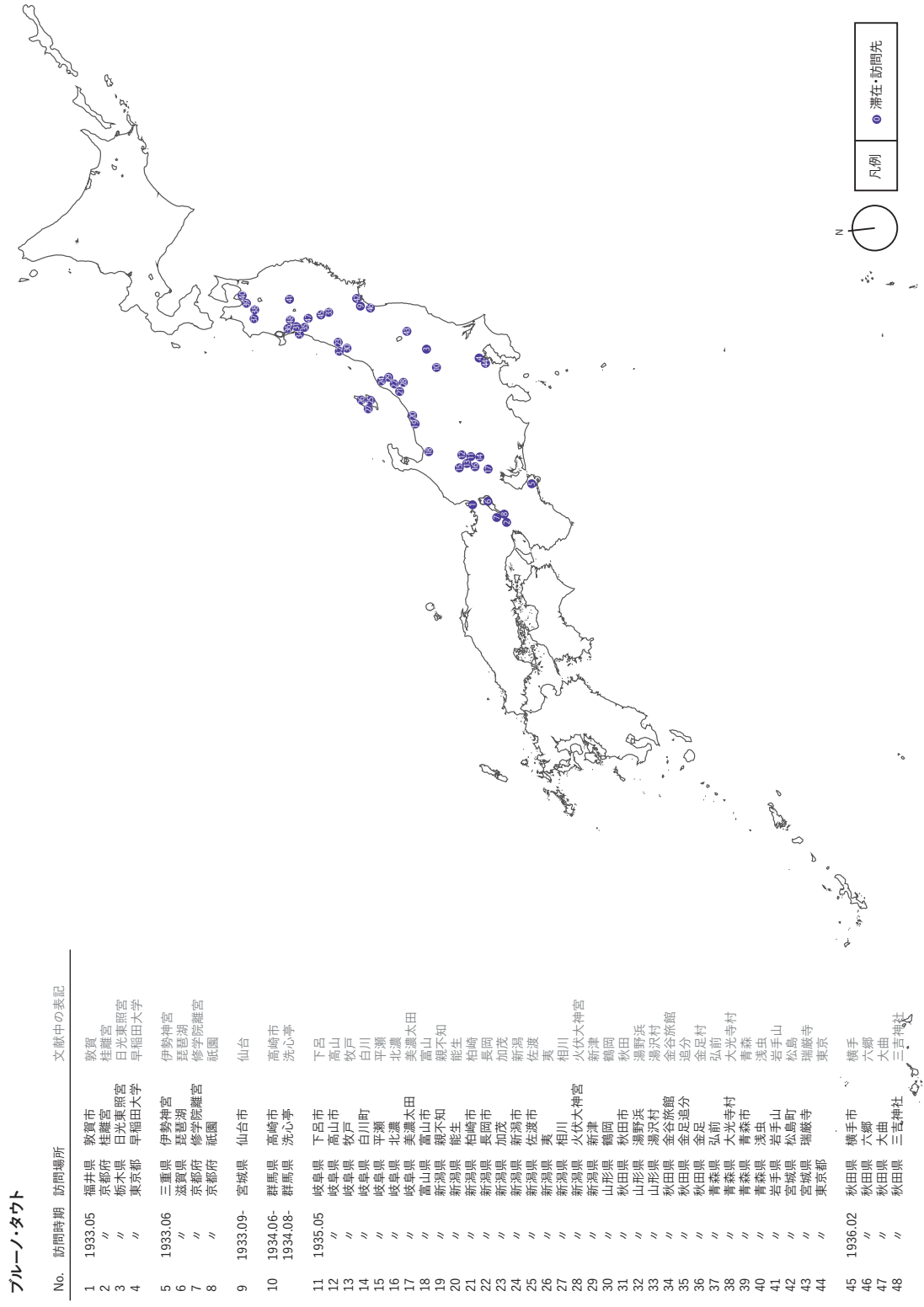


図2-8 日本国内移動の軌跡（ブルーノ・タウト）

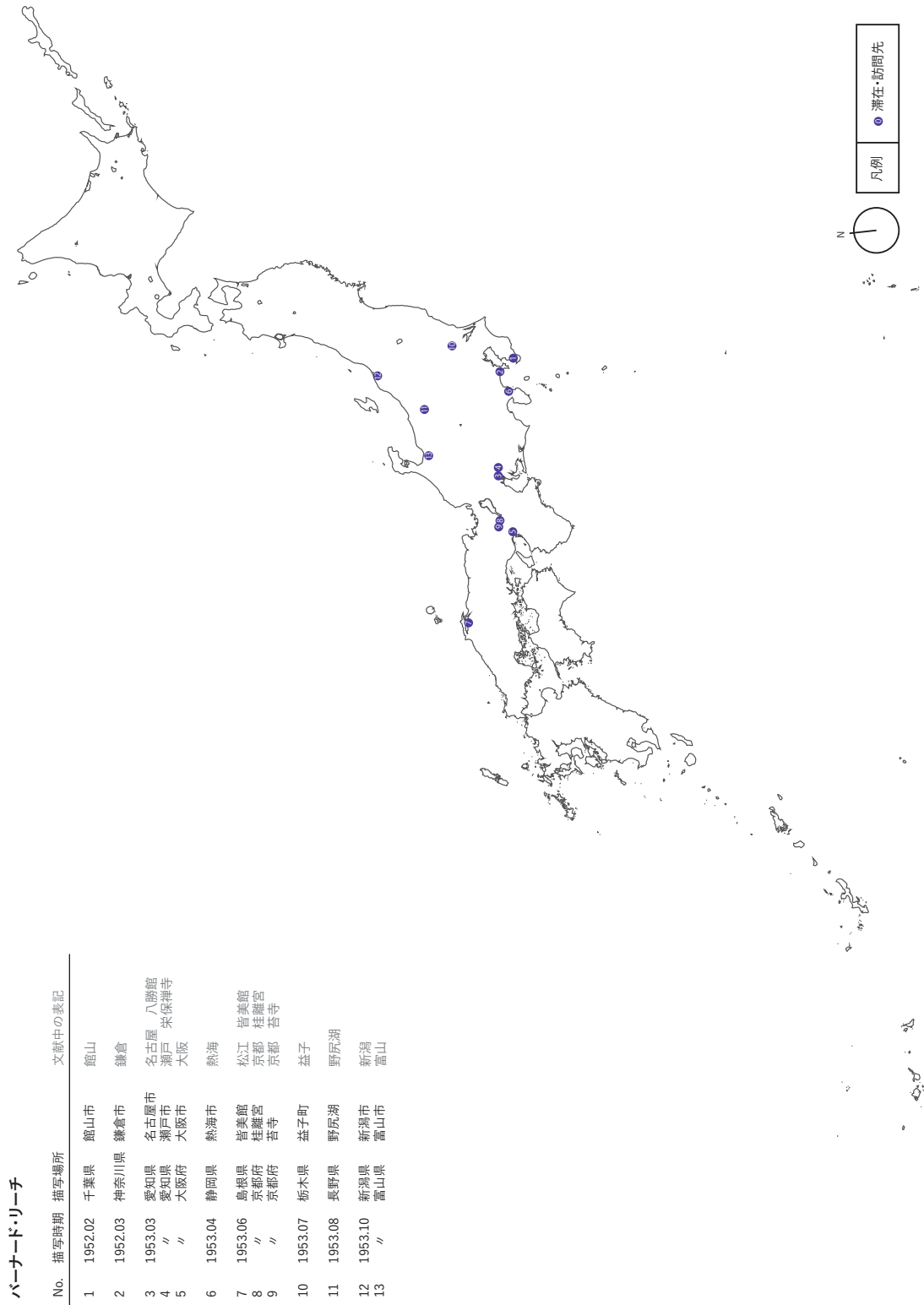


図 2-9 日本国内移動の軌跡 (バーナード・リーチ)



図 2-10 日本国内移動の軌跡 (アレックス・カー)

2-4. 日本の居住空間の認識

2-4-1. 日本の居住空間の認識一覧

各文献から抽出した日本に移住した外国人の日本の居住空間にまつわる記述、具体的には日本の建築要素や空間の使い方の描写、また、その描写に評価内容が含まれる場合はその記述について、書籍ごとに整理した。その上で、文献全体で、建築要素や空間の使い方、評価内容に、同じような記述が含まれるものをまとめ、日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目を抽出し、項目ごとに記述を整理した。また、広義の居住空間として旅館や、居住空間に連なる住宅、街並み、建物、神社仏閣、ランドマークも項目として抽出し、記述を整理した。

日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目と各書籍の該当一覧を表2-3に示す。

居住空間に特化した書籍である『日本のすまい』と『日本の家屋と生活』に、抽出項目に該当する記述が多いことがわかる。全時代で多い記述内容は「床・床座」「沓脱習慣」「簡素さ（家具がない）」「庭・自然とのつながり」「部屋の広さ・天井高」「仕切り（建具・戸・障子）」「温熱環境」「採光・照明」「清潔さ」である。「床間」「茶室」「年中行事・飾り」についても、多く取り上げられている。昭和・平成期と比べて明治初期に顕著にみられる記述内容としては「音（騒音・プライバシー）」「匂い・臭い」「清潔さ」が挙げられる。また、明治初期の文献には紀行・日記が多いことから、「東京」のみならず「京都」や「日本の旅館」についての記述も多くみられる。「東照宮」「富士山」の記述も多いのも特徴である。

上記の例に挙げた項目において特徴的な記述内容を、各項目ごとに表2-4から表2-21に示す。次項以降、各項目の記述をもとに考察する。また、2-4-17において、本節のまとめを行う。

2-4-2. 床（畳、床座、床に寝る）・沓脱習慣

1) 畳（表 2-4）

畳に関する描写では「清潔さ」にまつわるものが多い。視覚的な印象だけでなく、「よい香り」「柔らかな」といった嗅覚、触覚で捉えていることもうかがえる。また、身分に関係なく住居では簡素で清潔な畳が使用されていることをロチやマサビュオーが指摘している。バードやシドモアは畳のモジュールについてその詳細を理解している。

2) 床座（表 2-5）

床座についての記述では身体的反応に関するものとして、モースが「日本家屋に賞賛すべき多数のものを発見したが、なかには、わたしの耐えられないこともある。たとえば、床にすわる姿勢などは、なれるまでつらいことである」と床座での経験を記している。リーチも同様に畳が「すてきである」ことは認識しつつも、床座については否定的な印象を述べている。サンソムは正座を「日本の習慣の中で最も難しく、真似ることが不可能に近い」と、周作人も「十分も経たぬうちに両足は痺れてしまうだろう」と述べている。もつとも、モースにとって床座は来日当初「たいへんつらいこと」であったが、時間経過とともに「今では私は一時間半、すこしも苦痛を覚えずに、坐っていることが出来る」ように、床座に慣れていったことがわかる。一方、タウトは身体的感覚として、床座での地面に近い感覚と日本人の感性や床座と光の取り入れ方などを考察している。

3) 床に寝る（表 2-6）

バードとシドモアは、日本の住居において「床に寝る」ことだけでなく、布団を押し入れに収納、また外で日に干す等、就寝時以外の空間や布団の扱い方までを含めた一連の流れを記している。「床に寝そべる有様は誠に滑稽だった」という印象を持ったモースは、のちに「これは不意の客をとめるばあい、最大の利点である」と、就寝時に家具のない畳の部屋に布団を敷く習慣を、空間活用の観点から評価している。タウトの記述からは、床に寝ることに対してすっかり慣れて、休息時にも活用していることがうかがえる。

4) 沓脱習慣（表 2-7）

明治初期に来日したロチやシドモアは、靴を脱ぐという行為について「三人の若い女中が、きちんと梳ってはいるが眠りかけのままやって、私の汚れた靴を脱がし」、「玄関先で大勢の姐さんやメイドに迎えられ、帽子や靴を脱がせてもらい靴下のまま案内されました」というように他人を介しての経験を記している。一方、自らの身体的感覚として、「この靴を脱ぐという習慣を身につけるのは、とても骨が折れた」と述べたマサビュ

オーヤ、玄関だけでなく、室によって履き物を替える習慣に「家のなかでは縁側や廊下でスリッパを用いるが、便所ではそこにある草履とはき換える、しかし畳の上では足袋だけである。靴だとぬいだり穿いたり或はスリッパにはき換えたりして万事がひどく面倒だした妙な感じを与える」という印象を持ったタウトの記述もある。タウトはのちに「家のなかを靴下だけで歩くのがもう今ではまったく自然になり、それどころか靴下もはかずにいる方がもっと自然でかつ快く感じるようになった」と沓脱習慣を受け入れている様子を綴っている。

表 2-4 床（畳）についての記述（抜粋）

床（畳について）
<p>というのも、日本の家は非常に清潔なので、履き物についたほんのわずかな泥や埃によっても、部屋が汚れて台無しになってしまうからである。すべての部屋の床が、柔らかい畳敷きになっており、その上に座って食事をとり、眠るのだ。『明治日本散策』P87</p>
<p>日本の家具には、座るための椅子は含まれていない。住居に入る前に靴を脱ぎ、床の至る所に敷き詰められた、汚れ一つなく清潔な莫塵（畳）の上にしゃがむのが習わしである。『明治日本写生帖』P58</p>
<p>床はどこもかしこも例のお決まりの厚みのある白ゴザ〔畳のことは以下畳と訳す〕が敷かれていて、これは皇宮だろうが寺院だろうが、町人や貧乏人の家だろうが、同じように簡素で行き届いた、清潔なものを目にする事ができる。家具はいっさいなく、そうしたものは日本では見かけないか、あってもわずかである。したがって御殿はすっきり空っぽである。『日本秋景』P25-26</p>
<p>一段高い床に敷いてあるいぐさの畳は新しくて、しみひとつなく、よい香りがする。私たちが履きものを脱いで上がると、部屋の中は、小ざれいに整えられていた。『日本の面影 II』P48-49</p>
<p>畳は視覚にばかりでなく、触覚にも(裸足で歩いたり坐ったりする)、否、嗅覚にすら(材料の藁草はいつまでもその香りを保つ)働きかける。『空間の日本文化』P92</p>
<p>「畳」は、このうえなくつましい住居においても、またこのうえない豪邸においても、基本的にはどこでも同じものが用いられている。西洋では、住居が豪華なものになると、叩き土や簡素な床はすぐに変化して、凝ったデザインの高価なはめ木の床になったりする。それに豪華な絨毯が敷かれることもあり、またモケットが前面に敷きつめられたりする。一方、日本の住居の場合には、たとえどんな貧しいものでも、少なくとも一つの部屋は畳敷きである。畳を用いることのできない例外的な場合には（たとえば、樵の共同使用の小屋などでは）、粗網のござが代わりに使われ、土間とは色いいよって常い隔てられ、敷居をまたぐ前に靴を脱ぐようになっている。『家屋と日本文化』P179</p>
<p>マットということばを使いますが、誤解しないように。日本の家屋の畳は最上のアクスミンスター絨毯並みにこざれいで、上質で、やわらかな床の敷物なのです。長さは五フィート九インチ、幅は三フィート、厚みは二インチ半あります。枠は粗い藁でしっかりとつくってあり、その枠にこの上なく白くて目の細かいゴザがかぶせてあります。畳はふつうそれぞれ濃紺の布で縁取りしてあります。寺院や部屋はそこに敷いてある畳の数で大きさを測り、部屋は畳が敷けるようにつくります。畳を部屋に合わせて切ることはしません。畳はつねに床を囲んでいる敷居と高さが同じです。柔らかくて弾力性があり、上質のものは非常に美しい。最上のブリュッセル絨毯と同じくらい高価で、日本人は畳を大いに誇りとしており、無遠慮な外国人が汚れた靴のままその上を歩きまわったりするととても迷惑します。あいにく畳には無数の蚤がひそんでいます。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P125-127</p>
<p>どの部屋の面積も三フィート[〇・九メートル]角の倍数になっています。なぜなら、柔らかな畳や床敷の基本寸法は、幅三フィート長さ六フィート[一・ハメートル]だからです。これらは普通の藁や藁草で編まれ、稲穂のきめ細かい敷物で上張りされています。靴は部屋の外に脱ぐので畳や磨かれた廊下は汚れません。『シドモア日本紀行』P186-189</p>

表 2-5 床（床座）についての記述（抜粋）

床（床座）
日本家屋に賞賛すべき多数のものを発見したが、なかには、わたしの耐えられないこともある。たとえば、床にすわる姿勢などは、なれるまでつらいことである。もっとも、日本人にとっては、イスにかけることが、なれるまでつらいことであるのと同じであろう。『日本のすまい・内と外』P34
日本人は、この畳のうえで食事をし、就寝し、死んでゆく。畳は、ベッド、イス、安楽イスの役目をはたし、ときには、テーブルにもなる。畳のうえで、日本人は正座をする。スネをしたにまげ、尻をフクラハギと足のうらにのせ、足の甲の外側で、身体ぜんたいがささえられるように、つま先を内側にまげる。『日本のすまい・内と外』P136
外国人にとって正座は、ひどくつらいもので、なれるには、ずいぶん練習がいる、何年も洋行した日本人にとっても、この習慣をまたはじめるのは、たいへんつらいことである。『日本のすまい・内と外』P136
私は日本風に、両足を真下にして坐らねばならなかった。この坐り方は、外国人にとっては、初めの間は、やり切れぬものであるが、今では私は一時間半、すこしも苦痛を覚えずに、坐っていることが出来る。『日本その日その日』P309
外国人として私はいつものように「主客」となったが、その前から畳の上にあぐらを書いて坐っていたので足の骨が痛くなった。そこで許しを求めて床の間の柱に寄りかかせてもらった。後になって作法を破るよりは初めに破った方が良く考えたし、誰の作法もまねる必要がなかったからだ。『日本絵日記』P54-56
厚くて清潔な、弾力性のある畳が、どんなにすてきでも、私の体がその上での生活を好んでいるなどは考えないでほしい。それは大間違いだ。関節はこわばってくるし、骨はあまりにも長すぎるし、一日に10回も靴を脱いだり、はいたりで、まるで私は年寄の「このとり」のようだ。『日本絵日記』P128-129
生活様式の西洋化の正気とは思えぬ流行は、やがて阻止されるだろうか。将来日本人は床の上や、椅子の上で生活するつもりなのだろうか。二十年のうちには「畳敷き」の和室は今日の洋室の場合のように贅沢なものになってしまわないだろうか。『日本絵日記』P82-83
日本の習慣の中で最も難しく、真似ることが不可能に近いのは、床の上に二、三分以上正座することです。しかし、「毛を刈った子羊のために神は風をやわらげる」という諺のとおり、外国人には余分な座布団が与えられますし、痛いという呻き声も小柄な女中が絶えず注いでくれる酒の中に消えてしまいます。『東京に暮す』P177
こういう日本式の家屋が私は好きだ。というのも、べつに古を好むからのことでない。右にいわれるような坐り方はじっさい骨の折れるもので、私には胡坐つまり略式の跡がやっとなのである。管寧みたいにしろといわれたら、席を何枚重ねても、十分も経たぬうちに両足は痺れてしまうだろう。『日本談義集』P195
ところで日本の室にはなぜ椅子やテーブル類がないのであろうか、なぜ畳を敷いてあるだけなのだろうか。畳の上に坐るのは、日除けに必要な庇があるという純然たる実用的理由から説明することができる、庇は光線を遮るものであるから、高いテーブルを用いると暗くなりすぎることがある。しかし堪能な日本の大工例えば昔の名匠であれば、容易にこの問題を解決し得たであろう。部屋のなかを意のままに明るくするには、縁側の庇上に、横に細長い窓を横に取りつければよいからである。これをしなかつたのは、なにか然るべき理由があつたに違いない。いずれにせよ今日では十分な光を採り入れるには畳の上に坐らねばならない、これは単に美的な意味だけのことであろうか、それとも昔からの伝統が固定した結果であろうか。『日本の家屋と生活』P92
しかし今日では、極めて多数の人々が二重生活を営まざるを得ない。工場や事務所では、暖房が多かれ少なかれ温められた室で働いている。ところが冬だけ取りつける鉄製ストーヴを使用するので火力の盛衰が甚だしく、そのために室内が熱すぎたり寒すぎたりして寒暖の交代が頗る頻繁である。こういうところでは洋服を着用してそれ相応の立居振舞をするが、いったん家へ帰ると、キモノに着替えて寒い部屋の畳の上に坐るという在来の生活に愛着をもっている。『日本の家屋と生活』P294-295
むしろ日本人には下方をじっと眺める習性がありはしまいか。つまり日本人は畳の上に坐るので、その結果、瞑想的で恬静な境地を体得し、それが芸術的にぎわめて洗練された形で、地面の上に表現されたものに違いない。『日本美の再発見』P160

表 2-6 床（床に寝る）についての記述（抜粋）

床（床に寝る）
<p>どのへやにも、ベッドなどの家具類はまったくない。ねるときは、ふつう、綿のつまったフトンを畳のうえにしく。とうぜん、どのへやもネドコにすることができる。家具がほとんどなんにもないため、床のうえを連続して掃除してゆく事ができる。したがって必要とあれば、ほとんど床全面に人をねかせることもできる。これは不意の客をとめるばあい、最大の利点である。『日本のすまい・内と外』P127</p>
<p>我々は床の上に寝るのである。『日本その日その日』P51</p>
<p>我が国の夜具の役をするフトンは木綿か絹の綿—最高級の家を除いてはめつたに後者を使わぬ—をたくさん入れた上掛である。その一枚を身体の下に敷き、上には何枚でも好きなだけ掛ける。東京を出発する前に我々は大きな枕蓋か袋のような形の寝間着をつくらせた。夜になるとこの中にはいりこんで、首のまわりで紐を締めるのである。寝るときが来て我々が手も足も見せず長々と床に寝そべる有様は誠に滑稽だった。我々はまるで死骸みたいだった。障子を開けるためには、ヨロヨロと歩いて行って頭で障子を押す。これには腹をかかえた。『日本その日その日』P57</p>
<p>私の経験からして、畳の上に寝ることは、藁蒲団を下敷にしたベッドに寝るよりは、遥かに健康であり、身体のためにも良いように思われる。『日本文化私観』P300-301</p>
<p>そうなる畳は実に素晴らしい、熱くもなければ硬くもない、——昼食後の休息などに、私はうちつけに畳の上へごろりと横になったりする。『忘れられた日本』P176</p>
<p>こちらの人々は夜明けとともに起き、それまで寝ていた布団を畳、上に小さく紙を巻いたものか、小さなクッションのついた、立体鏡のような形の木の枕ともども引き戸のついた押し入れにしまします。畳をていねいに掃き、木造部すべてと縁側も拭いて、雨戸——縁側の縁にある敷居を滑らせて開け閉めする木製のよろい戸で、夜は家全体をふさぎ、昼間は戸袋にしまします——と障子を開けます。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P177-178</p>
<p>日本式ベッドはじかに床に敷かれ、木箱の首当てが枕代わりになり、布団が掛け物代わりとなります。外人に対して宿屋の主人は、五、六枚の綿詰め布団を割り当てます。これは多少湿ってかび臭くスプリングが利かなくても、かなり上等な寝具です。旅行者は自前の敷布や毛布、羽根枕や空気枕、さらに蚤よけの粉薬が必要で、特にこれは大事な旅の必携です。畳や布団には蚤が充満し、このため惜しめない粉薬の添加や、まんべんないハッカ油の擦り込みが必要で、これなしに眠ることはできません。ただ、就寝前のこの準備はあまり気分のよいものではなく、遠足や登山による疲労後では、体の節々をととてもこわばらせます。昼間、布団は暗い押し入れに詰められたり、バルコニーに吊されて大気に晒されたりしますが、従業員が日没前に家に入れるのを忘れると、かえって湿っぽくなります。『シドモア日本紀行』P186-189</p>
<p>私は畳の上に寝ることはもうすっかり慣れて、柔らかい羽根布団にくるまるよりもはるかに健康的であるときえ思っている。『日本の家屋と生活』P96</p>
<p>畳のうえに寝るのは、最初の晩と同じようにやはり美的な享楽であった。また生活形式 例えば夜の寝床を設ける仕方が道徳的な考え方を変更するものであることを知って非常に興味ふかく感じた。私達はおりおり知人の訪問をうけた、訪問客は男子が一人か二人のときもあるし、また婦人が一人だったり或は男子が一人に婦人が一人だったりすることもある。そのような折には私達は夜おそくまで談笑にふけり、さて寝る時刻がきてもお客さん達をお寺まで泊らせにやりたくない。そこで大きな方の部屋に吊った一つの蚊帳のなかに三つの寝床が敷かれる。時には小さな部屋にも一つか二つ床をのべることもある、両つの部屋の間には襖はあってもただ見る眼にとってだけの仕切りにすぎない。しかしこのような生活形式は西洋の室とちがって、互いに親しくない男女が並べて敷いた床に寝ても妙な感じをすこしも起こさせないのである。このことは私達が少林山へきた最初の晩に、畳は日本人が隔てなく坐ったり寝ころんだりする芝生が文化的に発達したものにほかならないといった農民の言葉を実証している。これと同じ感情から、日本人は部屋と部屋とのあいだの防音にまったく意を用いなかったのであろう。『日本の家屋と生活』P97</p>

表 2-7 沓脱習慣についての記述 (抜粋)

沓脱習慣
また、畳はやわらかいので、靴をはいたままあるくことはできない。日本人は、木製の下駄をはき、これを、踏み石のうえや、玄関のタタキなどの室外でぬぐ。『日本のすまい・内と外』P135
木の床を張りながら、しかも靴を脱ぐための玄関を設けたりなどするのは、大多数の日本人が、もし家へ入る際に靴を脱がないでもよいのなら、それを拭う必要もないと考えているからであると云えよう。『日本文化私観』P299
家のなかでは縁側や廊下でスリッパを用いるが、便所ではそこにある草履とはき換える、しかし畳のうえでは足袋だけである。靴だとぬいだり穿いたり或はスリッパにはき換えたりして万事がひどく面倒だした妙な感じを与えるが、下駄や足袋は日本人にとっては非常に簡便でありかつ自然でもある。『日本の家屋と生活』P92
しかしのちには、下駄が足全体の活動を敏活にしたのである、足の親指はまるで手の親指のように、巧みに下駄の鼻緒をおさえている、縁側や玄関の上り段から降りてすぐ下駄を穿いたりまた下駄を脱ぎすてて玄関にあがったりする敏活な動作はこの能力を増大し、足の主要な動作を司っている両脚の筋肉を強健にした。『日本の家屋と生活』P93-94
また不思議なことに、家のなかを靴下だけで歩くのがもう今ではまったく自然になり、それどころか靴下もはかずにいる方がもっと自然でかつ快く感じるようになった。そうすると畳は実に素晴らしい、熱くもなければ硬くもない、——昼食後の休息などに私はうちつけに畳のうえへごろりと横になったりする。『日本の家屋と生活』P105
日本の家具には、座るための椅子は含まれていない。住居に入る前に靴を脱ぎ、床の至る所に敷き詰められた、汚れ一つなく清潔な蓑蓑(畳)の上にしゃがむのが習わしである。『明治日本写生帖』P58
一段高い床に敷いてあるいぐさの畳は新しく、しみひとつなく、よい香りがする。私たちが履きものを脱いで上がると、部屋の中は、小ざれいに整えられていた。『日本の面影Ⅱ』P48-49
やっとのことで天井も、洗い立てた羽目板も、ゴザ〔畳〕もどこもかしこも純白のところにとどり着いた。三人の若い女中が、きちんと梳ってはいるが眠りかけのままやって、私の汚れた靴を脱がし、私は彼女らと一緒に鏡のようにびかびかに磨かれた小階段を上がっていったが、入ったのは二階の貴賓室で、なにもかも雪のように真っ白だった。素晴らしい。ニコッ滞在の間中、車夫も私もこの旅館に泊まることにしよう。『日本秋景』P133-137
またここでは、靴を脱ぎ、少なくともスリッパに履き替えて暮らさなければならない。この靴を脱ぐという習慣を身につけるのは、とても骨が折れた。『家屋と日本文化』P20
靴を脱ぎ、私たちはテーブルと椅子が設けられた玄関の広間に上がった、このことは周知の通り、畳でしゃがんで生活をする日本の状況からすると、極めて贅沢である。『明治日本散策』P333-334
私は、日本到着の一日後か二日後に、このユニークな艦隊の客となる幸運に恵まれました。それは芝の増上寺の上にある山腹の紅葉館〔東京タワー付近〕、つまり紅葉クラブハウスで催されました。午後三時に到着し、玄関先で大勢の姐さんやメイドに迎えられ、帽子や靴を脱がせてもらい靴下のまま案内されました。光沢のある廊下を通り、階段を降りて長く低い部屋へ向かいました。『シドモア日本紀行』P122
上履！鳥の巣のような日本人の家は、外履のままでは中には入れないことになっている。だから、1日に何回も靴を履いたり、脱いだりしなければならない。磨かれた廊下には草履やスリッパが備えてあり、便所用にはまた別なのがおいてある。これらの履物はいつも小さすぎるので、六十年のあいだ靴の中で締めつけられていた私の爪先は、下駄や草履や鼻緒にスッと入らないのである。『日本絵日記』P143-144
この旅館では、部屋から便所まで十歩ばかりなのに、履物が四遍も変るのである。一、畳敷きの部屋では靴下だけ。二、廊下ではスリッパ。三、便所内の短い通路では下駄。四、最後に用便所では草履。『日本美の再発見』P56

2-4-3. 簡素さ（家具のない居住空間・簡素な造りや装飾）

1) 家具のない居住空間（表 2-8）

日本の居住空間に家具がほぼないことを、「必要な家具もほとんどなく」「室内にもものがない」「日本間には家具というものがなく」「家具はっさいなく」と多くの人が記している。特にモースはものがないことに「おどろかされた」と印象を綴っているが、日本人が質素で洗練されたセンスを持ち、見栄をはることもない生活を評価している。

2) 簡素な造りや装飾（表 2-9）

日本家屋や居住空間の簡素さについては、タウトの「最もすぐれた日本家屋の外観は極めて控え目である」、バードが床間について「日本人の用いる茶碗や花瓶や漆器ではたった一つの装飾の効果をみんな知っており、装飾の繰り返しは避けられています」と述べているように、簡素さにある美しさを捉えていることがうかがえる。これはリーチの言う「語らざる美」にも共通しているであろうと考える。

また、茶室や伊勢神宮、桂離宮のような建物については居住空間よりもさらに簡素であり、素材や色合いの素朴さ、装飾の妙について記されている。

マサビュオーは、家を「文明の凝縮体である」と捉え、日本の簡素な造りや色合いを例に挙げ「壁の灰色や褐色の漆喰、畳表のおだやかな緑色、天井の茶色の貫板、半透明の障子紙、それよりもいくらか頑丈で、つましい模様のある襖などが、日本独特の雰囲気を作り出していて、他の文明に属する人々の好みや理想とは相容れないものである。そして、そこでは日本人でなければ、決してほんとうにくつろぐことはできない」と述べている。

表 2-8 簡素さ / 家具のない居住空間についての記述 (抜粋)

簡素さ/家具がない居住空間
<p>じっさい、必要な家具もほとんどなく、しかも経済的であることは、信じられないくらいである。家や家具が、このように簡素だ、といえ、家族がへやのたりないのをがまんしたり、必要な家具をきりつめたりしているように、おもわれるかもしれない。しかし、じっさいは、より快適な生活をおくるために、こうしているのだ。日本人は、あれもこれもと要求せず、質素で、洗練されたセンスをもち、見栄をはることのない生活をしている。したがって、無理な借金をすることは、まったくない。『日本のすまい・内と外』P127-128</p>
<p>日本の住居をみて、室内にものがない、ということにおどろかされた。『日本のすまい・内と外』P196</p>
<p>若い僧侶の書齋を覗いて見よう。まことに空虚な室である。ただ畳の上に座蒲団があり、低い経机と傍らに数巻の書があるだけである。あるいはまた、室の大小によって非常に微細に区別されており、家がそこでまったく野外に開放されている。玄関は家中で一番高い、そして水平でない天井を取り付けるといふ具合に、室々の高さは不揃いである。あるいは、非常に富裕な家でさえ、浴場は美しいそして簡素な木材とタイルを用いて、化粧は完全に実質本位である。もちろん台所も実質本位の相貌を備えている。『ニッポン』P118-119</p>
<p>ところで日本間には家具というものがなく、洋間の家具に相当するものは、日本までは飽くまで優雅に仕上げられた壁面にほかならないということを考えて頂きたい。(中略) 例えば、小堀遠州の住んでいた孤篷庵の極めて厳格な茶室(忘莖)はごく小さな部屋でありながら鴨居の高さが一様でない、しかもそのかすかな差異は精査して初めて気づくほどのものである。『日本の家屋と生活』P250-251</p>
<p>床はどこもかしこも例のお決まりの厚みのある白ゴザ〔畳のことは以下畳と訳す〕が敷かれていて、これは皇宮だろうが寺院だろうが、町人や貧乏人の家だろうが、同じように簡素で行き届いた、清潔なものを目にする事ができる。家具はいっさいなく、そうしたものは日本では見かけないか、あってもわずかである。したがって御殿はすっかり空っぽである。『日本秋景』P25-26</p>
<p>よく知られていることだと思いますが、日本の民家は東南アジアの家と似たところが沢山あります。高床、合掌造りなどがそうですが、一番面白いのはこの「Empty Room」(空の部屋)精神なのです。中国、韓国、チベットなどはまた大変に違います。貧しい人でも部屋に家具、テーブル、椅子などを置いていますし、中国の場合には家具の置き方自体が一つの素晴らしい芸術に発達しました。しかし日本の民家はあくまでも「Empty Room」の生活のために作られたものなので、飾りをあきらめて「Empty Room」の静けさに最終的に降参するしかありません。『美しき日本の残像』P39</p>

表 2-9 簡素さ / 簡素な造りや装飾についての記述 (抜粋)

簡素さ/簡素な造りや装飾
その室の徹底的な簡素さは全く他を圧している。床の真上の横梁は、私の知った唯一の例であるが、襖の上の鴨居よりも高からず、床の間の柱も特別な材木を用いてはいない、これ以上簡素にするということは不可能である。それにもかかわらず、加うるに他のどこにも見出されなかった独創性が、その玄関に現れている。それはすなわち頭の高さよりやや上に取り付けられ、下向きに開いている紙の窓である。『ニッポン』P159
最もすぐれた日本家屋の外観は極めて控え目である。『日本の家屋と生活』P226
そして今、私は簡素で美しい離れの庵室で、心地よい蒲団の上に寝そべってうつらうつらしながら、半ば彼方の世界の、そして異なった環境にいる読者に、こうした経験を伝えようと空しく試みている。語らざる美。ほとんど何もない部屋。物の巧みな整理。茶碗の中の緑茶の色。箸台に乗せられた箸の姿。床の間の壁に掛けられた掛軸の文字。紙障子を通した白い光。障子に映る竹の葉の影。『日本絵日記』P69-70
茶道の行なわれる小屋は一見このうえなく質素な構造で、見栄や贅沢を示すものは何ひとつないように見える。だが、ふつう茶室はあらゆる細部まで絶妙に仕上げられているので、大邸宅より建築費が高む。例えば、床柱はただの曲がりくねった木の幹にしか見えないだろうが、通人の目にかかってはじめて、それがきわめて珍奇な木材であることがわかる。茶道に用いられる諸道具も、人目を欺く謙譲さを備えている。竹製の茶笥は数セントで買えそうに見えるし、錆びた古釜も、見栄えのしない陶器の茶碗も、茶を入れる小さな罐も例外ではない。しかし、実はそのひとつひとつが、もし正統な素姓の品ならば、一身代にも価するほど高価である。『果てしなく美しい日本』P97-98
人の住む家は簡素なほどよろしいという兼好法師の意見は、大抵の日本人に共有される意見となった。「おほくの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ(すばらしい)調度(家具)どもならべおき、前栽(草木を植え込んだ庭)の草木まで心のまゝならず(あるがままでなく)作りなせるは、見る目もくろしく、いとわびし」(『徒然草』第十段)。兼好のこの意見は、五十年前の西洋の作家よりも、今日の私たちのほうに、ずっとしっくり来るのである。『日本人の美意識』P28
富が目立つことを避けるための配慮は、茶室の中で、色彩、花の香り、食べ物の味などを殺して用いることによって、一層強調される。茶室の内部は、様々な木肌を持つ木が使われ、畳も使われているが、床の間に置いた花の青白い色を除けば、殆ど全体が茶系の色で統一されている。『日本人の美意識』P31
花を活けた花瓶と白いゴザ[畳]以外には、私の寝所には何もない。壁を飾るものとしては、変わった細長い絵[掛け軸]などがあり、帯状の絹布に描かれていて、竹の棒に掛けて天井から吊るされている。『日本の秋景』P133-137
家は「文明の凝縮体」である。(中略) 同様に日本の家も、日本の文明が作り出した特有の生活環境を各人に提供している。壁の灰色や褐色の漆喰、畳表のおだやかな緑色、天井の茶色の貫板、半透明の障子紙、それよりもいくらか頑丈で、つつましい模様のある襖などが、日本独特の雰囲気を作り出していて、他の文明に属する人々の好みや理想とは相容れないものである。そして、そこでは日本人でなければ、決してほんとうにくつろぐことはできない。『家屋と日本文化』P25-26
日本家屋の床の間や壁に一輪の蓮や菖蒲や牡丹、あるいは藤がひと枝飾ってあるように、日本人の用いる茶碗や花瓶や漆器ではたった一つの装飾の効果をみんな知っており、装飾の繰り返しは避けられています。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P301
桂離宮はあらゆる決定的な点において、いかなる日本住宅よりも文字通り簡素である。豪華な邸宅ならば床の間にも庭園にも嫌味な、もしくは「面白い」意匠が、いたるところにつきまとっているし、また普通の住宅でなら、同じ意匠がもっと安っぽい細部や下品な趣味として現れている。なかんずく禅に由来する哲学的要素を多分に含む茶道と日常生活との間の限界は、まったく払拭せられているのが一般である。これに反して桂離宮は、この両者に截然たる区別を付しているのである。つまり一方的で日常生活が他奇なく営まれる部分に対しては、これに必要な一切の要求は、きわめて自然に、また最も単純な仕方であらされ、従って全体はこの上もなく淡々とした落ち着きを示している。しかしこのことは他方で、哲学的なものの背景をますます際立たせ、両者の分化を強める効果を挙げているのである。『日本美の再発見』P152
伊勢神宮は全体としてこの上もなく簡素であり、素樸にすら見える。(中略) 内宮の近くにある荒祭宮は、同じ原理に従って建築せられた小規模の社殿であるが、まことに優雅きわまりなきものである。『忘れられた日本』P86

2-4-4. 自然とのつながり・庭/庭園 (表 2-10)

日本の居住空間における自然とのつながりに関して、タウトが「とにかく日本人の自然に対する関係は、すでに家屋が開放的であるという点にもよく現れているが、それはまた自然と一体の生活を営み自然に接近するという結果にいたらざるを得ない」というように日本の家屋が開放的であり、レガメの「小さいながらも、それはむしろ縮小された大自然といった趣の庭があった」バードの「家は表の間口がとても狭く、驚くほどの長さで奥に延びており、花や灌木や蚊の育つ庭がついています」など、さほど広くはない住居にも庭が隣接しており、身近に自然を感じられることが描写されている。同様に、ベルクの「住民は通りを清掃し、鉢植えで飾る」のように居住空間から溢れ出している植物も、ギメが記した竹製の道具や家具などの家庭用品が取り入れられていることやレガメやバードが描いた生け花の美しさも、居住空間と自然の密接なつながりを描いている。シドモアの「日本の家族は、見晴らしのよいところが好きで必ず出かけ、最小単位の住居空間である筵の掛かった建て場（簡易小屋）でキャンプをします」という描写からは、実際の居住空間からは離れてはいるが、大自然の中で簡易な居住空間を仮設し自然とともに過ごす様子がわかる。

表2-10 自然とのつながり・庭/庭園についての記述(抜粋)

自然とのつながり・庭/庭園
日本の暮らしでは、竹製の家や家具、家庭用品をよく目にするが、その細く軽やかな葉は、幸せの象徴とされているのだ。『明治日本散策』P212-216
生け花 菖蒲と竹—日本の植物は豊かで、比類のない美しさである。『明治日本写生帖』P17
通りの住民への従属は、無数の行動で実証される。住民は通りを清掃し、鉢植えて飾る。店の陳列台も道に張り出し、子どももそこで遊ぶ。車で行くより歩くことのほうが多い(歩道の欠如自体、我々の目には完全な自動車優先と見えるが、実は歩行者支配—この支配体制はまだまだ堅固だの現われである)。夕方になれば、隣人同士ビールを飲みながら碁を打つし(路上駐車は固く禁じられているので、充分その余地がある)、浴衣姿で涼気を楽しみながら散歩もする。つまり、家の空間が大きく通りにはみ出し、自分のものになっているのだ。『空間の日本文化』P175
日本の家において作り出される内部と外部のこうした密接な関係もまた、日本人が鋭く感じ取っている美的なレベルでのよこびの源泉である。西洋では、ルネサンスの運動によって、自然は研究し分析する対象とされたが、極端では仏教によって、人間は自然に溶け込むべきであるという教えが広められた。長い間にわたって自然神崇拝神道においては、泉、山、石、木などが神々であるが行われ、一年の十二の各月に自然のさまざまな姿が繰り広げられ、自然の姿を文学や芸術が称賛する。こうしたことによって、日本人は自然を楽しむことに慣れ親しむようになったのである。こうして日本人は、住居の閉ざされた空間と庭の中に、たいへん巧みに溶け込んでいる。庭は、家の中から、畳の表面の明るい色と、縁側の板の帯状の部分の暗い色の向こうに、柱の間にはめ込まれて眺められた姿がもっとも効果的である。こうして、毎日の生活の中心に自然の選ばれた姿が持ち込まれるのである。『家屋と日本文化』P263-264
生け花は入門書を使って学び、女の子の教育のひとつに教えられています。わたしの部屋に花が生けかえられない日はめつたにないほどです。これはわたしにとっても教育で、ただひとつのものだけを飾る、その極端な美しさを評価しはじめています。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P176-178
一四〇〇ある東京の通りのうち、およそ三分の二が自然界のものに由来する名を持っており、日本人は自然を愛する気持ちの非常に強いことがこれでも証明される。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P226-227
日本の家族は、見晴らしのよいところが好きで必ず出かけ、最小単位の住居空間である筵の掛かった建て場(簡易小屋)でキャンプをします。そこには木炭火鉢、土瓶と五、六個の茶碗セット、緋毛氈を広げた低いベンチが二、三脚備えられています。山水庭園や景観に一見識を持つ国民の情熱は、絶えず美しい景色の見渡せる場所を探し回って確保します。(中略)日本の至るところに、山登りをしたり、渓谷で釣りをしたり、狩猟のため山奥の窪地に身を隠したり、水辺に張り出した狭い岩棚に腰掛けたりできる場所が去ります。旅をする誰もが茶店や夏の山仲間、開戸裏の上でやかんがちんちんわいている建て場に出合います。また、どこでも湯水、茶、米、果物、卵、茶碗、皿、グラス、コルク栓抜きが簡単に手に入ります。『シドモアの日本紀行』P59-60
とにかく日本人の自然に対する関係は、すでに家屋が開放的であるという点にもよく現れているが、それはまた自然と一体の生活を営み自然に接近するという結果にいたらざるを得ない。『忘れられた日本』P181
日本家屋の部屋は開け放たれているので、庭は実際にも家屋の一部であるから、家は垣根まで届いているわけである。(中略)そこで、近所の子供達がいかに騒ごうと、隣家で毎日のように朝から晩まで同じレコードを蓄音機で鳴らそうと、ラジオの拡声器が終日なり立てようと、まだ夜明けの六時だというのにもう雨戸をがらがら繰りあげようと、—近所の人達が往来で出会う丁寧にお辞儀をし懇懇に挨拶を交わすには、一向かかわりが無いのである。『日本の家屋と生活』P266
建物の端にあたる私たちの部屋の前には、小さいながらも、それはむしろ縮小された大自然といった趣の庭があった。『明治日本散策』P263-265
こんな隔離された環境を埋め合わせているとでもいおうか、庭はことのほか美しい。屋敷の三方向を囲むひと続きの庭である。広い縁側からは庭が見渡せ、縁側の場所によっては、二つの庭を一度に堪能できる。『日本の面影』P214
前景には旅館の小庭があり、小石や小ぶりの灌木、泉水や小型の社がある。後ろの背景は非常に高くて雲をつくほどで、奇妙なのこぎり形の山々(男体山などが)と、秋に色づく森とで出来上がっている。そして太陽の曙光が美しいバラ色に輝きながら、山の頂きの上を華やかにさすらっていた。『日本秋景』P139
座敷に入りますと裏の庭が見えます。これは「庭」というより「森」と言ったほうが良いかも知れません。四畳半ぐらゐの芝生の周りに百年前の桜、猿滑の木、銀杏などが繁っています。その奥は急に川の滝まで落ちて、川の向こう岸は森に覆われた山が聳えています。金曜日の夜に家に帰る時間にはもちろん川や山は暗闇の中ですが、縁側のガラス戸を開けると、滝の音がザーと聞こえてきます。その瞬間東京の雑な思いは完全に吹き飛ばしてしまい、真の自分自身に戻った気がします。『美しき日本の残像』P135-139
晩方早く、日本の料理屋へ食事に来ないかという招待には、よこんで応じた。我々は二階へ通され、部屋々々の単純な美と清潔とを、目撃する機会を得た。このホテルは(若しホテルといひ得るならば)東京の、非常に人家の密集した区域にあるのだが、それでも庭をつくる余地はあった。その庭には、まるで天然の石段がとび出したのかと思われる程、セメントで密着させた、大きな岩石の堆積があった(75図)。その上には美しい羊歯や躑躅が一面に生え、天辺には枝ぶりの面白い、やせた松が一本生えていた。岩には洞穴があり、その入口の前には小さな池があった。『日本その日その日』P180-181
家は表の間口がとても狭く、驚くほどの長さで奥に延びており、花や灌木や蚊の育つ庭がついています。橋がいくつか繰り返すように架かっていて、通りから見ると、おとぎの国を眺めているような効果があります。どの日本家屋も主な居住部分は奥にあり、こういったミニチュアの景色が眺められます。庭はたいがい三〇フィート[約九メートル]四方しかない空間にうまく矮小化して造園してあります。湖、岩、橋、石灯籠、変形させた松は不可欠なものです。環境と方法が許すかぎり、あらゆる種類の古風な趣が取り入れられます。(中略)紫がかかった緑やくすんだ緑の小さく仕立てたさまざまな種類の樹木が、驚くほどそっくりに、獣や地を這う生き物の形に選定されたり、小さな湖の上に腕を伸ばしていたりします。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P271-272
玄関で案内を乞うと、応接間へ通された。初秋だったためか、床に台湾製の、木目の細かい菓座が敷いてあり、残暑の厳しい京都だったが、家の中は涼しかった。部屋が美しい庭に面していて、池もあり、数分毎にししおどしがつらな音を立てていた。風流そのものの家であった。『二つの祖国に生きて』P196-197
そして障子を押し開けた後、室の前のヴェランダのガラス戸を通して青々とした風景に見入ることは、眼のよい保養である。上流住宅における、障子の前のガラスで囲まれたヴェランダの近代的な設備は、日本のよい業績のうちで決定的なものの一つである。『ニッポン』P116-119
私達は、この広縁に張出してある竹縁の上に立った、これは月見台と呼ばれ、ここから池水に映る満月の影を楽しむのである。水を隔てて、むかひのやや小高い茂みのなかに、一基の石燈籠がある。『日本美の再発見』P143

2-4-5. 部屋の広さ・天井高（表2-11）

部屋の広さ・天井高については、身体的反応として、モースの「住宅にはいると、まずへやの小ささにおどろく。ついで背の低い独立柱が目にはいる。天井はたいへんひくく、かんたんに手がとどく。また、となりのへやにうつるときは、鴨居に頭をぶつけそうになる」、タウトの「上半身をまっすぐにしていても頭だけは日本人よりもずっとさげて仕事をしなければならない」、リーチの「この仕事場は、日本の他のものと同様、機敏な足の短い人たちに都合よく作られている。たった九インチの違いがもたらすものは驚きである。色々食い違うのだ」のように、部屋の小ささ、天井の低さ等、身体の寸法と合致しない居住空間についての描写が多い。

その一方で、カーが「昔の家は驚くほど広々と作られていますが、住む人が障子と襖で部屋と廊下に小さく区切って狭く居る空間に変えてしまいます。昔は冬の寒さを防ぐため、また大家族のプライバシーを守るためには必要だったでしょうが、現代の私たちにとってはそうした区切りは必要ないと思います。障子と襖を取っ払って、初めて日本の座敷や居間の美しさが現れてきます。特に回り廊下を部屋に入れてしまうと雰囲気は非常に良くなります」と指摘している。同様にバードやシドモアも、襖や障子を取り払うことにより広い空間を作り出せることを描写している。

表 2-11 部屋の広さ・天井高についての記述（抜粋）

部屋の広さ・天井高
住宅にはいると、まずへやの小ささにおどろく。ついで背の低い独立柱が目にはいる。天井はたいへんひくく、かんたんに手がとどく。また、となりのへやにうつるときは、鴨居に頭をぶつけそうになる。『日本のすまい・内と外』P123
アメリカの同ていどの階級の住宅のへやとくらべると、かなりせまいが、しかし家具がないので、ひろく感じられる。『日本のすまい・内と外』P130-131
これでは、外国人があるへやからもうひとつのへやにうつろうとすると、頭をうってしまふ。つまり、このカモイの高さがいまいましいくらいひくいことが証明されるのだ。『日本のすまい・内と外』P172
私は、洗心亭の鴨居に――これは日本家屋としては標準の高さである、――頭を打ちつけたことがある。(中略) 卓子を前にして椅子に坐ると両脚を組みあわせねばならないのでなかなか窮屈だし、また上半身をまっすぐにしていても頭だけは日本人よりもずっとさげて仕事をしなければならぬ。『日本の家屋と生活』P74
私の老骨には、この仕事場は居心地の良い場所ではない。この仕事場は、日本の他のものと同様、機敏な足の短い人たちに都合よく作られている。たった九インチの違いがもたらすものは驚きである。色々食い違ふのだ。 光線は低目に入ってくる。頭上には、セント・アイヴスと同じように、棚の上に焼物がしまつてあるが、棧がついていないし、それに焼き物を全部動かすのでいつも粘土だらけになっている。(中略) 薄暗いところでは、私は竹の張り出し棚に頭をぶつければ、そうかと思うと、今度は凸凹した土間の上にいっぱいならんでる焼物を蹴とばす始末。テーブルもなければ、気楽に腰を下ろしてどんな様子だろうと眺めることのできる腰掛もないのだ。みんなは轆轤(ろくろ)のはめ込んである低い床にあぐらをかく。私は脚を空間に投出して坐り、あまり汚くならないために濱田のモンペ(だぶだぶの作業用ズボン)とゴム長靴とを着用し、瀬戸物屋の中を不恰好な雄牛のようにノソノソと歩き廻るのである。『日本絵日記』P145-146
座敷は小ざれいで、広々としている。『日本の面影』P179
大橋川そばの二階家は、鳥籠のように可愛らしく風情のある家だったが、暑い季節が近づくとつれ、快適に過ごすにはその家では小さすぎるのがわかった。部屋の天井高は蒸気船の客室ほどもないし、狭すぎて普通の蚊帳も吊るせない。『日本の面影』P213
たとえば、日本の小説に四畳半の部屋が描写されている場合、良心的な訳者は大いに困る。日本の読者なら かりに東京のマンションの生活しか知らない読者でも頭の中で四畳半の部屋の大きさだけでなく、その雰囲気は何となくわかるであろう。(中略) 訳者が澄ました顔をして four and one-half mat room と訳した場合、よっぽど日本のことに詳しい読者でなければ連想は何一つもなく、意味さえないかなかなか捕えられないと思う。欧米では一部屋何畳と表現せず、また、それらしい考え方もない。(中略) また、良心的な訳者が四畳半は何平方メートルというふうに訳したら、欧米の読者は別のことで当惑する。つまり、「そのような小さい部屋は何の役に立つだろう。ベッドもろくに入らないし、窮屈で堪らない」と言うのではないかと思う。(中略) 日本では裕福な人でも小さい部屋を喜ぶが、広々とした部屋に馴れている欧米人には納得できない。その代わり、日本人はだだっ広い部屋に落ち着かないようである。『二つの母国に生きて』P80
日本の家の場合、一番大事なことは改造、建築など技術的なことではなく、空間の使い方をどうするかを決めることです。特に、部屋の間仕切りのことを考えると、木材の柱を使うことで壁が少なくなり、右から左にスパッと視界が広がるのですっきりとした気持ちになるのが、東アジアの建築の特徴の一つです。日本の家もそうした造りであり、極端に言えば、風と明かりを通すオープンエア・パビリオンです。昔の家は驚くほど広々と作られています、住む人が障子と襖で部屋と廊下に小さく区切って狭く居る空間に変えてしまいます。昔は冬の寒さを防ぐため、また大家族のプライバシーを守るためには必要だったでしょうが、現代の私たちにとってはそうした区切りは必要ないと思います。障子と襖を取っ払って、初めて日本の座敷や居間の美しさが現れてきます。特に回り廊下を部屋に入れてしまうと雰囲気は非常に良くなります。『美しき日本の残像』P36-38
出発の物音は夜明けとともに聞こえはじめ、わたしは七時に喜びいさんで宿を発ちました。発つ前に襖は開け放たれ、自分の部屋だったところは広々とした畳敷きの大部屋の一部となりました。かび臭さを防ぐ効果的な案配というわけです。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P133-134
退屈で生彩の欠く町・豊橋に到着しました。この町で旅人の群がる大きな茶屋を見つけました。私たちが通されたのは、鬱陶しい高塀に囲まれた庭のある二部屋と中庭奥にある食堂でした。この食堂は、襖や障子を外してしまいたくなるほど小さく風通しの悪い部屋で、しかも廊下が大きな風呂場へ通じ、いつも五、六人がバシャバシャと音を立て騒々しくおしゃべりをし、しかも腕に着物を抱えた裸の紳士が、まるで美術学校の生物画専属モデルのように(?)、私たちの戸口前を行ったり来たりしました。入浴者の騒音は夜半過ぎまで盛り上がり、茶屋の中で寝ている人は誰もいない感じでした。朝四時頃になると咳払いをしたり、鼻をかんだり、唾を飛ばしたりする光景が私の泊まる前庭で展開しました。障子をそとと開け外の様子を見た私は、結局終わりまで覗くはめになりました。しばらくして十二、三人ほどの泊まり客が庭石、竹、棕櫚のある四角い坪庭で歯を磨き始めました。単なる飾り物と思っていた石造や青銅の大壺で顔や手を洗いました。砂利庭は、使い捨てたたくさんの木製歯ブラシ、つまり繊維状の房毛の先が伸び切ったブラシや、砂混じりの歯磨粉の空箱で覆われました。『シドモアの日本紀行』P258

2-4-6. 建具・仕切り (表 2-12)

居住空間内に「開き戸はほとんどない」というモースの記述のように、建具に関する描写には、襖や障子、雨戸などの引き戸が挙げられている。とりわけ、襖や障子の開閉は音もなく静かであるのに対し、雨戸を仕舞う音の大きさについて、「その朝、建物を取り壊す音で私は目が覚めた。誰かが何かを叩いたり、何度も打ち付けたり、取り外したりしていると思っていたら、部屋に光が射してきた。解体されているのは、なんとこの家なのだ。外壁の役目を果たす木製の雨戸が取り払われ、戸袋に紙製の仕切り板 [襖あるいは障子か] がしまわれた」のように、大変な騒音としてレガメが記している。他にもタウトやロチも同様の印象を持っていたことが記述からうかがえる。

襖や障子はマサビュオーの「視覚的な絶縁しか確保しない」との認識の通り、音が筒抜けであることをタウト、レガメ、シドモア、キーンも記している。戸を立てなくとも視覚の絶縁を保ち風を通す仕切りとしては、モースやシドモアが描写した簾が挙げられる。モースは「誠にいい思いつきである」と評価している。

「襖や障子の引手は下から七五センチ或はもっと低いところに付してあり、日本の婦人は開けたてするたびに膝をつくのである」とのタウトの描写からは、開き戸のように立った状態で開閉する戸とは異なり、床座を基本とした身体的寸法によって作られている日本の建具の特徴が記されている。

リーチの「わたしたちが来ると言うので障子紙は全部張り替え、蒲団綿も打直し、私の身丈に合わせた絹の綿入まで作り、帰りがけにはそれを私にみやげとして下さった」という友人のもてなし方からは、障子紙を定期的に張り替え新陳代謝しながら使用する障子の扱い方がわかる。

バードが「襖は開け放たれ、自分の部屋だったところは広々とした畳敷きの大部屋の一部となりました」と記したように、襖によって仕切られていた部屋は必要に応じて襖を外すことにより広い空間としても使用可能となる、こういった空間活用の要となるものが襖や障子などの間仕切りであることが描かれている。

表 2-12 建具・仕切りについての記述 (抜粋)

建具・仕切り
開き戸はほとんどない、ということに、すぐ気づく。もっとも、扉以外のばあいには、開き戸形式のものをあちこちでみかける。『日本のすまい・内と外』P125
そうしているうちに私は、女中さんが縁側で雷鳴のような物音を立てるのを聞いた。(中略) それから雨戸の内側の硝子戸を閉め最後に二枚の硝子戸の重なり合うところに付いている金属製の掘込錠を締めた。『日本の家屋と生活』P26-27
雨戸は、廻り縁の両端に設けた戸袋のなかに重ねて立ててあり、戸袋の側方に張ってある板(妻板)を削り抜いた孔に手を差しこんで一枚ずつ繰り出す。(中略) その場合には戸袋に妻板が付いてない、これも簡単ですぐれた技術的設備である。『日本の家屋と生活』P67
現在建築されている日本家屋でも、依然として旧来の戸の高さや畳の寸法が踏襲されているし、夜具やキモノにする布地の寸法もきまっています、特に注文しない限り呉服店で普通よりも長尺のものをもとめることができないからである。そればかりでなく身体の釣合は日本家屋の細部に重大な影響を及ぼしている。家屋とその細部とは日本人の体格と見事な調和を保っている、ここに日本家屋の美的効果を説明する鍵がある。私達ヨーロッパ人が日本家屋の室内で向き合っている、このような美的効果は余り感じられない。しかし日本家屋のなかで見える日本人の形姿、歩き方、襖障子の開け方襖や障子の引手は下から七五センチ或はもっと低いところに付してあり、日本の婦人は開けたてするたびに膝をつくのである、などは室の壁を背景にして実に美しい調和を示すのである。それだから日本家屋の真美は畳の上に坐ったときに始めてよく開顕せられる。このとき部屋は広々と見え、鉄瓶をかけた茶の間の開け裏は快い雰囲気を感じだし、また花をいけた花瓶と香炉とを置いた床の間の掛物は、あたかも天から地へ懸かっているかのようである。『日本の家屋と生活』P76
その朝、建物を取り壊す音で私は目が覚めた。誰かが何かを叩いたり、何度も打ち付けたり、取り外したりしていると思っていたら、部屋に光が射してきた。解体されているのは、なんとこの家のなだ。外壁の役目を果たす木製の雨戸が取り払われ、戸袋に紙製の仕切り板[襖あるいは障子か]がしまわれた。そして女中たちが蚊帳を外すと、私たちは小さな寝台から出ずして、田圃から吹いてくる朝の風でひんやりとした戸外にいたのだ。『明治日本散策』P269
縄、竹、又は南京玉のように糸を通した介殻さへも材料にした、簾の器用なつくりよう「戸の前に流蘇のように下っていて、風通しがよく、室内をかくし、そして人は邪魔物なしに通るめけることが出来る」といふ、誠にいい思いつきである。『日本その日その日』P73
人の歩く音、話し声、笑い声、大方撥られてもいるのだろうか、きょつきやという女の声も入り交じって聞えてくる。都会の人達がここへ来てさんざめいているのである。これが日本の旅館なのだ! 障子一重で部屋と廊下とを仕切っているのだから、人声物音が手にとるように聞こえるのは、うただけ野暮である。要するに、家屋全体が一つの部屋で、ただ見た目に仕切がしてあるだけなのだ。『日本美の再発見』P55-56
部屋と部屋をへだてる紙製の仕切りは、隣室に発する物音が伝ってくるのをささぎるにはほとんど役に立たない。だが、このわずかなプライバシーをすら破壊するかのよう、裕福な家庭にある念入りに彫刻をほどこした欄間は、ほんの微かな衣ずれの音や咳払いさえ確実に耳にできる仕組みになっている。部屋部屋の扉はしばしば向こうが透視できる雪見障子になっていて、あたかも内部を観察してくれといわんばかりである。『果てしなく美しい日本』P37
室内は言うまでもなく、紙製の間仕切りしかない。そのうち二面は透けない紙〔襖〕で、開口部のない大きな障壁をつくっている。ほかの二面は薄紙〔障子〕で、軽い甚盤縞の木枠があらわれて、いくつもの小さな半透明の窓ができていて、日中はそこから日が入ってくるのである。おまけにこの繊細なフレームは可動式になっていて、われわれの国のガラス窓のように開けることができ、ヴェランダ〔廊下〕が見晴らせる。このヴェランダは日本の民家では一般にそうするのだが、夜は木の厚板〔雨戸〕で閉め切ってしまう。『日本秋景』P133-137
さて彼女らは、ガラガラと音をたてて外側の木製の仕切り〔雨戸〕を全部開け、まだ十分ではない、とでもいうように、薄紙でできた内側の仕切り〔障子〕もすっきり開けたので、おかげで私は、朝の凍るような冷たい空気と、昇る太陽のまばゆい光にさらされた。またたく間のうちに事が運ばれ、部屋は解体され、四面の内の二面だけとなって、私は風に吹きさらしとなったのだ。『日本秋景』P139
日本の家の場合、一番大事なことは改造、建築など技術的なことではなく、空間の使い方をどうするかを決めることです。特に、部屋の間仕切りのことを考えると、木材の柱を使うことで壁が少なくなり、右から左にスパッと視界が広がるのですっきりとした気持ちになるのが、東アジアの建築の特徴の一つです。日本の家もそうした造りであり、極端に言えば、風と明かりを通すオープンエア・パビリオンです。昔の家は驚くほど広々と作られています、住む人が障子と襖で部屋と廊下に小さく区切って狭く美しい空間に変えてしまいます。昔は冬の寒さを防ぐため、また大家族のプライバシーを守るためには必要だったでしょうが、現代の私たちににとってはそうした区切りは必要ないと思います。障子と襖を取っ払って、初めて日本の座敷や居間の美しさが現れてきます。特に回り廊下を部屋に入れてしまうと雰囲気は非常に良くなります。『美しい日本の残像』P36-38
伝統的日本家屋の屋内における仕切りの僅少さは誰の目にもつく。部屋と部屋を分けるのは壁ではなく、横滑りし、取り外しも可能な仕切り戸で、これは厚紙(襖)、もしくは半透明な紙(「障子」)でできている。部屋同士の区別はむしろ床の種類による。ある種の部屋、たとえば、入り口の間、台所の一部は地面と同じ高さであり、かつては地面がそのまま床になっていて、そのため「土間(地面の部屋)」と呼ばれていた。他の部屋は地面から高くなっているが、床板だけの部分(「縁側」と、畳を敷いた、いわゆる部屋が区別される。屋内は、いろいろの手段で屋外とははっきり区別されている。踏み石を越え、地面より高くなった部分に上る時には、履物を脱ぐ。縁側は夜(もしくは台風の時など)、厚い木の板で閉ざされる。庭は、生垣、棘のある木(「逆茂木」)、さらには溝や堀で、周囲と距てられている。『空間の日本文化』P176
紙でできた仕切りは、視覚的な絶縁だけしか確保しない。この仕切りはたいへんに薄く、また仕切りのある上の部分は通風のために開いている。家の中での静かさの問題が全く考えておらず、他の解決策が望ましいとも考えられていないのである。『空間の日本文化』P126
それにしょっちゅう襖が音もなく開き、何対かの細長く黒い目が隙間からわたしをじろろ見るのです。それというも右側の部屋には日本の家族二組が、左側の部屋には五人の男性がいたからです。わたしは障子という格子に薄紙を張った窓の戸を開け、ベッドに入りました。が、プライバシーの欠如たるや恐ろしいものでした。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P124-127
出発の物音は夜明けとともに聞こえはじめ、わたしは七時に喜びいさんで宿を立ちました。発つ前に襖は開け放たれ、自分の部屋だったところは広々とした畳敷きの大部屋の一部となりました。かび臭さを防ぐ効果的な案配というわけです。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P133-134
寝室の仕切りは、襖を滑らせて壁にします。隣の部屋の客に興味があれば、襖をちよっと滑らせたり、襖紙をつついて穴を開けたりします。内緒話や穴漏れの音は部屋から部屋へと順繰り旅をしますが、アングロサクソン(英国人)が泊まっていると、その軒は、宿屋全体を揺るがす大事件となります! 『シドモア日本紀行』P189
日本の夏の暮らには、各種の屏風が衣服よりも大切となり、しかも裸同然の生活なので、その必要性が大いに高まります。小さな窓のある屏風は裸の当人を隠し、本人は街道の様子を一瞥でき、また風の強い日はさまざまな棚や鉤のある屏風が台所の火鉢脇へ持ち込まれます。夏の仕切りには、当然のごとく使われるものが簾、つまり糸で結んだ葦のカーテンや竹ひごカーテンです。糸を通した簾の波打ち、チリンチリン鳴る音は、新鮮な微風を暗示させ、また日本人の美的想像力は、あちこち数珠繋ぎした水晶粒を涼しい雨の滴に変え、滴が竹ひごカーテンを滑り落ちてゆきます。『シドモア日本紀行』P350-351
だが、話し声や笑い声やらびびきやを立てる隣室の旅客たちと隔てるには、紙の壁〔襖〕では、まったくもって用をなさないではないか。なにしろ、三味線を弾いて歌う者さえるし、子供の泣き声だって聞こえてくるのだ。『明治日本散策』P282
この人の洗練された接待のセンスは並はずれている。わたしたちが来ると言うので障子紙は全部張り替え、蒲団綿も打直し、私の身丈に合わせた絹の綿まで作り、帰りがけにはそれを私にみやげとして下さった。『日本絵日記』P230-231

2-4-7. 温熱環境 (表 2-13)

ハーンが「暑い季節には風通しを良くするために、家屋をすっかり開け放つ」と記しているように、日本家屋の開放性についてモース、タウト、ロチ、レガメが述べている。日本の家屋は「むしあつい夏の日を過ごすには最適である」(モース)が、冬の寒さには適しておらず、火鉢や炬燵、行火、懐炉を使用して暖をとっている様子がシドモア、ロチ、タウト、バードによって描かれている。バードは「炬燵は日本では「おなじみのもの」で、炭火を入れた鉢を四角い木の枠がかぶせてあり、この枠が大きな綿入れキルトすなわち布団を支えているもので、布団のなかにそっと入り、布団を顎まで引っ張り上げたまま、暖かくて不精でだらしない夕べをすごします」と炬燵ならではの過ごし方を記している。ロチは「あちこちの白木だの、薄っぺらい白紙の障壁だのもそうで、住まい自体が裸同然なのである。そこで人々は、重い大きな火鉢のすぐそばにかたまって座っている」と冬の寒い家の中の様子を描いている。タウトは「一人用の木製或は粘土製の行火があり、また寝床に入れるもっと小さな懐炉もある。(中略) このように寝床にも入れる保温器の類は様々であるが、いずれも熱湯を入れる湯婆より永く熱を保つし、燃料の上からいっても経済的である」といった冬の寝室での工夫も述べている。

2-4-8. 光環境 (採光・照明) (表 2-14)

ロチは「室内は言うまでもなく、紙製の間仕切りしかない。そのうち二面は透けない紙〔襖〕で、開口部のない大きな障壁をつくっている。ほかの二面は薄い紙〔障子〕で、軽い碁盤縞の木枠があてられて、いくつもの小さな半透明の窓ができています。日中はそこから日が入ってくるのである」と記述している。障子を通して光が入る様子について、タウト、マサビュオーも同様に述べている。

照明については、シドモアがガス灯や電灯が普及している中で、紙の行燈が人気であり、「提灯の柔らかな明かりを鑑賞するには、日本で生活するのが一番で、夜ごとの惜しみない灯火の利用は、まるでお伽の国のような華麗な効果を生み、それはまさに、紙切れ、幾本もの竹ひご、紙灯心の周りの植物油から生まれる幻想芸術なのです」と昔ながらの照明を評価している。さらに、カーが「蛍光灯の青白い光はいかに上品で美しい部屋もみっともなくさせてしまいます。アメリカとヨーロッパでは人の家にはトイレとキッチン以外にはほとんど使いませんが、日本は完全に蛍光灯に汚染されてしまっていると言えるでしょう」と述べているように、現代の日本の照明事情では、行燈が評価されていた時代から大きく光環境への認識に変化があることがうかがえる。

表 2-13 温熱環境についての記述（抜粋）

温熱環境
すべて住宅のつくりには、簡素な魅力がある。ただ、むしあつい夏の日を過ごすには最適であるが、冬のうすらさむい雨のふる日などは、あまり居心地のよいものではない。すくなくとも外国人にとってはそうだ。『日本のすまい・内と外』P131-132
不思議なことだが、家屋も、夏に於けると同様、開けっ放しであるらしい。『日本その日その日』P227
そのほかにも、一人用の木製或は粘土製の行火があり、また寝床に入れるもっと小さな懐炉もある。（中略）このように寝床にも入れる保温器の類は様々であるが、いずれも熱湯を入れる湯婆より永く熱を保つし、燃料の上からいっても経済的である。『忘れられた日本』P203
しかし火鉢があるにしても、私達は寒さを感じないわけにはいかなかった。ヨーロッパの衣服は室内の空気の温度を顧慮して作ってある。ところがキモノは、いま広瀬夫人が五枚も重ね着しているのを見てもわかる通り、まったく戸外の気温を目安にしている。また実際にも日本家屋の室内温度は、火鉢があっても戸外の温度とあまり大きな差がないのである。私達は、日本がこんなに寒いのに非常に驚いたしまた失望もした。『日本の家屋と生活』P25
とにかく開け放すことのできる日本家屋は非常に快適である。『日本の家屋と生活』P88
しかし南向きの日本家屋は、陽のあるあいだは一日じゅう開け放しておくことができる。（中略）子供も縁側に坐ったりまたここで遊んだりしている。『日本の家屋と生活』P119
日本の冬の観察から得られた結論はこうである、——世界諸国の北部地方の家屋はその形式をもつら冬に順応させている、夏は比較的短くそのうえ日本風の建築形式が快適に感じられるような夏日が非常に少ないからである。（中略）つまり日本は家屋とその生活を日本の風土に適するように発達させたのであり、しかもこれを能う限り論理的に成就し得たのである。『日本の家屋と生活』P132-133
生活様式の西洋化の正気とは思えぬ流行は、やがて阻止されるだろうか。将来日本人は床の上や、椅子の上で生活するつもりなのだろうか。二十年のうちに「畳敷き」の和室は今日の洋室の場合のように贅沢なものになってしまわないだろうか。近代的要求を満たすためには、日本式家屋の暖房には何が一番良いだろうか。『日本絵日記』P82-83
松本さんは、両側の内壁が取り払われた大きな部屋に、私たちを迎えた。昨今ではめつきり見かけなくなったその広さに、私たちが驚くを見て、これは風を通すために襖を外したもので、本来は十二ほどの部屋であることを教えてくれた。この季節の暑さは、部屋の仕切りを取り払うという、きわめて簡単な方法で、見事にしのがれているのだった。『明治日本散策』P88
炬燵一種で、日本の家屋にある唯一の暖房器具・火鉢を開んだ夕食後の団欒時、過去について語り、重々しく未来について考える。『明治日本写生帖』P66
暑い季節には風通しを良くするために、家屋をすっきり開け放つ。（中略）まさに家は壁なしで、どこからお見通しである。『日本の面影』P179
冬の寒さや夏の暑さについてしばしば不平をもらさないわけではないが、さらに、日本人はこうした四季それぞれに特有な属性を体験することを楽しむ。ニューヨークのアパートと違って、東京の家々には苛酷な季節に対する防禦策がほとんどどこもこされてないが、その結果、厳しい冬の後に訪れる最初の暖かい春の日は、人々により真正な喜びをもたらす。日本人は四季を認識するばかりか、四季に応答する。『果てしなく美しい日本』P95
さて彼女らは、ガラガラと音をたてて外側の木製の仕切り〔雨戸〕を全部開け、まだ十分ではない、とでもいうように、薄紙でできた内側の仕切り〔障子〕もすっきり開けたので、おかげで私は、朝の凍るような冷たい空気と、昇る太陽のまばゆい光にさらされた。またたく間のうちに事が運ばれ、部屋は解体され、四面の内の二面だけとなって、私は風に吹きさらしとなったのだった。『日本秋景』P139
実際、床に敷かれたこの白いゴザ〔畳〕では凍えてしまう。——それで言えば、あちこちの白木だの、薄べらい白紙の障壁だのもそうで、住まい自体が裸同然なのである。そこで人々は、重い大きな火鉢のすぐそばにかたまて座っている。火鉢は漆塗りの三脚の上に据えられており、火鉢の取っ手のところは怪物をかたどっている。その中では炭が燃えているが、特殊な木からつくった炭で、けっして火が消えないようにできているのだが、暖まっても愉快という感じはなく、しかも眠くなるような、なんとも言えない臭いを出すのである。『日本秋景』P228-229
日本の家の場合、一番大事なことは改造、建築など技術的なことではなく、空間の使い方をどうするかを決めることです。特に、部屋の間仕切りのことを考えると、木材の柱を使うことで壁が少なくなり、右から左にスパッと視界が広がるのですっきりとした気持ちになるのが、東アジアの建築の特徴の一つです。日本の家もそうした造りであり、極端に言えば、風と明かりを通すオープンエア・パビリオンです。昔の家は驚くほど広々と作られています、住む人が障子と襖で部屋と廊下に小さく区切って狭く涼しい空間に変えてしまいます。昔は冬の寒さを防ぐため、また大家族のプライバシーを守るためには必要だったのですが、現代の私たちにとってはそうした区切りは必要ないと思います。障子と襖を取っ払って、初めて日本の座敷や居間の美しさが現れてきます。特に回り廊下を部屋に入れてしまうと雰囲気は非常に良くなります。『美しき日本の残像』P36-38
また、この家では特に、夏はたいへんに暑く、冬はたいへんに寒かった。『家屋と日本文化』P20-21
寒さがたとえ厳しくて長引いても、それに耐える日本民族の姿は、外国人観察者をいつも感動させてきた。寒さに対する忍耐力が彼らにあるのは、否定し得ない。田舎の家に住む家族が、熱の放散がほとんどない囲炉裏の周りに座って平気で長談義しているのを見るだけで十分だろう。室温は〇度かそれをほとんど上回らない程度で、針がにも敗れた窓を通して入ってくる氷のように冷たい風で冷え切っているが、それを何とも感じていないかのようである。『家屋と日本文化』P129
炬燵は日本では「おなじみのもの」で、炭火を入れた鉢を四角い木の枠がかぶせてあり、この枠が大きな綿入れキルトすなわち布団を支えているもので、布団のなかにそっと入り、布団を顎まで引っ張り上げたまま、暖かくて不精でだらしない夕べをすごします。ひとつの炬燵に五人か六人、いいえ、もっともおおぜいの人々が当たれます。いまこの瞬間にも日本の家庭の半分が炬燵で体を寄せ合っているのはまちがいないと思います。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P308-309
どの建物も地面から上がった床、垂直の柱、木の屋根で構成されていますが、外壁には主に溝にはめて開け閉めする、紙を貼った軽い木材の枠が使われており、夜間は木製の雨戸を閉めます。悪天候に対しては家屋全体が穴だらけでしかないのです。このような状態で、炬燵にあたりなさいと勧められるのは、スコットランド高地地方の「入ってお座りなさい」や、コロラドの「ストーブで足を暖めなさい」同様うれしいものです。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P308-309
私たちの泊まっている湯元の茶屋の二階三室は、日中襖を開けてワンルームとし、三方の廊下の障子も開けっ放しにしました。火鉢には真つ赤に焼けた炭の灰が入り、朝晩の冷気を和らげ、私たちは終日厚く積まれた布団に心地よく座りました。『シドモア日本紀行』P218

表 2-14 光環境についての記述 (抜粋)

光環境
また紙の障子も採光の手段として用いることも、実に比類なき性質のものである。『日本文化私観』P300-301
これらの一切が伝統の一部をなすものであるとすると、完全に伝統的な環境にある多くの場合に、たまたまこの照明がまったく軌道を外れていることがあるのは、怪訝に堪えない。純日本的な住居では、たいいていの場合、この問題は解決されていない。電気があるのだから、本来それに適合するように、部屋を効果的にかつ改善して証明することは、当然出来るはずである。『ニッポン』P89-90
日本風の居間で最も讃嘆すべき点は陽光の処理法である。障子は未だ閉まっているが、外側の板戸はもう開け放たれているような時、畳の上で眼覚めながら、この光を味わうのは実に筆紙に尽し難い。『ニッポン』P116-118
ところで日本の室にはなぜ椅子やテーブル類がないのであろうか、なぜ畳を敷いてあるだけなのだろうか。畳の上に坐るのは、日除けに必要な庇があるという純然たる実用的理由から説明することができる。庇は光線を遮るものであるから、高いテーブルを用いると暗くなりすぎることがある。(中略) いずれにせよ今日では十分な光を採り入れるには畳の上に坐らねばならない、——これは単純に美的な意味だけのことであろうか、それとも昔から伝統が固定した結果であらうか。『日本の家屋と生活』P92
川向こうの家では、部屋の中の照明が幅広い障子を柔らかな黄色に染め、その明るい紙のおもてに、すらりとした女の影がしとやかに動いている。私は心から、日本にはガラス窓が普及しないのでほしいと願っている。そうなれば、このような美しい影を見ることができなくなるからである。『日本の面影』P111-112
室内は言うまでもなく、紙製の間仕切りしかない。そのうち二面は透けない紙〔襖〕で、開口部のない大きな障壁をつくっている。ほかの二面は薄い紙〔障子〕で、軽い基盤縞の木枠があてられて、いくつもの小さな半透明の窓ができていて、日中はそこから日が入ってくるのである。おまけにこの繊細なフレームは可動式になっていて、われわれの国のガラス窓のように開けることができ、ヴェランダ〔廊下〕が見晴らせる。このヴェランダは日本の民家では一般にそうするのだが、夜は木の厚板〔雨戸〕で閉め切ってしまう。『日本秋景』P133-137
日本の家は本質的に「開かれた」建築であり、南に向かっているの内部はかなり明るいと考えるのが自然であるように思われる。しかし住居の内部の明るさは、開口部に使われている材料の性質にも依存している。「障子」の半島めの紙は外光の10パーセントを吸収し、40パーセントを反射しているために、家の内部に入ってくる光の量は50パーセントに満たない。ガラス窓の場合には、外光の90パーセントが内部に入ってくる。つまり障子紙をガラスに取り替えるならば、日本の家において障子紙が張られている広い面積を半分近くにしても、家の内部に同じ量の光を入れることができるのである。確かに冬を除いて障子戸はたいいてい開けられているし、障子戸はガラス窓よりも内部の熱を保存する効率がよい。『家屋と日本文化』P124
ところで、日本の全都市にガス灯や電灯が普及し、さらに米国やロシアがランプの灯油を船に満載し入港しているのに、なぜか紙提灯の製造が急速に増えています。実は目下、地球の四分の一の地域からその需要が殺到しているからです。薄っぺらな枠造りは手品のような技法で行われ、しかもデザイン、文字、本体の彩色は、老練な提灯職人が太い絵筆で一気に仕上げます。ともあれ、提灯の柔らかな明かりを鑑賞するには、日本で生活するのが一番で、夜ごとの惜しみない灯火の利用は、まるでお伽の国のような華麗な効果を生み、それはまさに、紙切れ、幾本もの竹ひご、紙灯心の周りの植物油から生まれる幻想芸術なのです。『シドモア日本紀行』P354
そのうちあたりはもうすっかり暗くなった。お寺の人は庫裡の廊下に懸けてある沢山の提灯のひとつに蠟燭をともして、境内の小径を家まで送ってきてくれた。油紙を張った見事な提灯には寺の山号(少林山)と紋とが描かれ、いわゆる提灯型に作られているが堅牢で品位があり、火をともすと絵のように美しくまことに印象的である。《洗心亭》——これが私達の小家屋の名である、一の灯火が薬師菩薩の像を安置した古墳のうえの大樹のうしろに隠見する。薬師塚は石の洞窟で、願文だの願主の名などを書いた紙が薬師像や周囲の彫像にくくりつけてある、また小石が像の上や周囲に供えてあるのは、眼病平癒の祈願のためである。提灯の灯りをたよりに洞窟のなかのいろいろのものを見てみると、これこそ例の入浴に関する衛生学上の疑問と浪漫的な対応をなすもののように思われた。『日本の家屋と生活』P30
行燈は、高さが一メートルばかりでやはり電燈を点すようにはなっているが、それから放射する柔らかな光は、概ね室の下方を照らすので畳と淡黄色の壁とのある日本間のちょうど長押のところまでが(一、七二メートル)明るくなる、つまり光は、畳の上に坐っている人の目のとどく高さまで達するのである。(中略) これはもうお祭のための陳列ではない、祭礼と現実との融合であり、それ故にこそ、いきいきとした深い印象を与えるのである。『忘れられた日本』P119
窓からのこぼれ灯もなく、びったり閉じられた雨戸のすきまから、わずかに、光がちらほらするだけ、「よく晴れた夕方などには、障子がしまっている、家のなかで、そここに無意識のうちにうごく人影が生じにうつり、この一種グロテスクな影絵が、旅行者の目をたのしませてくれる。『日本のすまい・内と外』P28
空間の使い方には照明の問題も関係します。もちろん蛍光灯を避けるのは言うまでもないことですが、日本では残念ながら「言うまでもある」のです。蛍光灯の青白い光はいかに上品で美しい部屋もみっともなくさせてしまいます。アメリカとヨーロッパでは人の家にはトイレとキッチン以外にはほとんど使いませんが、日本は完全に蛍光灯に汚染されてしまっていると言えるでしょう。『美しき日本の残像』P38

2-4-9. 音環境 (表 2-15)

「雨戸は、家のなかの数すくない騒音源である」とモースが述べたように、第4節6項でも触れているが、複数の人が雨戸の開閉音に驚いていることを記している。人の話し声については、襖や障子の性質上、音が筒抜けであり、レガメの「話し声やら笑い声やらいびきやらを立てる隣室の旅客たちと隔てるには、紙の壁 [襖] では、まったくもって用をなさないではないか」という記述にも表れている。プライバシーの脆弱性については、マザビュオーが「部屋は、紙製の戸だけで区切られ、欄間は吹き抜けになっていて、外部からの断絶という点ではあまり堅固ではない。こうした部屋にいと、ちょっとした動作でも他人に聞き取られてしまう」という指摘している。しかし、日本人が騒々しいわけではないという印象を述べたのはバードである。「この宿での騒音の印象を誤って伝えたくありません。もしわたしがイギリスの大きなホテルの厨房から同じくらい近いところにて、五〇人の英国人と紙製の仕切りだけで隔てられていたとしたなら、うるさは少なくとも三倍になったでしょう」。このようにバードは、騒音は人々のふるまいではなく紙製の仕切りに拠るものであることを認識している。

雨戸の騒音や隣室の話し声が筒抜けである音環境は、バードらが体験した当時の日本の居住空間の特徴であると考えられるが、居住空間を俯瞰的に捉えたシドモアの次の描写「陽当たりのよい日、絵のように愛らしい風景に、絶えず人間的興味を誘う泊まり客や同伴者の動く姿が加わり、庭は小さな楽園となります。(中略)ときどき粋な夕立もあり、これが降ると奉公人は足駄を履き、裾を捲って脚を剥き出し、頭上に大きな油紙傘 [唐傘] をくるくる回しながら軒から軒へと私たちのいる庭の周りをぱたぱたと走り抜けます。夜になると、奉公人は雨戸をにぎやかに閉め、木綿を粗く織った緑色の蚊帳を吊るために来て、部屋と同じ寸法の緑の網を天井の四隅から紐でしっかりと留めます」からは、雨戸を閉める音さえも騒音ではなく賑やかさにつながるものとして受けとめていることがわかる。

2-4-10. におい環境 (表 2-16)

においに関する記述のうち大多数を占めるのが厠の臭いについてである。タウトの「それに階下の手洗所からは、階段が二つもあるのに、厠臭が三階の部屋まで上ってくる」という描写に代表されるように、居住空間ではこの臭いから逃れられないといった記述が多い。他には、畳のいぐさの真新しい甘い香り (ハーン)、花を飾り部屋にパッと広がる薫り (シドモア) など、植物からのよい匂いについても記されている。

表 2-15 音環境についての記述 (抜粋)

音環境
<p>雨戸は、家のなかの数すくない騒音源である。閉するときの、戸と戸があたる音や、スベリのわるい錠前を操作するときの音などがそれである。フスマの開閉にはまったく音がしないし、畳のうえをあるくにも猫のようななかろやかさで、しずかにあることができ、敷居部分の違和感もまったくない。『日本のすまい・内と外』P240-241</p>
<p>「障子を閉める音、夜一枚々々押して雨戸をびしゃびしゃ閉める音は、最もうるさい。『日本その日その日』P96</p>
<p>人の歩く音、話し声、笑い声、大方撥られてでもいるのだろうか、きゃっきゃという女の声も入り交じって聞えてくる。都会の人達がここへ来てさんざめいているのである。これが日本の旅館なのだ！障子一重で部屋と廊下とを仕切っているのだから、人声物音が手にとるように聞こえるのは、いうだけ野暮である。要するに、家屋全体が一つの部屋で、ただ見た眼に仕切がしてあるだけなのだ。『日本美の再発見』P55-56</p>
<p>いずれにせよ日本家屋で物音がよく聞こえるのは、サディズムのような粗野な現象が日本人のあいだに殆んど見受けられないという事実を説明するものである。『日本の家屋と生活』P97</p>
<p>だが、話し声や笑い声やらびきやらを立てる隣室の旅客たちと隔てるには、紙の壁〔襖〕では、まったくもって用をなさないではないか。なにしろ、三味線を弾いて歌う者さえいるし、子供の泣き声だって聞こえてくるのだ。『明治日本散策』P282</p>
<p>さて彼女は、ガラガラと音をたてて外側の木製の仕切り〔雨戸〕を全部開け、まだ十分ではない、とでもいうように、薄紙でできた内側の仕切り〔障子〕もすっかり開けたので、おかげで私は、朝の凍るように冷たい空気と、昇る太陽のまばゆい光にさらされた。まったく間のうちに事が運ばれ、部屋は解体され、四面の内の二面だけとなって、私は風に吹きさらしとなったのだった。『日本秋景』P139</p>
<p>紙でできた仕切りは、視覚的な絶縁だけしか確保しない。この仕切りはたいへんに薄く、また仕切りのある上の部分は通風のために開いている。家の中の静かさが問題が全く考えておらず、他の解決策が望ましいとも考えられていないのである。『家屋と日本文化』P126</p>
<p>これとは逆に、家族生活が、住居の枠組からはっきりした影響を受けるといった面もある。日本の住居は戸外に向かって大きく開いているために、家の中にいても、季節の変化や戸外の物音が生き生きと感じ取れる。また、家の中の仕切りも、中に住んでいる人間の間をあまり隔てるようにはなっていない。部屋は、紙製の戸だけで区切られ、欄間は吹き抜けになっていて、外部からの断絶という点ではあまり堅固ではない。こうした部屋にいと、ちょっとした動作でも他人に聞き取られてしまう。『家屋と日本文化』P314</p>
<p>調理する音、お風呂を使う音、食べる音、なかでも最悪なのがキキキと軋む滑車を使って井戸から水を汲む音で、それが朝の四時半から夜の一一半まで続きます。夜はふた晩ともアルコールで鼓舞された騒々しいどんちゃん騒ぎと芸者による音のはずれた演奏が騒音に加わりました。</p> <p>この宿での騒音の印象を誤って伝えたくありません。もしわたしがイギリスの大きなホテルの厨房から同じくらい近いところにいる、五〇人の英国人と紙製の仕切りだけで隔てられていたとしたなら、うるさは少なくとも三倍になったでしょう。</p> <p>きのうひとりの男が来て障子の「のぞき穴」すべてに紙を貼ってくれたので、宿屋がこれほど込んでいても、わたしはほとんど気にならなくなりました。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P418-420</p>
<p>三笠山〔若草山〕の崖下に沿った小さな茶屋に滞在する旅行者は、奈良の本当の暮らしを味わい、快適な環境の中心にいることになりま。庭に点在する独立した園亭や家屋にいと、私たちは日本人観光客の美的存在が際立つ光景に出逢います。回廊をめぐらした小さな家々の絶妙な簡素美、どの家も四方が大気と景観に開放され、庭の静寂は竹筒から青銅鉢や小池へ流れしたたる水の音だけに沈黙が破られ、理想郷がこの庭に再現されています。わずかな費用で、誰でも自分専用につつまな家や、優美な茶の湯の離れ屋を一軒持つことができ、それぞれの建物には小さな台所が付きま。陽当たりのよい日、絵のように愛らしい風景に、絶えず人間の興味を誘う泊まり客や同伴者の動く姿が加わり、庭は小さな楽園となります。雨の降る日はいっそう絵画的風情が増し、とても静やかな気分になります。雨の降る六月、頑なに間断なく降る霧雨は、すべてをびしょりと湿度で包みます。ときどき粋な夕立もあり、これが降ると奉公人は足駄を履き、裾を捲って脚を剥き出し、頭上に大きな油紙傘〔唐傘〕をくるくる回しながら軒から軒へと私たちのいる庭の周りをばたばたと走り抜けます。夜になると、奉公人は雨戸をにぎやかに閉め、木綿を粗く織った緑色の蚊帳を吊るために来て、部屋と同じ寸法の緑の網を天井の四隅から紐でしっかりと留めます。この蚊帳は日本の多くの品物に染み付いた古臭いかびの匂いを発散させますが、雨季にはこのかびから逃れようもありません。『シドモア日本紀行』P401-403</p>
<p>人の歩く音、話し声、笑い声、大方撥られてでもいるのだろうか、きゃっきゃという女の声も入り交じって聞えてくる。都会の人達がここへ来てさんざめいているのである。これが日本の旅館なのだ！障子一重で部屋と廊下とを仕切っているのだから、人声物音が手にとるように聞こえるのは、いうだけ野暮である。要するに、家屋全体が一つの部屋で、ただ見た眼に仕切がしてあるだけなのだ。『日本美の再発見』P55-56</p>
<p>部屋と部屋をへだてる紙製の仕切りは、隣室に発する物音が伝ってくるのをさえぎるにはほとんど役をなさない。だが、このわずかなブライバシーをすら破壊するかのよう、裕福な家庭にある念入りに彫刻をほどこした欄間は、ほんの微かな衣ずれの音や咳ばらいさえ確実に耳にできる仕組みになっている。部屋部屋の扉はしばしば向こうが透視できる雪見障子になっていて、あたかも内部を観察してくれといわんばかりである。『果てしなく美しい日本』P37</p>

表 2-16 におい環境についての記述 (抜粋)

におい環境
日本の宿屋の便所の臭気についてのべるならば、わが国の田舎でも、よごれた中庭や、悪臭をはなつ豚小屋のある不愉快な宿屋があることを、だれしもおもうかべることだろう。『日本のすまい・内と外』P34
それに階下の手洗所からは、階段が二つもあるのに、厠臭が三階の部屋まで上ってくる。便所が汲取り式で便器孔の下が糞壺になっているからだ。『日本美の再発見』P129
そこで妻の希望は案の定実現して、雨戸はまた戸袋の中に引込まれた。(中略) 厠臭は、湯殿の戸を閉めておいてさえ風のまにまに鼻先に漂ってくる。『日本の家屋と生活』P28-29
美的にこれほど発達している国民でありながら、殆んどこの家でも居間にたまらない厠臭が漂っているのは、実に訳の判らないことである。『日本の家屋と生活』P70
だが、そこに足を踏み入れるやいなや、耐えがたい臭いが鼻をついた。松本さんによると、無臭化する設備が未だ整っていない日本の住宅事情では、これは普通のことであるという。『明治日本散策』P191-192
ここは、あらゆるものが大層優美なのだが、例の臭気が.....。やれやれ、日本家屋特有のこの臭いときたら！そして人が間違ふことがあろうかと、臭気による案内だけでは不十分であるかのように、無数の「限定形容詞」が、旅行者に必要な例の場所を知らせている。例えば、人目を惹く一株の八手や、イグサの蓋の上の軽い柄杓を伴った、水がいつばいに貼られた青銅製の鉢、その上に吊るされた、洗浄後に手を拭くための白と青の手拭などである。また他人から目隠しになる細い竹の小さな垣根もある。そしてすべての不浄なる接触を断つために、聖なる敷居をまたぐ前に履く草鞋があるが、それはしばしば無駄な用心であろう。というのも、この嗅覚上耐えがたき場所は、ほとんど贅沢なほどすでに清潔であるからである。『明治日本散策』P263-265
明るい部屋の畳は真新しく甘い香りが漂っている。『日本の面影』P57
日本の家は音を通してしまっただけでなく、引き戸の継ぎ目の数多くの隙間から匂いも通してしまう。このことは今に落ちてもっともよく感じられる。匂いに関しての状態は、夏も冬もあまり大差なく、家の後方にある部屋でも匂いが伝わってきてしまうのが普通である。『家屋と日本文化』P127
終日、わたしたちはかなり往来の多い水田の中の道路を粕壁まで行きました。粕壁は大きくはあるもの見窄らしいまちで、目抜き通りは東京のいちばん貧しい地域の通りのようでした。その夜泊まるのでクルマが泊まった大きな宿屋は一階と二階に部屋があり、旅人で込んでいて、さまざまな悪臭がしていました。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P124-127
横手は人口一万人で、木綿の大きな交易場ですが、最上級の宿屋はどこもひどいものです。醜くて臭く、わびしくて、汚くて、じめじめしていて、みじめたらしい街です。わたしが後ろ足だけで進む馬に乗って通りを行くと、人々はわたしを見ようとお風呂から飛び出してきました。男も女も一様に一条まとわぬ姿で、です。宿屋の亭主はとても礼儀正しいものの、わたしの部屋は暗くて汚く、竹製のはしごを上って行きます。そして糞に障るほど蚤と蚊がいますのです。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P351-352
わたしの宿泊費は(伊藤の分も含めて)一日三シリング未満で、これまでほぼどこに行っても、快適にすごしてもらいたいという心温まる思いやりがありましたし、日本人ですら足を踏み入れない一般コースをはずれた小さくて素朴な村落に泊まること多いことを考えると、宿泊設備は、蚤と臭気をのぞけば、驚くほどすばらしく、世界のどの国へ行っても、同じように辺鄙なところで同等の宿泊設備は得られないと考えるべきでしょう。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P426-427
三島の最高級の茶屋は、かつて大名が休憩した宿[本陣]です。これは極めて模範的な日本建築で、黒光りする柱、幻想的窓、小さな中庭があり、とても充実しています。私たちの泊まる部屋の一室に床の間があって、巨大な字で書かれた詩歌の掛軸がかかり、さらに見事な銅製の花瓶が置かれ、三本の芍薬からピンク色の芽が出ていました。もう一室には、家庭の福の神・福祿寿の木彫りが笑い、卓上漆机には巻紙、硯箱、毛筆の入った大きな漆箱が置かれていました。しかも、これらの室内には、それぞれ柔らかな敷物、何枚かの絹布団、茶盆、煙草盆が備えられていました。ともあれ、この素晴らしい簡素な和室は、私たち米国人の持ち込んだ不似合いな旅行バッグや手荷物と無理に馴染むまでじつと堪えているようでした。やがて宿の主人が顔を出し、あり余るお辞儀と当惑気味の笑顔で挨拶をした後、贈り物としてとびきり上等な茎の長いジャクミュノウ紅バラを飾ったので、薫りがぱつと部屋全体に広がりました。『シドモア日本紀行』P244
七時になると顔を洗ったり嚏をしたり、実に騒々しい。そのうえ隣家のいろんな物音まで聞えてくる。顔を洗い髻を剃っていると、近くの便所からたまらない厠臭が漂ってきた。『日本美の再発見』P49
私達の部屋は、今度も去年の五月と同じく、一間しかない三階の客室である。この座敷は二方が廻り縁になっていて、いま一方に窓が空いている。夜に入ってから風が烈しく吹き出し、ガラス戸が夜びつてがたがた鳴るので、一晩じゅう眠れなかった。それに階下の手洗所からは、階段が二つもあるのに、厠臭が三階の部屋まで上ってくる。便所が汲取り式で便器孔の下が糞壺になっているからだ。『日本美の再発見』P129

2-4-11. 床の間 (表 2-17)

「床の間は、多少の例外はあるにせよ、幾分でも立派な日本座敷には欠くことのできない『壁面を凹ました』装飾的個所である」というタウトの記述内容は、モース、バード、ハーンにも共通するものであり、床の間は掛け軸や花を一つだけ飾る場所であると描写している。タウトが「床の間に置かれるものは極く少数に限られているけれども、その部屋に意のままの雰囲気を与え、またこの部屋が能う限り純粋な釣合を保ち、美すらも不偏にして過多ならざることを要求する」と記したように、モース、バードの記述からも、床の間装飾の単純化の極に美を見出し、床の間や床間装飾が部屋の雰囲気を規定するまでの存在であることを認識している様子がうかがえる。

一方、現代の居住空間における床の間の描写としては、キーンの「床の間に黄色い髪の人形やばら色のキューピーが飾られていることもあるが、日本人にはエキゾチックで魅力的に思われるのかもしれない」が挙げられる。本来の床の間の美が、西洋化された現代生活の中で従来と異なる解釈で捉えられているのではないかという疑問を投げかけている。

2-4-12. 茶室 (表 2-18)

茶室は、茶の湯 / 茶会のための特別な空間で、入り口は狭く、質素で簡素な空間として描かれている。モースの「畳の標準寸法だけは別であるがそのほかには趣味上の厳格な規則——つまり普通なら繊細な感覚が大工その他の工人の仕事に吟味する際に抛りどころとするような規則は一切用いてない」、キーンの「竹製の茶筌は数セントで買えそうに見えるし、錆びた古釜も、見栄えのしない陶器の茶碗も、茶を入れる小さな罐も例外ではない。しかし、実はそのひとつひとつが、もし正統な素姓の品ならば、一身代にも価するほど高価である」のように、茶室空間は簡素で田舎風にも見えるが、茶道具は実際には大変価値のあることが綴られている。

現代の日本の居住空間にはものが溢れ、茶室とは対極の空間であると指摘しているのはカーである。「四国の古い茅葺の民家も、東京の最新のマンションも、雑多なもので溢れ、それは日本人の生活パターンになっているようです。僕の考えでは「茶室」はそれによって生まれたのだと思います。室町の茶人はごみごみした生活に飽きて、何も置かれていない簡素な茶屋を作ったのではないか」と記している。

表 2-17 床の間についての記述 (抜粋)

床間
<p>奥には床に磨いた板を張った二つのアルコーヴがあって、このアルコーヴを床の間と言います。床の間のひとつには掛物が掛かっています。この白い絹地に桜の枝を描いた絵画は申し分のない芸術品で、これが掛かっているだけで部屋が生き生きとして美しさに満ちます。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P141-144</p>
<p>床の間に掛けてあるえもいわれぬ美しい掛物には、花をつけた桜の枝が一本だけ描いてあります。屏風の一面には一輪だけのあやめがあります。磨き込んだ柱にとっても優美に掛かっている一輪挿しにはそれぞれ牡丹、あやめ、つつじが一輪また一枝ずつ挿してあり、茎も葉も花卉もその美しさをあますところなく見せています。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P176-177</p>
<p>これは美しい部屋のある家で、二十年前純日本風に建てられた。部屋は皆大きく美しく、床間もそれに相当した深さを持っていて。私は、大きな部屋の床間が非常に深く、懸物、花瓶、その他の装飾品も、それに釣り合って大きいことに気がついていて。床間の前が名譽の席であるということは、興味がある。『日本その日その日』P307-308</p>
<p>座敷は小ぎれいで、広々としている。床の間の壁には、杵築の神道の掛け物が掛かっており、部屋の一角には、立派な禅宗の仏壇が飾ってある(仏壇の形や位牌や仏具は、宗派によって異なる)。『日本の面影』P179</p>
<p>床の間は、イギリス家屋の壁付暖炉に比せられる。それは一室の荘重な交点である。私の一友人は、これを日本古来の剣道の決然たる打ち込みの気合に比している。イギリスの壁付暖炉は、イギリスの古来の家屋では秀れた簡素さを示しているが、近代に到っては感傷主義の塊りになってしまった。『ニッポン』P43-44</p>
<p>床の間がなんであるかは、何人もこれをよく知っている。床の間は、多少の例外はあるにせよ、幾分でも立派な日本座敷には欠くことのできない『壁面を凹ました』装飾の個所である。教養のある人はここにだけ自分の好みに応じた、もしくはその折々にふさわしい掛物を吊し、その前には掛物につきづきしい活花とか、彫刻のついた香炉とか、或は彫刻そのものを置くのである。また三月や五月の節句にはここに人形を飾ったり、時には先祖を祀る祭壇を設けることもある。要するに床の間は、芸術とその連想とのために定められた場所である。床の間に置かれるものは極く少数に限られているけれども、その部屋に意のままの雰囲気を与え、またこの部屋が能う限り純粋な釣合を保ち、美すらも不偏にして過多ならざることを要求する。部屋は床の間の放射する多種多様な趣に堪えねばならないからである。部屋には、床の間のほかには何ひとつ美術品を置いてはならない。つまり床の間は、諸芸術の限界と意識とを最も明白に規定するのである。例えば建築は、その抽象的な釣合の関係が最も純粋であり、かつできるだけ中正であるときに最も美しい、彫塑と絵画とは(詩もまたそうである、掛物はその一部或は全体が書から成っている場合もある)、その作品が、住む人の精神生活ないし感情生活に対する緊密な関係をできるだけ適切に表現するときに最も美しいのである。即ち建築の意義は、抽象的な不偏中正にあり、絵画及び彫塑はもとより装飾の意義も、精神的なものを能う限り端的に表現するにある。『忘れられた日本』P131</p>
<p>床の間は平生は掛物をかけるところであるが、なにか特別の行事のある場合には、例えば結納や出産祝などの祝物を置く場所になる。(中略) そればかりでなく床の間を祭壇風にしつらえて死者の殯の場所にすることもある。『日本の家屋と生活』P136</p>
<p>外国人の扱いに見られる日本人の不安さ加減は、外国の事物の用い方についてもしばしば見受けられる。例えば、現代の多くの家には少なくともひとつ西洋風の部屋があるが、そこには詰め物の入りすぎた椅子や、テーブル・センターのたぐいの小布や灰皿が置かれたテーブルや、アメリカやイギリスの中産階級の家庭にあってもおかしくないようなさまざまな現代生活の付属物がしつらえてあって、隣の日本式座敷の落ち着いて広々とした優雅さとみじめな対照をなしている。(中略) しかし、全般的に、日本人は日本列島の地に生じたものの扱いについては剃刀の刃のような感受性に恵まれているのに、外国の事物の品質を識別する力をしばしば欠いているように思われる。床の間に黄色い髪の人形やばら色のキューピーが飾られていることもあるが、日本人にはエキゾチックで魅力的に思われるのかもしれない。庭園や公園は、しばしばブリュッセルの誇る「小便小僧」の石膏の複製を自慢にしている。『果てしなく美しい日本』P45</p>

表 2-18 茶室についての記述 (抜粋)

茶室
<p>裕福なタイプの家では、はっきりとしたポーチと入り口、つまり玄関がある。(中略)二階建ての茶室では、その階段が、しばしば、台所のちかくにもうけられることがあるが、そのしたが戸棚になっており、その戸は開き戸であることがおい。『日本のすまい・内と外』P30-31</p>
<p>茶室はごく小さく、同時にまたきわめて閉ざされている。低く狭い(六九×五一センチ)入り口ではほとんど膝を床につけねばならないので、「にじり口」とさえ呼ばれる。窓も小さく、外がよく見えないように配置されている。五平方メートルほどのこの小部屋はさらに中央の柱(「なか柱」)とその袖のような壁(「袖壁」)一床から五〇センチほどから天井まで伸び、部屋の中央まで張り出している——で、さらに仕切られている。四囲の壁にはへっこみがいづくもあって、部屋の周囲に変化がもたらされている。こうした様々な手の込んだ仕組みは、日本式美学の好む未完成、不完全の感覚を生むためと言われるが、実際には、一方でできるだけ縮小しようとしている広がり、質的变化を付与する——したがって主観的には拡大する機能もはたしていることは一目瞭然である。『空間の日本文化』P194-195</p>
<p>茶室は定常寸法である六フィート平方 [三・三平方メートル (一坪)] に制限され、その入り口は高さ三フィート [九〇センチ] にも満たない開口だけで、ホストは召使の手を借りず、四人の参加者だけが六時間、あるいは終日儀式に出席することになります。ホストとの関係で客人の座席は、開口や床間(壁奥)の側が厳しく定められます。会話すらも指図を受け、床の間の美術品が一定の時間尋ねられ、さらに茶碗や付属品も真剣に論じられます。これらについて何も語らないことは、不適切なときに喋ると同じくらい、とても不作法となります。『シドモア日本紀行』P126-129</p>
<p>石のテラスを通過して池の端をすぎ、将軍の別荘に入りました。急で狭い階段、ひどく邪悪に見える小部屋、不規則な形の縁、深い床の間のある広い部屋、それに茶の湯という神秘的な儀式に用いられる小さくて風変わりな部屋が奇抜に配された建物です。ふたりの従者が他のみんなと同じように無言で待っていて障子を開いてくれたので、異なった階のそれぞれ異なった美しい景色が眺められました。わたしの思うところでは、最も美しかったのは堂々たる木立の上に寺院の反った屋根が見え、下の池が緋色のぶちに染まっている、魔法にかかったような庭園でした。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P294</p>
<p>話をもどそう。茶会の儀礼のようすがわかると、茶会のために、特別なヘヤや建物をたてることなど、おどろくにはあたらない。ここで、茶室の内部をしめすスケッチをいくつか紹介しよう。(中略)ちいさなクボミがあって、その隅柱は屈曲しているが、その屈曲した柱は、この隅の壁に穴をつくっている。その穴は、絵や花生けをつるためにつかわれていた。『日本のすまい・内と外』P158-164</p>
<p>有名な茶人小堀遠州が二百五十年前に建てた茶室は、茶の湯の簡素と荘厳とに相応しい、意匠の簡単さのよい例である。『日本その日その日』P284</p>
<p>この茶室は宮殿に特有な、様式の厳格さをひとつもっていない。萱葺屋根も丸木柱も、また家の周囲に配置された石も、全て田舎の趣きである。しかし一切のものは相寄って一つの見事な統一を形づくっている。誰かあって、この様子を真似でもしたら、滑稽極まるものができるに違いない。『日本美の再発見』P147-148</p>
<p>茶室では、畳の標準寸法だけは別であるがそのほかには趣味上の厳格な規則——つまり普通なら繊細な感覚が木工その他の工人の仕事を吟味する際に抛りどころとするような規則は一切用いてない。(中略)窓の配置はまったく自由であっていささかも規則に拘束されていない、これは室つぎの狭い場所(台目畳)についても同様である、ちなみに湯はここで支度せられ、美しいキモノを着たこの家の主婦や令嬢はまたほかの若い婦人が作法にかなった物腰で、秘蔵の茶碗のなかに入れた緑の碾茶に湯を注ぎ茶を点じるのである。『日本の家屋と生活』P194</p>
<p>同じように、茶道の行なわれる小屋は一見このうえなく質素な構造で、見栄や贅沢を示すものは何ひとつないように見える。だが、ふつう茶室はあらゆる細部まで絶妙に仕上げられているので、大邸宅より建築費が高む。例えば、床柱はただの曲がりくねった木の幹にしか見えないだろうが、通人の目にかかってはじめて、それがきわめて珍奇な木材であることがわかる。茶道に用いられる諸道具も、人目を欺く謙讓さを備えている。竹製の茶筥は数セントで買えそうに見えるし、錆びた古釜も、見栄えのしない陶器の茶碗も、茶を入れる小さな罐も例外ではない。しかし、実はそのひとつひとつが、もし正統な素姓の品ならば、一身代にも値するほど高価である。『果てしなく美しい日本』P97-98</p>
<p>全体的に日本のオフィスも家も物で溢れています。きっと昔からそうだったのでしょう。四国の古い茅葺の民家も、東京の最新のマンションも、雑多なもので溢れ、それは日本人の生活パターンになっているようです。僕の考えでは「茶室」はそれによって生まれたのだと思います。室町の茶人はごみごみした生活に飽きて、何も置かれていない簡素な茶室を作ったのではないかと。「雑」と「簡素」という両極端の空間が日本文化にあります、ビジネスには中間である「整理した空間」が必要だと思います。その整理した空間がなかなかできないらしい。『美しき日本の残像』P169</p>

2-4-13. 清潔さ (表 2-19)

清潔さについての記述は、床や畳に関するものである（モース、レガメ、ギメ、ハーン、ロチ、バード、リーチ、カー）。「畳はとても上質で白く、ブーツを脱いでストッキングだけとなった足でさえ、歩くのがためらわれるほどでした」とバードが記したように、歩くのをためらうほどの床であるという表現が、清潔さの印象度合いを示唆していると考えられる。

2-4-14. 東京 / 街並み・建物・住居 (表 2-20)

明治時代の東京の大都市としての印象は、バードの「町全体が見える場所はひとつもなく満足な全景を得ようとするなら、気球に乗るしかなさそうである！」という街が広大で全体像を掴みづらいことや、同じくバードの「全般的に東京の通りは薄っぺらで、趣に欠け、朽ちやすく、そこを往来する雑踏はべつにして、妙に印象に残らないのである」、シドモアの「これは観光客の夢見た大江戸ではなく、まして東洋の大都会でもありません。漆喰壁、木造円柱、ぎらつく店の飾り窓、けばけばしい模造品の山、この有様に観光客はすっかり面食らいます」などと、辛辣な印象が綴られている。しかし、一般庶民の生活圏では「小売店の日常、運河の日常、子供の日常、車上から見た東京、傘をさした日の東京、雑踏といつも変わらぬその穏やかな気性や行儀のよいふるまい、花見、祝日、行列のある祭り、にこやかな葬式、有名な寺院の混雑ぶり、ピクニック、昼夜分たぬ水の行列、消えることのない色提灯の明かり、風情のある不調和、変化や変動、動きの多さ、間断のない勤勉さ、卑屈でもなければでしゃばりでもない物腰に表れる、すべての階層が享受している個人の自立と自由、小さな家と人形のような女性たち」などおもしろさを無尽蔵に秘めていると記している。東京の住居についての記述には、モースの「ほこりっぽくて、そうぞうしい表通りから、一步このひなびた庭にはいると、そこには、静かな田園生活の喜びがある。これは、わたしたち外国人にとって、まことにおどろくべき様子である」や、タウトの「東京の郊外には、或る公益団体（同潤会）が二千五百円で建てた瀟洒な分譲住宅がある。（中略）それでも四間はある、そのうちの一つは洋間で西洋風の窓や戸を取りつけ、床は板張りだし、そのうえ気持のいい庭までついている」のように、大都会の喧騒から離れた居住空間があり、好意的に捉えている様子がうかがえる。

表 2-19 清潔さについての記述 (抜粋)

清潔さ
家は清潔で木の床は磨き込まれ、周囲は綺麗に掃き清められている。『日本その日その日』P42
部屋は綺麗に取片付けられている、畳は清潔である。『日本その日その日』P45
これは私が初めて見る個人の住宅で、他の家々よりも（若しそんなことが可能でありとすれば）もっとさっぱりして、もっと清潔であった。『日本その日その日』P157
というも、日本の家は非常に清潔なので、履き物についたほんのわずかな泥や埃によっても、部屋が汚れて台無しになってしまうからである。すべての部屋の床が、柔らかい畳敷きになっており、その上に座って食事をとり、眠るのだ。したがって畳は、いつでも非の打ちどころがない状態に保たねばならず、小綺麗な部屋にブーツのまま上がる西洋人の訪問は日本人にとって不快なものなのだ。『明治日本散策』P87
日本の家具には、座するための椅子は含まれていない。住居に入る前に靴を脱ぎ、床の至る所に敷き詰められた、汚れ一つなく清潔な莫塵（畳）の上にしゃがむのが習わしである。『明治日本写生帖』P58
座敷は小ぎれいで、広々としている。『日本の面影』P178
床はどこもかしこも例のお決まりの厚みのある白ゴザ〔畳のことは以下畳と訳す〕が敷かれていて、これは皇宮だろうが寺院だろうが、町人や貧乏人の家だろうが、同じように簡素で行き届いた、清潔なものを目にすることができる。家具はいっさいなく、そうしたものは日本では見かけないか、あってもわずかである。したがって御殿はすっきり空っぽである。『日本秋景』P25-26
二カ所ある縁側はよく磨き込まれており、それは玄関や私の部屋に通じる階段も同様で、畳はとても上質で白く、ブーツを脱いでストッキングだけとなった足でさえ、歩くのがためらわれるほどでした。磨き込まれた階段を上ると美しい景色の望めるピカピカに磨き込まれた広縁があり、そこから広い部屋に入ります。(中略) 階下には同じように美しい部屋がひとつと広いスペースがあり、家事は全てそこで行われます。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P141-144
厚くて清潔な、弾力性のある畳が、どんなにすてきでも、私の体がある上での生活を好んでいるなどは考えないでほしい。それは大間違いだ。関節はこわばってくるし、骨はあまりにも長すぎるし、一日に10回も靴を脱いだり、はいたりに、まるで私は年寄の「こうのとりの」ようだ。『日本絵日記』P128-129
京都から車で行きますと、三時間ぐらいで松源院に到着します。禅僧姿のトラーさんが門まで迎えに来て、広い清潔な畳の座敷でお茶を飲ませてくれます。それから大亀老師が建て直した古い民家の内部などを案内してくれます。『美しき日本の残像』P222-223

表 2-20 東京 / 街並み・建物・住居についての記述 (抜粋)

東京/街並み・建物・住居
ほこりっぽくて、そうぞうしい表通りから、一步このひなびた庭にはいると、そこには、静かな田園生活の喜びがある。これは、わたしたち外国人にとって、まことにおどろくべき様子である。『日本のすまい・内と外』P87
町全体が見える場所はひとつもなく満足な全景を得ようとするなら、気球に乗るしかなさそうである！『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P213
城について最も東京らしい特徴といえば、旧大名の屋敷であったこれらの「江戸屋敷」で、その大多数は城の堀の内側にあり、また町の北と南の区域に散らばっている。政府省庁の建物となっているのに関わらず、外側の建物の通りに面した部分はぎまぎと静かで単調で、ねずみの巣くつていそうな様相を呈しており、厳めしくて壮麗なところがない。どれも同じ様式の建物で、慣例による規制を受けているのであまり変わり映えがしない。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P218-219
全般的に東京の通りは薄っぺらで、趣に欠け、朽ちやすく、そこを往来する雑踏はべつにして、妙に印象に残らないのである。歩道はないもの、車道がみごとにきれいなので、歩道が恋しくなることはない。屋外がきれいなのはこの都の特徴である。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P225-226
アングロサクソン系アメリカの建築は、東京では日に日に定着しつつあり、地方の県庁所在地で複製されつつあるが、これは日本家屋の寒さや不便さにアメリカの三流郊外住宅の醜さや不便さを合体させたものである。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P231
東京の街の生活はおもしろさを無尽蔵に秘めている。中間層・下層民は戸外ですぐすのが好きな傾向があるので、その暮らしぶりがよく見え、興味深い点をいくつも提供してくれる。小売店の日常、運河の日常、子供の日常、車上から見た東京、傘をさした日の東京、雑踏といつも変わらぬその穏やかな気色や行儀のよいふるまい、花見、祝日、行列のある祭り、にこやかな葬式、有名な寺院の混雑ぶり、ピクニック、昼夜分たぬ水の行列、消えることのない色提灯の明かり、風情のある不調和、変化や変動、動きの多さ、間断のない勤勉さ、卑屈でもなければしゃべりでもない物腰に表れる、すべての階層が享受している個人の自立と自由、小さな家と人形のような女性たち、どこをとっても三〇〇年以上の歴史はない都に入り交じった新しさと古さ。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P244-245
初めて目に入る東京の風景は、横浜の最初の風景と同様、旅行者がっかりさせます。道路の大部分に、外国を手本にした月並の建物、緑石、緑陰が並んでいます。その道を鉄道馬車がブーブ音を響かせ、軽乗合馬車がガラガラ走るの、街の風景をかなり不調和にしています。これは観光客の夢見た大江戸ではなく、まして東洋の大都会でもありません。漆喰壁、木造円柱、ぎらつく店の飾り窓、けばけばしい模造品の山、この有様に観光客はすっかり面喰らいます。『シドモア日本紀行』P75
薄い畳敷の小さい木造家屋は、いつでも発火準備オーケーです。ランプが壊れたり、金火鉢が転倒したり、火花が散ったりするとすぐ炎に包まれ、火の粉は屋根から屋根へ飛び移り、最後に街区全体が燃え上がります。焼け出された地区は、再建されるたびに道路が広がり、絵のような美観を削り取ることで防火対策となり、財産防護の手段となります。ともあれ、耐火政策とは、広く大きな道に面した建物に可燃性のペンキの塗装を禁じ、一列に低い建物を並ばせ、単調で面白みにかけた近代的日本都市を作り上げることなのです！『シドモア日本紀行』P95
私達が東京で誰かを訪問しようとする。場所はどこかの広い住宅地域である。タクシーの運転手は助手に手伝わせて二三次或はもっとたびたび警官に訊ねたあげく、目指す家のありそうな辺をなんとかうまく探しあてて。若い助手は帽子をぬいで、赤電球のついた交番へ行き恭しく腰をかがめそれから何度も丁寧にお辞儀しながら全能の国家権力の象徴から御指示をうける。車を近くの狭い路地へ乗りいれて差支えないことになつたらしい、ここにはもう通りのように商店が立ち並んでいない。そこで私達は車を降りる。この路地には高い板塀やトタン塀或は石塀があるだけで、そのうしろに家々の高い屋根が見える。道の両側には石で築いた下水溝がある。道幅は三メートルそこそこで、舗装もせずに砂利だけ敷いてある。助手は慇懃に私達を、最初の路地よりもっと狭い路地へ案内してくれる(ここへ来ると便所の臭気はますますひどくなる)。彼は懐中電灯をたよりに何軒かの門札を読んでしたが、とうとうある一軒で玄関のベルを鳴らし、出てきた女中さんに訊ねてみる。調子がよければ私達の訪ねる家はこの近くにある。しかし車でさっきの交番まで戻りまたもや恭しくお辞儀をして新しい指示に従い、今度は大丈夫らしい方向に進むということもある。尤も非常に間がよければ、国家の尊厳のいかめしい象徴にべこべこしくなくても、車がもっと広い道路に面している私達の友人の家の前へすぐ横づけになるとか、またほんの数歩あるけば目的の家に着くという場合もある。『日本の家屋と生活』P210
東京の郊外には、或る公益団体(同潤会)が二千五百円で建てた瀟洒な分譲住宅がある。(中略)それでも四間はあり、そのうちの一つは洋間で西洋風の窓や戸を取りつけ、床は板張りだし、そのうえ気持ちのいい庭までついている。『日本の家屋と生活』P289
外から見た大都市は醜く喧騒で匪賊だ。しかし、その内側には、すばらしくゆかしい古い生活をひそめている。そして、田舎は都市と比較にならないほど美しい。旅で、信じられぬほど我慢強い畑地と農夫たち、ひたむきな愛情と労苦に色取られた激しい手仕事に出会い、私は驚嘆する。『日本絵日記』P94
冬の寒さや夏の暑さについてしばしば不平をもらさないわけではないが、さらに、日本人はこうした四季それぞれに特有な属性を体験することを楽しむ。ニューヨークのアパートと違って、東京の家々には苛酷な季節に対する防禦策がほとんどどこもできていないが、その結果、厳しい冬の後に訪れる最初の暖かい春の日は、人々により真正な喜びをもたらす。日本人は四季を認識するばかりか、四季に応答する。『果てしなく美しい日本』P95
全体的に日本のオフィスも家も物で溢れています。きつと昔からそうだったのでしょう。四国の古い茅葺の民家も、東京の最新のマンションも、雑多なもので溢れ、それは日本人の生活パターンになっているようです。僕の考えでは「茶室」はそれによって生まれたのだと思います。室町の茶人はごみごみした生活に飽きて、何も置かれていない簡素な茶室を作ったのではないか。「雑」と「簡素」という両極端の空間が日本文化にあります、ビジネスには中間である「整理した空間」が必要だと思います。その整理した空間がなかなかできないらしい。『美しき日本の残像』P169

2-4-15. 京都 / 街並み・建物・住居 (表 2-21)

京都の街並みについて、モースは「京都は確かに芸術的日本の芸術的中心である。いたる所で人はその証拠を見る—商店、住宅、垣根、屋根の上、窓、襖、それを迂らせる装置、格子、露台の手摺。看板さえも趣味を以て考案され、芸術と上品さとがいたる所にある」と述べている。タウトも「いたるところの街路に(住宅地域の道路は別として)日本風の商店が数限りなくつづいている様は驚くばかりであり、これこそ私達ヨーロッパ人が日本から受ける最も強烈な印象であると言っていい」と述べており、明治以降、急速に西洋化が進んだ東京とは異なり、開国前の日本の街並みを維持している京都の街の様子を記述している。多くの外国人が滞在した「山の中腹高くに位置し、全市を見下ろす」(モース)也阿弥ホテルからの眺めをロチは「四方を囲む高い山々は、松や竹の林になっており、見事な緑の色合いをかもし出している。一見すると、ほとんどヨーロッパの街のようだ。暗灰色の瓦をのせた何千もの小さな屋根は、フランスの北部地方のスレート葺きの屋根さながらだ。この暗ぼったいものが層をなす中を、まっすぐな道路が縦横に走り、それが明るい線を描いている。思わず教会や鐘楼を探してしまう。いやしかし、そんなものは見当たらない。それどころか、堂々たる高い屋根、あまりに大きく奇妙に反りかえった屋根屋根が、見なれない変わったアクセントをなしている」と描いている。

京都の住居については、タウトが「京都では東京と異なり、住宅が道路にじかに接し、土間が奥行の深い家のなかを貫いている」と、間口が狭く奥行きの深い京都の居住空間の特徴を捉えている。

2-4-16. 日本の旅館 (表 2-22)

「旅館、とくに地方の旅館には、たいへんおちついた、きもちのよい雰囲気がある」というのは、モースの旅館についての記述である。同様に良い評価としては、ロチの「すべてにわたって、下卑たところ、がさつなところがいっさいない。そもそも日本にはそうしたものがないのである。どんなささいな物でも、風変わりではあっても、かならず品のよさがある」が挙げられる。関東から信越を抜けて東北へと旅したバードは、時折「ひどい宿屋」に宿泊することもあり、「プライバシーは思い出すことも御法度の贅沢品でした」と述べているが、宿泊を重ねるうちに「これまでほどこに行っても、快適にすごしてもらいたいという心頭る思いやりがありましたし、日本人ですら足を踏み入れない一般コースをはずれた小さくて素朴な村落に泊まること多いことを考えると、宿泊設備は、蚤と臭気をのぞけば、驚くほどすばらしく、世界のどの国へ行っても、同じように辺鄙なところで同等の宿泊設備は得られないと考えるべきでしょう」と、日本の旅館の質の高さについて述べている。

表2-21 京都/街並み・建物・住居についての記述(抜粋)

京都/街並み・建物・住居
京都の真趣は、広い住宅地域やそのあたりの極めて簡素な住宅、門、庭及びこれらのものに付属するあらゆる些細な箇所ばかりでなく、商店の店構えなど、およそ日本的なものなかに如実に生きているのである。『日本の家屋と生活』P86
京都では東京と異なり、住宅が道路にじかに接し、土間が奥行の深い家のなかを貫いている。(中略) 実際、通りから家の外観を見ただけでは、これが有名な工房であるとか、或はここに工房があるということさえまったく知る術がないのである。『日本の家屋と生活』P220-221
例の土間を通して台所をめぐる、台所は梁を見せた細長い広間である。(中略) ただ日本人は、冬でも外で仕事をするを好むところから、それが多少の変化を与えるくらいのものである。『日本の家屋と生活』P221-222
いたるところの街路に(住宅地域の道路は別として)日本風の商店が数限りなくつづいている様は驚くばかりであり、これこそ私達ヨーロッパ人が日本から受ける最も強烈な印象であると言っている。 多種多様な照明、大方は真赤な地に文字を白ぬきにした広告の旗の華やかさ、店先に張った日除け雨避け用の天幕、また店全体は道路に向けて開放されているので、奥の居間までまる見えであるまことに東洋的な光景だ、しかし一般に東洋特有と見なされている不潔さは微塵もなく、むしろ装飾があくどい安物であることさえまったく忘れさせるくらいである。それどころか町内の商店が連合して広告するような折に、色とりどりの幕が狭い通りの上に張り渡され、びかびかした垂れ飾りなどがつるされること、それが陽光をうけてきらびやかに輝き、町全体のえも言われぬ美観はひとしおであるこれこそ日本の民衆のうちに今なお撥刺と生きている芸術的精神が、いかにも心楽しいモチーフによって創り出した無限の変化を表現する所産である。こういうものについても京都は優雅と洗練との極致に達している。とはいえ地方の町で、年末年始に松や竹を売出しの店頭装飾に添えたり、また正月には松竹だけを注連縄でつなぎこれに提灯を配したりする様は、今でも諸他の国々にとって無比の模範である、かかる光景はとうてい写真で示し得るものではない。これこそまだ西洋が発見していない日本である……。『日本の家屋と生活』P224-225
わたしの滞在先はアメリカ式の女子ミッション・スクール[同志社女学校]で、障子の代わりにガラス戸の入ったとても大きな準和風の建物なのですが、雨戸がないためとても寒い。塀に囲まれたある公家屋敷の広い敷地に建っており、うしろには寺院があって、昼も夜も数多い寺院の甘美な鐘の音が快い時をすごさせてくれます。『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P276
琵琶湖から流れてきている宇治川という広い川を長い立派な橋を渡り、小さくてきれいな町宇治まで来ました。宇治には広くて流れの速い川に迫り出した日本で最もすてきな茶屋が何軒かあります。庭や縁や泉水、石灯笼など古風で趣のあるものがすっかりそろっており、それがまたここにはぴったりと調和するのです。こういった茶屋はよく日本の美術品の題材となります。理想的な茶屋の写真でも見るようなことがあったら、それはきっと宇治にある茶屋です。わたしたちはそんな茶屋のひとつのなんともしずかしい二階の部屋でお昼をとりましたが、宇治川が琵琶湖からそのあいだを流れてくるロマンティックな峡谷が眺められ、また部屋が面しているミニチュアのような庭は真っ赤な紅葉が明るさを放っていました。なにもかもが理想的で、わたしは自分たちががさつな現実の存在のようで場違いな気がしました!『イザベラ・バードの日本紀行(下)』P309-310
この高みにある陳列室からは、まるで空を飛んでいるかのように、まっ平らな土地にアリのように人がひしめき合っている広大な街が一望できる。四方を囲む高い山々は、松や竹の林になっており、見事な緑の色合いをかもし出している。一見すると、ほとんどヨーロッパの街のようだ。暗灰色の瓦をのせた何千もの小さな屋根は、フランスの北部地方のスレート葺きの屋根さながらだ。この暗ぼったいものが層をなす中を、まっすぐな道路が縦横に走り、それが明るい線を描いている。思わず教会や鐘楼を探してしまう。いやしかし、そんなものは見当たらない。それどころか、堂々たる高い屋根、あまりに大きく奇妙に反りかえった屋根屋根が、見なれない変わったアクセントをなしている。『日本秋景』P17
二時三十分我々は出発し、山間の谿谷の最も景色のよい所を登って、こども伊勢の国の、山に囲まれた坂下に着いた、我々はこの夜を送り、翌朝は人力車一台に車夫二人ずつをつけて速く進み、二時半大津着、四時半京都に着いた。即座に我々は山の中腹高くに位置し、全市を見下ろす也阿弥ホテルへと車を走らせた。このホテルは日本風ではあるが、西洋風に経営されていて、それ迄の、各様な日本食の後をうけて、半焼のピフテキ、焼馬鈴薯、それからよい珈琲は、誠に美味であった。我々のいる建物に達するには、長い坂と石段とを登らなくてはならぬが、これが中々楽でない。部屋にはいずれも広い張出縁と、魅力に富んだ周囲とがあり佳良である。私は屋根の一つある、一間きりのちいさな家を占領しているが、張出縁から小さな反り橋がこれに通じ(102図)、灌木の叢が床と同じ高さまで生え繁っている。私の写生帳は襖や格子細工や窓の枠や美しい欄間やで一杯である。それ等の意匠の典雅と美麗とは即席の写生図で示すことは不可能である。薄板施した形板ぎざみは完全で、例えば打ちよせる波は、奇妙な牧羊杖の手法と空中にかかる各々の水滴とで、あくまで月並みではあるが、しかも速写写真が示す波の外見を、そっくり表している。数百哩にわたってこの国を旅行する人が驚かずにいられぬのは、如何に辺鄙な寒村にでも、これ等の仕事を充分やり得る腕を持つ、大工や指物師や意匠家がいることである。『日本その日その日』P268-269
京都は確かに芸術的日本の芸術的中心である。いたる所で人はその証拠を見る—商店、住宅、垣根、屋根の上、窓、襖、それをにらせる装置、格子、露台の手摺。看板さえも趣味を以て考案され、芸術と上品さといがいたる所にある。『日本その日その日』P269-270
ヤアミ[也阿弥楼(東山区円山町)]、この京都の外人向けホテルには、急な段丘状の庭園、小ぶりの松、花咲く百日紅があり、またさまざまな建物が敷地に立ち、外回廊の上をすいすい飛ぶ鳥影が見えたりして、よそでは味わえない魅力ある宿です。この絵のようなホテルの所有者ヤアミは、なかなかの人物です。彼と弟は、ここを経営する以前はプロのガイドとして働き、やがて利発な眼力は、この上ない幸運な事業「京都の宿」に目を付けました。ここで外人客はベッド、椅子、テーブル、ナイフ、フォーク、西洋料理に安心してありつけ、京都の東を塞ぐ丘・円山の傾斜地の途中にある老舗一力茶屋にも心配なく入れます。『シドモアの日本紀行』P280
玄関で案内を乞うと、応接間へ通された。初秋だったためか、床に台湾製の、木目の細かい莫塵が敷いてあり、残暑の厳しい京都だったが、家の中は涼しかった。部屋が美しい庭に面していて、池もあり、数分毎にししおどしがうつろな音を立てていた。風流そのものの家であった。『二つの祖国に生きて』P196-197

表 2-22 日本の旅館についての記述 (抜粋)

日本の旅館
<p>ほどなく、きれいな着物姿で、彼女が再び敷居に顔を出し、おしとやかに、どうぞお上がり下さいませと言って、中へ私たちを迎えてくれた。もちろん私たちは、喜んで部屋に上げさせてもらった。座敷は小ぎれいで、広々としている。床の間の壁には、杵築の神道の掛け物が掛かっており、部屋の一角には、立派な禅宗の仏壇が飾ってある(仏壇の形や位牌や仏具は、宗派によって異なる)。『日本の面影』P179</p>
<p>すべてにわたって、下卑たところ、がさつなところがいっさいない。そもそも日本にはそうしたものが無いのである。どんなささいな物でも、風変わりではあっても、かならず品のよさがある。『日本秋景』P94-96</p>
<p>下方の小部屋に入ると、中は白い湯けむりが立ちこめて、ほんのりと温かかった。半透明の紙でできた四角い囲いに入れられたランプが、ほのかにあたりを照らしている。その紙囲いにはうまでもなくコウモリが二、三匹描かれている。浴場はすべて木製である。壁も腰掛けも、脱衣を行う狭い縁も、また女客たちがすでに飛び込んでいる大浴槽も木で出来ている。白木でおまけに石鹸がついているので、いつ滑るか危なくしてやがたない。たしかに木は清潔だが、人の体が触れるのであまりにツヤツヤしており、黄色い皮膚の獣じみた臭いがする。『日本秋景』P178</p>
<p>旅館、とくに地方の旅館には、たいへんおちついた、きもちのよい雰囲気がある。宿泊者は、旅館のなかで自由にふるまえる。すくなくとも、外国人は旅館のなかのすべての場所ですくなく。ところが、この点で、日本人には無作法な印象をあたえているのではないかと、おもう。というのは、日本人客は、たいへん、じぶんたちのへやにとじこもってしまうのがふつうだからである。『日本のすまい・内と外』P88-89</p>
<p>宿屋はとても大きく、先に60人の客が到着して部屋を選びようがなく、わたしは四方が襖ではなく障子で仕切られた部屋で満足しなければなりません。緑色のかび臭い蚊帳は格好の蚤の巣で、そのしたにはベッドと浴槽と椅子をかううじて置けるだけの広さしかありません。(中略) 障子は穴だらけで、その穴の一つずつからしょっちゅう人間の目がのぞきます。プライバシーは思い出すことすら御法度の贅沢品でした。(中略) 女ひとりて日本を旅行などすべきではないと思いはじめました。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P133-134</p>
<p>きょうのきつい旅も申し分のない宿屋で終わりとなりました。建物のうちも外も美しく、旅の土埃にまみれた人間より妖精にふさわしいところです。襖は鉋をかけた軽い板で位香りがします。畳はほほ白に近く、縁は磨き込んだ松材です。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P166</p>
<p>とても居心地の良い宿屋にいい感じの二階の部屋が見つかり、ここですごした三日間は充分に忙しく、またたいへん楽しいものでした。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P365-366</p>
<p>わたしの宿泊費は(伊藤の分も含めて)一日三シリング未満で、これまでほどこに行っても、快適にすごしてもらいたいという心温まる思いやりがありましたし、日本人ですら足を踏み入れない一般コースをはずれた小さくて素朴な村落に泊まること多いことを考えると、宿泊設備は、蚤と臭気をのぞけば、驚くほどすばらしく、世界のどの国へ行っても、同じように辺鄙なところで同等の宿泊設備は得られないと考えるべきでしょう。『イザベラ・バードの日本紀行(上)』P426-427</p>
<p>大きな敷物のある部屋、つまり玄関前のスペースは一度に事務所、ホール、ポーチ、食器室、貯蔵庫として使われます。片側には炭火の入った小さな石火鉢の列が並び、広い石畳の台所は、いつも何か蒸気を上げパチパチ音がし、コック長、コック助手、快活で愛らしいメイドが周囲でおしゃべりしています。メイドたちは邪魔な袖を紐でび、井戸から水を汲み揚げ、変化に富む日本料理を晚餐用の盆に盛りつけてゆきます。日本の宿には共同食堂はなく、食事の時間も決まっています。客は昼でも夜でも、随時バーンと手を打ち食事を注文します。すると盆が部屋に運ばれ、床や膳(高さ約四インチ[一〇センチ]の食卓)に置かれます。御飯は一日か二日分もちこたえるに足る量が炊かれます。御飯は求めに応じて温めたり、給仕後冷たくなった御飯には熱い茶を注いだりします。私たちの食事は、すべてガイドが料理をし、高い専用テーブルに並べ、階段を上り下りし料理を運ぶのを姐さんたちに手伝ってもらいます。事務所に通じる小さな部屋で、二人の少女が宿の主人に届いた地元の新茶を選別していました。彼女たちは床から数インチ高い広いテーブルに座り、端に積まれた薫りのよい葉っぱの山から、片側の漆塗テーブル面にほんの一握り薄く敷き散らします。巧みな指先で彼女たちは、この新茶の広がり先端から最も美しい小さな葉っぱを選び取り別の片側へ滑らせます。かなり大きめに粗く生じた葉っぱを、見ているのが面白いくらいすべて他の方向へ迅速かつ確実に滑らせます。事務所の一角では、メイド二人が宿にある全部の枕に綺麗な袋をかけていました。日本の枕は上部に小さい詰め物を巻いた木箱で、毎日新しい柔らかな白い桑製の紙切れを被せます。『シドモアの日本紀行』P245</p>
<p>ところで、私たちが立ち寄った全ての旅館は、同じ形式で建てられている。最初に厨房があり、奥に、洗練された数々の部屋が庭に面して配置されている。それらの壁には、宗教や歴史的な主題の掛け軸、それに詩的な思想を表した額がよく掛けられている。『明治日本散策』P273</p>
<p>我々は村一番の宿屋に泊まった。道路から古風な建物の幾つかが長く続いて、美しい廊下や、掃き清めた内庭や、変わった灌木や、脊の低い松や、石灯籠や、奇妙な塀や、その他すべてが、如何にも人の心を引きつける。我々はかくの如き建物の最終の部屋一下二間、二回二間である一を選定した。その廊下は殆ど部屋と同じくらい広く、そして張り出した屋根で覆われている。我々はテーブルを廊下に持ち出し、夜は頭の上の桝からぶら下がった、二つの石油洋灯の光で、物を書く。これなどの洋灯は我々を除いては唯一のヨーロッパ、又はアメリカとの接触の形跡である。我々が逢うのは日本人ばかり。新聞紙片、ポスター、シガレットの箱、その他外国の物は一つもない。『日本その日その日』P47</p>
<p>美術館を見てから、名古屋郊外にある八勝館という美しい古いホテルに着いた。ここは私が今まで泊まったどのホテルよりも良い。部屋、庭園。(中略) 部屋は全部で二十あり、一部屋ごとに女中がついている。客は食べたり、寝たり、しゃべったり、歯を磨いたりする以外に自分ですること何もない。社会関係が形成され、藝術が日常のあらゆる行動の中で絶えず現実の役割を果たしていた当時の生活態度、これがこのホテルに体现されているのだ。一茶碗、漆塗の籠に入れられた熱い蒸しタオルの具合。荒い手感触の、あまり釉薬の掛かかっていない石皿に盛られた、カシの葉でくるんだ菓子(菓子)の形と色。襖のいぶし銀箔の上に描いてある花模様。床、格子窓、壁、天井の矩形の空間など。『日本絵日記』P63</p>

2-4-17. 本節のまとめ

本節では、日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目において特徴的な記述内容を、各項目ごとに表 2-4 から表 2-22 に示し、各項目の記述をもとに考察した。以下をもってまとめとする。

・床座生活にまつわる生活様式および習慣

床座生活にまつわる居住空間の特徴として、畳についての記述が多く見られた。また、生活様式として、床座や床に寝ることについて、体験を通して得た感想が述べられている。沓脱習慣についても、新奇性ををもって描かれている。

・居住空間の簡素さ

居住空間に家具等のもがないということが特徴として描かれている。また、柱や壁、天井などの居住空間の素材や造り、色合いの簡素さについても述べられている。室内装飾の簡素さについては、床間の装飾などを例に挙げ、簡素さの中に美しさを見出す日本人の認識を捉えている。

・自然とのつながりおよび向き合い方

日本人の自然とのつながりについて、居住空間の開放性に関する記述や居住空間に庭を設ける・植物を取り入れるといった自然との密接な向き合い方が描かれている。

・部屋の広さ・天井高についての認識

部屋の小ささ・天井高の低さについては多くの人から指摘されている。その一方で、障子などの建具を取り外すことにより、用途に応じて大きな空間を作り出すことのできる可変的な居住空間であることも記されている。

・仕切りとその機能性

仕切りそのものの特徴として、襖や障子の開閉音は静かであるが対照的に木製の雨戸の開閉が騒音のように捉えられていること、また、襖や障子は、定期的に襖紙・障子紙が張り替えられて使用されている様子が描かれている。さらに、床座生活に基づいた身体的寸法で建具の取手が付けられていることも指摘されている。

仕切りとしての機能性について、「視覚的な絶縁しか確保しない」がゆえに音が筒抜けでプライバシーが欠如していること、簾は視覚の絶縁を保ちつつ風を通すことができること、仕切りの開閉により、用途に応じて部屋の大きさを変えられることが記されている。

・快適性にまつわる感覚

温熱環境について、開放的な居住空間の造りを指摘した上で、夏の過ごしやすさ、冬の寒さの厳しさについて述べている。冬の寒さを凌ぐための火鉢、炬燵、行火、懐炉などについても描かれている。

光環境について、障子を通して室内に自然光が入る様子が述べられている。照明に関しては、明治初期にガス灯・電灯が普及している中で、昔ながらの紙の行燈を評価している一方で、昭和期に一般的に使用されていた青白い蛍光灯には否定的な評価が述べられている。

音環境について、紙性の戸で区切られている部屋の造りからプライバシーの脆弱性が指摘されている。

におい環境に関する記述の大多数を占めるのが厠の臭いであり、明治期に多い。畳のいぐさの匂い、部屋に広がる花の匂いについても言及されている。

清潔さについて、床や畳に関する記述が多いが、居住空間そのものが清潔であることも述べられている。

・伝統的な建築要素

伝統的な居住空間の建築要素として、床間や床間装飾の美しさの特徴や茶室の簡素さについて述べられている。

・都市の様子

東京や京都の街並み・建物・住居について、開国後に急速に西洋化の進んだ東京と伝統的な街並みを維持している京都の様子が述べられている。東京および京都の住宅の特徴を捉えた記述もある。

・宿泊施設—旅館

旅館は住居ではないが、日本の居住空間の特徴を併せ持ち、床座生活にまつわる生活様式や習慣、居住空間の簡素さ、仕切りなどの特徴が描かれている。

2-5. 居住空間の認識および住まい方の変化

前節では、日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目について記述内容を踏まえて整理した。本節では、その中でも、時間経過に伴い居住空間の認識や住まい方に変化が見られた記述を整理する。以下の通り、床座生活にまつわる生活様式および習慣について、時間経過に伴う居住空間の認識および住まい方の変化が見られた。

・床座

モースは正座について、以下のように述べている。

「外国人にとって正座は、ひどくつらいもので、なれるには、ずいぶん練習がいる、何年も洋行した日本人にとっても、この習慣をまたはじめるのは、たいへんつらいことである。」『日本のすまい・内と外』P136

しかし、3度目の来日時である1883年1月18日の記述では以下のように、正座について慣れて長時間対応できるようになったことを記している。

「私は日本風に、両足を真下にして坐らねばならなかった。この坐り方は、外国人にとっては、初めの間は、やり切れぬものであるが、今では私は一時間半、すこしも苦痛を覚えずに、坐っていることが出来る。」『日本その日その日』P309

これは、時間経過に伴い、身体的反応も適応していった例であると考えられる。一方、リーチは、畳の素晴らしさは認めつつも、床座については身体的に適応していないことを次のように述べている。

「厚くて清潔な、弾力性のある畳が、どんなにすてきでも、私の体がある上での生活を好んでいるなどは考えないでほしい。それは大間違いだ。関節はこわばってくるし、骨はあまりにも長すぎるし、一日に10回も靴を脱いだり、はいたり、まるで私は年寄の「こうのとりのとり」のようだ。」『日本絵日記』P128-129

時間経過とともに、床座に適応するケースとそうでないケースがあることがうかがえる。

・床で寝る

タウトは、来日初日に床に敷いてもらった布団ではなく持参した毛布を敷いて寝たものの、次のように不慣れであったことを記している。

「私は寝つこうとして横向きになった、しかしそうすると肩のあたりが押しつけられてひどく気持ちがわるく、寝入るなどということは思いもよらない、忌々しいことだ。急に羽根布団なしで眠ろうとするのだからなかなか容易でない。」『日本の家屋と生活』P39

しかし、後に適応していったことを次のように記している。

「私は畳の上に寝ることにはもうすっかり慣れて、柔らかい羽根布団にくるまるよりもはるかに健康的であるとさえ思っている。」『日本の家屋と生活』P96

・沓脱習慣

タウトは、沓脱習慣について、訪日間もない頃は面倒に感じていたようである。

「家のなかでは縁側や廊下でスリッパを用いるが、便所ではそこにある草履とはき換える、しかし畳のうえでは足袋だけである。靴だとぬいだり穿いたり或はスリッパにはき換えたりして万事がひどく面倒だした妙な感じを与えるが、下駄や足袋は日本人にとっては非常に簡便でありかつ自然でもある。」『日本の家屋と生活』P92

しかし、時間経過とともに、靴下や裸足で家の中を歩くことに慣れ、快適さも感じるようになっていく。

「また不思議なことに、家のなかを靴下だけで歩くのがもう今ではまったく自然になり、それどころか靴下もはかずにいる方がもっと自然でかつ快く感じるようになった。そうなると畳は実に素晴らしい、熱くもなければ硬くもない、――昼食後の休息などに私はうちつけに畳のうえへごろりと横になったりする。」『日本の家屋と生活』P105

このように、時間経過に伴う認識の変化が見られたのは、「床座」、「床に寝る」、「沓脱習慣」の3項目であった。すべて身体的対応を伴う認識の変化である。リーチのように畳の価値について評価しているものの身体的に馴染まないケースもあり、誰もが認識を変化させるものとは考えられないが、来日当初に肯定的に受容できなかったことも、時間経過とともに変化するケースが見られたのは、新たな居住空間において、環境との相互作用による順応が生じる可能性を示していると考えられる。

2-6. 本章のまとめ

本章では、明治時代以降現代に至るまでのおよそ150年の間に日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識と住まい方を明らかにすることにより、その捉えられ方の特徴や時間経過に伴う認識の変化を整理することを目的とし、明治から平成にかけて出版された文献を調査対象として、明治以降の日本文化に触れた文化人・知識人のみだ日本の居住空間への認識および住まい方とその時間経過に伴う変容を明らかにした。

調査対象文献22冊から、日本の建築要素や空間の使い方、その評価内容について、記述箇所を抽出し、全文献のデータから同じグループとして捉えられる項目を抽出した上で、項目ごとに記述内容を整理し、日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質や時間経過に伴う認識の変化について明らかにした。

日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目として、主に「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「伝統的な建築要素」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」が挙げられる。なかでも、明治初期に顕著にみられた記述内容としては「快適性にまつわる感覚」のうち「音（騒音・プライバシー）」、「におい（厠臭）」が挙げられる。また、明治初期の文献には紀行・日記が多いことから、東京のみならず京都の「都市の様子」や「宿泊施設として日本の旅館」についての記述も多くみられた。

時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化については、上記項目のうち「床座生活にまつわる生活様式および習慣」に見られた。具体的には、「床座」、「床で寝る」、「沓脱習慣」の中で、身体的対応を伴う適応があることが認められた。

第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査では、現在日本に居住する外国人の日本の居住空間の認識と住まい方について整理し、「居住空間の図式」形成について検討するが、同時に日本に居住する外国人の視点による現在の日本の居住空間の特質を明らかにする。続く第5章では、第3章および第4章で明らかにした現在の日本の居住空間の特質と時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化と、本章で明らかにした明治時代から現代に至るまでの居住空間の特質と時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化とを対照する。

第3章 東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識 —東京在住の外国人を対象とした質問紙調査

3-1. 本章の目的

第3章では、「居住空間の図式」の更新について探る第4章に先立ち、特に日本に居住する外国人が現在の居住空間をどのように捉えているのかを質問紙調査に基づいて論じる。なかでも、「居住空間の図式」形成に関わっていると想定される個人の文化的背景や居住経験に相当する居住年数や居住空間の選択基準と日本の居住空間の認識との関わりを検討する。

3-2. 研究の方法

本章では、外国人の現在の居住空間の認識や住まい方を明らかにすることにより、外国人の日本の居住空間の捉え方を整理する⁷¹。現状の住まい方や行動の特質について幅広く把握するために、質問紙を用いて調査を行う⁷²。質問紙調査では、現在の居住実態（立地、構造、居住年数、住居選択基準、日本での生活様式）、現在の居住空間への認識、日本文化への認識、居住空間の捉え方について尋ねる。過去の居住経験を参照し比較することは、回答者によって居住歴、具体的には居住した住居の数が異なり比較対象を選定することが難しいため質問紙調査では取り扱わず、インタビュー調査に基づいた第4章で扱うこととし、第3章では現在の居住実態、居住空間への認識や居住観に焦点を当てる。また、特定の出身国、年齢、性別に偏らないように、異なる国出身の幅広い世代の男女を調査対象とする⁷³。データ収集方法としては、外国人が多く集まる団体で調査を依頼し、さらにデータ数が必要だと判断した場合、機縁法⁷⁴を用いて対象者を加える。

本節に続く第3節では、調査の概要、調査の方法について述べる。また、アンケート調査結果を基に調査対象者の基本属性を把握する。

第4節では、現在の居住の実態を捉えるために、居住空間の周辺環境や建物の概要、居住空間で過ごす時間数や時間帯、居住空間を選択した基準について明らかにする。

第5節では、居住空間についての認識を捉える。居住空間への興味や関心を抽出した上で、現在の居住空

71 第3章・第4章の質問紙・インタビュー調査では調査対象者が東京在住であるため厳密には移住した外国人の「東京の居住空間」の捉え方となるが、本研究では東京という大都市の特殊性を描くことを主眼としておらず、「日本の居住空間」という表現で統一する。

72 本調査は東京工業大学「人を対象とする倫理審査委員会」の承認、および東京工業大学長の許可を受けている（許可番号：2022258）。

73 本研究では調査対象者の個人の居住空間の認識を研究範囲とし、同居者の有無、同居者の居住空間の認識については直接取り扱わない。

74 桜井篤, インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方, せりか書房, 2002

間について、住居を構成する基本的な建築空間要素（広さ、天井高、窓の大きさ、壁や天井の色）、日本の建築空間要素（転移空間、接続空間、間仕切り、押入れ、畳）についての評価を明らかにする。居住空間にある特徴的な日本の空間要素として、参考文献に基づき以下の5種を取り上げる^{75 76}。外部空間と内部空間をつなぐ転移空間（玄関、ベランダ、土間、縁側等）⁷⁷と、内部空間である室と室をつなぐ接続空間（廊下等）が挙げられる。接続空間は正確には伝統的な日本の空間要素ではなく明治時代の中廊下住宅の出現により発展したもののだが、現代日本の住宅によく見られることから採用する^{78 79}。一方、一般的な居住空間に備わっているドア、収納、床に対応する日本の建築要素として間仕切り（障子、入違い戸等）、押入れ、畳がある。更に、日本の建築空間要素に関連した家具や習慣についての評価も把握する。転移空間と間仕切りに連なるものとして、沓脱習慣、可動式家具を、また、地域や国によって配置が異なることから、浴室の構成（浴室、洗面、トイレの配置）についても取り上げる。また、居住空間での快適さ・心地よさについて、状況や場所、物に即して捉えることで、居住空間をくつろぎの場としてどのように住みこなしているのかを明らかにする。ここで論じる居住空間の認識については、居住空間を構成する物理量を直接関連づけて検討するものではなく、調査対象者が彼ら彼女らの文化的背景や居住経験に基づいて居住空間をどのように捉えているかという点について着目している⁸⁰。

第6節では、居住の実態と居住空間の認識の関係として、居住年数と広さの評価、住居選択基準と広さの評価、さらに日光の有無や部屋の方角、開放感の評価との関わりを考察する。

第7節では、本章で得られた結果を総括する。

75 Shigeru Uchida, Interior to Nihonjin, Shobun sha, 2000(in Japanese) 内田繁, インテリアと日本人, 晶文社, 2000

76 中川武, 日本の家—空間・記憶・言葉, TOTO 出版, 2002

77 Koji Yagi, A Japanese Touch for Your Home Perfect, Kodansha International, 1992

78 廊下等の接続空間は、日本的な建築空間要素として分類されるものではないが、1960年代以降、分譲集合住宅の一般的な形式となった個室分離型や、戸建住宅で一般的な中廊下住宅を参考にした。

79 青木正夫・岡俊江・鈴木義弘, 中廊下の住宅, 住まいの図書館出版局, 2009

80 本章では現在の居住空間の認識のみ取り扱うが、第4章にて調査対象者の文化的背景、居住経験についてインタビュー調査を通して明らかにする。

3-3. 調査の概要

3-3-1. 調査の方法

質問紙調査は、東京都内 A 区の国際交流団体が運営する日本語教室へ通う外国人及びその知人（外国人）を含む 30 名を対象とした⁸¹。調査期間は 2019 年 9 月から 11 月である。質問紙は 16 頁で構成される紙媒体の形式で、日本語と英語を併記し、どちらの言語でも回答可能とした^{82 83}。調査対象者の出身国は様々であり、彼らの母語も多岐に渡る。本研究では、世界でも話者の一番多い英語⁸⁴及び現在習得中の日本語を併記した質問紙で調査したが、調査対象者の言語運用能力の問題から鑑みると、母語で回答した場合と比較し限定された回答内容となる可能性はある。英語が母語の調査対象者は 30 名中 4 名（英国 1 名、米国 2 名、豪州 1 名）であるが、英語が母語でない 26 名と比較して、記述回答（図 3-25, 図 3-26, 図 3-27）における文章数、記述内容の項目数について差異はみられなかった。回答方法は、選択回答法、評定尺度法、自由記述法で構成した。具体的には、現在の居住実態については、選択回答法と自由記述法、現在の居住環境の認識については、評定尺度法、選択回答法、自由記述法、居住空間の快適さに関する項目については、自由記述法で質問を設定した。回答に時間を要するため、日本語教室の授業後に調査用紙を配布し自宅等で回答、翌週の授業時に提出という手続きとした⁸⁵。

81 その知人（外国人）とは、日本語教室へ通う調査対象者からの紹介で調査をお願いした方である。

82 英語での回答者は 20 名、日本語での回答者は 8 名である。両言語混合での回答者は 2 名である。本稿では、英語でのデータを日本語に翻訳している。

83 質問紙は巻末資料編に付す。

84 What is the most spoken language?, Ethnologue (<https://www.ethnologue.com/insights/most-spoken-language/>)(2023 年 2 月 28 日参照)

85 日本語教室以外の調査対象者は個別対応とした。疑問点は、回収時及び調査票記載の連絡先への問い合わせで対応した。

3-3-2. 調査対象者の属性

調査対象者の基本属性を図3-1にまとめる。年齢は、20代から70代までで、中間層にあたる40代が11名で全体の37%に当たり最多を占める。性別は、男女比がほぼ同数である。出身地域は、アジア地域の出身者が半数を占めるものの、ヨーロッパ、アメリカ（北米/南米）、オセアニア出身者もあり、アフリカを除く五大州地域からの出身者で構成される⁸⁶。日本での居住年数は、移住間もない1年以内、ある程度慣れてきた1年以上3年未満、3年以上の長期在住者で整理したところ、居住年数1年以内が12名（40%）、1年以上3年以内が9名（30%）、3年以上が9名（30%）であった。現在の居住地は、調査地が東京23区内であることから東京在住者が9割を占めている。概ね、特定の出身国、年齢、性別に偏らず、居住年数も特定の期間に偏らない調査対象者であることがうかがえる。

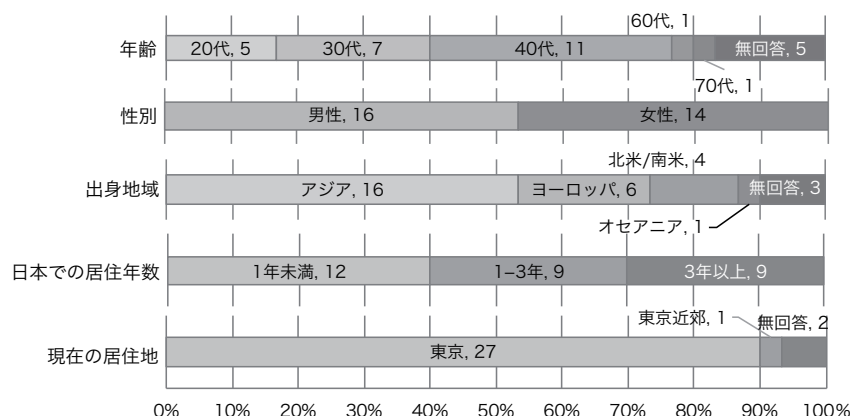


図3-1 アンケート調査対象者の基本属性 (n=30) (人)

86 国際連合の世界地理区分による分類に拠る。https://unstats.un.org/unsd/methodology/m49/ (2022年12月9日参照)

3-4. 居住実態の概略

3-4-1. 居住空間の概要

居住実態の概要を図3-2に示す。居住地域は、住宅街が一番多く18名で全体の6割であり、繁華街が6名、オフィス街が1名と続く。自宅から最寄り駅までの距離について、近いと感じている人は27名で9割に上り、その所要時間については10分以内である人が22名と多い。居住形態は集合住宅が8割を超え、部屋数は1-3部屋が一番多い。戸建ての場合(n=5)、庭の有無について大きな偏りは見られなかった。集合住宅の場合(n=25)、居住建物の階数については、低中層(1-5階)が11名(44%)、中高層(6-10階)が7名(28%)、高層階(11階以上)が4名(16%)であったが、実際の居住階は1-5階の低中層が16名(64%)で半数以上を占めている。家の構法は、木造が3名、木造以外が25名で多数を占めている。築年数は、5年以内が6名(20%)、6-10年が7名(23%)、11年以上が12名(40%)で、築浅よりある程度築年数の経っている建物が多い。

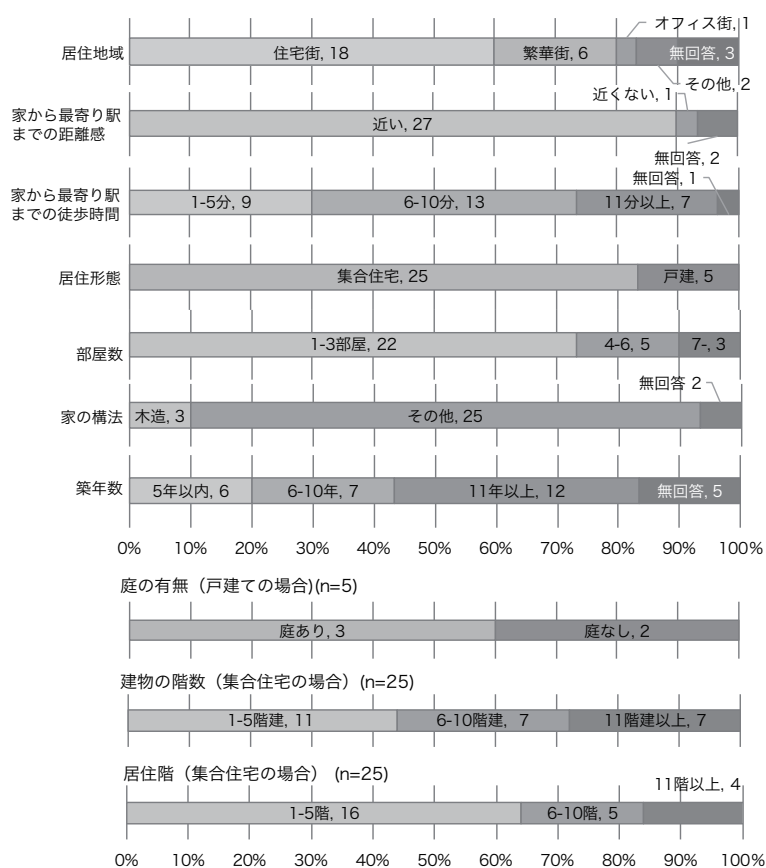


図3-2 居住実態の概要 (n=30) (人)

3-4-3. 住居の選択基準

住居の選択基準について、自由記述で得た回答から住居選択の基準となる項目を抽出し、得られた30項目を4つの大項目として整理し、6つの選択基準のタイプに分類した。詳細は表3-3の通りである⁸⁷。住居選択基準の大項目は、予算(B)、周辺環境(SE) (治安、アクセス、近隣の雰囲気・印象)、建物と空間(BS) (物理的環境、空間の雰囲気・印象)、選択権なし(N)である。回答者の選択基準はこの4項目の組み合わせで構成されており、それを整理したものが図3-3に示す選択基準の組み合わせ6タイプである。各6タイプに含まれる選択基準の詳細を表3-4に示す。社宅や寮など選択権のない場合(N)を除き、予算(B)、周辺環境(SE)、建物と空間(BS)の項目単体または組み合わせによって選択基準は構成されており、予算や周辺環境に重点を置く人がいる一方で、建物や空間に多く関心を寄せている人、選択基準としてすべての項目を網羅している人がいることがわかる。

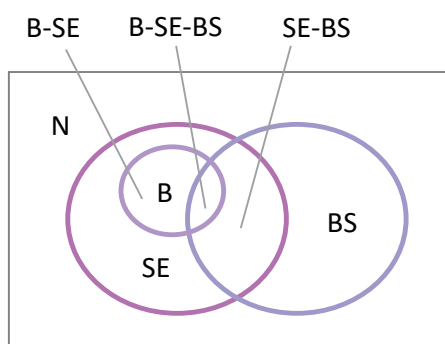


図 3-3 住居選択基準ダイアグラム

表 3-4 住居選択基準項目の分類

予算 (B)	予算	-
周辺環境 (SE)	治安 アクセス	近隣の雰囲気・印象 (心地よさ・静けさ)
建物/空間 (BS)	物理的環境 (居住形態、間取り、 耐震構造、他)	空間の雰囲気・印象 (清潔さ、快適さ 眺め、他)

87 ここでの「広さ」「天井高」は、物理量に依拠せず、回答者の実感として得た感覚である。

表3-3 住居の選択基準 (n=30) (人)

調査対象者	選択権なし (N)	予算 (B)	周辺環境 (SE)				建物・空間 (BS)										選択基準タイプ					
			治安	利便性	買い物	アクセス	近隣の雰囲気・印象	物理的環境	空間の雰囲気・印象	快適さ												
			治安	利便性	買い物	アクセス	近隣の雰囲気・印象	物理的環境	空間の雰囲気・印象	快適さ	清潔さ	新しさ	眺め	広さ	天井高	明るさ	日光	空間を感じる	開放感	快適さ		
2	○																					
3	○																					
14	○																					
17	○																					
23	○																					
4		○					○															
8		○					○															
27		○					○															
1		○					○															
5		○					○															
6		○					○															
20		○					○															
28		○					○															
29		○					○															
7		○					○															
13		○					○															
16		○					○															
18		○					○															
10		○					○															
11		○					○															
15		○					○															
22		○					○															
25		○					○															
26		○					○															
30		○					○															
9																						
19																						
21																						
24																						
12																						

3-5. 居住空間の認識

3-5-1. 居住空間への興味・関心

居住空間の認識に関連して、居住空間への興味について尋ねた。興味があると回答した人は全体の8割を超える25名であった。一方、部屋の向く方角や居住空間に日光が入るか否かは、両項目ともに「気にする」「気にしない」がほぼ半数となった。詳細は図3-4の通りである。

居住空間への興味の有無と部屋の方角および日光の捉え方についての回答をクロス集計したところ、表3-5、表3-6の結果となった。居住空間に興味があると回答した人(n=25)で、部屋の方角を気にする人が11名(44%)、気にしない人が14名(56%)、日光が入るかどうかに気にする人が15名(60%)、気にしない人が10名(40%)であった。さらに、部屋の方角を気にする/しないと日光が入るかどうかに気にする/しないという2項目をクロス集計したところ、「方角を気にする・日光を気にする」が14名中10名(71%)、「方角を気にする・日光を気にしない」が14名中4名(29%)で、「方角を気にしない・日光を気にする」が16名中6名(37.5%)、「方角を気にしない・日光を気にしない」が16名中10名(62.5%)であった(表3-7)。居住空間への興味の有無とは異なり、「部屋の方角を気にする」と「日光が入るかどうかに気にする」という2つの観点には関連性があることがうかがえる。この点については第6節の考察で分析・検討する。

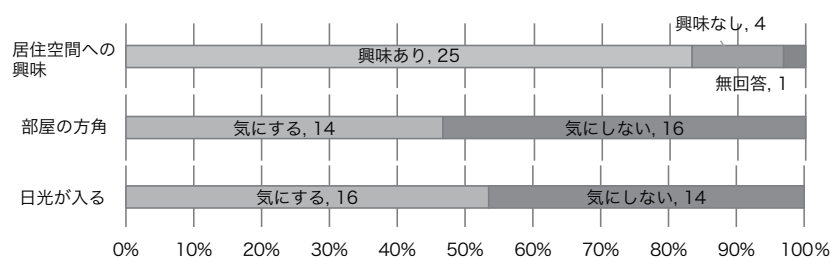


図3-4 居住空間への興味・関心 (n=30)(人)

表 3-5. 居住空間への興味と部屋の方角の評価 (n=30)(人)

	部屋の方角 気にする	部屋の方角 気にしない	総計
居住空間 興味あり	11	14	25
居住空間 興味なし	2	2	4
無回答	1	0	1
総計	14	16	30

表 3-6. 居住空間への興味と日光の評価 (n=30)(人)

	日光 気にする	日光 気にしない	総計
居住空間 興味あり	15	10	25
居住空間 興味なし	1	3	4
無回答	0	1	1
総計	16	14	30

表 3-7 部屋の方角の評価と日光の評価 (n=30)(人)

	日光 気にする	日光 気にしない	総計
部屋の方角 気にする	10	4	14
部屋の方角 気にしない	6	10	16
総計	16	14	30

3-5-2. 居住空間の基本的な建築空間要素に対する評価

居住空間の基本的な建築空間要素である「部屋の広さ」「天井の高さ」「窓の大きさ」について尺位評定法の5段階の尺度でどのように評価しているかを尋ねた。結果は図3-5の通りである。

部屋の広さについては、「狭い」「少し狭い」が計14名(47%)で、「ちょうどいい」が12名(40%)、「少し広い」(10%)、「広い」が1名(3%)である。「狭い」「少し狭い」と捉えている人が「ちょうどいい」と感じている人を上回っている。

天井高については「ちょうどいい」が22名(73.3%)で、「少し高い」が4名(13.3%)、「少し低い」「低い」が計4名(13.3%)である。天井高がちょうどいい高さで捉えている人が7割を占める。

窓の大きさについては、「ちょうどいい」が15名(50%)、「少し大きい」「大きい」が計10名(33.3%)、「小さい」「少し小さい」が計5名(16.7%)で、「ちょうどいい」と捉えている人が半数である。

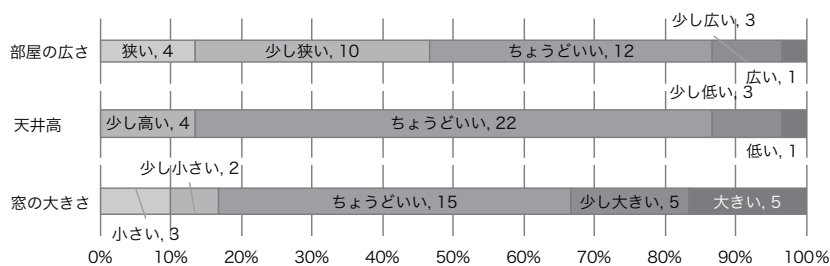


図3-5 居住空間の基本的な建築空間要素の評価 (n=30)(人)

部屋の広さに関連して、現在の居住空間を開放的と感じている人が18名で、開放的でないと感じている人が12名であった(図3-6)。その理由を回答別にまとめたものが、図3-7と図3-8である。開放的と感じる理由として「光が入る」「明るい」「窓が多い」と光に関連した項目が数多く挙げられている。一方、開放的でないと感じる理由としては「部屋が狭い」「景色がない」という空間や奥行きに関連した項目が複数挙げられている。

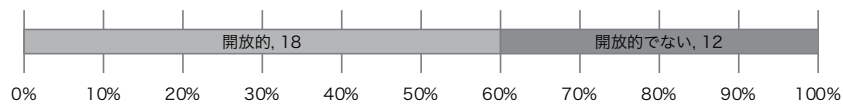


図3-6 居住空間を開放的に感じる / 感じない (n=30)(人)



図3-7 開放的と感じる理由 (n=18,自由記述、複数回答可)(人)



図3-8 開放的でないと感じる理由 (n=12,自由記述、複数回答可)(人)

窓の大きさに関連して、窓から景色をよく眺めるかどうかについては、「眺める」が21名で(図3-9)、その中で窓から眺めることが「大切」答えた人が19名であり(図3-10)、大切である理由としては、窓からの景色、自然や街を眺めることが好き/楽しみであるとの回答が一番多かった(図3-11)。

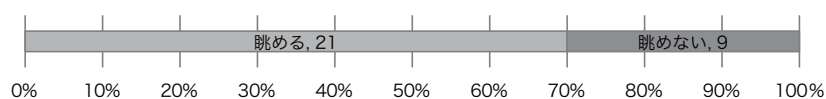


図3-9 窓からの景色をよく眺める / 眺めない (n=30)(人)

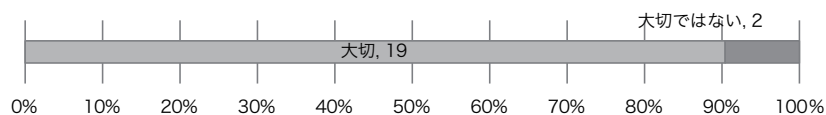


図3-10 窓からの景色を眺めることは大切か (n=21)(人)

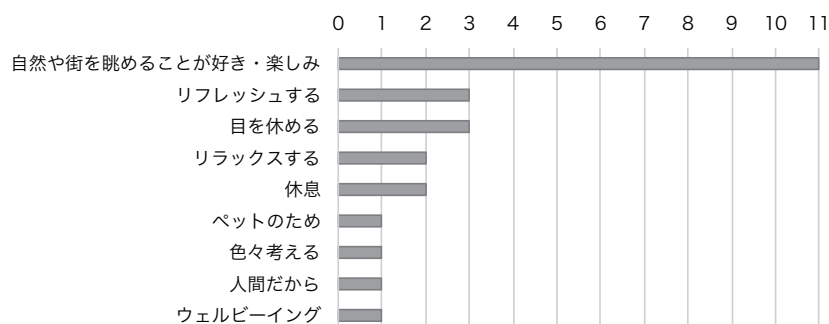


図3-11 窓からの景色を眺めることが大切な理由 (n=19, 自由記述、複数回答可)(人)

天井や壁の色については、現在の色に加え、その色についてどのように捉えているかを自由記述で回答を得た。詳細は図3-12、図3-13の通りである。天井や壁の色は白が6割を超え（19名）、ベージュが4名（13%）、クリーム、グレー、黄色、薄茶が各1名（各3%）となっている。全体として淡い色が並んでいる。色についての評価については、「好き」「よい」「清潔」といった肯定的な捉え方が多いが、「好きではない」「もっとカラフルがいい」という捉え方も見られる。

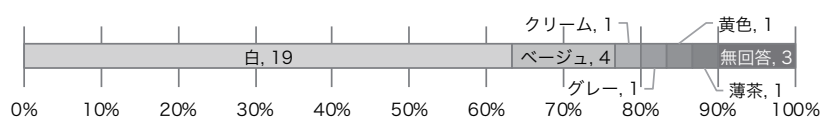


図3-12 天井・壁の色 (n=30)(人)

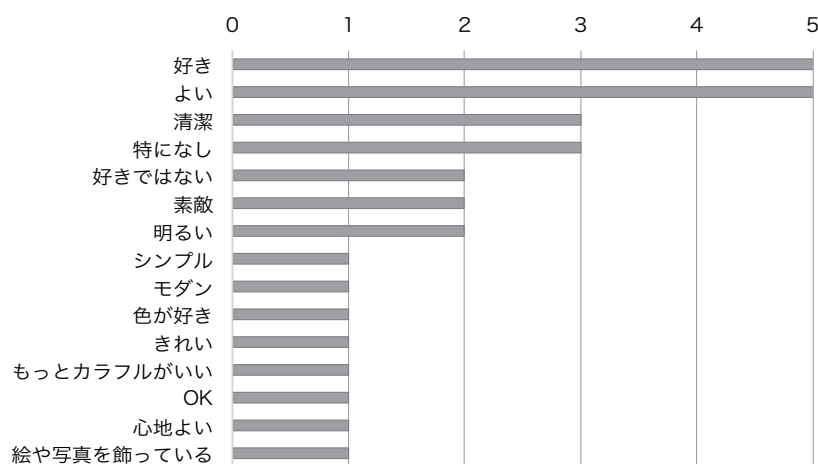


図3-13 天井・壁の色についての評価 (n=30, 自由記述、複数回答可)(人)

3-5-3. 居住空間の日本の建築空間要素に対する評価

日本の建築空間要素の評価に関連して、日本の文化および伝統文化への興味について尋ねた (図 3-14)。日本文化に興味がある人は全員、伝統文化に興味がある人は9割で、日本文化、伝統文化への興味を持つ人が大多数であることがわかる。

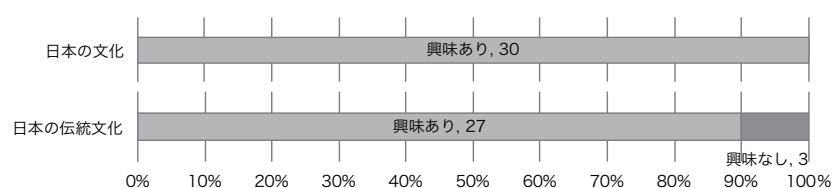


図 3-14 日本文化、日本の伝統文化の認識 (n=30)(人)

居住空間の日本の建築空間要素と考えられる沓脱を伴う玄関・ベランダなどの移行空間、廊下などの接続空間、襖や障子などの間仕切り、押入れなどの間仕切りを使用した収納、畳の各要素について、どのように捉えているかを尋ねたところ⁸⁸、移行空間については、必要であると回答したのが23名(図3-15)、接続空間については、必要であると回答したのが14名(図3-17)であり、どちらの空間も必要な理由として機能性を挙げている人が一番多い(図3-16, 図3-18)。

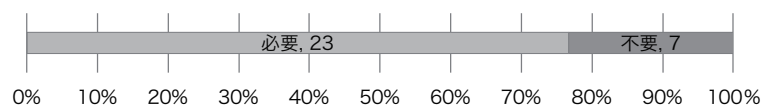


図3-15 移行空間(玄関・ベランダ)が必要/不要(n=30)(人)

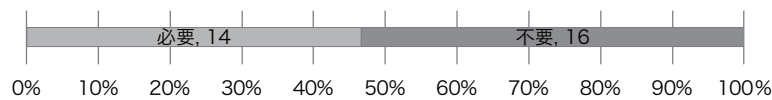


図3-17 接続空間(廊下等)が必要/不要(n=30)(人)

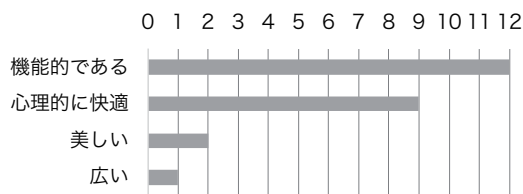


図3-16 移行空間が必要である理由(n=23)(人)
(自由記述, 選択・複数回答可)

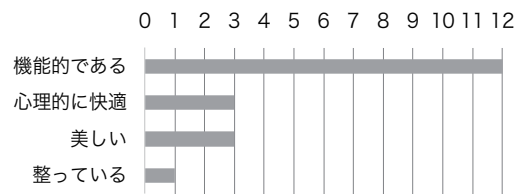


図3-18 接続空間が必要である理由(n=14)(人)
(自由記述, 選択・複数回答可)

88 日本の建築空間要素のうち、外部空間と内部空間をつなぐ玄関やベランダなどの転移空間と内部空間である室と室をつなぐ廊下などの接続空間については、日本の住居に多く見られるため日本の居住空間に備わっているものと前提し、その必要性について尋ね、必要であると回答した対象者にそれぞれの空間の評価を聞いている。一方、間仕切り、押入れ、畳のような建築要素については、現代の日本の居住空間に必ずしも備わっているものではないことから、最初にその有無を尋ね、有ると回答した対象者には、それぞれの要素の評価や使用法について聞いている。

襖や障子などの間仕切りについて、家にこれらの建築空間要素がある人が5名で(図3-19)、「実用的・便利」「取り外しが簡単」「効率的な空間利用」といった機能性、「美しい」という建具の美しさ、「壊れやすい」「音が筒抜け」のような脆さを評価項目として挙げている(図3-20)。押入れについては、家にある人が8名で(図3-21)、全員が「収納」もしくは「クローゼット」として使用している(図3-22)。

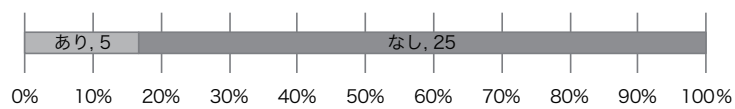


図3-19 日本の間仕切りの有無 (n=30)(人)

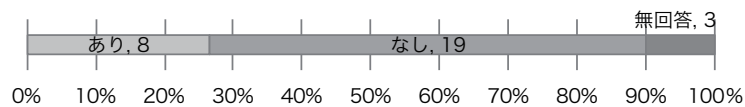


図3-21 押入れの有無 (n=30)(人)

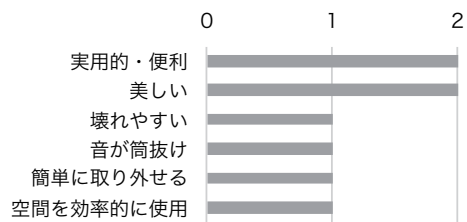


図3-20 間仕切りについての認識 (n=5, 自由記述)(人)



図3-22 押入れ空間の使用方法 (n=8, 自由記述)(人)

畳については、家に畳の部屋がある人は5名で（図3-23）、美しさや快適さ、空間活用や手入れしやすい利点を挙げる一方で、家具を置いて使用するには脆いとの考えもある（表3-8）。

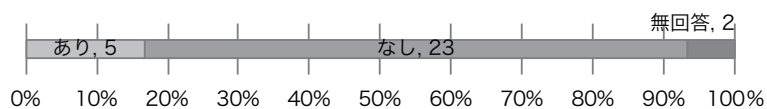


図3-23 畳の部屋の有無 (n=30)(人)

表3-8 畳についての認識 (n=5, 自由記述)(人)

- ・おそらく便利で快適だろうけれど、使ったことがない。
- ・気に入っている。
- ・とても快適で美しい。
- ・寝たり、座ったりできる場所。手入れが楽。
- ・西洋式家具を上に載せるにはあまりにも脆い。

3-5-4. 日本の建築空間要素に関連した家具や習慣、浴室に対する評価

可動式家具や間仕切りについては、「便利」と回答した人が11名と多く、「快適」や「空間を活用」という肯定的な捉え方がある一方で「出し入れが面倒」「使用していない」「必要ない/なくていい」という評価もあった(図3-24)。沓脱習慣については、「よい習慣」と考えている人が21名で、部屋を清潔に保つことができる機能面(9名)や、自分の国と同じ習慣(5名)であると続き、肯定的に捉えている人が多い(図3-25)。浴室の構成については、浴室とトイレの分離が「よい」と回答した人が10名で「複数人で同時に使用可能」「便利」と肯定的な回答が多数ある一方で、「不便」「好きではない」「閉塞的」など否定的な意見も少数ではあるが存在する(図3-26)。



図 3-24 可動式の家具や間仕切りについての認識 (n=30, 自由記述)(人)

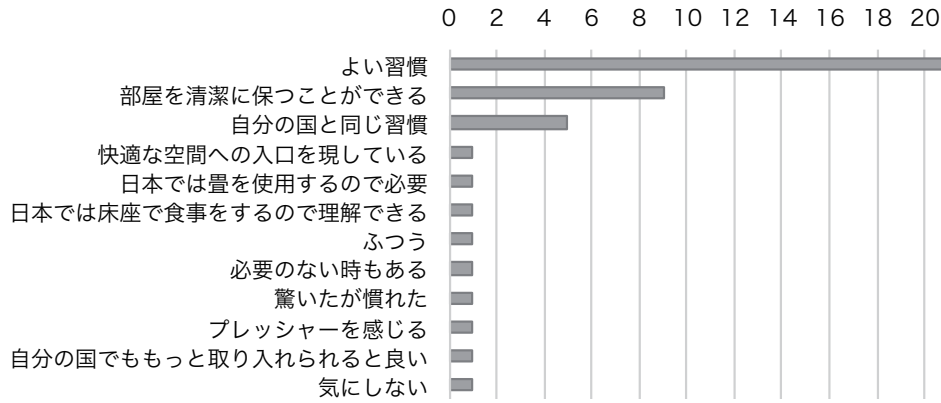


図 3-25 沓脱習慣についての認識 (n=30, 自由記述)(人)

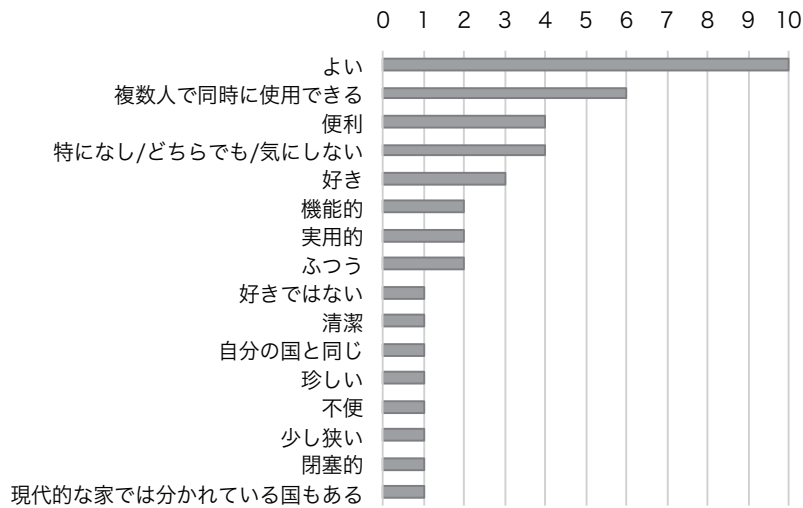


図 3-26 浴室・トイレの分離についての認識 (n=30, 自由記述)(人)

3-5-5. 居住空間における快適さ・くつろぎについて

居住空間における快適さについて、どのような状況の時に快適であるかを尋ねた。詳細は表3-9の通りである。「ソファやベッドで映画を見ている」「テレビを見ている」「入浴している」といった特定の行為、「家族揃って家にいる」「家が整っている」「天気の良い日に窓を開けている」という状態、「いつも快適」「快適かどうかは自分で作り出す」といった行為や状態に依拠しないものが挙げられている。

表3-9 家で快適に感じる状況 (n=30, 自由記述)(人)

<ul style="list-style-type: none"> ・ソファかベッドで映画を見ている(3) ・家族揃って家にいる(2), ・家がきれいで整っている(2), ・日の光が入ってきている(2) ・テレビを見ている, ・入浴している, ・ベッド/ソファで寝ている, ・ソファに座っている ・家でご飯を食べている, ・花を生けている, ・ヨガをしている, ・テラスでタバコを吸う ・本を読んでいる, ・晴れた日にソファでコーヒーを飲んでる, ・晴れた日に子どもたちが学校へ行き一人で家でコーヒーを飲みながら外を眺めている, ・バルコニーから眺めを楽しんでいる, ・天気の良い日に窓を開けている, ・部屋がきれいで外が寒い, ・天気が良く気分がいい ・静かできれいで暖かい, ・何をすることも自由/何もする必要のない, ・自分の家と両親の家にいるとき, ・いつも快適(家は自分にとってベストな場所), ・家が快適かどうかは状況に関係ない。自分の気持ち、エネルギー、オブジェ、音楽で快適さは作り出せる。 ・植物がある, ・特になし

一方、快適にくつろぐ場所については、「リビングルーム」が17名、「ベッドルーム・ベッド」が9名、「ソファ」が5名で、リビング・ベッドルームが上位を占める。その一方で、「台所」「ダイニング」「浴室」「庭」などの空間、「畳」「床」「ヨガマット」「アームチェア」「テラス・ハンモック」などの特定の場所や物も挙げられている（図3-27）。

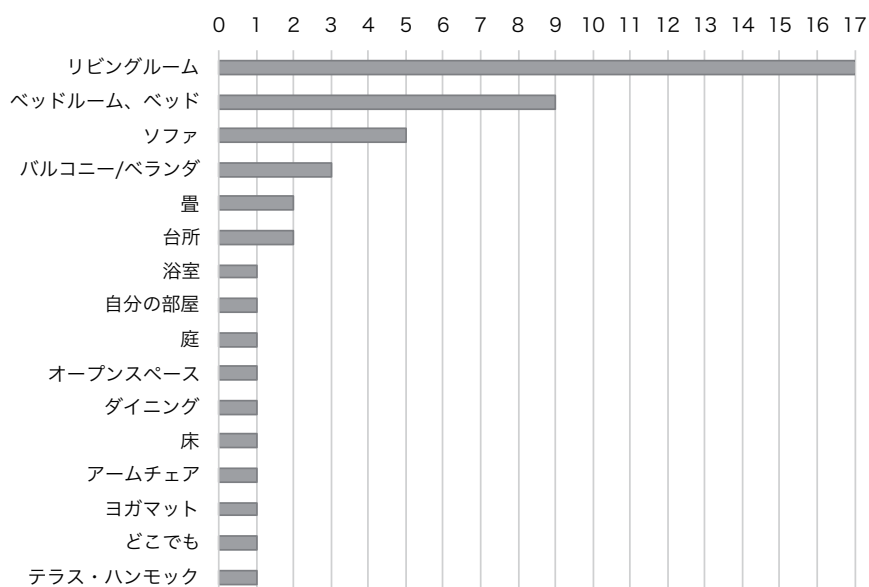


図3-27 家でくつろぐ場所 (n=30, 自由記述, 複数回答可)(人)

居住空間における快適さやくつろぎに関わる要素として、家で気に入っているものを尋ねた。詳細は図3-28の通りである。「アート」が9名、「眺め・景色」が8名、「植物」が5名で、鑑賞に関わる要素が上位3つに挙げられている。続いて、「空間」(4名)「リビングルーム」(4名)「間取り」(3名)と空間や室が続く。さらに、「ベッド」(4名)「ソファ」(3名)「電子レンジ」「ラグ」などの家具や家電などの空間を構成する要素が挙げられている。

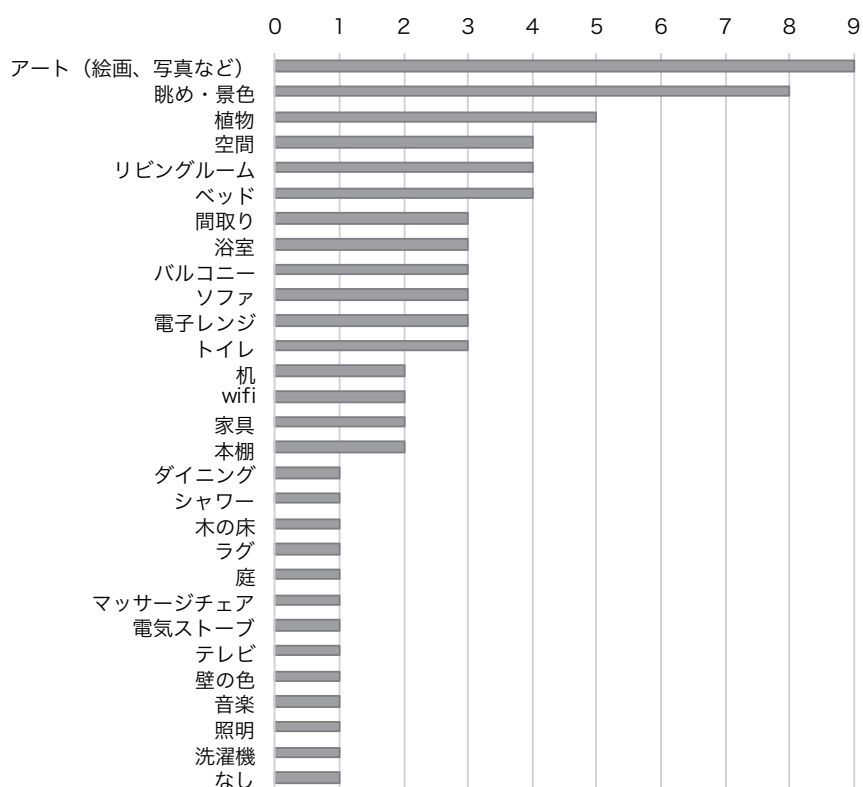


図 3-28 家で気に入っているもの (n=30, 自由記述, 複数回答可)(人)

3-5-6. 日本の居住空間にはない「自国において重要と認識している物や事柄」

自国居住時に「重要である」と認識していた物や事柄で日本の居住空間にないものについて尋ねた⁸⁹。詳細は図3-29の通りである。「広い空間」が5名、該当するものが「ない」との回答が4名、暖房システムが2名であった。他には、大きな窓、高い天井、シンクの高さ、バスタブの大きさなど自国と異なる寸法に関するものや、色鮮やかさや賑やかさといった居住空間の印象、台所用具、冷蔵庫、洗濯機といった具体的な道具や製品も挙げられている。

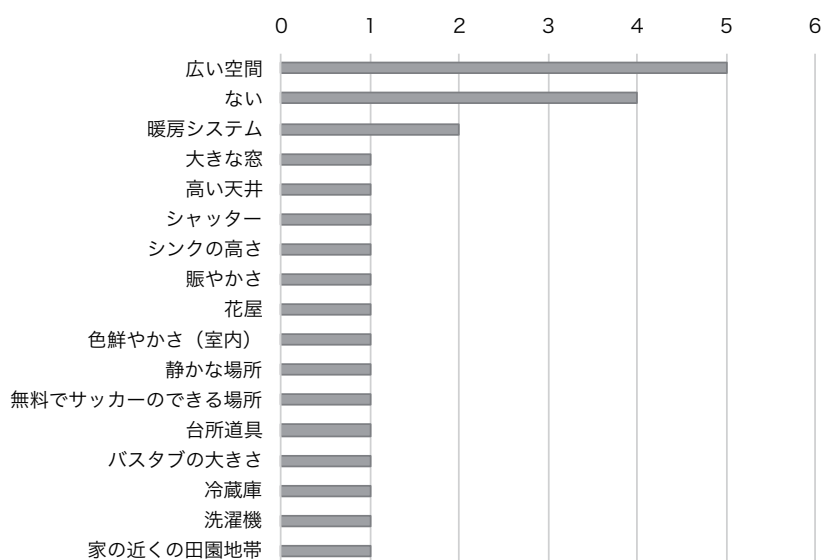


図3-29 日本の居住空間にはない「自国において重要と認識している物や事柄」
(n=30, 自由記述, 複数回答可)(人)

89 質問文に住居や周辺環境に限定する文言がなかったため、「家族」「友人」等の人や食べ物についての回答も見られたが、本研究の調査対象範囲外であるため分析・考察からは除外する。

3-5-7. 自国の居住空間にはない「日本において重要と認識している物や事柄」

現在日本において「重要である」と認識している物や事柄で自国の居住空間にないものについて尋ねた⁹⁰。詳細は図3-30の通りである。「公共交通機関」が8名で、アクセスの良さや使いやすさを理由として挙げている。続いて「清潔さ」が6名で、先に挙げた公共交通機関や公共トイレ、道路の清潔さを挙げている。「コンビニ」は3名で、コンビニへのアクセスのしやすさも回答に見られた。「規律」「静けさ」はそれぞれ2名回答しており、秩序が保たれている静かな街の様子を挙げていると考えられる。「温水洗浄便座」や「給湯システム」などの機器や「玄関」「伝統的な日本家屋」「トイレと浴室の分離」といった日本の建築要素も挙げられている。また、「温泉」「銭湯」などの公共浴場についても挙げられている。「公園」「児童館」「治安の良さ」なども周辺環境についても挙げられている。

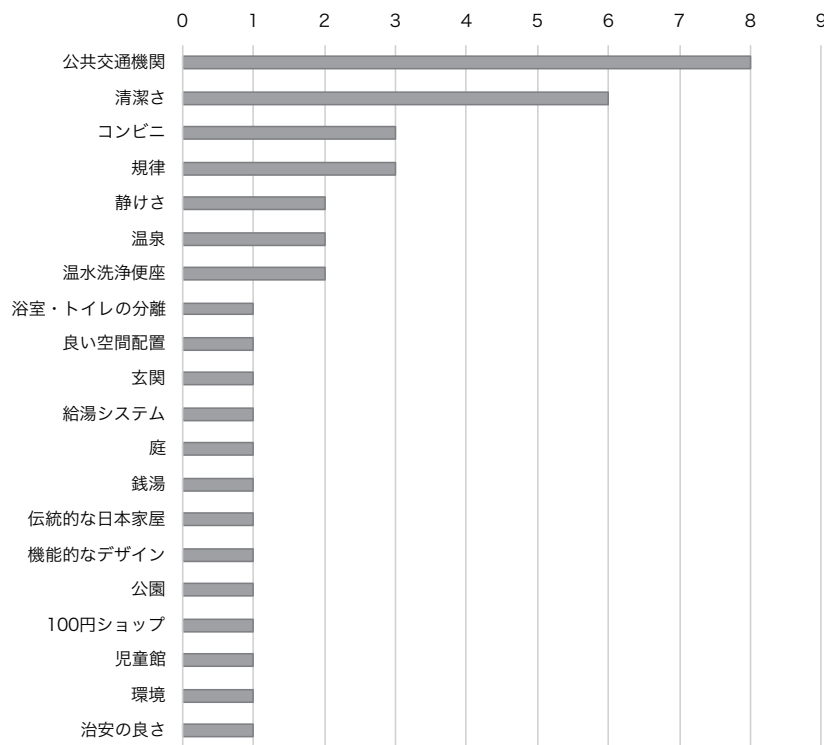


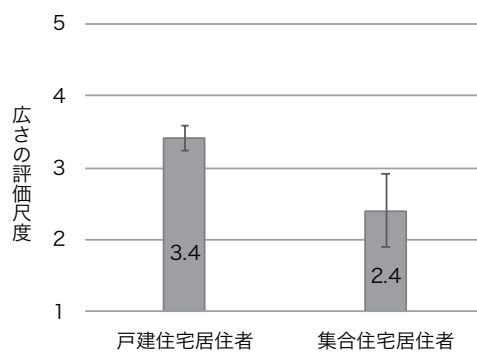
図3-30 自国の居住空間にはない「日本において重要と認識している物や事柄」
(n=30, 自由記述, 複数回答可)(人)

90 質問文に住居や周辺環境に限定する文言がなかったため、「家族」「友人」等の人や食べ物についての回答も見られたが、本研究の調査対象範囲外であるため分析・考察からは除外する。

3-6. 考察

3-6-1. 居住形態と広さの評価との関係

本研究では、居住認識と居住空間の面積を直接関連づけて検討するものではないが、居住形態によって居住空間の面積が大きく異なることが予想されるため、戸建居住者と集合住宅居住者の広さの評価の関係について整理する。両者の広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した。戸建居住者の平均値は3.4、集合住宅居住者の平均値は2.4であった（図3-31）。この2つの平均値の差についてT検定（有意水準5%）を行ったところ、戸建居住者の平均値の方が集合住宅居住者の平均値よりも有意に高いという結果となった ($t(28) = 2.24, p = 0.03$)。そこで、次節以降、広さの評価については回答の多数を占める集合住宅居住者25名を対象として分析、考察していく。



戸建居住者 (n=5), 集合住宅居住者 (n=25)

広さの評価尺度:

1:狭い, 2:少し狭い, 3:ちょうどいい, 4:少し広い, 5:広い

図3-31 戸建住宅居住者と集合住宅居住者の広さの評価尺度の平均値

3-6-2. 居住年数と広さの評価との関係

居住空間が変わると最初こそ戸惑うものの、時間経過とともに現在の環境に馴染んでいくことがある。今回の調査では、部屋の広さの評価（図3-5）において、「ちょうどいい」と感じている人数（n=12）と「狭い」「少し狭い」と感じている人の総数（n=14）がほぼ同数で、必ずしも日本の居住空間を狭いと感じている人が大多数を占めているわけではないことがわかった。そこで、日本での居住年数の長さで広さの評価に対応関係があるのではないかと仮定し、居住年数による調査対象者の分布（図3-32）から対数近似曲線を参考におおよそ1.5(人)に当たる居住年数1年と1(人)に当たる居住年数3年を区切りとし、移住間もない1年未満、ある程度慣れてきた1年以上3年未満、3年以上の長期在住者の3群に分け、部屋の広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した。その結果、集合住宅居住者25名において、各群の平均値は、1年未満（n=8）で2.25、1年以上3年未満（n=8）で2.88、3年以上（n=9）で2.11となった（図3-33）。この3つの平均値の差について一元配置分散分析（有意水準5%）を行ったところ、有意な差は見出されず（ $F(2,22) = 1.97, p = 0.163$ ）、居住年数の長さで広さの評価の間に関係は認められなかった。

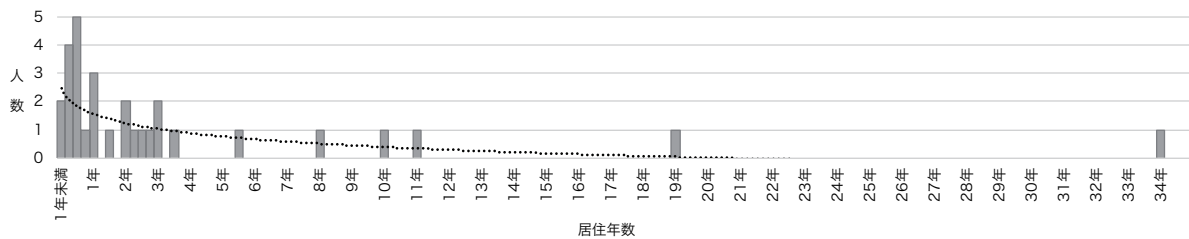
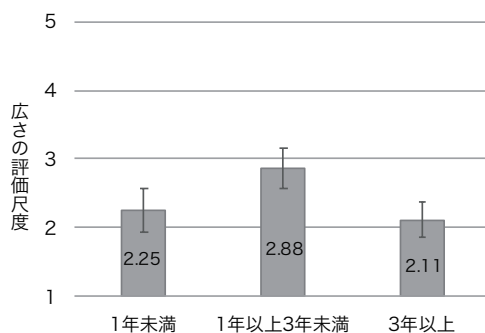


図3-32 居住年数による調査対象者の分布 (n=30)(人)



1年未満 (n=8), 1年以上3年未満(n=8), 3年以上(n=9)
 広さの評価尺度：
 1:狭い, 2:少し狭い, 3:ちょうどいい, 4:少し広い, 5:広い

図3-33 異なる居住年数3群の広さの評価尺度の平均値

3-6-3. 住居選択基準と広さの評価との関係

次に、住居選択時に基準とした項目とその組み合わせによって分類した住居選択基準と居住空間の広さの評価の関係について検討した。住居選択基準の6タイプ (p.93, 表 3-3) から、「選択権なし」(n=5)を除く5タイプの部屋の広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した⁹¹。その結果、各群の平均値は、B-SE(n=2)で2.5、B-SE-BS(n=6)で2.33、SE (n=3)で1.67、SE-BS(n=6)で2.33、BS(n=4)で2.75となった(図3-34)。この5つの平均値の差について一元配置分散分析(有意水準5%)を行ったところ、有意な差は見出されず($F(4,16) = 0.66, p = 0.63$)、住居選択基準のタイプによる広さの評価に差があることは認められなかった。

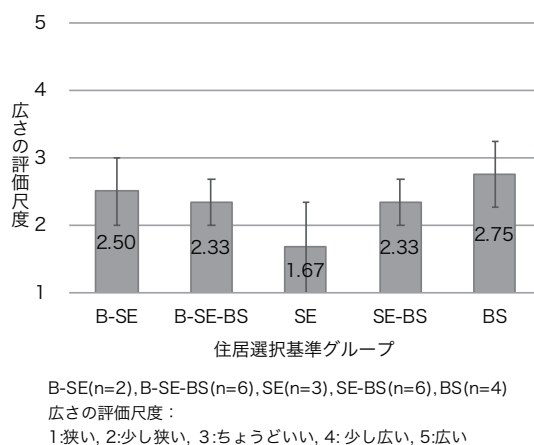


図 3-34 住居選択基準グループ 5 群の広さの評価尺度の平均値

91 戸建居住者のうち1名が「選択権なし」タイプのため、本節分析対象者は戸建居住者5名と「選択権なし」タイプ4名を除く21名である。

そこで、住居選択基準の中でも空間の雰囲気や印象に連なる項目を基準とした人は、広さの評価においても肯定的に捉えているのではないかと仮説を立て、住居選択基準6タイプ (p.93, 表3-3) の中で建物・空間 (BS) 内の空間の印象や雰囲気についての項目を住居選択基準に含む人と含まない人の広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した⁹²。その結果、住居選択基準に空間の雰囲気・印象の項目を含む群 (n=8) が2.75、含まない群 (n=13) が2.08となった (図3-35)。この2つの平均値の差についてT検定 (有意水準5%) を行ったところ、住居選択基準に空間の雰囲気や印象の項目を含む人の平均値の方が含まない人の平均値よりも有意に高いという結果となった ($t(19) = 1.85, p = 0.04$)⁹³。部屋を選ぶ際に空間の雰囲気や印象について考慮している群の方が、考慮していない群よりも部屋の広さを肯定的に評価していることが確認された。

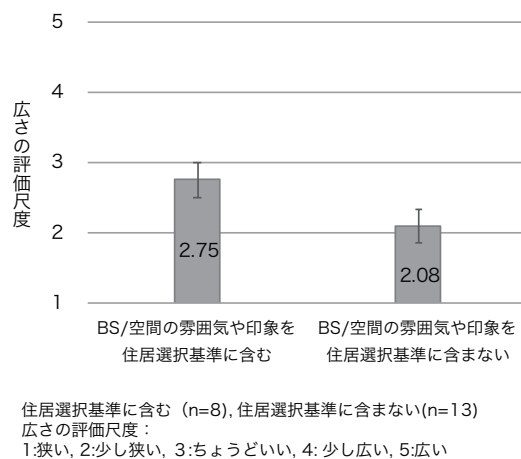


図3-35 BS/空間の雰囲気や印象を住居選択基準に含む群と含まない群の広さの評価尺度の平均値

92 部屋の大きさを広いと評価することと部屋の大きさを肯定的に捉えることは必ずしも同義であるとは限らず、「広すぎて寒い」「広すぎて落ち着かない」等のケースが考えられる。本稿の調査では「少し広い」と評価した人が21名中 (戸建居住者・居住選択権なしを除く) 2名である。

93 この検定では、住居選択基準に空間の雰囲気・印象の項目を含む群が、含まない群よりも、広さ認識の尺度評定平均値が高いことを対立仮説としたため、片側検定 (有意水準5%) を採用した。

広さの評価についての尺度と人数の分布を見ると(図3-36)、2つのグループ間で、「狭い」「少し狭い」と評価している人数の割合に開きがあることがわかる。住居選択基準に空間の雰囲気・印象の項目を含む群では、「狭い」「少し狭い」といった否定的な評価を持っている人が8名中3名(38%)である一方で、住居選択基準に空間の雰囲気・印象の項目を含まない群では13名中8名(62%)であった。選択基準のタイプにより広さの評価に差異が認められたことは、居住空間を認識する際に用いる認知的枠組みによって居住空間を認識するという「居住空間の図式」と符合するプロセスがあるのではないかと考える。また、居住期間の長短に拠らず、居住空間の選択基準により広さの評価に差異が認められたことから、「居住空間の図式」には、その人の持つ文化的・経済的背景、それに付随する価値観に加え、居住経験を構成する一つの指標である物理的な時間のみではなく、日本居住後の時間経過に伴う居住空間の捉え方の変容の度合いも含めた複層的な関わりが推察される。

空間の雰囲気や印象に考慮している群に関して、その選択基準として実際に自分の好みの部屋を明確に心に描いていた人、漠然とした印象で空間を捉えていた人等が想定されるが、本研究の調査ではその内訳については把握していない。また、部屋の広さを肯定的に評価している人が、実際に理想と合致した部屋を選択しているかどうかについても明らかにしていない。居住空間を選択した時点から肯定的に捉えていたのか、住みこなす過程で肯定的に捉えるようになったのか、その過程も含め、より詳細な検討は今後の課題としたい。

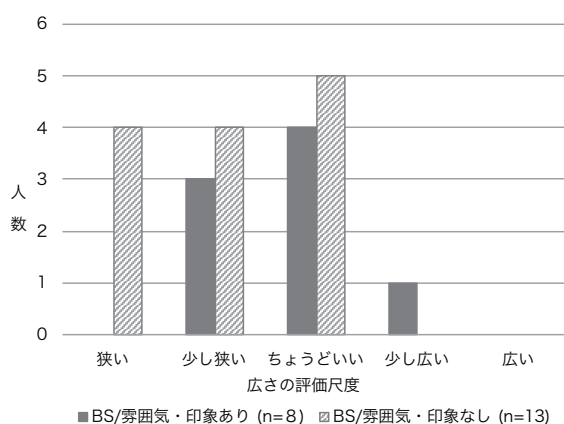


図3-36 BS/ 空間の雰囲気や印象を住宅選択基準に含む群と含まない群の広さの評価の分布 (n=21)

空間の印象や雰囲気についての項目 (BS) を住居選択基準に含む人の住居選択基準の内容について、住居選択基準タイプと広さの評価の尺度とともに表 3-10 にまとめる。記述からは「広い空間」「広さ」のように広さについて直接言及している基準もある一方で、「快適さ」「日当たりの良さ」「開放的」といった基準も見られた。そこで、次節以降、5 節で言及した居住空間の方角および日光についての評価や開放的に感じているかどうかという項目と広さの評価の関係について検討する。

表 3-10. BS/ 空間の雰囲気や印象を住居選択基準に含む群の住居選択基準タイプ
および基準の詳細と広さの評価尺度 (n=8)
広さ評価の尺度：1: 狭い, 2: 少し狭い, 3: ちょうどいい, 4: 少し広い, 5: 広い

調査対象者	住居選択基準タイプ	住居選択基準についての記述	広さ評価尺度
7	B-SE-BS	快適さ (家が職場を兼ねているので、一日中過ごすため) オフィス用の部屋がある、 日の光が入る 。配偶者の職場から徒歩圏内。適切な価格。	3
12	BS	日の光、広さ	2
19	BS	良い間取り、 清潔さ 、設備/什器の充実度、白い家具等	4
21	BS	日当たり、広く、開放的な感じ、天井高の高さ、開けた眺めのあるバルコニー	2
24	BS	日当たりが良く 、3 部屋ある。低層マンション。 新しい家 。床暖房がある。	3
25	SE-BS	便利さ。家から配偶者の会社まで近い。 明るさ	2
26	SE-BS	日当たりの良さ 、 空間を感じるリビングやダイニング (来客をもてなすことが可能)、駅まで10分ほどの距離、職場まで5km	3
30	SE-BS	眺め、日当たり、広い空間 、大きなバルコニーが2つ、街の中心地	3

3-6-4. 居住空間の方角の評価と日光の評価との関係

居住空間の方角および日光の評価については表3-7 (p.95) にまとめている。この両者の関係について、部屋の方角を気にする人は日光が入るかどうかが気になる人が多く、部屋の方角を気にしない人は日光についても気にしない人が多いことがうかがえる。そこで、 χ^2 検定で独立性の検定（有意水準5%）を行ったところ、対立仮説は棄却され ($\chi^2 (1) = 3.453, p = 0.063$)、部屋の方向を気にする人と日光を気にする人との間に関係は認められなかった（表3-11, 表3-12）。

表 3-11 部屋の方角の評価と日光の評価との関係
(n=30)(人) カッコ内は期待値

	日光 気にする	日光 気にしない	総計
部屋の方角 気にする	10 (7.467)	4 (6.533)	14
部屋の方角 気にしない	6 (8.533)	10 (7.467)	16
総計	16	14	30

表 3-12. 部屋の方角の評価と日光の評価との関係： χ^2 値

	日光 気にする	日光 気にしない	総計
部屋の方角 気にする	0.859524	0.982313	1.841837
部屋の方角 気にしない	0.752083	0.859524	1.611607
総計	1.611607	1.841837	3.453444

3-6-5. 日光の評価と開放感の評価との関係

部屋を開放的であると回答した人の理由の中で一番多かったのが「光（自然光）が入る」であったことから（図3-7）、日光を気にする人と開放的であると回答した人の中には何らかの関係が見られると仮定し、 χ^2 検定で独立性の検定を行った。その結果、対立仮説は棄却され ($\chi^2(1) = 0.089, p = 0.765$)、日光が入るかどうかが気にする人と開放的であると回答した人との間に関係は認められなかった（表3-13, 表3-14）。

表 3-13 日光の評価と
開放感の評価との関係
(n=30)(人) カッコ内は期待値

	開放感あり	開放感なし	総計
日光 気にする	10 (9.6)	6 (6.4)	16
日光 気にしない	8 (8.4)	6 (5.6)	14
総計	18	12	30

表 3-14 日光の評価と
開放感の評価との関係： χ^2 値

	開放感あり	開放感なし	総計
日光 気にする	0.016667	0.025	0.041667
日光 気にしない	0.019048	0.028571	0.047619
総計	0.035714	0.053571	0.089286

3-6-6. 日光の評価と広さの評価との関係

日光が入るかどうかが気になる人と気にしない人の2つの群で、広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した。その結果、日光が入るかどうかが気になる群(n=14)が2.36、含まない群(n=11)が2.45となった(図3-37)。この2つの平均値の差について、T検定(有意水準5%)を行ったところ、日光が入るかどうかが気になる人の平均値の方と気にしない人の平均値には有意差が見られなかった($t(23) = 0.27, p = 0.79$)。日光の評価と広さの評価には関係は認められなかった。また、広さの評価についての尺度と人数の分布について見ると(図3-38)、日光が入るかどうかが気になる群において、「少し狭い」と回答した人数が多いものの、2つのグループの分布には大きな違いが見られなかった。

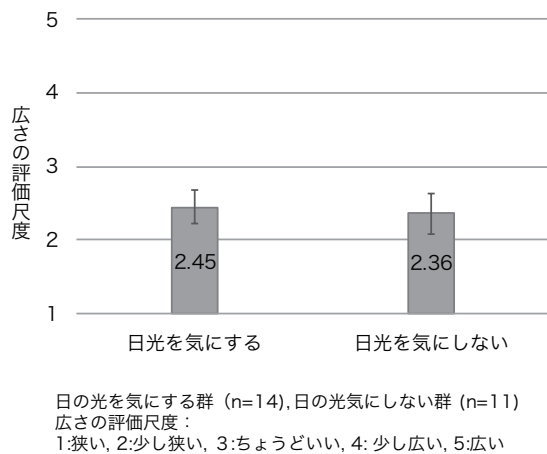


図3-37 日光を気にする群と日光を気にしない群の広さの評価尺度の平均値

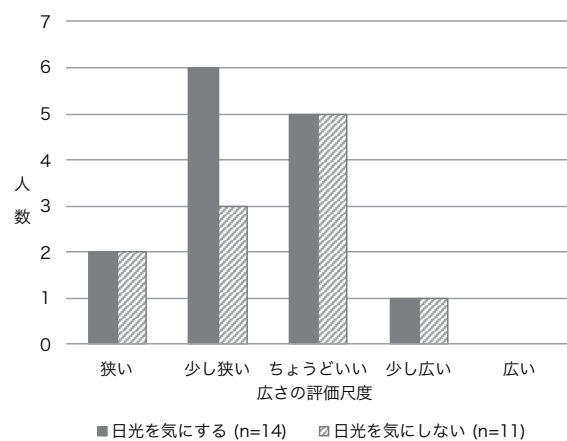
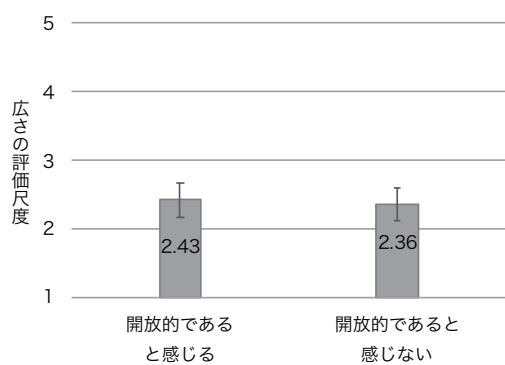


図3-38 日光について気にする群と気にしない群の広さの評価の分布 (n=25)

3-6-7. 開放感の評価と広さの評価との関係

居住空間が開放的であると感じている人と感じていない人との2群で広さの評価についての尺度得点の平均値を算出した。その結果、開放的であると感じている群 (n=14) が 2.43、開放的であると感じていない群 (n=11) が 2.36 となった (図 3-39)。この2つの平均値の差について、T検定 (有意水準 5%) を行ったところ、開放的であると感じている人の平均値と開放的であると感じていない人の平均値には有意差はなく ($t(23) = 0.18, p = 0.86$)、開放的であるかどうかと広さの評価には関係は認められなかった。その一方で、広さの評価についての尺度と人数の分布について見ると (図 3-40)、開放的であると感じている群 (n=14) では、「ちょうどいい」「少し広い」と肯定的に評価している人が 14 名中 8 名 (57%)、「狭い」「少し狭い」と否定的に評価している人が 14 名中 6 名 (43%) と、肯定的に捉えている人の割合が大きいのに対し、開放的であると感じていない群 (n=11) では、「狭い」「少し狭い」と否定的に評価している人が 11 名中 7 名 (64%)、「ちょうどいい」「少し広い」と肯定的に評価している人が 11 名中 4 名 (36%) であった。開放的に感じている人の方が部屋の広さについて肯定的に捉えている割合が高く、開放的に感じていない人の方が部屋の広さについて否定的に捉えている割合が高い。統計的な有意差は認められなかったものの、開放的であると感じていることと居住空間の広さの評価については関わりがないとは言いきれないのではないかと考えられる。データ数を増やす等検討の余地があると考えられる。



開放的と感じる群 (n=14)、開放的と感じない群 (n=11)
 広さの評価尺度:
 1:狭い, 2:少し狭い, 3:ちょうどいい, 4:少し広い, 5:広い

図 3-39 開放的と感じる群と開放的と感じない群の広さの評価尺度の平均値

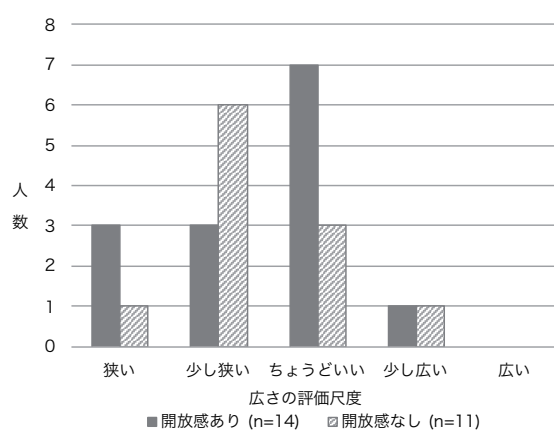


図 3-40 居住空間を開放的と感じる群と開放的と感じない群の広さの評価の分布 (n=25)

3-7. 本章のまとめ

本章では、質問紙調査を用いて、外国人の現在の居住空間の認識や住まい方を明らかにすることにより、外国人の日本の居住空間の捉え方を整理した。

居住空間についての一般的な認識については、全体の8割が居住空間への関心を示す一方で、居住空間を構成する光環境および温熱環境への関心は全体のおよそ半数にとどまり、必ずしも一致しないことがうかがえた。

現在の居住空間については、住居の選択基準となる30項目を抽出し、予算(B)、周辺環境(SE)、建物・空間(BS)、選択権なし(N)の4分類を得、この4分類を組み合わせた住居選択基準のタイプ6種類が確認できた。現在の居住空間の基本的な建築空間要素として部屋の広さ、天井の高さ、窓の大きさについては、とかく狭いと語られがちな日本の居住空間について、必ずしもその限りでないことが推察される。また、日本の建築空間要素への評価は、その機能性から移行空間、接続空間が必要であると考えている人が多く、少ないながらも機能性・脆弱性により間仕切り、押し入れ、畳の各要素を評価している。

以上に加え、居住期間の長短に抛らず、住居の選択基準として居住空間の雰囲気や印象を基準項目に挙げた群と挙げていない群とでは、居住空間の広さの評価に差異が認められた。この結果からは、居住空間を認識する際に用いる認知的枠組みによって居住空間を認識するという「居住空間の図式」と符合するプロセスがあると考えられる。その人の持つ文化的・経済的背景、それに付随する価値観に加え、居住経験を構成する一つの指標である物理的な時間量のみではなく、日本居住後の時間経過に伴う居住空間の捉え方の変容の度合いも含めた複層的な関わりが推察される。第4章では、居住経験と現在の居住空間の認識についてインタビュー調査を通してその関わりを分析することにより、「居住空間の図式」の更新について詳細に検討していく。

第 4 章 東京に在住する外国人の日本における住まい方の変化の対応と
居住空間の認知構造からみる「居住空間の図式」形成の過程
—東京在住の外国人を対象としたインタビュー調査

4-1. 本章の目的

第3章では、「居住空間の図式」更新について検討する本章に先立ち、日本に居住する外国人が現在の居住空間をどのように捉えているのかを質問紙調査に基づいて論じた。なかでも、「居住空間の図式」形成に関わっていると想定される個人の文化的背景、居住経験に相当する居住年数や居住空間の選択基準と日本の居住空間の認識との関わりを検討した。本章では、第3章の質問紙調査の結果および考察を踏まえ、インタビュー調査に基づいて、日本に居住する外国人の居住空間の認識と住まい方を整理し、それらと日本の居住空間における住まい方の状態（不変/変化）の対応（以下、「住まい方の対応」⁹⁴）から「居住空間の図式」形成について推定を行う。さらに、居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念と移住後の日本の居住空間における住まい方の状態が変化の場合の対応（以下、「住まい方の変化の対応」）から「居住空間の図式」形成の過程を考察する。

4-2. 研究の方法

本章では、東京在住の外国人の現在の居住空間と住まい方の認識と、過去と現在の居住空間の住まい方の変化について尋ねることで、外国人の日本の居住空間と住まい方の認識を明らかにし、日本居住後の居住空間における住まい方の対応を整理し、「居住空間の図式」形成との関係の仮説を得る。さらに居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念（以下、上位概念）を抽出し日本居住後の住まい方の変化の対応と抽出した上位概念から「居住空間の図式」形成の過程について考察する。第3章で把握した外国人の現状の住まい方や行動の特質に基づき、本章では質問紙調査で得られた回答から更に深く探るためにインタビュー形式で調査を行う⁹⁵。

質問紙調査と同様に特定の出身国、年齢、性別に偏らないように、出身国と世代の異なる男女を調査対象とする⁹⁶。データ収集方法としては、質問紙調査回答者に、質問紙調査回収時にインタビュー調査への協力を打診し、同意を得られた回答者に依頼する。

本節に続く第3節では、調査の概要、調査の方法について述べる。また、インタビュー調査結果を概観し、調査対象者の基本属性と質問項目ごとの発話数を把握する。

94 日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態として、以前と変わらない「不変」と、日本居住後に変化した状態の「変化」がある。本章のインタビュー調査ではこれらの「不変」「変化」を起点とした日本の居住空間における住まい方の状態の対応を6種類抽出し分類した(p137, 表4-3)。これらを「住まい方の対応」と呼称する。

95 本調査は東京工業大学「人を対象とする倫理審査委員会」の承認、および東京工業大学長の許可を受けている（許可番号：2023004）

96 本研究では調査対象者の個人の居住空間の認識を研究範囲とし、同居者の有無、同居者の居住空間の認識については直接取り扱わない。

第4節では、インタビュー調査結果から逐語録を作成しコード化した上で、居住空間と住まい方の認識として語られている内容を以下のように整理する^{97, 98, 99}。①調査対象者ごとにコード化した概念項目を整理し概念ダイアグラムを作成する。②調査対象者全体でコード化した概念項目を整理し概念ダイアグラムを作成し、概念項目の重複やばらつきなどを示す。さらに日本居住後の住まい方の不変/変化を基軸に日本の居住空間における「住まい方の対応」を分類し、「居住空間の図式」形成との関係を推定する。

第5節では、調査対象者の居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念である抽象的・心理的な価値内容を把握するために、居住空間の評価構造を整理する。居住空間についての認識のうち住居を構成する基本的な建築空間要素（広さ、天井高、窓の大きさ、壁や天井の色）¹⁰⁰を取り上げ、現在と過去の居住空間において要素ごとに対照し、より好ましく思う居住空間を選択し、評価グリッド法のラダーアップという手法を用いてその上位概念を抽出する。その上で、抽出した上位概念と日本居住後の居住空間の「住まい方の変化の対応」から「居住空間の図式」形成の過程について考察する。

第6節では、本章で得られた結果を総括する。

97 本研究のデータ分析では、逐語録からコード化し抽出した概念項目を、関連する概念項目同士でネットワーク化し、概念ダイアグラム（カテゴリー関連図）を生成している。これはグラウンデッドセオリーアプローチの基本的な姿勢を踏襲するものと考えるが、半構造化インタビューから得られたデータは、居住空間と住まい方の認識および日本居住後の住まい方の変化を明らかにするまでに留め、居住空間や住まい方の認識や住まい方の変化の背景となる認識の変化の過程について扱わないため、本稿では概念ダイアグラム生成の先に想定される理論形成は行っていない^{89, 90}。

98 佐藤郁哉, 質的データ分析法 原理・方法・実践, 新曜社, 2008

99 サトウタツヤ, 春日秀朗, 神崎真実 (編), 質的研究法マッピング 特徴を掴み、活用するために, 新曜社, 2019

100 この4つの基本的な建築空間要素はどの住居にも共通する居住空間を構成する物理的要素であり、比較可能であることから選定したものである。

4-3. 調査の概要

4-3-1. 調査の方法

第3章の質問紙調査回答者のうちインタビュー調査への依頼に同意を得られた6名を対象にインタビュー調査を行った。調査期間は2019年11月から2020年2月である。調査時間は1人当たり1時間30分から2時間である。調査は、質問紙調査を行なった日本語教室が開催されている施設内の会議スペース、もしくは調査対象者が出向きやすい都内の喫茶施設で、調査対象者と調査者が一対一で行った。インタビューの様子はICレコーダで録音した。

インタビュー調査は、質問紙で調査した項目を基に予め質問項目を設けた半構造化インタビューと評価グリッド法の手法を用いた調査で構成される。インタビューは、質問項目を日本語と英語の二言語で準備し、回答者が希望する言語で調査を行った¹⁰¹。質問紙調査と同様に調査対象者の言語運用能力の問題から鑑みると、母語で回答した場合と比較し限定された回答内容となる可能性はあるが、インタビュー調査では英語が母語の調査対象者は6名中2名(米国1名、豪州1名)で、英語が母語でない4名と比較して、会話のターン数、回答内容の項目数について差異はみられなかった。インタビュー調査の質問項目及び分析で扱うデータの範囲とインタビューの構成図を図4-1に示す。

インタビュー調査の手続きは、まず①居住履歴と②選択した過去の居住空間の概要では、続く質問項目である③住居を構成する基本的な建築空間要素の認識とその選好に関わる上位概念で上位概念を抽出するための準備段階として、過去の居住履歴の中から一番気に入っていた家(以下、過去の居住空間)を選択してもらい、その概要について尋ねる。続いて、③住居を構成する基本的な建築空間要素の認識とその選好に関わる上位概念では、評価グリッド法を用い、住居を構成する基本的な建築空間要素(広さ、天井高、窓の大きさ、壁や天井の色)ごとに、過去の居住空間と現在の居住空間を対照し、より好ましい方を選択してもらい、その理由を尋ね、その理由をオリジナル評価項目としてラダーアップし上位概念を抽出する。調査対象者によって居住履歴の多寡があるため、本研究では一番気に入っていた過去の居住空間を選択してもらい一つに限定した¹⁰²。①居住履歴、②選択した過去の居住空間の概要に加え、④間取りと周辺環境についての認識から⑤日本の建築空間要素の認識、⑥居住空間における快適さ、⑦家にある大切な物への認識、⑧生活の中で重要と思う物や事柄

101 回答者が使用した言語は、英語5名、日英併用が1名である。

102 過去の住まい方については、選択した過去の居住空間に限定せず、居住履歴全体からの発言も分析対象とする。

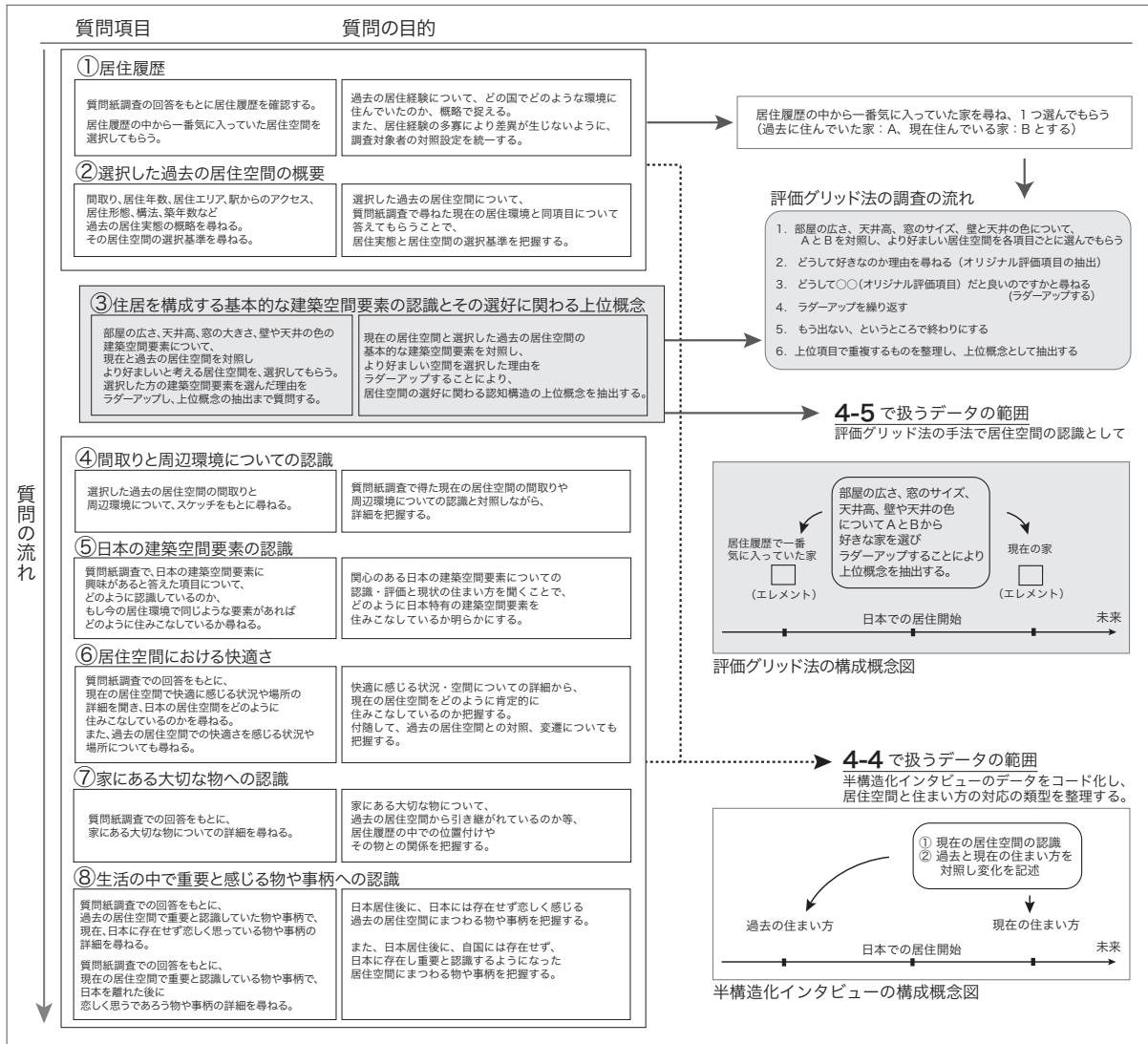


図 4-1. インタビュー調査の質問項目と扱うデータの範囲およびインタビューの構成図

への認識までの質問項目では、1) 現在の居住空間と住まい方の認識を詳細に尋ねること、2) 過去と現在の居住空間の住まい方の変化について尋ねること、以上の2点を基軸に半構造化形式でインタビューを行う。なお、半構造化インタビューと評価グリッド法での調査は同一インタビュー調査内で行う¹⁰³。インタビュー前半で評価グリッド法の調査が入ることで、後半のインタビューにバイアスのかかる可能性は考えられるが、居住空間や住まい方の認識について日常で言語化する機会は稀であり、居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念を抽出することがその後の発話を促す契機となる可能性も考慮している。

分析方法は、第4節で半構造化インタビューの発話データを逐語化、コード化を行い、居住空間と住まい方の認識に関する概念項目を整理した上で、日本の居住空間における「住まい方の対応」の分類を基に「居住空間の図式」形成を推定する。さらに、第5節において評価グリッド法で抽出した上位概念を、前述の日本の居住空間における「住まい方の変化の対応」と対照し、「居住空間の図式」形成の過程について考察する。

4-3-2. 調査対象者の属性

調査対象者の基本属性及び現在の居住空間の概要・過去の居住空間の概要を表4-1にまとめる。年齢は、30代3名、40代3名である。性別は、男女比が同数で、出身地域は、アジア地域2名、北米1名、南米1名、欧州1名、豪州1名である。日本での居住年数は、移住間もない1年以内、ある程度慣れてきた1年以上3年未満、3年以上の長期在住者で整理したところ、居住年数1年以内が2名、1年以上3年以内が3名、3年以上が1名である。年代は30代・40代に集中しているが、国籍、性別、居住年数にばらつきが見られ、限られた数の調査対象者ではあるが、ある程度の多様性は担保されていると考える。現在の居住地は、東京23区内で、居住形態は6名全員が集合住宅である。居住形態については、第3章の調査結果でも集合住宅居住者が8割を超えており、偏りはないと考える。居住空間選択基準は、調査対象者AおよびBは社宅で選択権がなかったため記載していない。日本居住は全ての調査対象者にとって初めてであり、現在の住居は来日時から継続して居住しているところである。選択した過去の居住空間については、居住エリアとして住宅街を挙げている人が多いが、居住地、最寄駅へのアクセス、居住形態、構法は多岐にわたっている。過去の居住空間選択基準については、両親の家を挙げた3名は記載していない。

103 図4-1の通り、4-4と4-5とでは扱うデータの範囲と重複しておらず、同一インタビュー内ではあるが独立したデータとなっている。しかしながら、4-5で扱うデータのうち、評価グリッド法のラダーアップに該当しない箇所がある場合、4-4のデータ範囲として取り扱う。

表 4-1. 調査対象者の基本属性及び現在と選択した過去の居住空間概要

調査対象者		A	B	C	D	E	F
国籍		イタリア	インド	フィリピン	オーストラリア	アメリカ	コロンビア
性別		女性	男性	男性	女性	男性	女性
年代		30代	40代	30代	40代	30代	40代
日本	居住年数	3年	8ヶ月	2年11ヶ月	8ヶ月	2年3ヶ月	8年
	居住エリア	繁華街	住宅街	住宅街	住宅街	住宅街	住宅街
	最寄駅への所要時間	徒歩3分	徒歩10分	徒歩6分	徒歩10分	徒歩1-2分	徒歩3分
	居住形態	集合住宅	集合住宅	集合住宅	集合住宅	集合住宅	集合住宅
	構法	木造以外	木造以外	木造以外	木造以外	木造以外	木造以外
	居住選択基準	—	—	間取り、清潔さ、設備や/什器、白を基調	光、浴室、大きさと開放感、高天井、バルコニーと眺め	ペット可 賃貸価格、駅への近さ、学校や職場へのアクセス、築年数、静かな地域	眺め、光、大きな空間、大きなバルコニー2つ、街の中心
選択した居住空間	選択した居住地	イタリア	インド	シンガポール	オーストラリア	アメリカ	コロンビア
	居住年数	約20年	12年	3年	6年	4年	9年
	居住エリア	住宅街	田舎	住宅街	住宅街	住宅街	住宅街
	最寄駅へのアクセス・時間	徒歩15分	鉄道駅まで2km	徒歩5-6分	徒歩10分	空港まで車で5分	鉄道の駅はない
	居住形態	集合住宅	戸建	集合住宅	集合住宅	集合住宅	戸建
	構法	コンクリート	木造	コンクリート	煉瓦	木造以外	コンクリート
居住選択基準	—	—	部屋の広さ	光がたくさん入る、広く感じる、空間を感じる、高天井、プライバシーの確保、60,70年代に建てられた住宅	価格、立地、治安、収納の多さ	—	

4-3-3. インタビュー調査結果の概観

インタビュー調査の発話ターン数を質問項目ごとにプロットした。図4-2に示す。本研究における発話ターンは、話者の交替で1ターンと区切る。ターンの定義は言語分析・会話分析を行う多くの研究分野で議論がなされており、実質的な意味内容を含まない相槌のような発話は1ターンと見なさず分析対象から外すケースもあるが¹⁰⁴、本研究では、実質的な意味内容を含まない発話も前後の意味内容との接続を担う会話の実態であると考え、話者交替で1ターンとして区切ることにした。なお、本研究では、①回答者の発話能力を概括するため、②回答者によって居住空間に関する質問について言語化する能力に大きな制約がないかを確認するために、発話ターン数を把握する。

発話ターン総数は290ターン近辺を中心に255ターンから305ターンの範囲内で、大きく逸脱しているケースはなかった。質問項目では、質問内容の多い②選択した過去の居住空間の概要と③住居を構成する基本的な建築空間要素の認識とその選好に関わる上位概念において、発話ターン数が多い。一方、質問内容が少なく自由回答に期待する質問項目⑤日本の建築空間要素の認識、⑥居住空間における快適さ、⑦家にある大切な物への認識、⑧生活の中で重要と思う物や事柄への認識については、発話ターン数に幅が見られる。質問項目と直接対応していない日本の居住空間以外の建築物や文化、コミュニケーションに関する事項、また選択した過去の居住空間以外の他国での居住経験については「その他」とした。

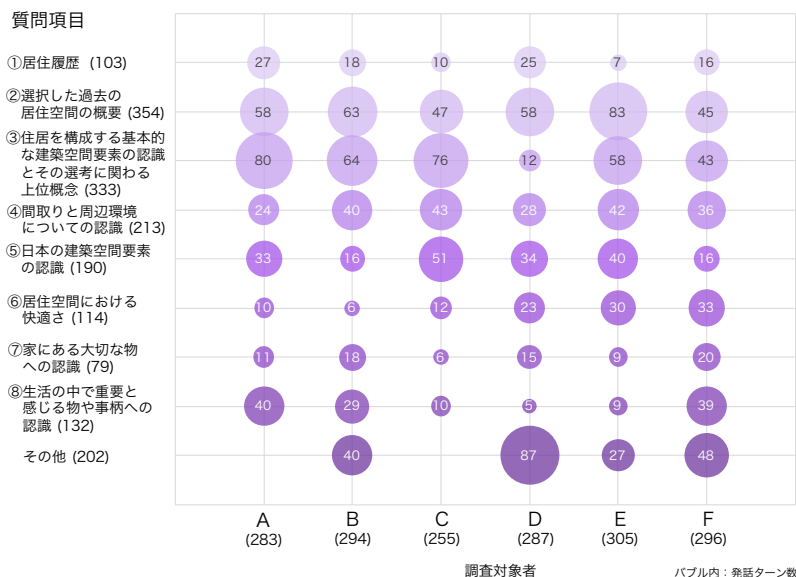


図4-2. 発話のターン数：総数および質問項目ごとのターン数
 (質問項目及び調査対象者記号下カッコ内は発話ターン総数)

104 金志宣, Turn-taking 研究の動向 - "turn" と "turn-taking" をめぐる議論を中心に -, 言語文化と日本語教育, 205-221, 2002

4-4. 居住空間の認識と「住まい方の対応」

4-4-1. 調査対象者ごとの概念項目の整理

インタビュー中の発話から、評価グリッドの手法でデータを取得する部分を除いた居住空間と住まい方の認識に関わる内容¹⁰⁵を調査対象者ごとに整理、コード化し、概念項目を抽出した。具体的な手続きは、次の通りである。①居住空間の認識に関する発話を1ターンごとにコード化(複数コードを含む)する。②コード化した意味内容が前後の発話ターンから独立している場合、1ターンで概念項目を抽出する。③連続するターンでコード化した意味内容が重複する場合、複数ターンのコードから1つの概念項目を代表として抽出する。コード化の事例を表4-2に示す。発話下線部が意味内容をコード化したものである。発話B168からB172までは床座に関する発話が続き、なかでも床座で過ごしていることが繰り返し語られていることから、これらを一つの概念項目<床で過ごす(床座)>として抽出した。概念項目抽出後、関連のある概念項目を線でつなぎ居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム(以下、ダイアグラム)を作成した¹⁰⁶。各調査対象者のダイアグラムを図4-3から図4-8に示す。

表 4-2. 発話データのコード化例(調査対象者B 発話抜粋)

<p>B168: そして、日本では木の床がとても清潔です。インドでは靴のまま家に入るので清潔ではない。(日本では)お茶を飲んだりなんでもできる。インドでは、椅子やソファ、ベッドに必ず座ります。床には座りません。一般的に床には座りません。</p> <p style="text-align: center;"><small>床・清潔(床座可能な理由)</small> 椅子座(インド): 床座(日本)との比較</p>
<p>B169: ええ、でも日本ではいつも床に座ります。もしあなたの家に行ったら、インドでは誰も訪ねて来なくなるかもしれない。でも、日本では気軽に床に座ります。もちろん清潔なので。慣れてきました。</p> <p style="text-align: center;"><small>床座(現況)</small> <small>床・清潔(床座可能な理由)</small> <small>床座(適成度)</small></p>
<p>B170: はい、最初はとても変な感じがしました。床に座るの?というように。</p> <p style="text-align: center;"><small>床座(第一印象)</small></p>
<p>B171: はい、今は問題ないです。床に座ります。</p> <p style="text-align: center;"><small>床座(現況)</small></p>
<p>B172: いや、インドで妻と暮らしていた時からなので。</p> <p style="text-align: center;"><small>床座(期間)</small></p>

105 居住経験に該当する内容のうち、事実確認に関する項目は除く

106 つながりが考えにくい概念項目については、単体で示す。

居住空間における快適さについての質問があることから、すべての調査対象者から「リラックス」という概念項目が出てきているが、「リラックス」から連なる概念項目は多面的である。調査対象者 A、B、D、F では、「リラックス」「自然・植物」「外部空間」の3つの概念項目が共通して抽出されており、これらの概念項目を基軸として他の概念項目が連なっている。調査対象者 C、E では、上述の概念項目のうち「リラックス」のみが抽出されているが、C の場合、具体的な外部空間についての発話はなかったものの、「外部とつながる感覚」「眺め」といった、室内空間と外部空間との関わりをうかがわせる概念項目が確認できる。続いて、個別のダイアグラムの背景となるインタビュー内容の概要を述べる。

調査対象者 A：開放的で光が多く入る広い空間を好む一方で、家は自分自身に戻る場所でもあり、一人で集中できる空間を心地よいと感じる。イタリアの光の差し込む大きな窓や高い天井、テラスでの時間を恋しく思っている。旅先で知った和室の良さ（必要最低限の家具のみの静かな空間、畳の質感、匂い）を発見し、旅で旅館に宿泊するのが楽しみになっている。

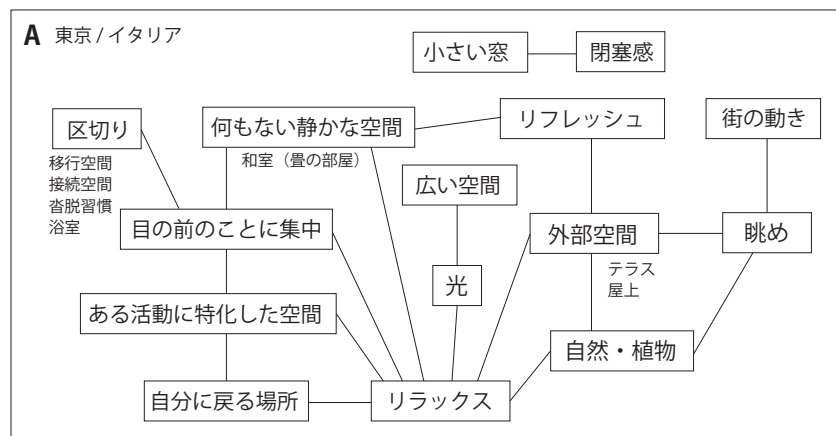


図 4-3. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム A

調査対象者 B：インドの色鮮やかな壁と開放的な居住空間で育つ。現在の日本の狭い居住空間に我慢しつつも、随所に工夫の見られる日本の居住空間の無駄のない空間デザインを実感している。布団生活を通して空間活用の効率性、自然素材としての畳の良さも実感している。高層階からの眺めを楽しみ、近隣の公園・神社へも頻繁に外出し、外部との繋がりを積極的に持っている。

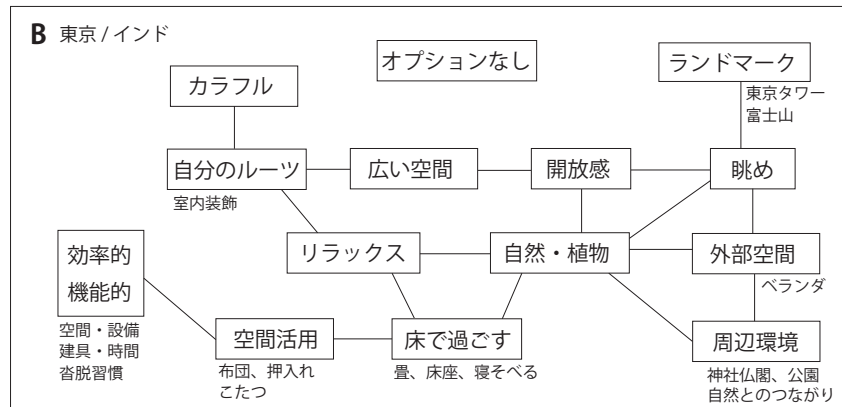


図 4-4. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム B

調査対象者C：東京ではシンガポールでの都会的な暮らし方を基本的に踏襲し、繁華街に程近い住宅街のマンションで暮らしている。部屋の広さも部屋数もシンガポール時代と変わらない。明るく光の入るリビングでくつろぎながら窓から外の街の様子を眺める時間を好む。日本では、靴を脱ぎコートや鍵など身の回りのものを整理して家に入る玄関での一連の所作を好み、清潔さの維持と気持ちの区切りとして大事な習慣となってきた。

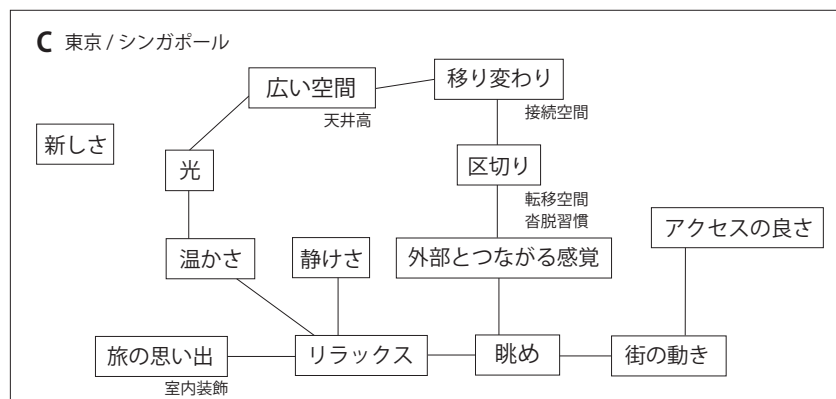


図4-5. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラムC

調査対象者 D：東京では、部屋数が少なく、部屋のサイズも小さいが、「どこにいても自分らしい空間は創り出せる。家は自分の心そのもので大きさにではなく空間を広く感じられることが大切」と考えている。日本では極力家具を持たないようにし、布団や可動式家具を活用し、部屋を広く感じられるよう工夫している。自宅周辺環境の商店街でのコミュニケーションや神社での静かな落ち着いた時間を生活に取り入れている。

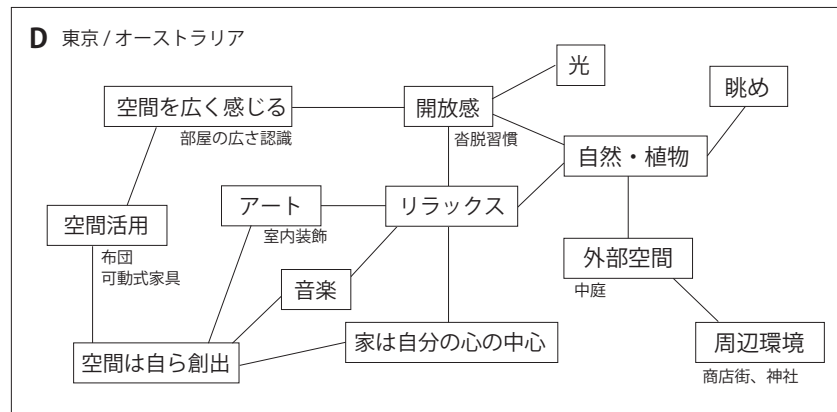


図 4-6. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム D

調査対象者 E：広いアメリカの家から日本のワンルームマンションに猫とともに移ってきた。居住空間の選択基準は予算とアクセスの良さで、空間自体にあまり拘りはない。アメリカでは部屋ごとに用途、行動、行為が異なっていたが、今はワンルームにあるベッドの上でテレビ、食事、メールを打つ、寝る等、ほぼすべての行動・行為を一ヶ所に集約している。

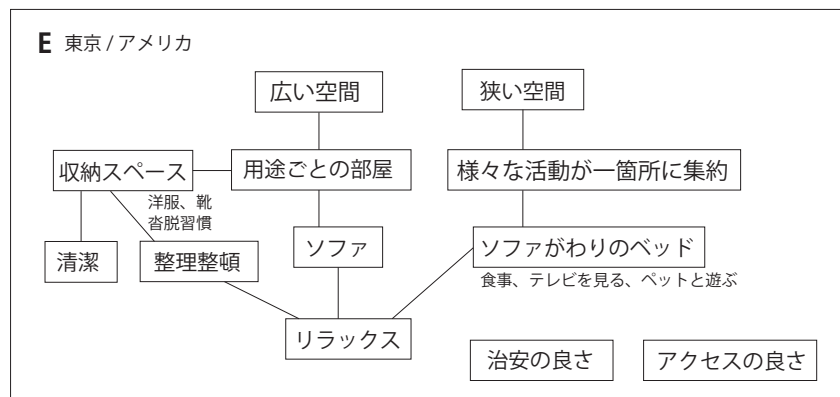


図 4-7. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム E

調査対象者F：コロンビアでは植栽あふれるパティオのある広い戸建に住んでいたが、現在は東京の高層マンションの上階で暮らしている。自分のルーツでもある自分自身が「自然の一部である感覚」を大切に考え、ベランダから街を眺めること、屋内でも自然を身近に感じられるいけばなを生けること、東京の街を自転車で気軽に移動するなど、自然や外部との繋がりを持つ生活を楽しんでいる。

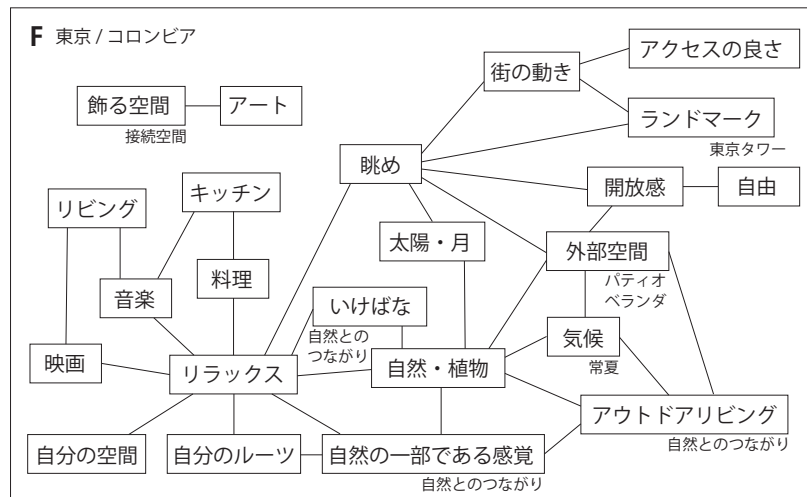


図 4-8. 居住空間と住まい方の認識の概念ダイアグラム F

4-4-2. 調査対象者全体の概念項目の整理

前項で個別に作成したダイアグラムをもとに、調査対象者全体のダイアグラムを作成した（図4-9）。前項で述べたように「リラックス」「自然・植物」「外部空間」という概念項目が4名から抽出されている。この3項目に加え、「開放感」「広い空間」「光」「眺め」「街の動き」が3名から確認できた。共通の概念項目が一定数抽出されているが、そこから展開される概念項目は多種多様であり、個々人の持つ居住空間と住まい方の認識の多面性がうかがえる。

日本の建築空間要素に関しては、布団や可動式家具による「空間の活用」や、こういった空間活用や沓脱文化などから連想される「効率的・機能的」や「区切り」などの概念項目が抽出され、空間の使い方や捉え方の機能的な効用のみならず、心理的な影響についての発話も確認できた。また、「何もない静かな空間」「床で過ごす」など和室や畳のある住まい方についての概念項目も確認できた。

4-4-3. 居住空間の認識と日本居住後の「住まい方の対応」の分類

居住空間の認識について、日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態である「不変」「変化」を起点とし、日本の居住空間における「住まい方の対応」を分類した。抽出した6種の対応の詳細を表4-3に示す。日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態として、以前と変わらない「不変」と、日本居住後に変化した状態の「変化」がある。

表4-3. 日本居住後の居住空間における「住まい方の対応」

移行に伴う 住まい方の 状態	住まい方の 対応	過去の 居住空間 との類似	経験のない 居住空間の 受け入れ	実態としての住まい方	
不変	維持	○	—	これまでの住まい方を維持	
	拒絶	×	×	これまでの住まい方を維持	
変化	適応	新規	×	○	日本の居住空間に適応する住まい方を積極的に構築
		代替	×	○	これまでの住まい方の意味内容をもとに日本の居住空間で代替可能な住まい方を見出し積極的に構築
	妥協	×	×	日本の居住空間に即した住まい方をやむなく構築	
	諦観	×	×	日本の居住空間に即した住まい方にやむなく従う	

「不変」には現在の居住空間がこれまで経験した居住空間と同じまたは似ているため、これまでの住まい方を維持している維持、これまで経験したことのない日本の居住空間を受け入れられず、これまでの住まい方を変えずに暮らしている拒絶が考えられる。

「変化」にはこれまで経験したことのない居住空間を受け入れ¹⁰⁷、日本の居住空間に適応した住まい方を構築している適応・新規、これまで経験したことのない居住空間を受け入れ、これまでの住まい方の意味内容を維持し、日本の居住空間で代替可能な住まい方を見出し、積極的に構築している適応・代替、これまで経験したことのない居住空間を受け入れておらず、日本の居住空間に即した住まい方をやむなく構築している妥協、これまで経験したことのない居住空間を受け入れておらず、妥協して日本の居住空間に即した住まい方を構築せず、やむなく従っている諦観が考えられる。

これらの観点を基に調査対象者の発話を整理する。詳細は図4-10の通りである。以下、特徴的な「住まい方の対応」について説明する。

107 本研究で用いる「受け入れる」という表現は、心理的に受容していることを想定し、一般的に「受容」という表現に含まれる受動的な意味合いではなく、より能動的、積極的な「受容」として限定的に使用している。

維持：

【沓脱習慣】 自国でも家で靴を脱いで生活していたという人が複数確認できた。日本の居住空間でも従来の沓脱習慣を維持していることがうかがえる（A, B, D, E）。A の場合、沓脱習慣は維持しているが、日本の居住空間にいわゆる日本の玄関の空間がなく、イタリアの玄関の方が日本のそれに近いものがあり、そちらを恋しく思っている珍しいケースである。

【区切り】 沓脱習慣を挙げている人の中には、家を清潔に維持できる機能的な利点のみならず、玄関を屋外と室内の心理的な区切りとして認識しているケースがあった（A, D）。

【床座】 畳の生活では、椅子やソファなどの家具を使用せず、床に直接座ることが多いが、B のケースは、来日前から配偶者の影響で床に座る習慣を得ていたため、来日後に特に床座生活について変化はなかった。

【室内装飾】 以前居住していた国から、絵画やアート作品を持参し、日本の居住空間でも継続して飾るケース（B, D）があり、自分のルーツを象徴するような色使いや宗教的な絵画から人生の折々で手に入れた思い出の品に至るまで多岐にわたっている。自分や家族の一部と見なしているという認識もあった。

【外部とつながる感覚】 部屋でくつろぎながら、室内から街の様子、人や車の動きを眺めるのが好きだという C は、来日前のシンガポールの居住空間でも、室内にしながら外の空間とつながっていたい感覚を持ち続けており、家具の配置も自分の意向を反映したものとしている。

拒絶：該当する発話は確認できなかった。

適応・新規：

【空間活用】 畳の部屋や、床座の生活、引き戸式の窓など、狭いながらも空間を広く使えるような日本の居住空間の特質を評価し、布団や可動式家具を使用した生活を実践している (B, D)。

【機能的・効率的な間取り、建具・設備】 空間活用と同じく、よく考えられた日本の機能的かつ効率的な間取りや建具、水回りの設備等を評価し、現在の住まい方において活用している (B)。

【畳】 日本ならではの床材である畳について、くつろぐ場所として、感触や匂いなど肯定的に認識し活用している (B)。

【沓脱習慣】 日本の玄関の沓脱とコートを脱ぐ、鍵を置く等のルーティーンが、家に入る / 家を出る際の儀式のようで気に入っている (C)。

適応・代替：

【自分に戻る場所】 自分自身と向き合えるような集中できる空間が必要と認識している A は、日本居住後に旅館で和室に宿泊し、必要最低限のもので構成された自然の香りのする畳の部屋で、無心になりリフレッシュする経験を得た。現在の居住空間には自分自身のための空間はないが、時折旅に出て旅館に泊まることを楽しみにしている。今後もし可能であれば畳の部屋がほしいと考えている¹⁰⁸。

【外部空間】 【眺め】 【自然とのつながり】 幼少期に過ごした家が低層の開放的な造りで中庭をアウトドアリビングとして使用し、今でもその住まい方や自然とのつながりを恋しく感じている B と F のケースでは、外部空間で過ごす時間、例えば高層階のバルコニーでくつろいだり、ランドマークや自然の移ろいなど眺めを楽しむ時間を持ち、母国とは異なるが、日本の居住空間で可能な外部空間でくつろぐ住まい方を実践している。また、近隣の公園や神社の自然豊かな環境へ定期的に出かける、いけばなを楽しむといった自然とのつながりを積極的に持っている。

108 このケースは、旅館という居住空間外に和室という自分にとってリフレッシュできる空間を見つけて時折訪ねており、厳密に言えば、継続的に暮らしてはいない。しかしながら、従来持ち合わせていた図式から新たな住まい方（過ごし方）を創出する構造は、居住空間のそれと同一であり、本稿では広義での居住空間として捉える。

妥協：

【収納スペース】玄関の造作下駄箱が小さいため、自ら靴用収納を購入し部屋に置いているが、部屋がワンルームのため更に狭くなること、靴を持って家の中に入ることを嫌い、シューズインクローゼットがあればと思う (E)。

【自分の空間】日本の居住空間では自分だけのための作業スペースがない。現在は作業する際、他の部屋を片付けてから作業し、作業後また元通りにするというを毎行っているが、本当は自分だけの作業場がほしい (F)。

諦観：

【小さい窓】初めて日本の家の窓の大きさを見た時に、気分が沈んだ。今は目が慣れてはきたけれど、イタリアの大きな窓が恋しい (A)。

【オプションなし】他に選択肢がなかったので、今の居住空間でなんとかやっている (B)。

【狭い空間】部屋がワンルームで、全ての行為・活動がベッド周辺で集約されて、集中しにくい、仕方がない (E)。

以上、日本の居住空間と住まい方の6種の対応のうち5種から該当する発話が確認できた。次項では、これらの対応と「居住空間の図式」形成との関係を検討する。

4-4-4. 日本の居住空間と「住まい方の対応」にみる「居住空間の図式」形成の推定

前項では日本の居住空間と「住まい方の対応」について、維持、拒絶、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観の6種の対応を抽出・分類した。このうち、維持、拒絶は日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態が「不変」であり、日本居住後に「居住空間の図式」が更新されていないと考えられる。例えば、維持で挙げた【沓脱習慣】であれば、家で靴を脱いだことがなかったBは、インドで結婚後、配偶者の影響で沓脱の習慣を得ており、その際沓脱にまつわる「居住空間の図式」もとに表出した住まい方が「家は靴を履いて過ごすところ」から「家では靴を脱いで過ごすところ」へと更新されている。日本居住後はこの「居住空間の図式」は更新されておらず、住まい方の状態が「不変」となったことが考えられる。

続いて、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観は住まい方の状態に「変化」がみられているものの、妥協、諦観については、日本の居住空間を受け入れておらず、「居住空間の図式」は更新されていないと考えられる。妥協について、例えば、Eのケースで、収納に入りきらない靴を出したままにせず、部屋に収納を購入し靴を整理している。「玄関には靴の収納が多い」という「居住空間の図式」は更新されてはいないが、現実在即して妥協した対応を取っている状態である。積極的な「住まい方の変化の対応」が見られた適応・新規、適応・代替については、何らかの形で「居住空間の図式」が更新されていることが推察される。次節で「居住空間の図式」形成について、居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念とともに考察する。

4-5. 居住空間の認知構造の上位概念と「住まい方の変化の対応」

4-5-1. 居住空間の認知構造の上位概念

居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念である抽象的・心理的な価値内容を把握するために、居住空間の認知構造のうち「より好ましく思う居住空間」という選好に関わる評価構造を整理する。評価グリッドの手法で得られたデータから調査対象者個人と全体の評価構造図を作成した。評価構造図の凡例を図4-11に示す。評価対象項目は、居住空間についての認識のうち住居を構成する基本的な建築空間要素の広さ、天井高、窓の大きさ、壁や天井の色の4項目である。現在の居住空間と過去の居住空間について、要素ごとに対照し、より好ましく思う居住空間を選択してもらった。その選択理由をオリジナル評価項目とし、ラダーアップを行い、上位項目を抽出した。個人の評価構造図を図4-12から図4-17に示す。個人の評価構造図からは、評価対象項目が異なっても、上位概念として同じような項目が抽出されていることがわかる。

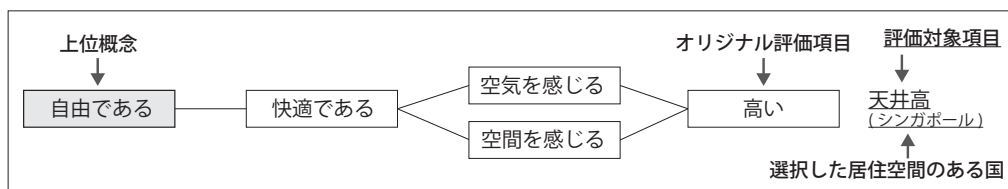


図 4-11. 個人の評価構造図 凡例

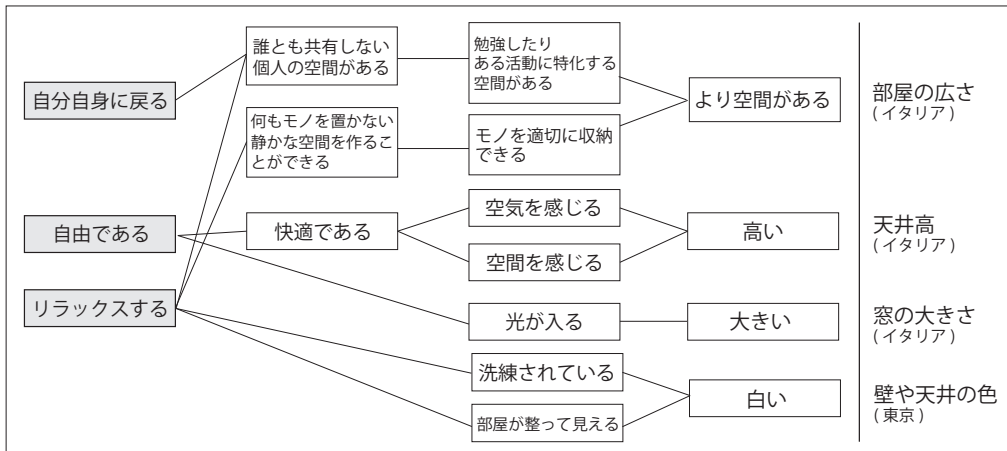


図 4-12. 個人の評価構造図 A (東京 / イタリア)

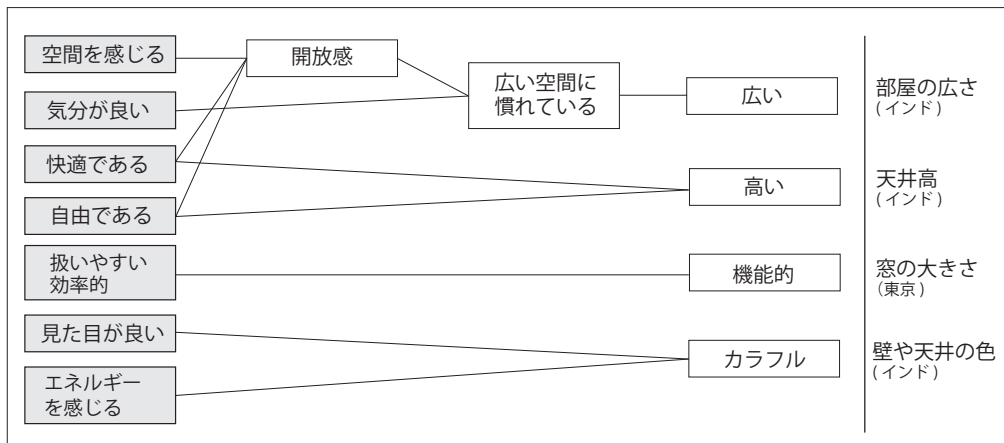


図 4-13. 個人の評価構造図 B (東京 / インド)

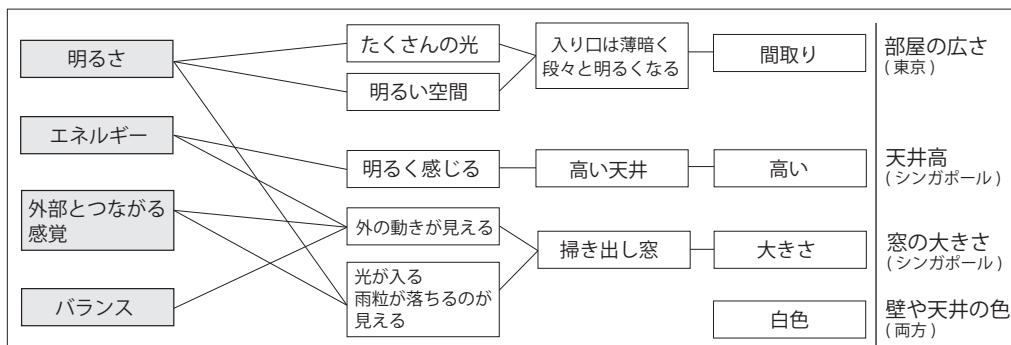


図 4-14. 個人の評価構造図 C (東京 / シンガポール)

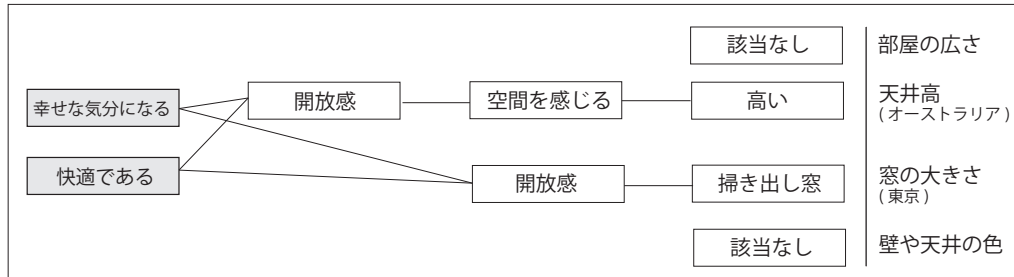


図 4-15. 個人の評価構造図 D (東京 / オーストラリア)

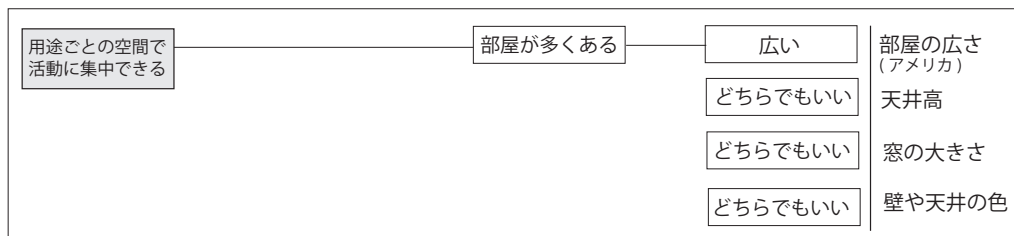


図 4-16. 個人の評価構造図 E (東京 / アメリカ)

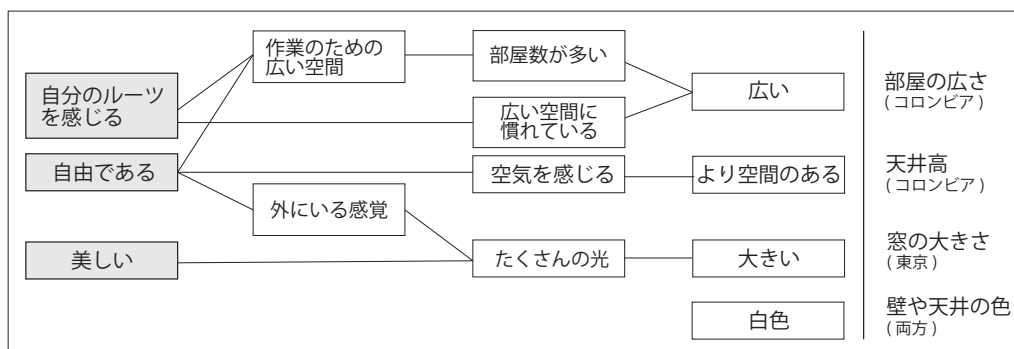


図 4-17. 個人の評価構造図 F (東京 / コロンビア)

また、評価対象項目ごとの全体の評価構造図を図4-18から図4-20に示す¹⁰⁹。太枠で示す重複した概念項目が全体の中ではごく僅かであり、図4-12から図4-17に示した回答者の評価構造が多様であることがわかる。抽出した上位概念を、空間を感じる、外部とつながる感覚といった「空間感覚」、リラックスする、気分が良いといった「快適性や感情」、そして、自分のルーツを感じる、自分自身に戻るといった「内省的感覚」の3つのグループで整理した(図4-21)。「広い」「高い」「大きい」のようにオリジナル評価項目には重複が見られるが、上位概念が上述の3グループに分散されることから、広い、大きい、高いといった感覚が意味するものの多様さがうかがえる。

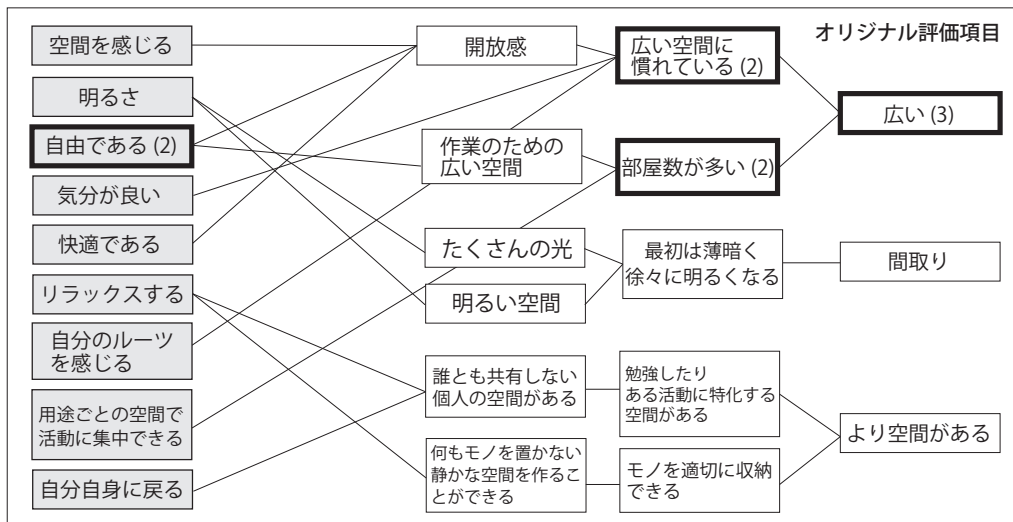


図4-18. 全体の評価構造図 部屋の広さ

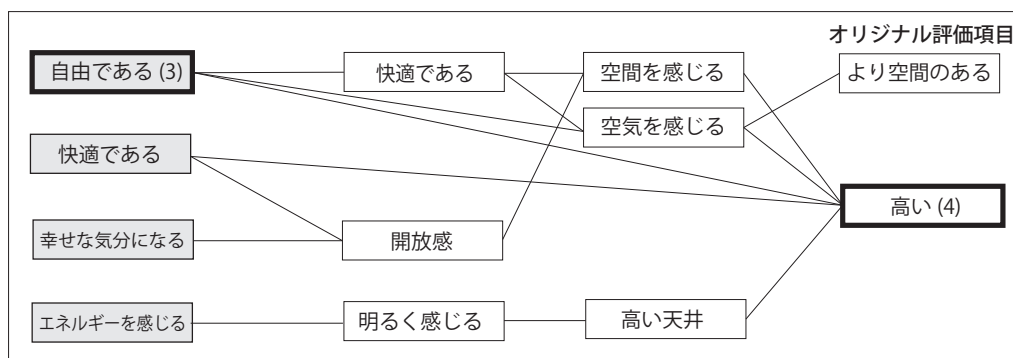


図4-19. 全体の評価構造図 天井の高さ

109 壁や天井の色はデータ数が少ないため、全体の評価構造図を作成していない。

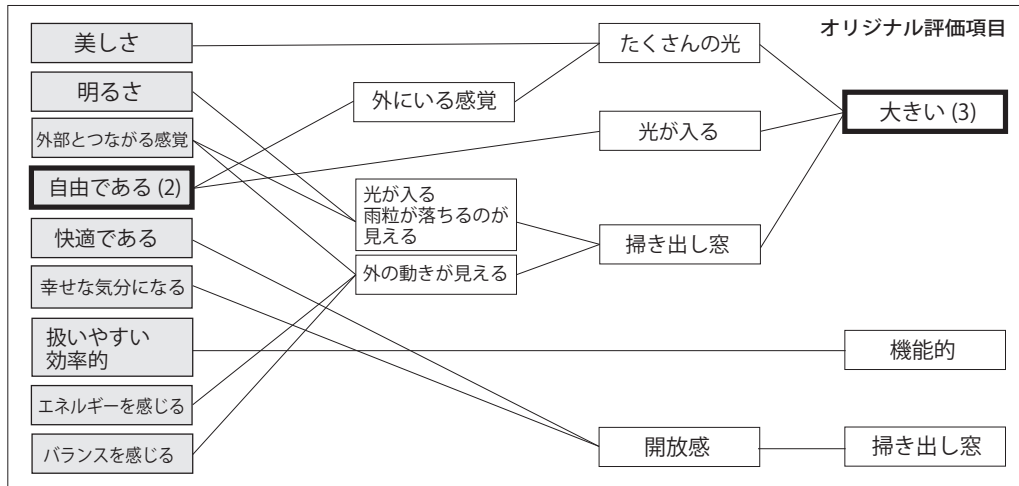


図 4-20. 全体の評価構造図 窓の大きさ

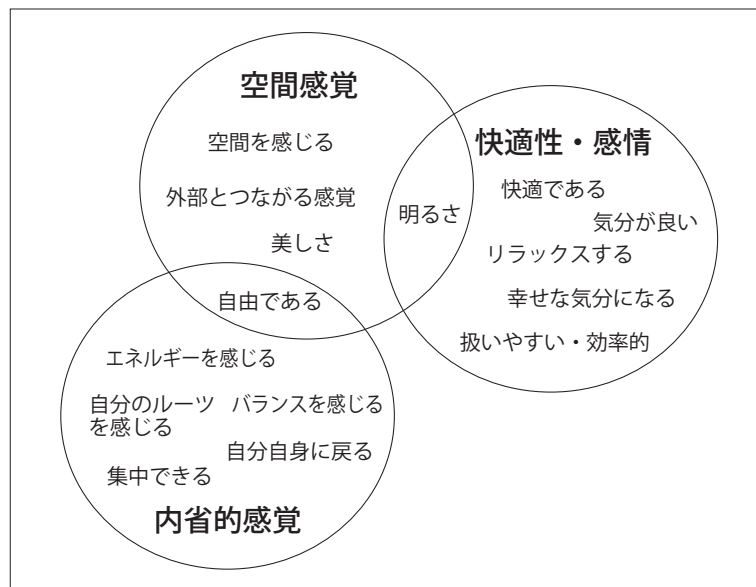


図 4-21. 抽出された上位概念の3グループ

4-5-2. 居住空間の認知構造の上位概念と「住まい方の変化の対応」

本研究では、「居住空間の図式」を形成する際の中心的な概念のうち、居住空間の選好に関わる基準が、個人の持つ好ましい居住空間の認知構造の上位概念であることを想定している。前節では日本の居住空間と「住まい方の対応」について、維持、拒絶、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観の6種の対応を抽出・分類した。このうち、積極的な「住まい方の変化の対応」が見られた適応・新規、適応・代替において、「居住空間の図式」が更新されているのではないかと推定し、以下「居住空間の図式」形成の過程を上位概念との関係から考察する。

適応・新規：

B,Dは、畳、床座の生活、引き戸式の窓、機能的な設備等、狭いながらも空間を効率的に使えるような日本の居住空間の特質を評価し、布団や可動式家具を使用した生活を実践しているが、来日前はこのような暮らし方の経験はなく、B,Dが新たに獲得した「居住空間の図式」をもとに表出させている住まい方だと考えられる。また、Cの沓脱習慣については、靴を脱ぐ履くといった動作そのものだけでなく、玄関という転移空間での一連の所作から得られる心のバランスにも言及しており、こちらも新たに加わった「居住空間の図式」であると考えられる。この「適応」のケースに共通しているのは、それまで経験のない日本の居住空間の特質に即した住まい方に接し、受け入れ実践していることである。

本研究では、新たな住まい方を受け入れる過程については把握していないが、各ケースで個人の評価構造図と照合すると、例えば【空間活用】【機能的・効率的な間取り、建具・設備】【畳】に「適応」がみられたBは、上位概念として、「空間を感じる」、「快適である」、「扱いやすい・効率的」など抽出しており、適応例の内容と見合っていると考えられる。【沓脱習慣】に「適応」がみられたCは、上位概念として「バランス」を抽出しており、Cの言及している転移空間での一連の所作を行うことで得られる心のバランスとCの上位概念として抽出されている項目とが見合っていることがうかがえる。つまり、日本居住後に新しい住まい方を知ったとしても全てを受容するのではなく、自分の居住空間認識の根幹となる上位概念と見合った住まい方であれば積極的に受け入れるのではないかと推察される。

適応・代替：

Aは自分自身とつながる空間が必要で、イタリアでは一人で過ごす空間を持っていたが、現在の居住空間ではその希望は叶っていない。しかし、旅館で和室での暮らしを体験し、必要最低限のもので構成されている静謐な空間に魅了され、リフレッシュできる空間として、旅先で楽しんでいる。

BとFは、生まれ育った環境（インド、コロンビア）での屋外を身近に感じる生活から、集合住宅の高層階へと居住空間を変えているが、両者とも自国での住まい方は継続できないものの、外部空間の過ごし方、自然との向き合い方を日本の居住空間に合わせて楽しんでいる。

AもB・Fのケースも、従来の住まい方の本質的な部分を日本の居住空間において代替可能な住まい方の中に見出している。Aの場合は、日本の居住空間で見つけた代替可能な住まい方が、偶然日本の建築空間要素からなる空間（和室）の暮らしであった。Aの評価構造図(p.148, 図4-12)から「自分自身に戻る」「自由である」「リラックスする」という上位概念が抽出されたが、Aが自分自身とつながる空間が必要と認識している意味内容にはこれらの上位概念が含まれており、新たな住まい方に反映されているのではないかと考えられる。

B・Fについては、高層住宅からの眺め等は日本固有のものではないが、富士山、東京タワー、高速道路、神社、近隣の緑豊かな公園、いけばなといった発話からは、日本ならではの居住空間の住まい方も含まれている。Bの評価構造図(p.148, 図4-13)から「空間を感じる」「気分が良い」「自由である」という上位概念が、Fの評価構造図(p.149, 図4-17)から「自分のルーツを感じる」「自由である」「美しい」という上位概念が抽出されている。自国でのアウトドアリビングや自然とのつながりのある暮らし方を恋しく思う気持ちの意味内容にこれらの上位概念が含まれており、来日後に構築した住まい方に反映されているのではないかと考えられる。

このように、適応・代替のケースも、日本の居住空間で新たな住まい方を体験し、「居住空間の図式」を更新していると考えられるが、適応・新規のケースとは異なり、新たな「居住空間の図式」を獲得して日本の居住空間に即した住まい方を実践しているのではなく、以前から持ち合わせていた「自分自身とつながる」「外部空間とつながる」「自然とつながる」といった「居住空間の図式」の上位概念に基づいた自国での住まい方を、日本の居住空間に即した日本における新たな住まい方へと翻訳し^{110, 111}、表出しているのではないかと推察される。

110 ここでいう翻訳とは、日本語から英語のような言語間翻訳ではなく、ある記号で表された意味を、別の記号で表すことのような広義な翻訳である記号間翻訳である。

111 野原佳代子, ディスカッションから学ぶ翻訳学 トランスレーション・スタディーズ入門, 三省堂, 2014

4-6. 本章のまとめ

本章では、インタビュー調査を用いて、東京在住の外国人の日本の居住空間と住まい方の認識を明らかにし、日本居住後の居住空間における「住まい方の対応」から「居住空間の図式」形成を推定した。更に、より好ましい居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念と日本居住後の「住まい方の変化の対応」から「居住空間の図式」形成の過程を考察した。

居住空間と住まい方の認識について、発話データをコード化し概念項目を抽出した。「リラックス」「自然・植物」「外部空間」「開放感」「広い空間」「光」「眺め」「街の動き」といった共通の概念項目が複数の調査対象者から抽出されているが、そこから展開される概念項目は多種多様であり、個々人の持つ居住空間の認識と住まい方の多面性がうかがえる。

より好ましい居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念について、抽出した概念を「快適性や感情」「内省的感覚」「空間感覚」の3つのグループで整理した。オリジナル評価項目で共通して見られた「広い」「高い」「大きい」といった感覚は、上位概念では上述の3グループに分散されることが確認できた。広い、大きい、高いといった感覚が意味するものの多様性がうかがえる。また、全体の評価構造図において、重複した概念項目が全体の中ではごく僅かであり、調査対象者個々人の評価構造が多様であることがわかる。

日本の居住空間と「住まい方の対応」では、維持、拒絶、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観の6種の対応をインタビュー結果から抽出・分類し、このうち積極的な住まい方の変化が見られた適応・新規、適応・代替において、「居住空間の図式」が更新されているのではないかと推定し、上位概念との関係から考察した。適応・新規では、日本の居住空間の特質に即した住まい方に接し、積極的に受け入れ実践していることから、新たに「居住空間の図式」を更新していると考えられる。適応・代替では、自国において価値を置いていた住まい方を日本の居住空間における代替可能な住まい方として実践しており、「居住空間の図式」を更新していると考えられる。この場合、適応・新規とは異なり、自国での住まい方を上位概念を基軸として日本の居住空間に即した日本における新たな住まい方へと翻訳していることが考えられる。

第5章では、本章で明らかにした「居住空間の図式」形成の過程について、第2章、第3章および第4章の各調査において日本の居住空間の認識と住まい方を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について他地域との共通性および特異性から考察することで、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について検討していく。

第5章 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程
—文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照

5-1. 本章の目的

本研究では外国人の日本における居住空間の認識と「居住空間の図式」の形成について明らかにすることが目的であるが、加えて、日本の居住空間の認識を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について整理することで、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにすることができる。第2章の文献調査では、明治時代以降現代までに日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識と住まい方を明らかにし、その捉えられ方の特徴や時間経過に伴う認識の変化を整理した。第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査において「居住空間の図式」形成について明らかにする過程で、質問紙・インタビュー調査を通して、現在東京に居住する外国人の日本の居住空間の認識と住まい方について整理した。本章では、文献調査と質問紙・インタビュー調査で得られた日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質や時間経過に伴う認識の変化について対照し、日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」¹¹²との関わりを整理する。その上で日本の居住空間の他地域との共通性と特異性を明らかにし、さらには日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程を考察することを目的とする。

5-2. 研究の方法

第2章で抽出した「日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目」として、主に「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「伝統的な建築要素」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」が挙げられた。また、時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化については、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」における「床座」「床で寝る」「沓脱習慣」で見られ、身体的対応を伴う適応があることが認められた。本章では、これらの項目¹¹³について、質問紙・インタビュー調査で得られた内容と対照していく。第3節では、日本の居住空間の認識と住まい方について対照する。続く第4節では、日本の居住空間の認識と住まい方の変化の対照を行う。第5節ではこれらの対照をもとに日本の居住空間の特質と日本における「住まい方の対応」との関わりを整理する。第6節では日本の居住空間の他地域との共通性および特異性を整理し、これらの観点から日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について考察する。

112 日本の居住空間への移行に伴う住まい方の状態として、以前と変わらない「不変」と、日本居住後に変化した状態の「変化」がある。本章のインタビュー調査ではこれらの「不変」「変化」を起点とした日本の居住空間における住まい方の状態の対応を6種類抽出し分類した(表4-3,p140)。これらを「住まい方の対応」と呼称する。

113 「伝統的な建築要素」、「都市の様子」のうち「京都」については、質問紙調査およびインタビュー調査で得られた回答が少ないため、本章での対照では除く。

5-3. 日本の居住空間の認識と住まい方ー文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照

5-3-1. 床座生活にまつわる生活様式および習慣

床座生活にまつわる生活様式および習慣に関する項目、畳、床座、床に寝る、沓脱習慣について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-1である。畳の「清潔さ」「良い匂い」は共通して抽出されている。床座については、身体的対応としてどちらも「慣れる」「慣れてきた」という適応のケースが見られる。床に寝ることについては、床に横になることの快適さや就寝時以外は布団を押入れに片付けて部屋を寝室とは別の用途で使用できる空間活用についての評価が共通して述べられている。沓脱習慣に関しては、「慣れた」という適応のケースが共通して見られた。また、質問紙・インタビュー調査では、「元々自分の国でも家で靴を脱いでいた」という人が複数見られた。その中にはアジアや東欧地域出身者の「自国と同じ習慣」という人もいるが、自国の習慣とは異なる場合も日本に住む以前から「親がそうしていたから、その環境で育った」と、沓脱習慣を取り入れている人もいる。明治初期から比較すると、現代では沓脱文化が評価され、沓脱習慣の取り入れが起きているのではないかと推察される。

表 5-1 床座生活にまつわる生活様式および習慣についての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<p>【畳】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・清潔さ ・良い匂い ・やわらかな感触 ・簡素さ・清潔さは身分に関係ない ・モジュールがある <p>【床に座る】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辛い ・慣れる ・床座の生活は好んでいない ・地面に近い感じ <p>【床に寝る】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康的である ・熱くもなく硬くもない ・就寝時以外は布団は押入れにしまい、部屋は広く使える、空間活用できる。 <p>【沓脱習慣】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・習慣化するのに苦労する ・面倒だ ・後に慣れて快適に感じる 	<p>【畳】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・清潔 ・使用したことがない ・気に入っている ・快適 ・美しい ・手入れが楽 ・家具を置くのには脆い ・寝たり座ったりできる ・マットレスがなくても横になれる、快適 ・良い香り ・質感、匂いに自然の恵みを感じる <p>【床に座る】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気楽に座る ・清潔なので慣れてきた <p>【床に寝る】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就寝時以外は布団は押入れにしまうので、部屋は広く使える、空間活用できる。 <p>【沓脱習慣】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元々自分の国でも家では靴を脱いでいた ・良い習慣 ・部屋を清潔に保つことができる ・自分の国と同じ習慣 ・快適な空間への入口を現している ・日本では畳を使用するので必要 ・日本では床座で食事をするので理解できる ・必要のない時もある ・驚いたが慣れた ・プレッシャーを感じる ・自分の国でももっと取り入れられると良い ・気にしない

5-3-2. 居住空間の簡素さ

居住空間の簡素さについて、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-2である。文献調査においては「簡素である」という記述が、散見されるが、質問紙・インタビュー調査において「簡素さ」はそれほど多くは語られていない。日本の旅館に滞在した時に感銘を受けた「花や掛け軸だけ飾られている何も無い空間」や、日本のあまり広くない居住空間を「布団を使い床座で生活し、家具をあまり持たずに暮らす」ことにより空間を創り出している、といった従来の日本家屋の居住空間および生活様式に即した居住空間において、家具のない空間や簡素な飾りについて語られている。簡素さは、現代の居住空間の認識において和室や和室での生活様式に見出されていることがうかがえる。

表5-2 居住空間の簡素さについての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<p>【家具のない空間】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・室内にもものがない ・必要な家具もほとんどない ・質素で洗練されたセンスを持ち、見栄をはることもない生活を送っている <p>【簡素な造り / 装飾】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・控えめ ・一点のみの装飾の効果 ・素材や色合いの素朴さ、装飾の妙 	<p>【家具のない空間】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花や掛け軸だけ飾られている何も無い空間 ・日本では床座で、あまり家具を持たずに暮らしている <p>【簡素な造り / 装飾】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花だけ掛け軸だけで壁には何の装飾もない

5-3-3. 自然とのつながりおよび向き合い方

自然とのつながりおよび向き合い方について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-3である。文献調査では住居の庭の描写が多く見受けられたが、質問紙・インタビュー調査では居住形態が集合住宅である人が8割を超えるため、庭についての認識について回答は得られなかった。しかし、集合住宅に居住しているため、窓からの眺めが良く、例えば「太陽や月の色が変わっていくところが見られる。夕暮れ時の光の変化とか」「富士山や日の入りが見える、美しい」「キャンプ用の椅子をベランダに出し、コーヒーを飲みながら空を眺める」など、家にいながら自然のうつろいを感じることにについて複数の人が語っている。また、文献調査においてベルクが日本の住宅では「通りを掃除して鉢植えを飾る」と指摘しているが、インタビュー調査からも東京の住宅街で見かける「家の軒先に置いてある植物が好き」という評価が挙げられている。住居の奥にある庭だけでなく通りに面した狭い空間にも植物を飾る日本の居住空間における自然のかかわり方の特徴が両者にみられる。文献調査においてレガメやバードが「生け花」の美しさを描写し、女学校で生け花の稽古の様子を叙述しているが、現代では「生け花」に魅了され技術を習得し日々の暮らしに取り入れている。インタビュー調査では、畳の匂いや質感から自然を感じていることを語る人も複数いた。インタビュー調査対象者の居住形態は全員、木造以外の集合住宅であり、現代の東京の集合住宅において、都市や室内における限られた要素を通して自然の感覚を呼び起こされていることが考えられる。

表 5-3 自然とのつながりおよび向き合い方についての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<ul style="list-style-type: none"> ・家屋が開放的（自然と一体の暮らし） ・狭い家屋でも庭が併設されている ・自宅前の通りに面しても植物を飾る（街に溢れ出している） ・自然由来の道具を使用する（竹製品） ・生け花 ・大自然の中でピクニックをする ・自然由来の通りの名前が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベランダで植物や野菜を栽培している ・週末は近隣の公園や神社に出かける ・街で見かける家の軒先に置いてある植物が好きだ ・畳の部屋の匂いで自然を感じる ・畳の感覚が、暑くもなく自然の恵みのような感じがする ・家の中から窓に雨がたたうのを見るのが好き ・窓が掃出し窓なので、開放感がある ・太陽や月の色が変わっていくところが見られる。夕暮れ時の光の変化とか ・家から富士山が良く見える。日の入りが良く見える。とても美しい。 ・ベランダにキャンプ用の椅子を出し、外の様子を眺めながらコーヒーを飲み、空を眺める。 ・自然のものと繋がっていたいと思い、偶然雑誌をで見ていけばなを始めた。家で花をいける時間を楽しんでいる。

5-3-4. 部屋の広さ・天井高についての認識

部屋の広さ・天井高についての認識について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-4である。文献調査と質問紙・インタビュー調査の両方から、部屋の小ささ・天井の低さが指摘されているが、質問紙調査においては、部屋の広さを「ちょうどいい」と評価する人が「狭い」と評価する人とほぼ同数であり、天井高について「ちょうどいい」と評価する人は「低い」と評価する人の5倍に上る (p.96, 図3-5) ことから、現代の日本の居住空間において、部屋の小ささや天井高の低さが必ずしも主な評価ではないことがうかがえる。しかしながら、日本の居住空間にはない「自国において重要と認識している物や事柄」についての質問では、「広い空間」と回答した人が5名おり、「大きい窓」「高い天井」「シンクの高さ」「バスタブの大きさ」という回答もあった (p.109, 図3-29)。居住空間を自国との対照で捉えた時に部屋の大きさや天井高の高さのみならず身体寸法の異なるシンクやバスタブが挙げられることから、日本の居住空間の寸法が自国のそれと異なるとの認識は一定数あるといえる。仕切りや寝具、可動式家具の移動で部屋を広く使用する空間活用については、インタビュー調査からは布団や炬燵を使用し、空間を用途に応じて変化させながら住まう様子がうかがえる。シドモアが「寝室の仕切りは、襖を滑らせて壁にします」¹¹⁴ と、バードが「襖は開け放たれ、自分の部屋だったところは広々とした畳敷きの大部屋の一部となりました」¹¹⁵ と記したように襖によって仕切られていた部屋が必要に応じて襖を外すことにより広い空間としても使用可能となることなど、明治時代初期にみた住まい方の特徴が、現代の日本の居住空間に引き継がれていることが推察される。

表 5-4 部屋の広さ・天井高についての認識の対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の小ささ ・天井の低さ ・仕切りにより部屋を広く使用することが可能。 空間活用ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の小ささ ・天井の低さ ・シンクが低い ・家具を置かないなど空間の使い方で空間を広く感じる ・寝具を片付けることにより、日中広く部屋を使うことができる。 【日本の居住空間にはない「自国において重要と認識している物や事柄」】 ・広い空間 ・高い天井 ・大きな窓 ・シンクの高さ ・バスタブの大きさ

114 エリザ・R・シドモア, 外崎克久訳, 『シドモア日本旅行』, 講談社, [2002] 2020, P189

115 イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 上』, 講談社, [2008] 2021, P133-134

5-3-5. 仕切りとその機能性

仕切りとその機能性について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表 5-5 である。文献調査と質問紙・インタビュー調査ともに仕切りの存在が視覚的な絶縁を創り出しているも「音が筒抜け」であること、「取り外しが容易で、用途に応じ空間の大きさを変化させることができる」ことについて触れられている。しかし、雨戸開閉時のけたたましい音、襖・障子開閉時の静かさ、襖・障子の引き手の位置の低さ、襖や障子の張替え等の維持管理については文献調査による記述のみとなっている。質問紙・インタビュー調査において、和室や和室での生活様式において身近に理解できるこれらの認識が挙げられなかったのは、文献調査の調査対象書籍の著者と、質問紙・インタビュー調査の対象者の日本家屋に対する関心度合いが異なることも考えられるが、質問紙調査において、襖や障子などの間仕切りが家にある回答者が2割にも満たなかったことから (p.102, 図 3-19)、現在の東京では和室のある集合住宅が減少しており、日本の仕切りに接する機会が希少となってきていることも一つの要因ではないかと推察される。

表 5-5 仕切りとその機能性についての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<ul style="list-style-type: none"> ・襖・障子の開閉音：静か ・雨戸の開閉音：騒々しい ・視覚的な絶縁→音が筒抜け ・暖簾・簾は視覚的な絶縁とともに風を通す ・襖や障子の引き手の位置・床座による身体的対応 ・襖や障子の張替え・新陳代謝 ・襖や障子の付け外しによる空間活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・実用的・便利 ・壊れやすい ・音が筒抜け ・取り外しが簡単 ・空間の効率的活用 ・開き戸と異なり開閉が省スペースで可能

5-3-6. 快適性にまつわる感覚

快適性にまつわる感覚について文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表 5-6 である。文献調査で得られた記述が圧倒的に多い。

光環境において、カーの指摘した「蛍光灯の青白い光」ではなく、「電球色の間接照明を好む」ことがインタビュー調査で語られていることと、におい環境において、畳のイグサの香りについて述べられていることが、共通項として挙げられる。一方で、温熱環境における「冬の寒さ」、音環境における「声が筒抜けで聞こえてしまう」、におい環境における「厠の臭い」といった快適性に劣る項目について、現代の東京の居住空間の認識としては挙げられていない¹¹⁶。また、本研究で取り扱う範囲を超えているが、「お風呂が沸きました！」と音声で知らせる浴室の「自動湯はり機能」について面白いという回答があった。

清潔さについては、文献調査からは主に「畳の清潔さ」の記述が挙げられている。インタビュー調査からも「床のきれいさ」について語られており、沓脱習慣とともに床の清潔さも日本の居住空間の変わらない特徴であることがうかがえる。また、質問紙調査において、自国の居住空間にはない「日本において重要と認識している物や事柄」についての質問では、「清潔さ」が6名から挙げられ、街（公共の場）の清潔さを指摘する回答もあった。日本の居住空間における清潔さは明治時代も現在も変わらぬ移住した外国人の日本の居住空間の認識といえる。

表 5-6 快適性にまつわる感覚についての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<p>【温熱環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏の暑さに対応する住居の開放性 ・冬は寒い—火鉢等で暖をとる <p>【光環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障子を通した光 ・紙の行燈が人気 ・蛍光灯の青白い光が氾濫している <p>【音環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雨戸の開閉音が騒がしい ・人々の話し声が筒抜け <p>【におい環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・厠の臭い—離れていても臭う ・畳のイグサや花の香り <p>【清潔さ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畳の清潔さ ・家は清潔で木の床は磨き込まれている ・汚れひとつない畳座 ・縁側も階段も磨き込まれている 	<p>【温熱環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・炬燵の使用 <p>【光環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天井の蛍光灯よりも間接照明や電球色 <p>【音環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・該当なし <p>【におい環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畳の香りが良い <p>【清潔さ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木の床がとても清潔 ・街の清潔さ

116 石川・布野（2008）（p.10, 注 23）の研究では、木造のアパート居住の調査対象者から「隣の音が気になる」という指摘が挙げられており、建物の構造により、今もなお音環境の問題が存在していることが考えられる。

5-3-7. 都市の様子（東京 / 街並み・建物・住居）

東京 / 街並み・建物・住居について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-7である。文献調査からは東京の中心地の様子や、活気のある庶民の暮らし、住宅街についての記述が挙げられている。一方で、質問紙・インタビュー調査からは、調査対象者の居住空間としての東京、つまり調査対象者の住居周辺の環境を中心としてみた東京の様子が語られている。ここで描かれている東京の暮らしからは、徒歩圏内に自然あふれる公園や静かな神社、商店街、スーパーなど活気のある場所があり、家の中で静かに過ごすしながらも外の活気を眺めることのできる、住居と周辺環境が調和を保ちながら融合している居住空間であることがうかがえる。ここに文献調査で得られた項目「活気のある庶民の暮らし」「通りの喧騒から離れた静かな田園生活」と共通する人々の生活を見出すことができるのではないかと考える。

表5-7 東京 / 街並み・建物・住居についての対照

文献調査	質問紙調査・インタビュー調査
<ul style="list-style-type: none"> ・街全体が見える場所はない。 ・全般的に通りは趣に欠け、印象に残らない。 ・夢に描いた大江戸ではなく、ぎらつく飾り窓、ぎらぎらした模造品の山に面食らう。 ・庶民の街一生活圏は活気があり、人々の穏やかな気性、行儀のよい振るまいが見られる。 ・住宅街は通りの喧騒から離れて鄙びた庭があり、静かな田園生活がある。 ・郊外には庭の付いた分譲の集合住宅がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家の近所に公園や神社があるので家族でよく出かける。 ・最寄駅から商店街があり、お店の人たちに挨拶をしながら、家に帰る。 ・家の近くに神社がありよく通る。宗教的な意味合いではなく、静かなのでよく行く。 ・家の近所は静かな住宅街だけれど、歩ける距離にスーパーがある。 ・地下鉄やバスに乗るよりも自転車で出かける。気軽に出かけられる。 ・家にいながら、窓から街の様子、人々の動きを眺めるのが好き。 ・ベランダから高速道路の車の流れ、人々の動きを観察するのが好き。

5-3-8. 宿泊施設としての日本の旅館

日本の旅館について、文献調査と質問紙・インタビュー調査の結果を対照したものが表5-8である。文献調査からは日本の旅館が概ね清潔で気持ちの良い雰囲気、思いやりのある対応がある場所であることがうかがえる。関東から信越を抜け東北へと旅したバードは、時に「ひどい宿屋」に宿泊したことを記述しているが、旅の中盤でそれまでの経験から日本の旅館の質の高さについて「世界のどの国へ行っても同じように辺鄙なところで同等の宿泊設備は得られないだろう」と述べている。インタビュー調査からは、日本の旅館が床座で過ごす簡素で木の良い香りのするリラックスできる空間であることが語られている。

日本の旅館には、本節でこれまで対照してきた日本の居住空間の「床座生活にまつわる生活様式および習慣」「居住空間の簡素さ」「自然とのつながりおよび向き合い方」「仕切りとその機能性」「快適性にまつわる感覚」の特質があり、現代の東京の居住空間では少なくなっている畳の部屋、襖や障子などの仕切り、床間などを体験できる場所である。本研究では日本の旅館を広義の居住空間と捉えているが、実際の居住空間における日本の建築空間要素が減少している中、明治時代と同様に現代において日本の居住空間の特質が日本の旅館に息づいていることがうかがえる。

表 5-8 宿泊施設としての日本の旅館についての対照

文献調査	インタビュー調査
<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いた気持ちのよい雰囲気がある ・下卑たところ、がさつなところが一切ない。 ・どこに行っても、快適にすごしてもらいたいという心頭る思いやりがある。 ・宿泊設備（蚤と臭気以外）は素晴らしく、世界のどの国へ行っても、同じように辺鄙なところで同等の宿泊設備は得られないだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・木の香りだけ。とても本質的な空間。必要のないものがない。たくさんものに囲まれていないのでリラックスできる。畳の部屋がいいと思ったのは旅館に泊まってから。そこにいるとリフレッシュする。

5-3-9. 本節のまとめ

本節では、文献調査で抽出した「日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目」について、文献調査と質問紙・インタビュー調査で得られた内容を対照し、各項目ごとに表5-1から表5-8に示し考察した。以下をもってまとめとする。

・床座・床に寝る・畳 / 床座生活にまつわる生活様式および習慣

「床座」については「慣れる」「慣れてきた」という適応のケースが、「床に寝る」では、空間活用への評価が、「畳」では清潔さや良い匂いといった印象が、両調査から共通して語られている。語られている内容に大きな相違は見られないが、質問紙調査において、家に畳の部屋がある人が5名であり(p103, 図3-23)、現在東京に居住する外国人にとって「畳」を使用する機会や「床座」や「床に寝る」経験がない人が多いことがうかがえる。

・沓脱習慣 / 床座生活にまつわる生活様式および習慣

「沓脱習慣」については「面倒だ」「プレッシャーを感じる」など新たな習慣として受け入れられていない様子や、「快適だ」と良い習慣と捉えている認識が両調査から共通して挙げられている。質問紙・インタビュー調査からは「自国でも靴を脱いで生活をしていた」という回答があり、自国の習慣と同じ場合や、自国の習慣にはないが親が沓脱習慣を評価し家で取り入れていたという人もいる。明治初期の書籍では自国でも沓脱習慣があったという記述はなく、現代において沓脱習慣が評価され取り入れられるようになったことがうかがえる。

・居住空間の簡素さ

居住空間の簡素さについて、文献調査からは「簡素である」という記述が多く見られるが、質問紙・インタビュー調査では、和室や旅館を語る際に「簡素さ」に触れる程度で、文献調査ほど顕著ではない。先述の床座・床に寝る・畳の項目と同じように、現在東京に居住する外国人にとって、和室での生活様式を体験する機会が少ないことも一因であるのではないかと推察される。

・仕切りとその機能性

仕切りについては、両調査から共通してその機能性や脆弱性が抽出されているが、雨戸開閉時のけたたましい音、襖・障子の引き手の位置の低さ、襖や障子の張替え等の維持管理等、和室や和室での生活様式において身近に理解できるこれらの認識については文献調査による記述のみとなっている。質問紙調査において、襖や障子などの間仕切りが家にある回答者が2割にも満たなかったことから(p.102, 図3-19)、現在の東京では和室のある集合住宅が減少しており、日本の仕切りに接する機会が減少していることが考えられる。

・自然とのつながりおよび向き合い方

自然とのつながりおよび向き合い方について、両調査で共通項として、通りに面した家の軒先に植物を飾る様子や、日本の伝統文化である生け花が挙げられている。文献調査と質問紙・インタビュー調査では主な居住形態が異なることから、例えば文献調査で家屋が開放的であったり、小さくとも庭のある居住空間という内容が抽出されているが、質問紙・インタビュー調査で該当する内容は見当たらない。しかしながら、集合住宅の高層階から月や山、街を眺めるといった自然を感じる暮らし方や、ベランダで植物や野菜を育てる等、植物とともにある生活であることは共通している。

・部屋の広さ・天井高についての認識

部屋の広さ・天井高についての認識は、「部屋の小ささ」、「天井の低さ」といった空間の寸法に関する評価と「仕切りによる空間活用」の機能的な評価が両調査から共通して挙げられている。現代の日本の居住空間において、部屋の小ささや天井高の低さが必ずしも主な評価ではないことがうかがえるが、居住空間を自国との対照で捉えた時に部屋の大きさや天井高の高さのみならず身体寸法の異なるシンクやバスタブが挙げられることから、日本の居住空間の寸法が自国のそれと異なるとの認識は一定数あるといえる。

・快適性にまつわる感覚

光環境において、「電球色の間接照明を好む」ことやおい環境において、畳のイグサの香りについて述べられていることが、両調査の共通項として挙げられる。一方で、明治時代に顕著に挙げられた快適性に劣る項目について、現代の東京の居住空間の認識としては挙げられていない¹¹⁶。住宅の性能向上により、こういった不快感につながる事象は改善されてきているのではないかと考えられる。

清潔さについては、日本の居住空間における清潔さは明治時代も現在も変わらぬ移住した外国人の日本の居住空間の認識といえる。

・都市の様子

東京都市部の生活の様子として、徒歩圏内に自然あふれる環境や商店街など活気のある、住居と周辺環境が調和を保ちながら融合している居住空間であることが質問紙・インタビュー調査から明らかになっている。文献調査で得られた項目「活気のある庶民の暮らし」「通りの喧騒から離れた静かな田園生活」と共通する人々の生活を見出すことができるのではないかと考える。

・宿泊施設として日本の旅館

日本の旅館は、両方の調査からリラックスできる落ち着いたよい場所であるという共通認識が抽出されている。日本の旅館は、本節でこれまで対照してきた日本の居住空間の「床座生活にまつわる生活様式および習慣」「居住空間の簡素さ」「自然とのつながりおよび向き合い方」「仕切りとその機能性」「快適性にまつわる感覚」の特質があり、実際の居住空間における日本の建築空間要素が減少している中、明治時代と同様に現代において日本の居住空間の特質が日本の旅館に息づいていることがうかがえる。

5-4. 日本の居住空間の認識および住まい方の変化ー文献調査とインタビュー調査との対照

5-4-1. 日本の居住空間の認識および住まい方の「変化」の捉え方

文献調査において、時間経過を伴う居住空間の認識や住まい方の変化に関する記述を考察した。日本移住後の居住空間の認識や住まい方から時間経過とともに変化した居住空間の認識や住まい方について「語り」の中から該当項目を抽出し、整理することで「変化」を捉えている。一方、インタビュー調査においては、日本移住前後の住まい方に変化のあった場合を「変化」として捉え、住まい方の変化に伴う日本の居住空間の認識について詳細を尋ねている。本節では、第2章5節で整理した日本の居住空間の認識および住まい方の変化について、第4章4節で整理した日本の居住空間の認識および住まい方の変化 (p.142, 図4-10) と対照する。

5-4-2. 時間経過を伴う日本の居住空間の認識および住まい方の変化ー文献調査とインタビュー調査との対照

文献調査から得られた日本の居住空間の認識および住まい方の変化について該当する項目は、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」のうち、「床座」、「沓脱習慣」、「床で寝る」およびこれらの項目に関連した「畳」であった。時間経過を伴う居住空間の認識および住まい方の変化における文献調査とインタビュー調査との対照を表5-9に示す。変化の詳細については、次項以降に述べる。

表5-9 時間経過に伴う居住空間の認識および住まい方の変化の対照

文献調査	インタビュー調査
<p><床座> 外国人にとって正座はひどくつらく慣れるまでに練習がいる。 → 今では一時間半、すこしも苦痛を覚えずに、座っていることができる。</p> <p>厚くて清潔な、弾力性のある畳が、どんなにすてきでも、私の体がその上での生活を好んでいゝるなどは考えないでほしい。</p> <p><床で寝る> 最初は気分が悪くなり寝付けない。 → 慣れてくる。健康的だと思う。</p> <p><沓脱習慣> 万事が面倒で妙な感じ → 靴を履かない方が自然、裸足の方がもっと自然になる。 畳は素晴らしい。暑くない、硬くもない。</p>	<p><畳> マットレスも必要なく、横になるだけで快適。自然を感じる。</p> <p><沓脱習慣> 靴を脱ぐことで、空間の内側と外側が規定される。清潔さが保たれる。身につけていたものを一つ一つ取る儀式のようなルーティンが気に入っている。</p>

5-4-3. 文献調査で抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化

1) 床座

床座については、リーチが「厚くて清潔な、弾力性のある畳が、どんなにすてきでも、私の体がある上での生活を好んでいるなどは考えないでほしい。それは大違いだ。」¹¹⁷と述べている。リーチは、畳の清潔さや床材としての質を評価しているものの、身体的な対応としては受け入れていない。

一方、モースは来日当初は「外国人にとって正座は、ひどくつらいもので、なれるには、ずいぶん練習がいる、何年も洋行した日本人にとっても、この習慣をまたはじめるのは、たいへんつらいことである。」¹¹⁸という認識であったが、3度目の来日時である1883年1月18日の記述では「私は日本風に、両足を真下にして坐らねばならなかった。この坐り方は、外国人にとっては、初めの間は、やり切れぬものであるが、今では私は一時間半、すこしも苦痛を覚えずに、坐っていることが出来る。」¹¹⁹と、正座について慣れて長時間対応できるようになったことを記している。このように、モースはまとまった時間を床座で過ごすことができるようになったと述べ、居住空間の認識が変化したことがうかがえる。

2) 床に寝る

タウトは、来日初日に床に敷いてもらった布団ではなく持参した毛布を敷いて寝たものの、「私は寝つこうとして横向きになった、しかしそうすると肩のあたりが圧しつけられてひどく気持ちがわるく、寝入るなどということは思いもよらない、忌々しいことだ。急に羽根布団なしで眠ろうとするのだからなかなか容易でない。」¹²⁰と、不慣れであったことを記している。しかし、後に適応していったことを「私は畳の上に寝ることはもうすっかり慣れて、柔らかい羽根布団にくるまるよりもはるかに健康的であるとさえ思っている。」¹²¹と記している。このようにタウトは床で寝ることに身体的に慣れ、さらには床で寝る行為に「健康的である」と価値を見出し適応していることがうかがえる。

3) 沓脱習慣

タウトは訪日当初、沓脱習慣について「家のなかでは縁側や廊下でスリッパを用いるが、便所ではそこにあ

117 パーナード・リーチ, 柳宗悦訳, 水尾比呂志補訳, 『パーナードリーチ 日本絵日記』, 講談社, [2002] 2022, P129

118 エドワード・S・モース, 上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳, 『日本のすまい・内と外』, 鹿島出版会, [1979] 2003, P136

119 エドワード・S・モース, 石川欣一訳, 『日本その日その日』, 講談社, [2013] 2021, P309

120 ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P39

121 ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P96

る草履とはき換える、しかし畳のうえでは足袋だけである。靴だとぬいだり穿いたり或はスリッパにはき換えたりして万事がひどく面倒だした妙な感じを与えるが、下駄や足袋は日本人にとっては非常に簡便でありかつ自然でもある。」¹²² という認識であった。しかし、時間経過とともに、「また不思議なことに、家のなかを靴下だけで歩くのがもう今ではまったく自然になり、それどころか靴下もはかずにいる方がもっと自然でかつ快く感じるようになった。そうなると畳は実に素晴らしい、熱くもなければ硬くもない、——昼食後の休息などに私はうちつけに畳のうえへごろりと横になつたりする。」¹²³ といったように、靴下や裸足で家の中を歩くことに慣れ、快適さも感じるようになっていく。このように、タウトの沓脱習慣における住まい方の変化については、家の中で靴を脱ぐ習慣が定着し、身体的な快を見出し、さらに畳の価値を見出している様子が考えられる。

5-4-4. インタビュー調査で抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化

1) 床で過ごす

「家というのは一番の場所だと思っている。仕事に行き帰ってきてくつろぐ場所。畳の部屋はマットレスも必要なくただ横になるだけで快適。畳の感覚が本当に好き。暑くもなく、自然の感じがする。自然の恵みのような感覚。」(B:162-165)

調査対象者Bは、日本に移住して初めて畳の部屋を知る。仕事から家に戻りくつろぐ場所として、マットレスの必要もなく横になれる、自然を感じる触感や質感、快適さといった畳の利点について述べており、床で過ごすことに適応している様子がみられる。

2) 沓脱習慣

「日本の玄関が好き。物理的に靴を脱ぐことで空間の内側と外側の区切りを表していて、ここからは清潔に保たれていて、身につけていたもの、コートを脱いだり、鍵を置いたり、この流れが一つの儀式のようで気に入っている。シンガポールにはこういった玄関はなかった。古い時代のフィリピンにも洪水を避けるために段差のある玄関があった。もし自分の家をシンガポールで設計する時があれば、必ず日本の玄関を作ろうと思っている。」(C: 191-202)

調査対象者Cは、日本に移住して初めて玄関で靴を脱ぐようになる。室内の清潔さが保たれるという機能的な面だけでなく、家と外の心理的な区切りとなっていることも評価し、沓脱習慣のある住まい方に適応している。

122 ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P92

123 ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P105

5-4-5. 本節のまとめ

本節では、文献調査において時間経過を伴う日本の居住空間の認識および住まい方の変化が抽出された「床座生活にまつわる生活様式および習慣」について、インタビュー調査で得られた発話と対照した。文献調査とインタビュー調査で抽出されているのは、「床座」、「床で寝る（床で過ごす含む）」、「沓脱習慣」についての記述と発話である。「床座」では、時間経過に伴い正座が苦でなくなったモースと、畳がどれほど素敵であってもその上での生活は好んでいないというリーチの相対する見解が述べられている。「床で寝る」では、床で寝ることにまつわる「健康的」「マットレスも必要なく快適」といった利点が語られている。沓脱習慣についても、裸足でいる方が自然となった自らの適応状態を認識し「畳はすばらしい。暑くも硬くもない」と語ったタウトや、「清潔さが保たれる」「外と内の境界線となる」というインタビュー調査の発話から、沓脱習慣を住まい方に取り入れている根拠となる沓脱習慣にまつわる価値内容が語られている。時間経過を伴う住まい方の変化として、文献調査では、日本居住直後と住まい方の変化があった時点での記述を対照しており、モース、タウトの記述からは身体的適応が読み取れる。インタビュー調査では、住まい方の変化について自国での住まい方と現在の住まい方とで対照しているため、日本居住直後と現在の日本での住まい方の変化の過程は捉えておらず、身体的適応については把握していない。しかしながら、リーチが畳の価値を評価しているものの、身体的に適応しておらず住まい方が変化していないことから、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」において、住まい方の変化には価値内容の評価のみならず身体的適応も関わっているのではないかと考えられる。このように、日本の居住空間に適応していく中で、身体的な対応とともにその特質にまつわる価値内容の評価を行うことがうかがえる。

上述のように、日本移住後の住まい方の変化には、日本の居住空間の特質への身体的適応と特質のもつ価値への評価が関わっているのではないかと推察されるが、文献調査から抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化の記述は床座生活にまつわるもののみであった。日本の居住空間の特質と日本の居住空間の認識と住まい方の変化の関わりを明らかにするためには、他の居住空間の特質についても検討する必要があると考える。次節では本節で取り上げた「床座生活にまつわる生活様式および習慣」を含む第3節で対照した日本の居住空間の特質と、本節で取り上げた「床座生活にまつわる生活様式および習慣」の日本の居住空間の認識と住まい方の変化についての記述とインタビュー調査で抽出した日本の居住空間の認識と住まい方の変化についての発話を整理し、日本の居住空間の特質と日本の居住空間における「住まい方の対応」の関わりについて検討する。

5-5. 日本の居住空間の特質と日本の居住空間における「住まい方の対応」との関わり

第3節では、第2章で抽出した日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目のうち、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」の項目について、質問紙・インタビュー調査で得られた内容と対照した。第4節では、時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化について、文献調査で抽出した「床座生活にまつわる生活様式および習慣」に関する記述とインタビュー調査で抽出した同項目の発話記録を対照した。本節では、第3節で対照した日本の居住空間の特質と、第4節で取り上げた「床座生活にまつわる生活様式および習慣」の日本の居住空間の認識と住まい方の変化についての記述およびインタビュー調査で抽出した日本の居住空間の認識と住まい方の変化についての発話を整理し、日本の居住空間の特質と日本の居住空間における「住まい方の対応」の関わりについて整理する。なお、「快適性にまつわる感覚」のうち、温熱環境における「冬の寒さ」、音環境における「声が筒抜けで聞こえてしまう」におい環境における「厠の臭い」といった快適性に劣る項目について、現代の東京の居住空間の認識としては挙げられておらず、住宅の性能向上により、このような不快感につながる事象は改善されてきているのではないかと考えられるため、分析対象から除く。また、「都市の様子」に関しても居住空間の範囲を超えるため分析対象から除く。

第3節で取り上げた日本の居住空間の特質をインタビュー調査から抽出した発話(p.142, 図4-10)と対照し、日本移住前から認識していた/住まい方を実践していた日本の居住空間の特質と、日本移住後に認識した/住まい方を実践した特質とを整理する。前者は日本国外において日本の居住空間の特質に基づく認識や住まい方を実践していることから、「住まい方の対応」においては維持に該当すると考える。後者は日本居住後に初めて認識した日本の居住空間の特質であり、日本の居住空間特有のものであり、「住まい方の対応」においては適応・新規、適応・代替、妥協、諦観に該当すると考える。詳細を表5-10に示す。

日本移住前から認識していた/住まい方を実践していた日本の居住空間の特質には、日本国外において日本の居住空間の特質に基づく認識や住まい方を実践していることから、彼の地と日本の居住空間の特質に共通性が見出されるのではないかと考える。また、日本移住後に認識した/住まい方を実践した特質は、日本居住後に初めて認識した日本の居住空間の特質であることから、日本の居住空間特有のものであり特異性を見出せるのではないかと考える。これらの観点をもとに次節では、日本の居住空間における「居住空間の図式」形成の過程を検討する。

表 5-10 文献調査で抽出した日本の居住空間の特質と
 インタビュー調査の発話との対応

文献調査		インタビュー調査 / 住まい方の対応				
		維持	適応・新規	適応・代替	妥協	諦観
床	畳		○	○		
	床座	○				
	床に寝る		○			
	沓脱習慣	○	○			
簡素さ	家具がない		○	○		
	簡素な造り、装飾なし			○		
自然とのつながり / 向き合い方		○*1		○		
部屋の広さ・天井高の認識			○		○	○
仕切りとその機能性			○			
光環境 *2						
清潔さ			○			
日本の旅館				○*3		

*1 自然とのつながりには、外部空間とのつながりも含める。

*2 光環境については、インタビュー調査における照明の好みについての発話を抽出しているが、居住空間の認識や住まい方の
 不変 / 変化について触れておらず、図 4-10(P139) の分類には含まれない。

*3 「日本の旅館」は、「畳」「家具がない」「簡素な造り、装飾なし」を含む。

5-6. 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程

5-6-1. 日本の居住空間の他地域との共通性と特異性の定義および推定方法

本研究における日本の居住空間の他地域との共通性と特異性について、以下の通り定義して分析を行う¹²⁴。

日本の居住空間の他地域との共通性：その特質が日本の居住空間だけでなく他地域と共通する。

日本の居住空間の特異性：その特質が日本の居住空間特有である。

日本移住前から認識していた / 住まい方を実践していた日本の居住空間の特質には、日本国外において日本の居住空間の特質に基づく認識や住まい方を実践していることから、彼の地と日本の居住空間の特質に共通性が見出せると考える。「住まい方の対応」においては維持に該当する。日本移住後に認識した / 住まい方を実践した特質は、日本居住後に初めて認識した日本の居住空間の特質であり、日本の居住空間特有のものであり特異性を見出せると考える。「住まい方の対応」においては適応・新規、適応・代替、妥協、諦観に該当する。次項以降、これらの観点をもとに第4章4節および図4-10 (p.142) で示した内容と対照し考察する。

124 文献調査で対象とする書籍 24 冊の著者は 15 名で、出身国は、フランス 5 名、アメリカ 4 名、イギリス 3 名、中国 1 名、ドイツ 1 名である。質問紙調査及びインタビュー調査では調査対象者各 30 名と 6 名で、出身地域に大きな偏りはない。文献調査で抽出した日本の居住空間の特質について、質問紙調査及びインタビュー調査で得られた回答との対照において、出身地域により著しく乖離している項目は確認できなかった。回答内で大きな偏りはなかったものの、対象群全体の範囲が欧米圏の一部に偏っていることには留意が必要である。

5-6-2. 日本の居住空間の他地域との共通性

日本居住前から認識していた/住まい方を実践していた日本の居住空間の特質には、床座、沓脱習慣、自然とのつながりおよび向き合い方、が挙げられる。このうち、床座については、配偶者（日本人）との暮らしのなかで日本の居住空間の住まい方を実践していた例であるため、他地域との共通性についての検討から外す。

沓脱習慣について、「住まい方の対応」では維持の他に適応・新規でも抽出されており、日本居住後に初めて沓脱習慣に接した人がいることがうかがえる一方、質問紙調査およびインタビュー調査では、「自分の国でも家で靴を脱いでいた」という人が複数みられ、自国の習慣とは異なる場合も日本に住む以前から「親がそうしていたから、その環境で育った」と、沓脱習慣を取り入れている人がみられた。インタビュー調査ではアジア地域以外で、イタリア、オーストラリア、アメリカ出身者による沓脱習慣を持つ住まい方の実践がみられた。質問紙調査においても、30名中21名が「よい習慣である」と述べている(p.105 図3-25)。明治初期から比較すると、近年、清潔さなどの価値を見出した人々によって沓脱習慣が取り入れられるケースが増え、居住空間の特質として他地域との共通性が生じてきているのではないかと推察できる。

自然とのつながりおよび向き合い方について、「住まい方の対応」の維持で抽出されているのは、「部屋にしながら外部空間とつながる感覚を保持したい」、「内と外の世界のバランスを得たい」という思いが住まい方へ表出されているケースである。自然とのつながりおよび向き合い方における日本の居住空間の特質には、外部に対して開放的な家屋の造り、植物を飾る、小さくても庭を持つ、生け花などが挙げられている。ここでは日本の居住空間の特質の他地域との共通性を見出しているのではなく、「外部や自然とつながりを持つ」といった日本の居住空間の特質とまでは言い切れない一般的な居住空間の特徴ではないかと考えられる。

インタビュー調査で抽出した自然とのつながりおよび向き合い方についての発話は、日本の居住空間の特質として考えられる内容に限定しておらず、本項の分析において一般的な居住空間の特徴として分類されると考える。

以上、他地域との共通性のある日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」を整理した。維持に該当する沓脱習慣において、近年その価値が認められ取り入れられるケースが増えたことにより、日本の居住空間の特質として他地域との共通性が生じてきていると考えられる。同じく維持に該当する自然とのつながりおよび向き合い方においては、日本の居住空間の特質とは言えない一般的な居住空間の特徴が見出された。

5-6-3. 日本の居住空間の特異性

日本居住後に認識した / 住まい方を実践した日本の居住空間の特質には、畳、床座、床に寝る、沓脱習慣、居住空間の簡素さ、自然とのつながりおよび向き合い方、部屋の広さ・天井高についての認識、仕切りとその機能性、清潔さ、日本の旅館が挙げられる。「住まい方の対応」の適応・新規、適応・代替、妥協、諦観で抽出され、これらの日本の居住空間の特質に応じた住まい方を構築していることがうかがえる。以下、項目ごとに説明する。

畳、床座、床に寝る、沓脱習慣について、適応・新規で抽出されている内容は第4節3項および第4節4項で詳細を述べており、ここでは要点のみ記す。「床で寝る」では、床で寝ることにまつわる「健康的」「マットレスも必要なく快適」といった利点が語られている。沓脱習慣についても、裸足でいる方が自然となった自らの適応状態を認識し「畳はすばらしい。暑くも硬くもない」と語ったタウトや、「清潔さが保たれる」「外と内の境界線となる」というインタビュー調査の発言から、沓脱習慣を住まい方に取り入れている根拠となる沓脱習慣にまつわる価値内容が語られている¹²⁵。このように、特異性のある日本の居住空間の特質に適応していく中で、その特質にまつわる価値を評価していることがうかがえる

居住空間の簡素さについて適応・新規で抽出されているのは和室を寝室として使用しているケースである。昼間は家具もなく和室を広く使用できること、物が少ないために整理しやすく効率的に行動ができることを利点として挙げ、評価していることがうかがえる。

仕切りとその機能性について適応・新規で抽出されているのは、扉や窓ガラスの引き戸についてである。開き戸と異なり戸や窓の開閉時に場所を取らず空間を広く使用でき効率的であると評価している。

部屋の大きさ・天井高の認識について適応・新規で抽出されているのは、可動式家具や布団等の活用で空間を広く感じることができる、天井の低さを空間の広さで補う等、創意工夫して空間を捉えているケースである。機能的かつ効率的な方法で空間を広く認識できる点を評価していることがうかがえる。

125 表5-10 (p.173)の適応・新規に該当する「清潔さ」はこの「沓脱習慣」の印象・評価に含まれる。

日本の旅館について適応・代替で抽出されているのは、自分と向き合うリラックスできる場所として余計な物がない旅館の和室で過ごしているケースである。自国では1人で静かに過ごす部屋があり、日本で代替できる空間を望んでいたところ、日本の旅館と出会い魅了されたケースである。和室の簡素さ、畳の質感、匂いなど日本の居住空間の特質で構成されている旅館の部屋において、自分と向き合いリラックスできる点に価値を見出していると考えられる。

自然とのつながりおよび向き合い方について適応・代替で抽出されているケースの一つに「自国で身近に楽しんでいたアウトドアリビングでの過ごし方」の代替として、「東京の集合住宅において高層階のベランダで、椅子に座り夕暮れや月が上っていく様子を眺めながら自然とのつながりを感じる」といった異なる住まい方に読み替えているものがある。これは、「自分のルーツを感じる」といったその人のもつ居住空間の認知構造の上位概念を、日本において実現可能な住まい方に翻訳していると考えられるが、このケースの場合、新たな住まい方に日本の居住空間の特質は見出しておらず、一般的な居住空間の特徴であると考えられる。前項と同様に、インタビュー調査で抽出した自然とのつながりおよび向き合い方についての発話は、日本の居住空間の特質として考えられる内容に限定しておらず、本項の分析において一般的な居住空間の特徴として分類されることがある。一方で、同じく「自分のルーツを感じる」という上位概念をもとに自国で持っていた「いつも自然と繋がっている感覚」を日本の居住空間の特質である生け花に見出し（魅了され技術を習得し）「いつも家で花をいけるようになった」ケースでは、新たな住まい方に日本の居住空間の特質を見出すことができる。この場合の自然とのつながりおよび向き合い方は日本の居住空間の特異性に該当すると考える。

部屋の広さ・天井高の認識について妥協、諦観で抽出されているのは、狭い空間、小さい窓、収納スペースの少なさなど部屋の広さ・天井高の限界を挙げ、日本の居住空間の特質に即した住まい方をやむなく構築/従うケースである。空間サイズの小ささ、それに伴う収納や台所・浴室サイズの小ささに価値を見出しておらず、この特質を受け入れていないと考えられる。

以上、特異性のある日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」を整理した。適応・新規に該当する畳、床座、床に寝る、沓脱習慣（清潔さ）、居住空間の簡素さ、仕切りとその機能性、部屋の広さ・天井高についての認識については、日本移住後の新たな住まい方に特異性のある日本の居住空間の特質が見出されている。妥協、諦観に該当する部屋の広さ・天井高の認識も同様に特異性のある日本の居住空間の特質が見出されている。適応・代替に該当する自然とのつながりおよび向き合い方、日本の旅館については、日本の旅館では特異性のある日本の居住空間の特質が見出されているが、自然とのつながりおよび向き合い方においては、日本の居住空間の特質とは言えない一般的な居住空間の特徴と特異性のある日本の居住空間の特質の2ケースが見出されている。

次項では、日本の居住空間の特質と「居住空間の図式」の形成構造について整理し、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について考察する。

5-6-4. 日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程

本項では以下5種の「住まい方の対応」における日本の居住空間の他地域との共通性および特異性と「居住空間の図式」形成との関わりを整理する。なお、「自然とのつながりおよび向き合い方」において一般的な居住空間の特徴として分類されるケースは対象外とする。

「住まい方の対応」の維持で抽出されている沓脱習慣のケースは、自国にいる時から家で靴を脱ぐ生活を送っており、他地域との共通性がある日本の居住空間の特質として、日本移住後に住まい方に変化が見られず「居住空間の図式」を更新していないと考える。

「住まい方の対応」の適応・新規で抽出されている畳、床座、床に寝る、沓脱習慣（清潔さ）、居住空間の簡素さ、仕切りとその機能性、部屋の広さ・天井高の各ケースにおいて、日本移住後の新たな住まい方で特異性のある日本の居住空間の特質について、その価値を評価し、肯定的に受け止め適応している様子がうかがえ、「居住空間の図式」を更新していると考え。

「住まい方の対応」の適応・代替で抽出されている日本の旅館、自然とのつながりおよび向き合い方のケースにおいて、以前から持ち合わせていた「自分自身とつながる」「自然とつながる」といった居住空間の認知構造の上位概念を基に日本の居住空間に即し翻訳^{126, 127}した日本移住後の新たな住まい方が特異性のある日本の居住空間の特質である場合は、その価値を評価し、肯定的に受け止め適応している様子がうかがえ、「居住空間の図式」を更新していると考え。

「住まい方の対応」の妥協および諦観で抽出されている部屋の広さ・天井高の認識の各ケースにおいて、特異性のある日本の居住空間の特質について、その価値を評価しておらず、日本の居住空間に即した住まい方をやむなく構築している/やむなく従っている様子がうかがえ、「居住空間の図式」を更新していないと考える。

126 ここでいう翻訳とは、日本語から英語のような言語間翻訳ではなく、ある記号で表された意味を、別の記号で表すことのような広義な翻訳である記号間翻訳である。

127 野原佳代子, ディスカッションから学ぶ翻訳学 トランスレーション・スタディーズ入門, 三省堂, 2014

以上のことから、日本の居住空間の認識の中で形成される「居住空間の図式」の形成過程を以下のようにまとめる。

日本の居住空間の他地域との共通性のある特質として、沓脱習慣のみ確認できた。他地域との共通性のある特質として沓脱習慣を認識している場合、日本移住前からの住まい方が変わらず、「居住空間の図式」は更新されていない。

日本の居住空間の特異性のある特質として、畳、床座、床に寝る、沓脱習慣（清潔さ）、居住空間の簡素さ、仕切りとその機能性、部屋の広さ・天井高、日本の旅館、自然とのつながりおよび向き合い方が確認できた。これらのうち、その特質の価値が評価できると認識している場合、「居住空間の図式」は更新されている。一方、その特質に価値が評価できないと認識している場合、「居住空間の図式」は更新されていない。

日本の居住空間の特異性として、その特質の価値が評価できると考えられるものには、上記の項目全てが該当し、評価できる価値として、機能性、効率性、快適性にまつわる理由が挙げられている。その価値が評価できないと認識されている特質は部屋の広さ・天井高であり、身体寸法と合わず違和感を覚える理由も挙げられている。裏を返せば、居住空間の広さや高さおよび空間にまつわる寸法との不調和を除くと、特異性のある日本の居住空間において、日本に移住した外国人がその特質を理に合う価値のあるものと認識した場合、新たな住まい方としてこれらの特質を受け入れ適応していることがわかる。

第4章において、「居住空間の図式」が更新されていると推定し、その形成の過程を居住空間の認知構造の上位概念とともに検討したが、「住まい方の対応」における適応・新規では、上位概念と見合った住まい方であれば積極的に新しい住まい方を受け入れているのではないかと推察した。また、適応・代替においては、上位概念を基に自国での住まい方を日本の居住空間に即した住まい方へ翻訳しているのではないかと推察した。どちらも「居住空間の図式」の更新には上位概念が関わっていることを推察していたが、この上位概念が居住空間の選好に関わる認知構造の抽象的・心理的な価値内容であることから、本章において、日本の居住空間の特質の価値を評価できるものと考えられる場合に「居住空間の図式」が更新されていると明らかにしたことは、第4章における考察を支持するものと考えられる。

5-7. 本章のまとめ

本章では、第2章の文献調査で得た明治以降現代に至るまでの外国人のみた日本の居住空間の認識と住まい方さらにはその変化と、第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査で得た現在の東京に居住する外国人の捉えたそれらとを対照し、日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」との関わりを整理した。その上で日本の居住空間の他地域との共通性と特異性を明らかにし、さらには日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について考察した。

第3節では、文献調査で抽出した「日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目」のうち、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」の項目への認識について、質問紙調査およびインタビュー調査で得られた回答と対照した。このうち、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「仕切りとその機能性」については、両調査からこれらの特質の機能性、効率性、快適性に価値を見出す回答が得られた。自然とのつながりおよび向き合い方について、両調査で共通項として、通りに面した家の軒先に植物を飾る様子や、日本の伝統文化である生け花が挙げられている。部屋の広さ・天井高についての認識は、空間の寸法に関する評価と機能的な評価が両調査から共通して挙げられている。明治時代に顕著に挙げられた「快適性にまつわる感覚」における冬の寒さや廁の臭気、遮音性の低さについては、現代の東京の居住空間の認識として挙げられていない。日本の居住空間における清潔さについては、明治時代も現在も変わらぬ移住した外国人の日本の居住空間の認識として挙げられている。日本の旅館は、両方の調査からリラックスできる落ち着いたよい場所であるという共通認識が抽出されている。

第4節では、文献調査において時間経過を伴う日本の居住空間の認識および住まい方の変化が抽出された「床座生活にまつわる生活様式および習慣」について、インタビュー調査で得られた発話と対照した。対照した変化の内容から日本の居住空間に適応していく中で、その特質にまつわる価値内容を評価していることがうかがえ、日本の居住空間に適応していく中で、身体的な対応とともにその特質にまつわる価値内容を評価していることが推察された。

第5節では、第4節で対照した文献調査から抽出した日本の居住空間の認識および住まい方の変化の記述が床座生活にまつわるもののみであったため、他の日本の居住空間の特質と日本の居住空間の認識と住まい方

の変化の関わりを明らかにするために、第3節で取り上げた日本の居住空間の特質とインタビュー調査から抽出した発話 (p.142, 図4-10) とを対照し、日本移住前から認識していた / 住まい方を実践していた日本の居住空間の特質と、日本移住後に認識した / 住まい方を実践した特質との2種に整理した。前者は日本国外において日本の居住空間の特質に基づく認識や住まい方を実践していることから、「住まい方の対応」においては維持として、後者は日本居住後に初めて認識した日本の居住空間の特質であり、日本の居住空間特有のものであり、「住まい方の対応」においては適応・新規、適応・代替、妥協、諦観として整理した。

第6節では、日本の居住空間の他地域との共通性と特異性について定義と推定方法を説明した上で、他地域との共通性が「住まい方の対応」においては維持に該当し、特異性が「住まい方の対応」においては適応・新規、適応・代替、妥協、諦観に該当するとした上で、これらの観点をもとに第4章4節および図4-10 (p.142) で示した内容と対照し考察し、以下の内容を明らかにした。

- ・他地域との共通性のある日本の居住空間の特質としてその特質を認識している場合、日本移住前からの住まい方が変わらず、「居住空間の図式」は更新されていない。
- ・特異性のある日本の居住空間の特質のうち、その特質の価値が評価できると認識している場合、「居住空間の図式」は更新されている。一方、その特質に価値が評価できないと認識している場合、「居住空間の図式」は更新されていない。

居住空間の広さや高さおよび空間にまつわる寸法との不調和を除くと、特異性のある日本の居住空間において、日本に移住した外国人がその特質を理に適う価値のあるものと認識した場合、新たな住まい方としてその特質を受け入れ適応していることを明らかにした。これは、第4章における居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念を基に「居住空間の図式」が更新されているという考察を支持するものである。

第 6 章 結論

6. 結論

本章では各章で得られた知見を総括し、結論を得る。

第2章「日本文化に触れた文化人・知識人による日本移住後の日本の居住空間の認識—明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査」では、明治時代以降現代に至るまでのおよそ150年の間に日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識と住まい方を明らかにすることにより、その捉えられ方の特徴や時間経過に伴う認識の変化を整理することを目的とし、明治から平成にかけて出版された書籍24冊を調査対象として、明治以降の日本文化に触れた文化人・知識人のみた日本の居住空間への認識および住まい方とその時間経過に伴う変容を検討した。

日本に移住した外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目として、主に「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「伝統的な建築要素」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」が挙げられた。なかでも、明治初期に特に多い記述内容としては「快適性にまつわる感覚」のうち「音（騒音・プライバシー）」、「におい（厠臭）」があり、紀行や日記が多いことから、東京のみならず京都の「都市の様子」や「宿泊施設として日本の旅館」についての記述も多くみられた。

時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化については、上記項目のうち「床座生活にまつわる生活様式および習慣」にみられた。具体的には、「床座」、「床で寝る」、「沓脱習慣」の中で、身体的対応を伴う適応があることを明らかにした。

第3章「東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識—東京在住の外国人を対象とした質問紙調査」では、質問紙調査を用いて、外国人の現在の居住空間の認識や住まい方を明らかにすることにより、外国人の日本の居住空間の捉え方を整理した。

居住空間についての一般的な認識については、全体の8割が居住空間への関心を示す一方で、居住空間を構成する光環境および温熱環境への関心は全体のおよそ半数にとどまり、必ずしも一致しないことがうかがえた。

現在の居住空間については、住居の選択基準となる30項目を抽出し、予算(B)、周辺環境(SE)、建物・空間(BS)、選択権なし(N)の4分類を得、この4分類を組み合わせた住居選択基準のタイプ6種類が確認できた。現在の居住空間の基本的な建築空間要素として「部屋の広さ」、「天井の高さ」、「窓の大きさ」については、とかく狭いと語られがちな日本の居住空間について、必ずしもその限りでないことを明らかにした。ま

た、日本の建築空間要素への評価は、その機能性から玄関や廊下等の移行空間や接続空間が必要であると考えている人が多く、少ないながらも機能性・脆弱性により間仕切り、押し入れ、畳の各要素を評価していることが捉えられた。

以上に加え、居住期間の長短に抛らず、住居の選択基準として居住空間の雰囲気や印象を基準項目に挙げた群と挙げていない群とでは、居住空間の広さの評価に差異が認められた。この結果からは、居住空間を認識する際に用いる認知的枠組みによって居住空間を認識するという「居住空間の図式」と符合するプロセスがあることを推察した。その人のもつ文化的・経済的背景、それに付随する価値観に加え、居住経験を構成する一つの指標である物理的な時間量のみではなく、日本居住後の時間経過に伴う居住空間の捉え方の変容の度合いも含めた複層的な関わりが推察された。

第4章「東京に在住する外国人の日本における住まい方の変化の対応と居住空間の認知構造からみる「居住空間の図式」形成の過程—東京在住の外国人を対象としたインタビュー調査」では、第3章の推察をもとに、インタビュー調査を用いて、東京在住の外国人の日本の居住空間と住まい方の認識およびその変化を明らかにし、日本居住後の居住空間における「住まい方の対応」から「居住空間の図式」形成を推定した。さらに、より好ましい居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念と日本居住後の「住まい方の変化の対応」から「居住空間の図式」形成の過程について検討した。

日本の居住空間と「住まい方の対応」では、維持、拒絶、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観の6種の対応を抽出・分類し、このうち積極的な住まい方の変化が見られた適応・新規、適応・代替において、「居住空間の図式」が更新されているのではないかと推定し、上位概念との関係から検討した。適応・新規では、日本の居住空間の特質に即した住まい方に接し積極的に受入れ実践していることで「居住空間の図式」を更新しており、適応・代替では、自国で価値を置いていた住まい方の本質的な部分を日本の居住空間において代替可能な住まい方の中に見出し、自国での住まい方を上位概念を基軸として日本の居住空間に即した日本における新たな住まい方へと翻訳していることを明らかにした。

第5章「日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程—文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照」では、第2章の文献調査で得た明治以降現代に至るまでの外国人のみた日本の居住空間の認識と住まい方さらにはその変化と、第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査で得た現在の東京に居住する外国人の捉えたそれらとを対照し、日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」との関わりを整理した。その上で日本の居住空間の他地域との共通性と特異性を明らかにし、さらには日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について以下のように明らかにした。

- ・他地域との共通性のある日本の居住空間の特質としてその特質を認識している場合、日本移住前からの住まい方が変わらず、「居住空間の図式」は更新されていない。
- ・特異性のある日本の居住空間の特質のうち、その特質の価値が評価できると認識している場合、「居住空間の図式」は更新されている。一方、その特質の価値が評価できないと認識している場合、「居住空間の図式」は更新されていない。

居住空間の広さや高さおよび空間にまつわる寸法との不調和を除くと、特異性のある日本の居住空間において、日本に移住した外国人がその特質を理に合う価値のあるものと認識した場合、新たな住まい方としてその特質を受け入れ適応していることを明らかにした。

以上の結果から、本研究では日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識と「居住空間の図式」の形成、日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について明らかにした。

日本の居住空間の認識について「日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目」として「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「自然とのつながりおよび向き合い方」、「部屋の広さ・天井高についての認識」、「仕切りとその機能性」、「快適性にまつわる感覚」、「伝統的な建築要素」、「都市の様子」、「宿泊施設として日本の旅館」を抽出した。「床座生活にまつわる生活様式および習慣」、「居住空間の簡素さ」、「仕切りとその機能性」については、日本家屋や和室の生活様式の中で、その特質の機能性、効率性、快適性に価値を見出す回答が得られた。明治時代に顕著に挙げられた「快適性にまつわる感覚」における冬の寒さや廁の臭気、遮音性の低さについては、現代の東京の居住空間の認識として挙げられていない。日本の居住空間における清潔さについては、明治時代も現在も変わらぬ移住した外国人の日本の居住空間の認識として挙げられている。日本の旅館については、リラックスできる落ち着いたよい場所であるという共通認識が抽出されている。日本の居住空間の認識および住まい方の変化については、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」において、日本の居住空間に適応していく中で、身体的な対応とともにその特質にまつわる価値内容を評価していることが明らかになった。

このような特質のある日本の居住空間における移住後の「住まい方の対応（不変/変化）」について、その背景にある認知の枠組みをも視野に入れ日本の居住空間の認識との関係について検討した。居住空間を認識する際の認知的枠組みとしての図式を「居住空間の図式」と呼称し、この「居住空間の図式」の中心的な概念をパーソナルコンストラクト理論におけるコンストラクトシステムの認知構造の中に描かれた居住空間のイメージとその評価構造の上位概念の中に見出せると考え、日本移住後の「住まい方の対応」として抽出した積極的に日本の居住空間に適応する住まい方を構築していると考えられる2種の対応適応・新規、適応・代替の住まい方の変化について、この上位概念とともに考察したところ、適応・新規、適応・代替のどちらの対応も、上

位概念と見合った住まい方であれば日本の居住空間に適応した住まい方を構築していること、すなわち「居住空間の図式」が更新されていることが推察された。

さらに、上述の日本の居住空間の特質について日本移住後の「住まい方の対応」と対照し、日本の居住空間の他地域との共通性と特異性に分類した上で、これらの観点をもとに「住まい方の対応」の発話を分析したところ、居住空間の広さや高さおよび空間にまつわる寸法との不調和を除くと、特異性のある日本の居住空間において、日本に移住した外国人がその特質を理に適う価値のあるものと認識した場合、新たな住まい方としてその特質を受け入れ適応していることが明らかになった。これは、居住空間の選好に関わる認知構造の上位概念を基に「居住空間の図式」が更新されているという考察を支持するものである。

新たな居住空間において、居住空間に対する抽象的・心理的な価値に見合った新たな住まい方を実践できる場合に「居住空間の図式」は更新される。本研究の結果からは、日本の居住空間の特質に価値を見出し、新たな住まい方を構築している「居住空間の図式」の更新されているケースを確認できた。その多くが日本特有の居住空間の特質であることが明らかになったが、これらの特質に外国人が機能的・効率的な価値を見出していることは、日本特有の居住空間の特質に合理性が潜在していることを示していると考えられる。

本研究は、環境移行のなかでも著しい変化を伴う異文化居住経験を通して、異なる文化的背景や経験を持つ人々の新たな日本の居住空間への認識や「居住空間の図式」形成の過程を明らかにしようと試みたものである。個人の意識の表出として居住空間の認識や評価、適応の過程を捉えることに限定せず、その背景にある認知の枠組みをも視野に入れ日本の居住空間の認識の関係を見ていくことにより、居住空間の認知構造の一端を明らかにした。

本研究で得た知見は、今後も増加傾向のある外国人の日本移住における日本の居住空間の捉え方を一考するものとなる。さらに、本研究から得た結果において、日本の居住空間の特質として抽出した項目「自然とのつながりおよび向き合い方」では、日本の居住空間の特質に抛らず、「居住空間の図式」を更新している例が確認できた。自らの居住空間の認知構造の上位概念に見合う日本の居住空間における新たな住まい方を実践している事例であるが、この新たな住まい方は、現在の日本の居住空間において実践可能であるものの、本研究で抽出した日本の居住空間の特質に適応した住まい方ではなかった。ここに、異文化居住圏への拠点移動に限定せず「居住空間の図式」が更新されていることが示唆されていると考える。新たな環境へ移行後の居住空間の認識や評価、適応について、われわれの持つ認知構造を含めて捉えたことにより、本研究で着目した異文化居住経験のみならず、災害時の拠点移動や高齢者施設への移動などの顕著な変化を伴う環境移行において、居住者の葛藤を最低限に留めた適応を可能とする実践的な課題に向けて、本研究で得た知見の転用可能性を期待する。

さらに、外国人の捉える日本の居住空間の特質を抽出し、他地域との共通性および特異性の観点から「居住空間の図式」形成について整理したことで、当たり前であるがゆえに見落としがちな特異な日本の居住空間の特質を再考し、その価値を継承していく上での一助となることを願う。

発表論文目録

原著論文

1. 川野江里子, 野原佳代子, Norton Michael, 那須聖, イノベーション・ワークショップにおける環境デザイン —理工系人材のための創造性教育「コンセプト・デザインング」ワークショップにみる物理的環境の使われ方を事例として, デザイン学研究, 日本デザイン学会, Vol.66, No.3, pp.31-40, 2020, 1
2. 川野江里子, 那須聖, 外国人の持つ日本の居住空間の図式に関する研究 (その1): 東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識, 日本建築学会計画系論文集, Vol.88, No.810, pp.2250-2260, 2023, 8
3. 川野江里子, 那須聖, 外国人の持つ日本の居住空間の図式に関する研究 (その2): 外国人の東京の居住空間における住まい方の変化の対応と居住空間の選考に関わる認知構造の上位概念からみる居住空間の図式形成の構造, 日本建築学会計画系論文集, Vol.89, No.820, pp.985-996, 2024, 6

関連する学会発表

1. Eriko Kawano, Satoshi Nasu, Perception of Dwelling Environment and Updates of Schemata through Experience of People from Different Countries Living in Japan, 26th Conference International Association People-Environment Studies, 2020, 6
2. 川野江里子, 那須聖, 外国人の日本における居住経験と住まいの図式形成に関する研究, 人間環境学会第28回大会, 人間環境学会, 2021, 5

参考文献

第1章

- S. ワップナー, 山本多喜司編著, 『人生移行の発達心理学』, 北大路書房, 1991
- 高橋鷹志, 環境移行からみた高齢者の住まい, すまいろん, 23号, 8-23, 1992
- Oberg, K. Cultural shock: Adjustment to new cultural environments, *Practical Anthropology*, 7, 177-182, 1960
- 石井敏, 久米昭元, 遠山, 『異文化コミュニケーションの理論』, 有斐閣, 2001
- エドワード・S モース, 上田篤・加藤晃規・柳美代 訳, 『日本人の住まい 内と外』, 鹿島出版会, 1979
- ジャック・プザー=マサビュオー, 加藤隆 訳, 『家屋と日本文化』, 平凡社, 1996
- ブルーノ・タウト, 篠田英雄 訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, 2008
- 北岡紀子・磯貝恵三, 日本もどきと日本らしさ, 日本デザイン学会, 『デザイン学研究』, No.81, 88, 1990
- 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治, 『心理学』, 有斐閣, 2018
- 海保博之・松原望 (監修), 竹村和久・北村英哉・住吉チカ (編), 『感情と思考の科学事典』, 朝倉書店, 2010
- Frederic Charles Bartlett, *Remembering: A study in experimental and social psychology*, Cambridge University Press, London, 1932
- ジャン・ピアジェ, ベルベル・イネルデ, 波多野完治 訳, 『新しい児童心理学』, 白水社, 1969
- U. ナイサー, 古崎敬・村瀬旻共訳, 『認知の構図: 人間は現実をどのようにとらえるか』, サイエンス社, 1978
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編), 『岩波国語辞典第四版』, 岩波書店, 1986
- 野村理恵・森傑・島口拓也, 遠隔地避難における環境移行からみた居住環境の課題 東日本大震災における北海道への長期避難者を対象として, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 1255-1256, 2016
- 前田昌弘・石川直人・伊藤俊介・阪田弘一・高田光雄, 他者への“信頼”からみた仮設住宅居住者への支援の受け入れ要因 ー東日本大震災における仮設住宅の住環境改善支援に関する実践的研究 その2ー, 日本建築学会計画系論文集, 83(752), 1821-1831, 2018
- 沖田富美子・石渡瑞枝, 高齢者の住宅選択の実態と意識に関する研究: 第1報 居住経験及び住宅に対する考え方の実状, 日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科, 日本女子大学, 11, 197-204, 2005
- 林玉森・内藤和彦, 外国人から見た日本住宅に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 379-380, 2003
- 石川智章・布野修司, 在日外国人留学生の生活環境と居住空間に関する考察 ー彦根市を事例としてー, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 141-142, 2008
- 野間有朝・柳沢究, 日本在住外国人の住経験から見る日本の住環境への適応プロセス 来日後の住環境における環境要素及び人間関係への適応プロセス, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 115-116, 2021
- 野間有朝・柳沢究, 日本在住外国人の住経験から見る日本の住環境への適応プロセス ー来日後の住環境の空間構成への適応プロセスー, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 61, 125-128, 2021
- Kelly, G. A., *The psychology of personal constructs. Vol. 1. A theory of personality. Vol. 2. Clinical diagnosis and psychotherapy.* W. W.Norton., 1955

讃井純一郎, 乾正雄, レポートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出: 認知心理学に基づく住環境評価に関する研究 (1), 日本建築学会論文集, 367号, pp15-22, 1986

讃井純一郎, 乾正雄, 個人差および階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化: 認知心理学に基づく住環境評価に関する研究 (2), 日本建築学会論文集, 374号, pp54-60, 1987

辻村壮平, 階層的に構造化された評価を引き出すための評価グリッド法, 日本音響学会誌, 73巻, 12号, pp783-789, 2017

森永智年・大井尚行・高橋浩伸, インテリア・プレゼンボードの評価を通じた評価構造と個人属性の類型化住環境に関する価値観の進化と変容に関する研究, 日本建築学会論文集, 76(666), 633-639, 2011

池田佳樹・辻村壮平・佐野友紀・安江仁孝・今西美音子・平手小太郎, 駅空間におけるサインの評価構造に関する研究 追設サインに着目した駅利用者への情報提供手法に関する検討, 日本建築学会論文集, 82(741), 2799-2806, 2017

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司(編), 『心理学辞典』, 有斐閣, 1999

第2章

佐伯彰一・芳賀徹編, 『外国人による日本論の名著』, 中央公論新社, 1987

下山晴彦(編), 『誠信 心理学辞典 新版』, 誠信書房, 2014

甲田直美, 『物語の言語学』, ひつじ書房, 2024

橋本陽介, 『物語論 基礎と応用』, 講談社, 2017

イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 上』, 講談社, [2008] 2021

イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 下』, 講談社, [2008] 2016

エミール・ギメ, 岡本嘉子訳, 『明治日本散策』, KADOKAWA, [2019] 2022

エドワード・S・モース, 上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳, 『日本のすまい・内と外』, 鹿島出版会, [1979] 2003

エドワード・S・モース, 石川欣一訳, 『日本その日その日』, 講談社, [2013] 2021

フェリックス・レガメ, 林久美子訳, 『明治日本写生帖』, KADOKAWA, 2019

ラフカディオ・ハーン, 池田雅之訳, 『新編 日本の面影』, KADOKAWA, [2000] 2013

ラフカディオ・ハーン, 池田雅之訳, 『新編 日本の面影 II』, KADOKAWA, 2015

ピエール・ロチ, 市川裕見子訳, 『日本秋景 ピエール・ロチの日本印象記』, 中央公論新社, 2020

エリザ・R・シドモア, 外崎克久訳, 『シドモア日本旅行』, 講談社, [2002] 2020

ブルーノ・タウト, 森嶋郎訳, 『ニッポン』, 講談社, [1991] 2016

ブルーノ・タウト, 森嶋郎訳, 『日本文化私観』, 講談社, [1992] 2018

ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本美の再発見 [増補改訳版]』, 岩波書店, [1939] 2019

ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳, 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008

ブルーノ・タウト, 篠田英雄編訳, 『忘れられた日本』, 中央公論新社, [2007] 2016

キャサリン・サンソム, 大久保美春訳, 『東京に暮す』, 岩波書店, [1994] 2020

周作人, 木山英雄編訳, 『日本談義集』, 平凡社, 2002

バーナード・リーチ, 柳宗悦訳, 水尾比呂志補訳, 『バーナードリーチ 日本絵日記』, 講談社, [2002] 2022

<https://www.donaldkeene.org/history> (2023年7月19日参照)

ドナルド・キーン, 足立康訳, 『果てしなく美しい日本』, 講談社, [2002] 2016

ドナルド・キーン, 金関寿夫訳, 『日本人の美意識』, 中央公論新社, [1999] 2016
ドナルド・キーン, 『二つの母国に生きて』, 朝日新聞出版, [2015] 2016
ジャック・プズー=マサビュオー, 加藤隆訳, 『家屋と日本文化』, 平凡社, 1996
<http://www2.gol.com/users/jpmassa/japonais.html> (2023年7月19日閲覧)
オギュスタン・ベルク, 宮原信訳, 『空間の日本文化』, 筑摩書房, [1994] 2007
<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/jyusyou/2018.html> (2023年7月19日閲覧)
アレックス・カー, 『美しき日本の残像』, 朝日新聞出版, [2000] 2007

第3章

桜井篤, インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方, せりか書房, 2002
内田繁, インテリアと日本人, 晶文社, 2000
中川武, 日本の家—空間・記憶・言葉, TOTO 出版, 2002
Koji Yagi, A Japanese Touch for Your Home Perfect, Kodansha International, 1992
青木正夫・岡俊江・鈴木義弘, 中廊下の住宅, 住まいの図書館出版局, 2009
What is the most spoken language?, Ethnologue (<https://www.ethnologue.com/insights/most-spoken-language/>)(2023年2月28日参照)
<https://unstats.un.org/unsd/methodology/m49/> (2022年12月9日参照)

第4章

佐藤郁哉, 質的データ分析法 原理・方法・実践, 新曜社, 2008
サトウタツヤ, 春日秀朗, 神崎真実(編), 質的研究法マッピング 特徴を掴み、活用するために, 新曜社, 2019
金志宣, Turn-taking 研究の動向 — "turn" と "turn-taking" をめぐる議論を中心に —, 言語文化と日本語教育, 205-221, 2002
野原佳代子, 『ディスカッションから学ぶ翻訳学 トランスレーション・スタディーズ入門』, 三省堂, 2014

第5章

エリザ・R・シドモア, 外崎克久訳 『シドモア日本旅行』, 講談社, [2002] 2020, P189
イザベラ・バード, 時岡敬子訳, 『イザベラ・バードの日本紀行 上』, 講談社, [2008] 2021, P133-134
石川智章・布野修司, 在日外国人留学生の生活環境と居住空間に関する考察 — 彦根市を事例として —, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, 141-142, 2008
バーナード・リーチ, 柳宗悦訳, 水尾比呂志補訳, 『バーナードリーチ 日本絵日記』, 講談社, [2002] 2022, P129
エドワード・S・モース, 上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳, 『日本のすまい・内と外』, 鹿島出版会, [1979] 2003, P136
エドワード・S・モース, 石川欣一訳, 『日本その日その日』, 講談社, [2013] 2021, P309
ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P39
ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P96
ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P92
ブルーノ・タウト, 篠田英雄訳 『日本の家屋と生活』, 春秋社, [1950] 2008, P105
野原佳代子, 『ディスカッションから学ぶ翻訳学 トランスレーション・スタディーズ入門』, 三省堂, 2014

謝辞

本論文は東京工業大学 環境・社会理工学院 建築学系 那須研究室において続けてきた研究を博士学位論文としてまとめたものです。本論文をまとめるに当たり、多くの方々からご援助いただきました。お世話になりましたすべての方々へ感謝の意を表します。

まず、東京科学大学教授 那須聖先生には、博士課程進学時から研究を進め論文をまとめ上げる過程での様々な面においてご指導いただきました。心より感謝申し上げます。

さらに、東京科学大学教授 奥山信一先生、同教授 野原佳代子先生、同教授 斎尾直子先生、同准教授 平賀あまな先生、同准教授 藤田康仁先生には、本論文全体を通して詳細に査読していただき、貴重なご意見および重要なご指摘を賜りました。心より御礼申し上げます。

また、修士課程在籍時の指導教員である東京科学大学名誉教授 大野隆造先生、留学時の指導教員であるカリフォルニア大学アーバイン校名誉教授 Sanjoy Mazumdar先生には、ご助言とともにいつも温かく励まし続けていただきました。ここに深く御礼申し上げます。

質問紙調査およびインタビュー調査にあたり快くご協力いただいた皆さま、関係機関の皆さまにも厚く御礼申し上げます。

調査を進めるにあたり、東京科学大学那須研究室の修了生および在学生の方々にご援助いただきました。文献調査においてともに研究を進めた田宮もも氏、岡本峻真氏、資料作成にご協力いただいた城間菜由氏に深く御礼申し上げます。また、ゼミでの議論のみならず研究室での何気ない会話も本研究につながる多くの発想を得る機会でありました。那須研究室とともに過ごした皆さまに心から感謝申し上げます。

最後に、再び学生生活に戻り研究を進めることを応援してくれた家族と、心強い励ましの言葉とともにいつも近くで見守ってくれていた夫と娘に感謝いたします。

2024年 10月 川野 江里子

資料編

国籍 : 年代 : 20s, 30s, 40s, 50s, 60s, 70s, 80s

男性 / 女性

Nationality : Age : 20s, 30s, 40s, 50s, 60s, 70s, 80s

Male / Female

このアンケート調査は4つの章で構成されています。順番に教えてください。回答は日本語でも英語でも、どちらでもかまいません。もしわからないところがあれば、japanesehouse.perception2019@gmail.com まで気軽に質問してください。

This questionnaire has four parts. Please answer the questions in order. You can answer either in Japanese or in English. If you have any questions, please feel free to ask us.
Email: japanesehouse.perception2019@gmail.com

I. あなたの家や住んでいる場所について教えてください。

I. Please let us know your home and your living place.

1. 日本にはどのくらい住んでいますか? () かげつ / とし
ヶ月 / 年

1. How long have you been in Japan? () months / years

2-1. 日本のどこに住んでいますか? () く / し
区 / 市

2-1. Where do you live in Japan? () Ward or City

2-2. あなたの住んでいるところは、どのような地域にありますか?

2-2. Which category does your area belong to?

1. 繁華街

2. 住宅街

3. オフィス街

4. 混合地域

1. Downtown area

2. Residential area

3. Office area

4. Mixed area

3-1. あなたの家から電車(JR私鉄、地下鉄)の駅までは近いですか?

3-1. Is your home close to the railway/subway station?

1. はい

2. いいえ

1. Yes

2. No

3-2. 駅から家まで何分かかりますか? () ぶん
分

3-2. How many minutes do you walk to the station? () minutes

4-1. あなたの^{いえ}家は^{こだて}戸建ですか？それとも^{しゅうごうじゅうたく}集合住宅(アパート・マンション)ですか？

4-1. Is your home a house or an apartment?

- | | |
|----------------------|---|
| 1. ^{こだて} 戸建 | 2. ^{しゅうごうじゅうたく} 集合住宅(アパート・マンション) |
| 1. House | 2. Apartment |

4-2. もし、あなたの^{いえ}家が^{こだて}戸建の場合、^{ばあい}庭が^{にわ}ありますか？

4-2. If your home is a house, is there a garden?

- | | |
|--------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
| 1. Yes | 2. No |

4-3. もし、あなたの^{いえ}家が^{しゅうごうじゅうたく}集合住宅の場合、^{ばあい}何^{なん}階^{かい}建て^だですか？ ()階^{かい}建て

4-3. If your home is an apartment, how many floors does it have? () floors

5. あなたの^{いえ}家にはいくつ^{へや}部屋がありますか？ ()^{へや}部屋

5. How many rooms are there in your house/apartment? () rooms

6-1. あなたは^{へや}部屋が^む向いている^{ほうかく}方角を^き気に^きしますか？

6-1. Do you conscious about the direction which your room is facing to?

- | | |
|--------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
| 1. Yes | 2. No |

6-2. あなたは^{へや}部屋に^ひ日^{ひかり}の光が^{はい}入るか^きどうか^き気に^きしますか？

6-2. Do you mind if the room gets sunshine?

- | | |
|--------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
| 1. Yes | 2. No |

7. あなたの^{いえ}家は^{こうほう}どのような^た構法で^た建てられていますか？

7. What kind of building construction method for your house/apartment?

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. ^{もくぞう} 木造 | 2. ^{もくぞういがい} 木造以外 |
| 1. Timber | 2. Others |

8. あなたの^{いえ}は^た建てられてから、どのくらい^た経ちますか？ () ^{かげつ/ねん}ヶ月/年

8. How old is your house/apartment? () years old

9. あなたが^{いま}今の^{いえ}家を選^{えら}んだ^{りゆう}理由や^{きじゆん}基準を、^{おし}教えてください。^{おも}思いつくだけたくさん^か書いてください。

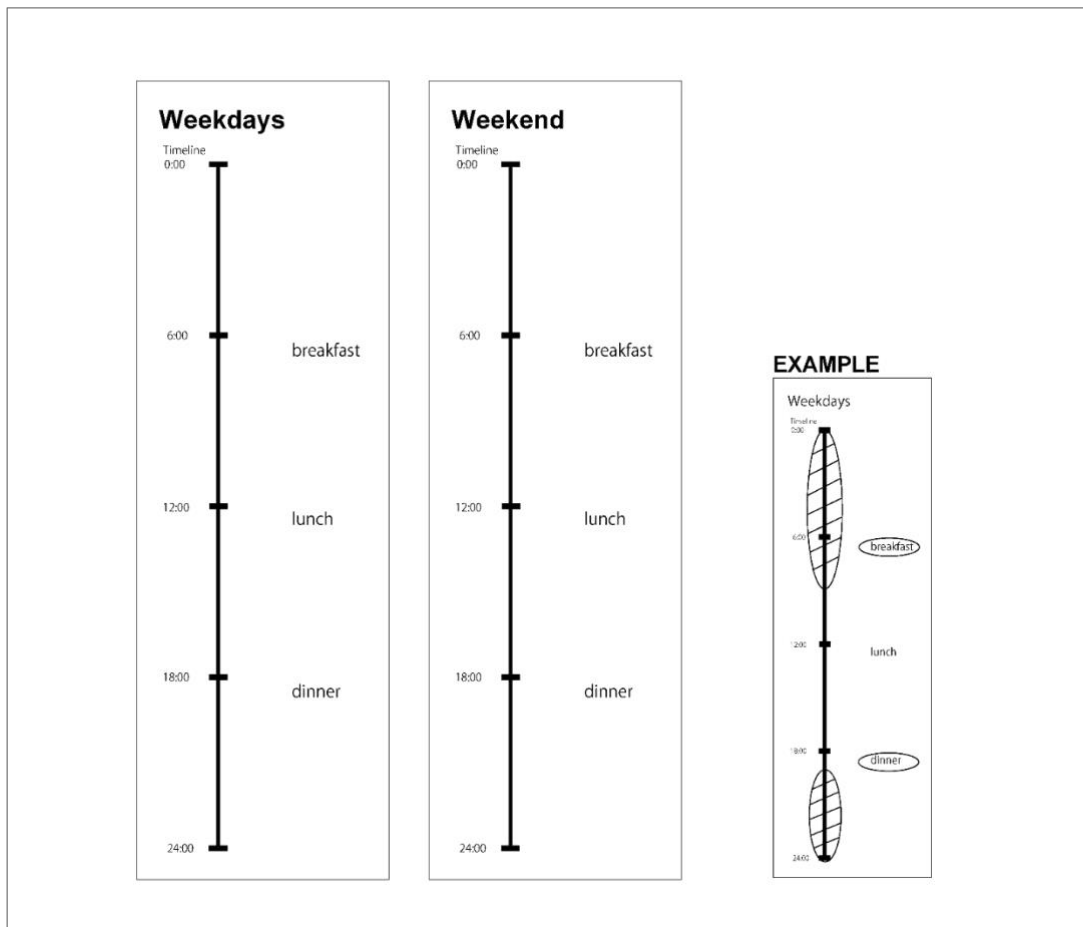
9. Please describe your criteria for choosing your house/apartment as possible as you can.

II. あなたの日本での生活スタイルや生活観について教えてください。

II. Please let us know your life style and life view in Japan.

1. 例を参考にして、平日や週末に、あなたが家にいる大体の時間帯と、家でどの食事を取るかどうか、丸をつけて示してください。

1. Please mark circles when you are at home and also mark the meals you usually eat at home in the column below. Please refer to the example.



2. あなたは家や住んでいる空間に興味がありますか？

2. Are you interested in a house and a living space?

1. はい 2. いいえ
1. Yes 2. No

III. あなたが日本にほんで住すんでいる空間くうかんや、日本の家にほん いえにある日本にほん的な建築要素けんちくようそをどのように捉とらえているか教おしえてください。

III. Please let us know your perception of a living space in Japan and Japanese architectural elements in Japanese house.

[A] あなたの住すんでいる場所ばしょや空間くうかんについてどのように捉とらえているか教おしえてください。

[A] Please let us know your perception of your living space/place.

1-1. 今住いますんでいる家いえ/へや/部屋へやは、あなたにとってちょうどいい大きおおさでしょうか？ せま過ぎするでしょうか、ひろ過ぎひろするでしょうか。

1-1. Is your current house/room size suitable to you? Is it too small or too large?

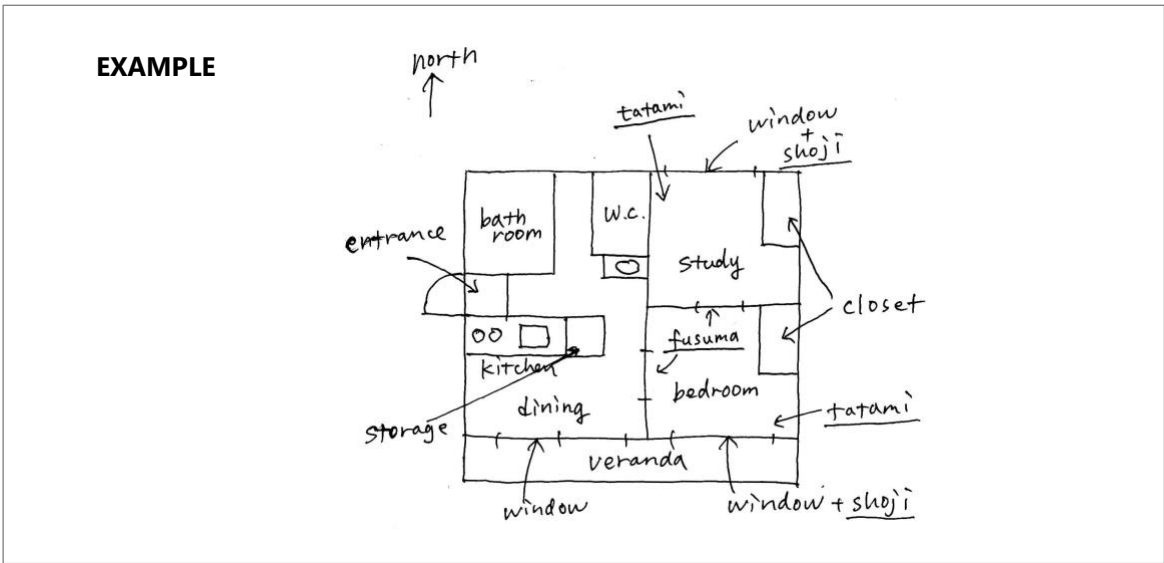
- | | | | | |
|----------|-----------------------------|-------------|--|-------------------------|
| 1. せまい | 2. 少し <small>すこ</small> せまい | 3. ちょうどいい | 4. 少し <small>すこ</small> 広い <small>ひろ</small> | 5. 広い <small>ひろ</small> |
| 1. Small | 2. Slightly small | 3. Moderate | 4. Slightly large | 5. Large |

1-2. あなたの家いえ/へや/部屋へやの間取り図まど ず みぎ わくない かを右の枠わく内に描かいてください。

- 各部屋かくへやに名前なまえを書いてください(例れい: 玄関げんかん、台所だいどころ、寝室しんしつ、など)。
- あなたの家いえ/へや/部屋へやに襖ふすまや畳たたみ、障子しょうじがあれば、間取り図まど ず なか かの中なかに書いてください。
その際さい、文字もじに下線かせんを引ひいてください。
- 北きたの方角ほうかくがどちらかわかれば、矢印やじるしを付つけて書かいてください。
- 見本みほんを参考さんこうにしてください。

1-2. Please draw a floor plan of your house/room in the box in the right page (P.7).

- Please make sure to write a **room name** on each space (e.g. **entrance, kitchen, bedroom**, etc)
- If you have **fusuma** (Japanese opaque sliding doors), **tatami** (mat), **shoji** (screen) in your house/room, please write it down in the plan with an underline.
- If you know which direction is the north, please add it.
- Please refer to the examples.



2-1. あなたは、生活していく上で、部屋がいくつ必要でしょうか？ () rooms

2-1. How many rooms do you need to live in? () rooms

2-2. どうして、その部屋の数が必要なのでしょうか？

2-2. Why did you choose the number of rooms?

()

3. あなたの^{いえ/へや}家/部屋の^{てんじょう}天井の^{たか}高さについてどう^{おも}思いますか？ ^{たか}高い？ ^{ひく}低い？ ちょうどいい？

3. How do you think of the ceiling height in your house/room? Is it high, low or moderate?

1. ^{たか}高い 2. ^{すこ たか}少し高い 3. ちょうどいい 4. ^{すこ ひく}少し低い 5. ^{ひく}低い

1. High 2. Slightly high 3. Moderate 4. Slightly low 5. Low

4-1. あなたの^{いえ}家は^{かいほうてき}開放的だと^{かん}感じますか？

4-1. Do you feel a sense of openness in your house/room?

1. はい 2. いいえ

1. Yes 2. No

4-2. 4-1.で「はい」と^{こた}答えた^{かた}方にお^き聞きます。どの^かような^{ところ}が^{かいほうてき}開放的だと^{おも}思いますか？

4-2. If yes, where or what kind of aspects do you find a sense of openness?

()

4-3. 4-1.で「いいえ」と^{こた}答えた^{かた}方にお^き聞きます。どの^かような^{ところ}が^{かいほうてき}開放的でないと^{おも}思いますか？

4-3. If not, where or what kind of aspects do you find a sense of closeness?

()

5. あなたの^{いえ/へや}家/部屋の^{まど}窓の^{おお}大きさについてどう^{おも}思いますか？ ^{おお}大きい？ ^{ちい}小さい？ ちょうどいい？

5. How do you think of the window size of your living room, is it large, small or moderate?

1. ^{ちい}小さい 2. ^{すこ ちい}少し小さい 3. ちょうどいい 4. ^{すこ おお}少し大きい 5. ^{おお}大きい

1. Small 2. Slightly small 3. Moderate 4. Slightly large 5. Large

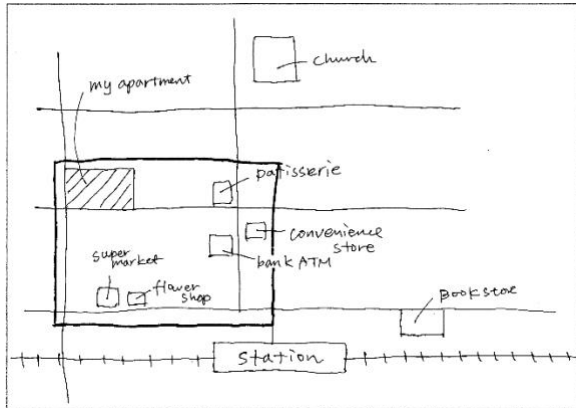
6-1. あなたは^{まど}窓からの^{けしき}景色をよく^{なが}眺めますか？

6-1. Do you often look at a scenery from the window?

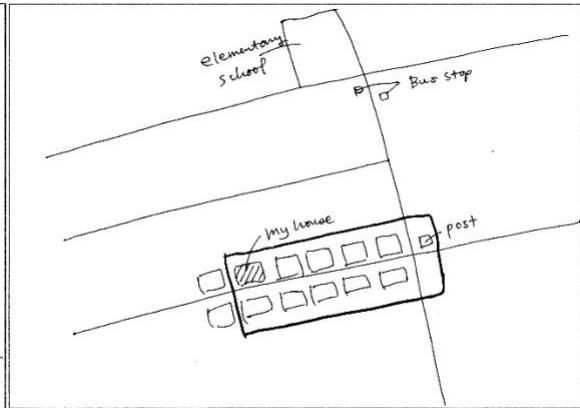
1. はい 2. いいえ

1. Yes 2. No

EXAMPLE



Example1. Downtown area



Example2. Residential area

8-1. あなたは、家の外から中へ、家の中から外へ移動するときに通る玄関や縁側(部屋と庭の間にある屋根のある屋外空間)、ベランダ、庭などの空間が必要ですか？

8-1. Do you need transitional space (e.g. entrance, *engawa*, veranda, and garden etc.) from outside to inside and vice versa?

- 1. はい
- 2. いいえ
- 1. Yes
- 2. No

8-2. 8-1.で「はい」と答えた方にお聞きます。このような空間についてどのように考えていますか。(例:

きのうてき うつ
機能的、美しい、など)

8-2. If yes, how do you think of these space? (e.g. Functionally, aesthetically, and etc.)

()

9-1. あなたは、部屋と部屋をつないでいる廊下のような接続する空間が必要ですか？

9-1. Do you need connections (e.g. corridor) between one room and others?

- 1. はい
- 2. いいえ
- 1. Yes
- 2. No

9-2. 9-1.で「はい」と答えた方にお聞きます。このような接続する空間についてどのように考えていますか。

れい きのうてき うつ
(例:機能的、美しい、など)

9-2. If yes, how do you think of these connections? (e.g. Functionally, aesthetically, and etc.)

()

10-1. あなたの^{いえ}家には、^{ふすま}襖や^{しょうじ}障子などの^{にほん}日本の^{まじき}間仕切りがありますか？

10-1. Is there any Japanese partition like *fusuma* and *shoji* in your house/room?

1. はい 2. いいえ
1. Yes 2. No

10-2. 10-1.で「はい」と答えた^{こた}方^{かた}にお聞きします。あなたは、このような^{まじき}間仕切りについて、どのように^{かんが}考えていますか。

10-2. If yes, how do you think of these partitions?

()

11-1. あなたの^{いえ}家には、^{おしい}押し入れ(^{ふすま}襖が ^{とびら}扉)となつている^{しゅうのう}収納スペースがありますか？

11-1. Is there any *oshiire* (closet with *fusuma*) in your house/room?

1. はい 2. いいえ
1. Yes 2. No

11-2. 11-1.で「はい」と答えた^{こた}方^{かた}にお聞きします。あなたは、どのように^{おしい}押し入れ^{つか}を使っていますか。

11-2. If yes, how do you use *oshiire*?

()

12-1. あなたの^{いえ}家に、^{たたみ}畳の^{へや}部屋はありますか？

12-1. Is there any *tatami* rooms in your house/room?

1. はい 2. いいえ
1. Yes 2. No

12-2. 12-1.で「はい」と答えた^{こた}方^{かた}にお聞きします。あなたは、^{たたみ}畳についてどのように^{かんが}考えていますか？

12-2. If yes, how do you think of *tatami* mat?

()

13-1. あなたの^{いえ}家の^{てんじょう}天井や^{かべ}壁は^{なにいろ}何色ですか？

13-1. What color are ceilings and walls in your house/home?

()

13-2. あなたは、^{てんじょう}天井や^{かべ}壁の^{いろ}色の^{くあ}組み合わせについて、どのように^{かんが}考えていますか？

13-2. How do you like/dislike combinations of these colors?

()

[B] あなたが日本の家をどのように捉えているか教えてください。

[B] Please let us know your perception of Japanese house.

14. 布団やこたつ、のれんやすだれのような動かせる寝具、家具や間仕切りについて、あなたはどのように考えていますか？

14. How do you think of removable stuff/furniture such as a *futon*, a *kotatsu*, a *noren*, and a *sudare*?

()

15. 日本人が家に入るときに靴を脱ぐ習慣について、あなたはどのように考えていますか？

15. How do you think the custom which Japanese people usually take off their shoes when they enter the house?

()

16. お風呂場とトイレが分かれていることについて、あなたはどのように考えていますか？

16. How do you think the layout which a bathroom and a toilet are separated?

()

IV. あなたについての質問にお答えください。

IV. Please fill out the questions regarding you.

1. あなたは、家でどのような状況でいるときに、快適に感じますか？

1. What kind of situations (when) do you feel comfort at home?

2. あなたは、家でどのような場所(どこ)にいるときに、くつろいでいますか？

2. What kind of space (where) do you relax at home?

3. あなたの家/部屋にある、気に入っているもの(空間、家具、景色、アート、植物、家の間取り、など)は、どのようなものですか？お思いだけ書いてください。

3. What are your favorite things (space, furniture, scenery, art objects, plants and a layout, etc) in your house/room? Please write out as possible as you can.

4. あなたにとって、自分の国じぶん くににいるときに重要じゅうようなもので、今いま、日本にほんにないものはありますか？

4. Is there anything important for you in your home country that you are missing greatly in Japan?

5. あなたにとって、日本にほんにいるときに重要じゅうようなもので、自分の国じぶん くににないものはありますか？

5. Is there anything important for you in Japan that you will miss in your country?

6. もし、あなたが以前いぜん、外国がいこくに住すんだことがあれば、住すんだ国くにの名前なまえと住すんでいた期間きかんを書いてください。

6. If you have lived in foreign countries before, please fill out the name of countries and the duration.

～ ご協力きょうりょくいただき、どうもありがとうございました! ～

～ Thank you very much for your cooperation! ～